
魔法少女リリカルなのはA`s ～夜天の大空 そら を舞う者達～

荒唐井蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA、S　～夜天の大空　そら　を舞う者達～

【Nコード】

N4258M

【作者名】

荒唐井蛙

【あらすじ】

「ジュエルシード事件」が終結し、事件の当事者達は各々の道を歩んでいた。しかし、再び事件は巻き起こり、運命の歯車は静かに回り始める。立ちはだかるは、夜天を統べりし少年。星と雷と風、強い絆で結ばれた少女達と少年が、今再び大空　そら　を駆ける。文武両道の天才気質なんだけど、ちよつと影が薄いオリジナル主人公。聡い・強い・超イケメンの三拍子そろった最強の兄貴。人智を越えた怪力と事務処理能力を持った少女。そんな彼等が原作キャラ

達と織りなす、涙あり笑いあり恋愛ありの物語です。基本的にはシリ阿斯メイン・・・のはず。

プロローグ（前書き）

初めまして。処女作ですので、稚拙な文章ですが、ご容赦ください。

プロローグ

暗い夜空に二つの色がたたずんでいた。しかし、それを纏っているのはたった一人の少年である。静かにたたずむその姿は、例えるならば百戦錬磨の武人。身に纏う空気や遠くを見据えた鋭い眼差しは、多く見積もっても十代半ばにしか見えない少年が発するとは到底思えないモノだ。

風が吹くたびに、彼の背中で漆黒と白銀が揺れ動く。首の後ろで束ねられた黒髪と、それを結わえるにはいささか長すぎ、余ったその身を風に任せる銀の布である。視線を下に移してみれば、纏う衣服も黒い生地に銀の装飾がなされたモノ。そして、一層人目を惹きつけるのが、左右の腕に輝く無骨な銀色の籠手だ。

「行くぞ、盾月^{しゅんげつ}」

黒と銀で身を染めた少年は短くそう呟くと、夜の闇へと消えていった。

これは、とある世界で起きた悲しみと因縁が渦巻く大事件、その解決までの全貌を記録した奇跡の物語である。

プロローグ（後書き）

というわけで、プロローグでした。オリジナルキャラクターは二人を予定していますが、必要に応じて増えるかもしれません。

第一話 「始まりは突然に」(前書き)

今回から本編突入です。
広い心で見てください。

第一話 「始まりは 突然に」

十二月

軽い金属を蹴るような音が木霊する早朝の公園に、九才程の少女が一人たたずんでいる。

ジューズの空き缶が空高く舞い上がるが、少女はそれに手を触れてなどいない。桜色に輝く光の玉が、弾丸のごとき速度で幾度となく空き缶を襲い、大空へと弾き上げているのだ。そばのベンチでは、そこに控えた紅い宝玉が、弾いた回数を正確に数えている。結論から言ってしまうえば、この弾丸は少女が作り出したモノであり、彼女はそれを手足のように操り、空き缶を『的』にした誘導操作の訓練をしているのだ。ちなみに、点滅を繰り返す宝玉は、魔法の構築を助力する『^{デバイス}機械』である。

弾き続けること百回、宝玉が少女に訓練の終了を告げると、彼女は肩の力を抜き、『的』を見上げ、

「ラストッ！」

澄んだ声をその場に響かせ、人指し指を立てた拳を振り下ろす。ちょうど目の前まで落下してきた空き缶を、光の弾丸が勢いよく地面に水平に弾き飛ばす。どうやら、そばにあったゴミ箱に入れようとしたらしいが、フチに当たり、軽い金属音と共に土の上に転がってしまった。残念そうに肩を落とし、ため息をつく少女に宝玉が励ましと労いの言葉を掛ける。

このような光景を見た者は普通、奇妙な現象だと感じるだろう。しかし、彼女にとってはごくごく自然なことであり、日常的なこと

なのだ。

今年の春に、彼女は『魔法』と出会った。偶然に偶然が重なって、異世界の少年と出会った事で手に入れた異世界の技術……。当初は『探し物の手伝い』程度であった繋がりだが、いつの間にか彼女をある大事件へと巻き込んだ。人呼んで『ジュエルシード事件』である。彼女達の『探し物』でもあった青い宝石が中核をなしたこの事件は、主犯であつたプレシア・テストロッサの実質的な死亡と、その娘であり事実上の実行犯でもあつた少女 フェイト・テストロッサの捕縛という形で幕を下ろした。

文字通り火花を散らせ幾度もまみえた少女達は、事件終結後強い絆を結び、お互いに良き友人となつた。事件の重要参考人として遠い世界に行ってしまったため、今は会えない金色の長髪と赤い瞳が魅力的な少女を思い浮かべる。次元世界の秩序を守る組織『時空管理局』の執務官であるクロノによれば、なんとか無罪放免に出来そうだが、とのこと。嬉しい限りである。

そして、今度は別の人物を思い浮かべる。自分と同じく偶然『魔法』を知り、共に戦った幼なじみの少年を。彼は今、その天才的な頭脳と指揮能力を買われ、管理局の『嘱託魔導師』として次元世界中を飛び回っている。たまに帰って来るのだが、ここ一週間はまるつきり音沙汰が無い。ハッキリ言つて心配である。「ちゃんとご飯を食べているか」、「ケガをしてはいないだろうか」、「今この時も自分を思い浮かべてくれているだろうか」、「だったら嬉しいな」など、表情を暗くしたり明るくしたりしながら少年を思い浮かべるのだった。

何はともあれ、大切な親友達との再開に期待をよせ、頭の左右で結んだツインテールを揺らしながら、少女 高町なのはは帰路についた。

同時刻、次元の狭間を渡る一つの巨大な影があった。

時空管理局艦船『アースラ』。『ジュエルシード事件』の際に捜査と対策の拠点となっていた次元航行船である。

その司令室では、緑色の長髪を高めに結わえた女性がスタッフ達に指示を出していた。

彼女の名はリンディ・ハラウン。時空管理局の提督の地位にあり、アースラの艦長でもある。

「失礼します。艦長、お茶のおかわりいかがですか？」

そう言つて、茶髪を短めに切った女性が緑茶とお茶菓子のヨウカンを彼女に差し出す。

名をエイミー・リミエッタ。時空管理局執務官補佐であり、優秀なオペレーターでもある。

丁寧にお礼の言葉を述べて、リンディは湯飲みを受け取る。

「本局にドッキングして、アースラも私達もやっと一休みね」
「ですね」

何気ない世間話でもするかのように言葉を交わす二人。彼女達の醸し出す穏やかな雰囲気は、とてもではないが、上官と部下のそれとは言いがたいモノがあった。

部下との会話を楽しみながら、リンディは手元にある金属製の小箱から角砂糖を数個取り出し、躊躇することなく次々とお茶のつがれた湯飲みへと投入していく。この提督、かなりの甘党のようだ。エイミーはすでに彼女の味覚に慣れているようで、ツツコムこともせ

ず、笑顔で会話を続けているが、はたから見ると、ハッキリ言つて気持ち悪い。

「子供達は？」

「今は休憩中のはずだよ。」

クロノ君とフェイトちゃん、さっきまで戦闘訓練してましたし、ユーノ君もそれに付き合っていましたから」

ふと思い出したかのようなリンディの質問に、その斜め後ろに控えたエイミイが答える。

「そう……。明日は裁判の最終日だつていうのに……マイペー
スねエ……」

トドメにミルクまで入れたその液体をおいしそうに飲み、満足そうに息をつく。甘党もここまで来ると異常である。

ふと、小皿に並んだ二つのヨウカンが目に入り、その一つをエイミイに勧める。

「まあ、勝利確定の裁判ですから！」

ヨウカンを受け取り、エイミイはニツコリと笑ってみせるのだった。

クルー達が思い思いに羽を休めるカフェテリアの一角に彼等はいた。談笑する周りのメンバーと異なり、その四人は少々重い空気を纏っている。それもそのはず。訓練を終えた彼等は今、明日に迫った裁判の最終確認をしているのだ。黒髪の少年の説明に、残りの三人、渦中の少女 フェイト、その使い魔 アルフ、なのはに魔法を

授けた張本人である少年 ユーノが頷く。

この三人をまとめている少年の名は、クロノ・ハラオウン。
リンディの息子であり、若干十四歳で執務官として活躍する、いわゆるエリートである。

「事実上、『判決無罪』『数年間の保護観察』という結果は確実
と言っているんだが、一応、受け答えはしっかり頭に入れておくように」

クロノがそう締めくくり、解散しようとしたちょうどその時、

「そーいえばクロノ、かおるから連絡とか来てない？」

と、フェイトが何気なく尋ねた。

彼女の言う『かおる』とは、なのはの幼なじみであり、先の事件で自分の友達にもなった魔導師の少年 春風かおるのことである。

「いや、来てないが・・・彼がどうかしたのか？」

「あ、えっと・・・大したことじゃないんだけど・・・」

一週間くらい前から連絡が取れないんだ」

フェイトの言葉にクロノとユーノは眉をひそめ、アルフは「あー、そーいえば」と、ポンと手を打った。

「そーいや・・・前に会った時、少しやつれてたねエ・・・」

囑託ってそんなに忙しいモンなのかい？」

アルフのそんな告白にクロノはますます表情を曇らせる。心なしか、フェイトの表情も暗くなってきた。

「管理局は深刻な人手不足だからな。

優秀な人材ほど多くの現場でコキ使われる……。

身体を壊してなけりゃいいんだが……」

場の空気が一層重くなる。

「まあ、心配するな。ボクの方から艦長にそれとなく聞いてみるよ。

身体が出来てない子供が無理して働いても、

良いことなんか無いからな」

クロノのその言葉に、表情を明るくする三人だったが、フェイトが無意識に爆弾を投下した。

「……あれ？ でも、クロノも私達と同じ年じゃ……」

「……ボクは十四だ……」

微妙な空気が四人を包む。

エリート執務官 クロノ・ハラオウン。目下の気がかりは身長伸び悩みであった。

三人と別れ、クロノは司令室に足を運ぶ。

そこではちょうど、リンディが眼鏡をかけた美女とモニター越しに言葉を交わしている最中だった。

紫色の長髪を後ろで束ねたこの女性の名はレティ・ロウラン。本局勤務の提督であり、リンディの友人の一人でもある。

こっちの方では、あんまり嬉しくない事態が起こってるのよ

表情を曇らせ、ため息混じりにレティは語る。

モニター越しでも伝わってくる重い表情と口調から、明るい話題だとは思えなかったクロノだが、その予想は見事に当たっていたようだ。

ロストログアよ。一級搜索指定がかかっている超危険物・・・。

いくつかの世界で痕跡が発見されてるみたいで、

搜索担当班はもう大騒ぎよ。

捜査員を派遣して・・・今はその子達の報告待ちね・・・

「そっかあ・・・」

そんなレティの言葉に、頬に手をやり、悩むような仕草をするリンディ。その後ろでは、『ロストログア』、『一級搜索指定』という単語に、クロノが僅かに眉をひそめていた。

あ、そうそう。ありがとね、リンディ

「？　なんのことかしら？」

先程までの重い空気と口調はどこえやら。唐突に、二人は実に軽い口調で話し始める。

ホラ、前にあなたが『使える』って紹介してくれた子よ！

「ああ、かおるさんのこと？」

クロノは驚いた。つい先程まで自分達の話題に上っていた少年の名前がいきなり浮上してきたのだ。

正直、助かってるのよ。

魔導師としての能力は一級品、

『小隊指揮権取得試験』は管理局史上最高得点での合格、

デバイスマイスターなみの知識と頭脳・・・

ホントに、どこからあんな人材見つけて来たのよ

「フフフ・・・秘密よ。ヒ・ミ・ツ」

何よそれ・・・まあ、いいわ。まだしばらく借りるけど、良いわね？

「よく言うわよ。とつくにさっきの『捜査員』のリストに載せてるんでしょ？」

あら、バレてた？

「長い付き合いですもの」

時折、笑い声を混ぜながら話す二人の口調は明るいモノだが、内容は決して明るくはない。よもや、かおるの消息不明の原因が自分の母親達だったとは、さすがの彼も夢にも思わなかっただろう。友人達にこの事実をどう伝えるか、彼がこの後小一時間悩み続けたのは言うまでもない。

日付が変わった真夜中のオフィス街。その片隅で、閃光と共に複数の悲鳴が木霊する。その場に倒れ伏す管理局の魔導師達を、二つの影が冷たい瞳で見下ろしていた。

一人は、赤い長髪を二対の三つ編みにし、髪と同色の衣服に身を包んだ小さな少女。不機嫌そうに青い目をつり上げ、その小さな手には不釣り合いな柄の長い鉄槌を握っている。

もう一人は、頭から爪先まで黒と銀の二色で統一された少年。風を受けて揺れる、夜空よりもさらに黒い長髪が月の光を浴びて輝き、漆黒の瞳と腕に装着した銀色の無骨な籠手が、冷たい光を放っている。

る。

「・・・弱いな。この程度の輩では、あまりページは稼げそうにないが・・・」

眉をひそめ、少年のソレとは思えないほど冷たい声で呟く。

「お前達の魔力・・・『闇の書』の餌だ」

左右にウサギの飾りを付けた帽子を揺らし、赤毛の少女が一冊の分厚い洋書を目の前に掲げる。

表紙に剣十字の装飾がなされたソレは鈍い光を放ちながら、自らペー지를パラパラとめくっていく。

星一つ無い冷たい夜空に、断末魔のごとき叫び声が木霊した。

夕方、一人の少女が行きつけの図書館に足を運んでいた。

紫色の長髪に、白いカチューシャが印象的なこの少女の名は、月村すずか。なのはやかおるの親友兼クラスメートであり、おとなしそうな容姿と雰囲気とは裏腹に運動が得意な、お嬢様である。

ふと、一人の少女が彼女の目に留まる。今までにも何度か姿を見たことのある、車イスに乗った同い年くらいの少女だ。必死に手を伸ばし、棚から本を取ろうとしているが、僅かに届かない。見ていられなくなり、「お節介かな」と思いつつも、少女の取ろうとしているであろう本を代わりに取って差し出す。

「これ・・・ですか？」

「はい。ありがとうございます」

かわいらしい顔で笑顔を作り、独特のアクセントで少女は感謝の言葉を述べる。

話を聞いてみると、彼女も時々、すずかを図書館で見かけていたらしい。

茶色い髪を短く切りそろえ、柔らかな関西弁が印象的なこの少女、名を八神はやて。

本好きという共通点もあり、この二人が親しくなるのに、あまり時間はいかなかった。

新しくできた——というより、ほぼ初めての同い年の友人、すずかと別れ、はやては家族と共に帰路についていた。

「はやてちゃん、寒くないですか？」

ショートカットの金髪を揺らして車イスを押しながら、彼女の家族である女性が問い掛ける。

「うん、平気。シャマルも寒ない？」

「私は全然」

お互いに相手の身体を気に掛ける会話をする内に、もう一人の家族の姿を遙か前方に見つける。

「シグナム！」

桃色のポニーテールを風になびかせ、悠然と立つ背の高いその女性の名を笑顔で呼ぶと、彼女もまた優しげな笑顔で答えた。

三人で並んで歩きながら、夕食のメニューについて話し合う。実に微笑ましい光景である。と、そんな時、

「そういえば、兄ちゃんとヴィータは？」

ふと思い出し、後ろを歩くシャマルに問い掛ける。

他の家族の行方を尋ねるはやてに、シャマルが歯切れの悪い返事しか出来ないでいると、

「ヴィータは外で遊び回っているようですが、ザフィーラが付いてくれています。」

兄上も、先程二人と落ち合われたようです。心配はいりません」

ハッキリとした口調で、代わりにシグナムが答えた。はやては「そっか」と納得するものの、心なしか寂しそうだった。

「でも・・・少し距離が離れても、

お兄さんも私達もずっとあなたのそばにいますよ」

「はい・・・我等はいつでも、あなたのそばに・・・」

少女の心中を察したのだろう。はやてを見つめて語りかけるシャマルとシグナムの声と瞳は、いつにも増して優しくなった。そんな彼女達の言葉に、はやては僅かに口元を緩める。先程までの寂しげな表情は鳴りをひそめ、代わりにそこにあったのは、幸福感のにじみ出た顔だった。

日が沈んだ暗い夜空を、月明かりが優しく照らしている。静まりかえった市街地の上空に大小三つの影が浮かんでいた。

「どうだ、ヴィータ。見つかりそうか？」

「いるような・・・いないような・・・」

渋めの男声で問い掛けてくる青い毛並みの狼に、赤い衣装を身につけた少女は、瞳を閉じながら曖昧な返事を返す。

「こないだつから時々出てくる、妙に巨大な魔力反応・・・
あいつが捕まれば、一気に二十ページくらいはいきそうなんだ
けどな・・・」

閉じていた目を開き、その手に持った鉄槌を肩に掛けながら不機嫌そうに少女は呟く。
と、その時、

「・・・時間が無い。ヴィータ、ザフィーラ、別れて探そう」

それまで一言も発しなかった黒髪の少年が、不意に口を開いた。

「承知いたしました。ヴィータ、闇の書は預けるぞ」

ザフィーラと呼ばれた狼は少年に恭しく返事を返し、背中ごしに少女に言い残すと、空の彼方へと飛翔していった。

「さて、私も行くでしょう・・・。ヴィータ、くれぐれも気を付けろよ」

そう言い残し、少年もまた夜空へとその姿を消す。
その場に残った少女は、大きな瞳をつり上げ、

「行くよ。グラーファイゼン」

鉄槌を虚空へと振り下ろし、足下に赤く輝くトライアングルを展開する。

「封鎖領域・・展開」

瞳を閉じながらの少女の言葉に、鉄槌が低い声で答え、彼女を中心に巨大な結界が展開されていく。魔力を持つ者だけを自信の領域に閉じ込めようとしているのだ。

そして、

「魔力反応！ 大物見つけ！！」

巨大な反応を確かに感知し、ヴィータは勢いよく目を開く。片手で鉄槌を構え、目標に向かって赤い軌跡を描きながら、最大速度で飛翔していった。

現在、アースラ司令室は混乱を極めている。

事の起こりはほんの数分前、フェイトの裁判が無事に終わったことをなのはに伝えようと、意気揚々といった感じでエイミイが通信を繋げようとしたところ、まったく通じないのだ。不思議に思い、なのはの居住地である海鳴町をスキャンしてみると、驚いたことに巨大な結界が構築されていたのである。何者が造ったのか分からないが、現状から判断して、なのはが狙いである可能性が非常に高い。そう判断したリンディの指揮の下、スタッフ総出で結界の解析を勧めているのだが、見覚えのない術式を前に作業は難航していた。結界を解析することが出来なければ、破壊することも救援を送ること

も出来ない。皆の表情は焦燥で満ち溢れていた。

「まだ解析は終わらないのかッ！！」

クロノの悲鳴にも似た怒号が司令部に響き渡った。すでに結界の存在を確認してから二十分が経過しようとしているのだ。何も写らないモニターを沈黙したまま見つめるリンディの頬にもイヤな汗が流れる。スタッフ達が文字通り右往左往する様を、フェイト、アルフ、ユーノの三人は不安と焦りが交ぜになった表情を顔に貼り付け、ただ見守るしかなかった。

その時、自動ドアの開閉音と共に一人の人物が司令室に静かに入ってきた。魔導師三人組の隣をまるでそよ風のようにすり抜け、コンソールを必死に叩くエイミイの背後で立ち止まる。

皆、その姿を確認し、絶句する。ある提督はその場に立ち尽くし、ある魔導師達は目をいっぱいに見開き、スタッフ達に至っては、これでもかというほど口をあぐりと開けていた。

「ちょっ・ちょっと待てッ！　なんで君がこんな所にッ・・・！」

最初に我に返ったクロノの叫びをきっかけに、皆が我に返る。

「な・・・なんなのクロノ君、そんなに叫ん・・・で・・・。」

背後に回られたため、その姿を確認出来なかったエイミイはクロノの絶叫に驚き、振り向いたところでその人物を視界に入れ、一足遅れて絶句した。当然だ。そこにいるのは、現在ここに来るはずがない・・否、『来られるはずがない』人物なのだから。

「かおる君ッ！？」

今度はエイミイの絶叫が司令室に木霊した。

なのははバラバラに砕け散った事務机にもたれかかり、目の前に迫る三つ編みの少女を焦点の定まらない眼で見つめていた。自身も相棒のレイジングハートも全身ボロボロの満身創痍である。

なんの前触れもなく襲撃してきた少女に、彼女は終始圧倒されっぱなしだった。見たこともない形態の魔法、唐突かつ爆発的に術者の魔力を増大させるデバイス。途中までは善戦したものの、結局力負けし、今いるこのオフィスに叩き付けられ、怯んだ隙にトドメの一撃を食らってしまったのだ。

かすんで見える少女の影が、携えた鉄槌を振り下ろさんとゆつくりと頭上に構えるのが見えた。次の瞬間に自分を襲うであろう衝撃を想像し、彼女の心を恐怖が埋め尽くす。

そして、ついにその瞬間は訪れる。鋭い風切り音を従えて、鉄の塊が頭部めがけて打ち下ろされた。走馬燈のように友人達の顔が脳裏をよぎる。

しかし、その一撃が彼女に届くことは無かった。

視界を黒一色が埋め尽くす。一瞬、自分は死んだのか、とも思ったが、違う。よく見れば、鉄槌は金色に輝く鎌によって止められていた。

「なのは・・・」

不意に横から名を呼ばれ、ぎこちなく首を動かして見てみれば――

「ッ・・・仲間か・・・！」

ヴィータは後ろに跳んで距離を取り、突然の介入者達を睨み付けながら、無意識にそう言葉を吐き捨て、
黒い衣装に身を包んだ少女は漆黒のマントをはためかせながら、光り輝く刃を持った巨大な鎌を突き付け、目の前の少女の発言を訂正するかのように言い放つ。

「友達だ・・・！」

—— ユーノ、クロノ、そしてフェイト。心強い友人達の姿がそこにあった。

第一話 「始まりは 突然に」(後書き)

と、いうわけで第一話でした。オリキャラは、なのは側に一人、ヴオルケンズ側に一人追加した状態です。お約束っていうか、この二人が戦うのが目に見えてますよね。

もちろん、なのは側のオリキャラ 春風かおる君が主人公なのですが、出番がたったの数行のうえにセリフ無し……。しかも、『なのは救出』に参加すらしていない……。どーゆーこっちゃねん……。しかし、物語の構成上仕方のないことなのです。序盤はアニメ同様『ベル方式の強力さ』を強調したかったです。とゆー訳で、第二話ではクロノ達にケチヨンケチヨンに負けてもらうつもりです。では、また次の投降でお会いしましょう。

第二話 「戦いの嵐、再び」

星のない、歪んだ夜空の下に広がるビル街。人影はどこにも見当たらず、いつもは人々で賑わうはずの大通りも静まりかえっている。その一角、一際高くそびえ立つ摩天楼、割れた窓ガラスと破損物の散乱する広いオフィスで、彼女達是对峙していた。

「民間人への魔法攻撃・・・軽犯罪では済まない罪だ」

最初に重い沈黙を破ったのは、漆黒の衣装とマントで身を包み、黒い柄と金色の刃が光る大きな鎌のような形を取ったデバイスを構えた少女、フェイトだった。

「あんだ、テメエ・・・。管理局の魔導師か？」

明らかに不機嫌そうな口調で、ヴィータは疑問を投げかける。あと一步で目的が達成できた、というところで邪魔に入られたのだから、彼女にとっては当然の反応と言えるだろう。

「・・・時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ」

親友を襲った敵に対する怒りを抑えながら、自らの役職と名前を告げ、その手に握ったデバイス『バルディッシュ』を構え直す。

「抵抗しなければ、君には弁護の機会がある。

同意するなら、武装を解除してほしい」

次いでクロノが投降を促す。こちらから自らのデバイス『S2U』を構えることを忘れない。さすがは執務官と言うべきか、彼の言葉に

はどこか威厳のようなモノが感じられた。

「誰がするかよッ！」

が、ヴィータが彼等の言葉に耳を貸すことはなかった。叫ぶと同時に素速く後退し、なのはを撃墜した際に大穴を開けた巨大な窓から夜空へと飛翔していった。

「待てッ！」

「ユーノ！　なのはをお願い！」

傷ついた親友を、その隣に控える少年に預け、フェイトとクロノはすぐさま赤毛の少女を追跡する。上空には未だに巨大な結界が展開され、普段は黒一色に染まるはずの夜空をいびつに歪めていた。

「かおるさん、現状は！？」

アースラの司令室にリンディの声が響く。凄まじい速度でコンソールを連打する一人の少年を、他のクルーも不安げに見つめている。

「なんとか、四人とも結界内に転送できました。

『敵』と思われる魔力反応と、現在交戦中のようにです」

「なのはさんは？」

「魔力反応、生体反応共に健在です。

間に合った・・・と見ていいと思います」

件の少年は矢継ぎ早に浴びせられる質問に、コンソールを叩く手を止めることなく、淀みのない口調で答える。司令室全体がその報告

に安堵するが、かおるの表情は口調とは裏腹に強張っていた。

「早急に結界の破壊を！ あなたにも現地に赴いてもらいます！」
「不可能です！」

リンディの言葉にかおるは、今までとは違う強い口調で即座に反論する。司令室が再びどよめいた。

「どっ……どうして!？」

クロノ達を転送できたということは、結界の解析作業が終了したことを意味する。ならば、破壊も容易いはずであり、彼の発言は矛盾していることになるのだ。納得できないとばかりに、エイミィが詰め寄る。

「現在、解析が終了したのは全体のほんの一部に過ぎないんです……！」

先の転送も、そこから半ば無理矢理に行ったモノでしかありません……」

絞り出すかのような彼の言葉は悔しさと満ち溢れ、その表情は苦渋で染まっていた。本来ならば、すぐにでも飛んでいきたい。幼なじみの無事な姿を、一目見て安心したいのだ。しかし、出来ない。今現在この場で、正体不明のこの結界を解析できる可能性があるのは、口惜しいことに彼しかいないのである。結界の破壊を確認するまで、この場を離れることは出来ない。

「……あと、どのくらいかかりますか……？」

彼の心中を察したのだろう。いつになく慎重にリンディは尋ねる。

「あと十分下さい！ それまでには・・・えっ・・・！！？」

突如として彼の言葉が途切れる。不思議に思ったエイミーがかおるの前に展開されたモニターを横からのぞき込み、驚愕の表情と共に移り変わった現状を報告する。

「正体不明の魔力反応三つ・・・結界内に侵入・・・！」

司令室がまたもや慌ただしくなった。

ごく短時間ながらも激しい戦闘の末、ヴィータはクロノの構築したバインドによってビル街の上空で磔にされていた。ユーノがなのは治療及び護衛のため戦線を離脱したため、実質二対一の戦闘が続いていたが、物陰に隠れて期をうかがっていたアルフが奇襲を掛けたことによって、戦況は一気に変わった。

「終わりだね・・・名前と出身世界、目的を教えてもらおうよ！」

バインドを解こうと抵抗するヴィータに、フェイトはデバイスの構えを解き、言葉を投げかける。しかし、ヴィータは悔しげな目で三人を睨み、何も話そうとしない。しびれを切らしたクロノが、とりあえず彼女を連行しようとしたその時、

「・・・ウチの妹が、ずいぶんとお世話になったようだね」

なんの前触れもなく、背後から底冷えのする声が聞こえた。振り向こうとするよりも前に、クロノは脇腹を蹴り抜かれ、声を上げる暇

もなく手近なビルへと叩き付けられてしまう。突然の轟音に驚いたフェイトとアルフが振り返ると、クロノがいたであろうその場所には、漆黒と白銀で身染めた長髪の少年が悠然と立っていた。

「呆けている暇は無いと思うがね。お嬢さん方？」

少年がそう呟くのとほぼ同時に、頭上から二つの影が降ってきた。フェイトは白と紫を基調とした戦闘服に身を包んだ女性の斬撃によって地面へと叩き付けられ、アルフは藍色の衣装を纏った筋骨隆々とした犬耳の男性にクロノとは反対方向のビルに蹴り付けられる。いきなりの救援にヴィータは目を丸くしていた。そんな彼女に最初に声を掛けたのは、

「・・・ヴィータ、ケガは無いかね？」

銀色の布で束ねた黒い長髪を吹きすさぶ風にゆだねる少年だった。彼が手をかざすと、ヴィータの手足を拘束していたバインドが音を立てて崩れ去る。

「ウッセー、これから逆転するところだったんだ。邪魔すんなよな」

ヴィータは頬を赤く染め、言い返す。その態度に、桃色の長髪を高めに関わえた女性が厳しい口調で注意するが、少年はそれを手で制する。

「それは、済まないことをしたな。せめてものお詫びだ、受け取ってくれ」

そう言って差し出されたのは、なのはとの戦闘で紛失してしまった

帽子だった。お気に入りのウサギの飾りが左右に添えられたそれは、なのはの砲撃によってボロクズのようになってしまったはずだが、目の前にあるそれは傷一つ無く、新品同然だ。

「修繕はしておいた。不備はあるまい」

ヴィータは表情を隠し、「ありがと」と、短く呟きながらそれを受け取る。その様子を見ていた女性と男性・シグナムとザフィーラは、やれやれとため息をついた。

「ずいぶんと余裕なんだな、戦闘の途中で仲間と談笑とは・・・」

四人が声のした方に振り向くと、そこにはクロノ、フェイト、アルフ、ユーノがいた。

「なに・・・家族の団欒は大切にしなければなるまい」

緊張した面持ちの管理局の魔導師達に対して、世間話でもするかのように自らの持論を語る少年。その態度に、クロノはいささかの不快感を感じた。

「君達はいったい何者だ？　なぜなのはを襲った！？」

「何者か、と問われれば『しがない犯罪者』。

なぜ、と問われれば『目的を果たすため』。満足いったかね？」

取るに足らない道ばたの石ころでも見るかのような目で、少年はクロノを見下ろし、感情のこもっていない口調で淡々と答える。ついにクロノがしびれを切らした。

「ふざけるなッ！　それで答えたつもりかッ！！」

「つもりもなにも、事実を述べたに過ぎん。
なにやら偉そうな態度を取るが、貴様こそ何者かね？」

クロノの怒号を少年は冷めた視線で軽く流し、逆に尋ねる。

「・・・時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

仕方なしにクロノは自らの名前と役職を告げる。顔が思いつきり嫌そうだ。

「そうか。では聞くが執務官・・・

今まで、自らの情報を得意気にベラベラと告白する犯罪者がいたかね？」

「・・・こちらとしては、その方が助かる・・・」

この少年は、どうにも扱いづらい。クロノはそう感じていた。

「フツ・・・まあいい・・・。

こちらが語ることは何もない。実質四対四だ・・・」

一瞬、少年の姿が視界から消え失せ、

「正正堂々の、勝負というのではないかね!!」

気付いたときには、クロノの正面で拳を振り上げていた。

少年がクロノに殴り掛かったのを合図に、皆各々の相手と武器や拳を交え始めた。そんな様子を、一人の女性が離れたビルの屋上か

ら眺めている。金色のショートカットを揺らし、薄い緑色の衣装に身を包んだその女性、シャマルは一人の少女へと連絡を取っていた。いつも使っている調味料が行きつけの店に無いので、遠くの店まで探しに行く、と。食品や調味料が詰め込まれたビニール袋を床に置く彼女の胸には剣十字の装飾が輝く洋書が抱かれていた。

クロノは正直に言って苦戦していた。目の前の少年が鋭い突きや重い蹴りを少しずつ、しかし確実に当ててくるのに対して、自らの攻撃はかすりもしない。結果、こちらにのみ消耗や傷が蓄積されている状況なのだ。こちらの撃ち出す魔力弾や砲撃は異常なほどに堅牢な障壁に遮られ、体勢を立て直そうと突き放しても、すぐさま懐に入られ一撃を食らってしまう。圧倒的、とまでは言わないが、明らかにクロノの方が劣勢である。信じられなかった。執務官という重要な役職からも見て取れるが、クロノは今現場にいる誰よりも実力の秀でた魔導師である。なのはやフェイトと比べると、魔力量において弱冠見劣りするものの、それを補って余りある技術と経験を持っていた。現に、今まで空いた時間に幾度となくフェイトと模擬戦をしたことがあるが、一度として負けたことがない。悔しげに唇を噛みしめ、敵を睨む。お前は、いったい何者なんだ、と。

金色に輝く弾丸が剣を携えた女性、シグナムへと迫る。しかし、当の彼女の表情に焦りや不安の色は見取れない。ただ静かに目をつむり、剣を構えることもせず迎え撃つ。彼女の体表ににじみ出た魔力の壁に遮られ、弾丸の群れは一つ残らず弾け飛んだ。弾丸の生成者であるフェイトは驚きを隠せない。シグナムの声に応え、長剣がその峰から葉莢を弾き出し、刀身に炎を纏う。

「魔導師としては悪くないセンスだ・・・。」

だが、ベルカの騎士を相手にするには、まだ足りん！
」

シグナムがそう叫ぶのと、フェイトに斬りかかるのとはほぼ同時。フェイトは鋭い一閃を受けきったものの、力負けしてビルへと叩き付けられてしまう。速度はともかく、力で押されてジリ貧気味だった。

白と橙の閃光が冷たい夜空で幾度も交差を繰り返していた。拳と拳がぶつかり合い、火花と共に鈍い音が木霊する。

「デカブツツ・・・！ アンタも誰かの使い魔かッ！」

自らの拳を受け止めた巨漢に、アルフは強い口調で疑問を投げかける。

「ベルカでは、騎士に仕える獣を使い魔とは呼ばん・・・！」

男の返答に、眉を寄せ怪訝な顔をするアルフだったが、

「主の盾、そして牙！ 守護獣だアアッ！！」

「同じような、モンじゃんかよオッ！！」

気合いの入った男のさらなる一言に、ツツコミを入れながらもそのまま殴り飛ばす。こちらは比較的实力が拮抗しているため、膠着状態に入っていた。

「だああアツ！ チョロチョコロチョコロしやがって！ ウゼエんだよ！

ネズミかテメーは！ いー加減にブチ当たれってんだッ！」「嫌だよッ！ 死んじゃうじゃないかッ！！ てゆーか、誰がネズミだ！！」

緊張感に欠ける言い争いをしながらも、ヴィータが鉄槌と鉄球による怒濤の攻撃を繰り返し、ユーノがそのことごとくを防ぎ、避け続ける。ユーノが逃げ惑っているだけなのだが、こちらも完全に膠着状態に入っているようだ。ヴィータが頭に血が上り、何も考えず無茶苦茶に暴れ回るだけなのに対し、

転送の準備は整ったけど、やっぱり結界を破壊しないと実行は無理だ！

ユーノはそんな念話をその場の仲間全員に送っていた。言葉とは裏腹に、ケッコー余裕がありそうだ。もしかしたら、今この場で最も頼りに出来るのは彼かもしれない。

黒い衣装を纏った少年二人は歪んだ夜空を背景に、無言で睨み合っていた。片や、自身も身につけたバリアジャケットもボロボロで、体力も限界が近いのか、ゼツ、ハツ、と肩で息をしている。片や、身に纏う戦闘服にかすり傷一つ付けず、さらに体力にも余裕があるのだろっ、感情の見えない表情をその顔に貼り付けている。どちらに軍配が上がるかとしているのか、誰の目にも明らかだった。

やはり結界を破壊しないと転送は無理らしい。
フェイト、アルフ、やれるか？

先程のユーノの念話を踏まえて、フェイト、アルフに念話を送るが、二人とも目の前の敵に手がふさがっていて、結界の破壊など到底無理だった。かくいう自分は論外である。手がふさがっているどころか、自身の安全確保もままならない状況だ。他のことに気を取られれば、それこそ一瞬でやられる。

「・・・一つ、質問があるのだが、いいかね？ 執務官」

戦闘開始以降、堅く口を閉ざしていた少年が唐突に尋ねてきた。正直、体力を回復させたかったところなので、クロノはこの会話で時間を稼ごうと考えた。目の前で自分を冷めた目で見つめる少年の質問に答えねばならないのはしゃくに障ったが、背に腹は代えられない。

「どーぞ、好きに・・・」

一応こちらにも黙秘権があるので、答えられる質問には限りがあるけど・・・」

「貴様等、どうやってこの結界内に侵入してきたのかね・・・？」

結界の構造を完全に把握しなければ、

破壊はおろか侵入すら不可能だと聞いている。

この巨大かつ堅牢な結界を、

貴様等はたったの二十分で突破してきた・・・何をした？」

なるほど、とクロノは納得した。当然の疑問だ。自分自身、今でも驚いている。アースラのスタッフが手も足も出なかった結界であったにもかかわらず、自分を師と慕うあの少年は、解析開始から一分

も経たないうちに自分達四人を結界内へ転送したのだ。彼の天才性を熟知している自分ですら未だに信じられないのに、彼を知らない目の前の少年が予想かつ理解できるはずがない。

「こちらには、君には想像も出来ないような『天才』がいるんだよ。

ボクなんかの弟子にはもったいないくらいの・・・ね・・・」

僅かに余裕を取り戻したクロノは優秀すぎる弟子に感謝しつつ、小さく胸を張り自慢げに語る。そんなクロノの様子を見た少年は、

「・・・弟子とはいえ、他人のことをそこまで誇れる人間は珍しいな・・・。

君とは、気が合いそうだよ・・・執務官」

彼はクロノを『君』と呼んだ。『貴様』ではなく『君』と。先程とは打って変わって、友好的な態度で語りかけてくる少年に、クロノは意地の悪い笑みを浮かべ言葉を返す。

「だったら、『執務官』はやめてくれないか？　ボクにも名前はあるんだ。

さつき名乗ったと思ったけど、ボクの思い違いだったかな？」

「フッ・・・これは失敬。詫びさせてもらうよ、クロノ・ハラオウン」

「悪く思ってるなら、君の名前も教えてくれないかな・・・。不公平だろう？」

クロノの要求に、少年はあごに手をやり考えるような仕草をする。

「・・・ふむ、なるほど。そうだな・・・『クロ』・・・とても呼

んでくれたまえ」

「・・・いや・・・ソレ、あからさまな偽名だよな？」

思わずクロノはずっこけた。相手がこちらに心を開き始めたこともあり、もしかしたら本名を聞き出せるかもしれないと考えていたのだが、甘い考えだったようだ。

「私達は仮にも敵同士だ。

一時の感情に流されて敵に情報を与えるほど、私は甘くはないよ」

「もつともな意見をどーも・・・」

ため息混じりに、自分の交渉術の拙さを恨む。あわよくば、このまま話を引き延ばして、かおるが結界を破壊するのを待とうと考えたクロノだったが、世の中は甘くなかった。特に、目の前の少年は。両腕に光る銀色の籠手から、金属同士を打ち付けるような音と共に薬莢が一発ずつ弾き出される。

「さて、名残惜しいが、決着といこう・・・クロノ・ハラオウン」

次の瞬間、無慈悲な一言と一撃がクロノを襲い、否応なしに彼の意識を刈り取った。

フェイト達に衝撃が走った。『クロノが墜とされた』のだ。もはや目の前の敵を捕縛するところではない。一刻も早く結界から脱出し、体勢を立て直さなければならぬ。空を駆ける三人の魔導師と使い魔は焦燥にかられていた。と、そんな時、

フェイトちゃん、アルフさん、ユーノ君、少しの間、足止めお願い！

スターライトブレイカーで撃ち抜くから！！

そんな念話がなのはから届いた。傷つき、消耗した身体に鞭打ち、仲間を救おうとしているのだ。彼女の身体を心配するフェイト達だが、自分達は手がふさがっているため、結界を破壊できるのは事実上、彼女しかない。手負いの親友に頼らなければならない己の無力を呪いつつ、砲撃を阻止せんとなのはに迫る各々の敵対者の行く手を阻む。

「スターライトオオ・・・ブレイカアアア
ッ！！」

高らかな声と共に、桜色の魔力の奔流が町を覆う結界へと唸りをあげて迫る。そこにいる誰もが、結界の破壊という未来を確信した次の瞬間、光の濁流が唐突にせき止められた。白銀に輝く球形の何かに行く手を阻まれ、四方八方へと細く枝分かれして散っていく。

「……え……………？」

なのは達四人の口から、ほぼ同時にそんな言葉が無意識に漏れる。当然の反応だった。あり得ない。なのはの砲撃魔法はこの場の誰よりも圧倒的かつ暴力的な破壊力を有する。そんな彼女の最強かつ最凶の砲撃・『スターライトブレイカー』を受けきった少年は息一つ乱すことなく、無傷の結界を背に悠然と立っていたのだから。その身を包むかのように展開された球状の膜は、銀色の光を放ちながらも半透明で、内部でたたずむ少年の表情までうかがい知ることが出来た。矢で射貫くようなその視線になのはは恐怖を覚え、一歩後ずさる。

「いやはや、油断した。」

その身体で、まだこれほどの砲撃が出来たとは……」

少年は何事もなかったかのように呟く。そう、確かに体力も魔力も消耗していた。レイジングハートも全体にヒビが入り、今にも砕けそうだった。だからといって、こんなことがありえるのだろうか。普通の魔導師ならば、確実に意識を失うであろう一撃であったはずなのに、少年は淀みなく言葉を紡ぎ、銀色の装飾がなされた漆黒の衣装には傷どころかホコリ一つ付いていない。彼は、あの魔力の嵐をこの至近距離で完璧に防ぎきったのだ。信じられないモノを見るかのようななのは視線に気付いたのか、少年は語りかけるように呟く。

「だが、私は呪われた書の守護者を統べる者……」

自身もデバイスも満身創痍のその身で放った攻撃ごとき、防ぐのはたわいもない……」

少年に気圧され、また一步後ずさった瞬間、彼女の胸部に衝撃が走った。何があつたのかと、おそるおそる視線を下に移してみる。言葉は失った。出血こそないが、光り輝く小さな球体を握った腕が、自身の胸を突き破っていたのだ。握られた球体が次第に小さくなり、発する光も弱まっていく。朦朧とする意識の中、遠くでフェイトの叫び声が聞こえたような気がしたが、少女はそのまま意識を手放した。

「解析終了！ 結果、破壊しました！！」

かおるの口から発せられた吉報に、司令室全体が活気づく。しかし、

第二話 「戦いの嵐、再び」(後書き)

作者「とゆー訳で、第二話でした!」

かおる「ふー・・・やっとセリフがあつたよ・・・」

クロ(仮)「私はすでに戦闘描写もあつたがな・・・」

か「・・・ボクって主人公なんだよね・・・？」

クロ(仮)さんは初登場『プロローグ』だったし・・・
なんかボクの扱いひどくない？」

作「設定上、メイン主人公はかおるだよ？」

なのは「・・・『メイン』・・・？」

か「ちよつ・・・だめだよなのは! まだ動いちゃ・・・!」

フェイト「ゴメン・・・。原作主人公として、

後書きにどーしても参加するって聞かなくて・・・」

作「そう、そこなんだよ!!! いーところに目を付けたな、なのはッ!!!」

な「ふえ・・・?!」

フ「ビックリしたあ・・・」

ク「いきなり大声など出してどうしたのかね。寿命かね？」

作「おめーはいきなり縁起でもねーな……。親の顔が見たいわっ
！！」

ク「現実的には、貴様が親、ということになるのだがね」

作「ソーデシタ……。まあ、そんなことは隅っこにでも置いといて、

実は前々からオレには悩みがあつたんだよ」

フ「え……。どこか具合でも悪いんですか？」

ク「安心したまえ。葬儀の準備は万端だよ？」

か「あ、ボク知り合いにお坊さんがいるので、ちょっと呼んできますね」

作「違うッ！！ 当人無視して勝手に話を進めるな！！

オレが悩んでるのは、

『かおるを完全に主人公にすると、

なのはやフェイトが影に隠れてしまう』ってことだ！！」

ク「ほお……。それで？ 具体的にはどうしたいのかね……」

作「オレとしては、原作主人公であるのはやフェイトも

かおる同様、『主人公』として扱いたいんだ。

こんなカワイイコ達を脇役どもと同じ扱いにするのは忍びないから

な！」

な「カ、カワイイだなんてそんな・・・／＼／」

フ「あ、ありがとうございます・・・／＼／」

ク「・・・なるほど、貴様ロリコンだったか・・・」

か「ッ！！！！！」

ちよっ・・・なのは何かしたらケシズミにするよッ！！？」

作「勝手に暴走するんじゃないやねエ、オリキャラども！！

心配せずとも、オレにその気はねエッ！！」

ク「しかし、そう言う割りには私達の方が強力過ぎると思うのだから？

なのは嬢、フェイト嬢が完璧に影に隠れているぞ」

な「クロノ君、未だにケガがひどくて結局ここに来られなかったしね・・・」

フ「うん・・・ものすごいチートぶりだったよね・・・」

なのはの『アレ』を無傷で防いだもん・・・」

か「そう言われれば、確かに・・・。今のところ戦闘描写は無いけど、

ボクも『魔導師としての能力は一級品』らしいですし・・・」

作「オレのツツコミは完全無視かい・・・」

まあ、なのはとフェイトも

この後原作通りにチート能力を身に付けるわけだからな。

その敵役を務めるとなれば、それなりにチートでなければ！」

ク「なるほど。確かに、私はともかく、なのは嬢の相手役である
『どこぞの小僧』がなんの能力もない平凡な人間では、
釣り合わないだろうね・・・。

やはり『男』は『女を護れる存在』でなければ・・・！」

な「あう・・・／＼／＼」

か「ちょ——ッ！！！」

何を言い出すんですかクロ（仮）さんッ！！

ボクとなのは別にそんな関係じゃ・・・！！／＼／

ク「私は『どこぞの小僧』と言っただけで、

『かおる』とは一言も言っていないのだが、

何か心当たりでもあるのかね？」

か「グ・・・」

作「まあ、こんな感じで話は進んでいきます。

あつ、なのはの恋敵でも出そうかな・・・？」

な「へえ・・・かおる君って浮気なんてするんだ・・・？」

フ「なつ、なのは？　なんか怖いよ？」

か「し・・・しないよ！？　絶対しない！！」

ク「突然の思い付きで、人の人生を大きくねじ曲げるか・・・。
未恐ろしいことだな作者よ・・・」

作「それでは皆さんまた会いましょう！」

な「スターライトオオオ……！」

か「イイイイアアアアア——ツ……！」

第三話 「再会、そしてお引越し」

なのは襲撃から数時間後、明るい照明が照らす本局の休憩室で、砂糖を大量に投下したコーヒートを片手に、リンディはエイミイと言葉を交わしていた。

「なのはさんの容態は？」

「検査の結果、ケガは大したことないようです。」

「……ただ、魔導師の魔力の源、『リンカーコア』が異様なほど小さくなっているそうなんです」

抹茶だろうがコーヒーだろうが砂糖を大量に突っ込む上司に苦笑しつつ、エイミイは答える。その口調はいつになく弱々しく、心なしか表情も沈んでいた。

「そう……じゃあやっぱり、一連の事件と同じ流れね……」

「はい……。レティ提督も、間違いないだろう、と……」

休暇は、延期ですかね？ 流れるに、ウチの担当になりそうですし……」

エイミイの言葉に、リンディは眉尻を下げながら答える。そういう仕事だから仕方ない、と。

「でも……クロノ君のリタイアは、正直痛手ですね……」

「……そう、ね……」

今回の襲撃事件で、なのははもちろんフェイト達も傷を負った。しかし、一番の重傷は、黒髪の少年と戦ったクロノである。全身に及ぶ打撲傷や擦過傷はともかくとして、左腕と肋骨を骨折する大ケガ

だった。命に別状はないが、管理局の医療技術を持っても、完治には二週間ほどかかる。エイミイの顔色が優れなかった大半の理由はこれである。

息子の幼なじみ兼相棒の心中を察しつつ、リンディは敵のリーダーと思われる少年を思い浮かべる。デバイス達の映像記録でしか彼の戦闘を見ていないが、一言で言うと彼は異常だ。『あの』クロノがあそこまで圧倒的かつ徹底的に敗れる姿を、彼女は見たことがなかった。なのはの最強の一撃を受け止めすらした少年に恐怖を覚える。

「やはり・・・彼が、そうなのかしら・・・」

エイミイにも聞こえないほど小さく呟く彼女の脳裏を、剣十字の洋書が再び横切った。

本局医療施設の一般病棟にある、ベッド以外に何もない無機質な個室に四人の少年少女が訪れていた。なのはが入院している病室である。

「・・・なのは、調子は・・・どう・・・？」

入室してからしばらく続いた沈黙をフェイトが破った。

「私は、平気・・・でも、クロノ君が・・・」

ベッドに腰を下ろすなのはは始めこそ笑顔を作っていたが、次第に表情が暗くなり、声も小さくなっていく。彼は自分を救出に来て重傷を負ったのだ。人一倍優しく責任感の強い彼女には辛い現実である。

「だっ・・・大丈夫だよ、なのはっ！」

命に別状はないってお医者さんが言ってたから・・・！」

「そうだよ！　なのはのせいなんかじゃないさ！」

悪いのは全部、あの『真つ黒能面野郎』なんだから！！」

フェイトとアルフが必死に弁護するが、なのはの返事は弱々しいモノだった。とゆーかアルフ、その長ったらしいアダ名はなんだ。すると、一人の少年がなのはにゆっくりと歩み寄ってきた。

「かおるちゃん・・・？」

口をつぐみ、ただ自分を見つめる少年を不思議に思い、なのはは彼の名前を呼ぶ。それからしばらくの沈黙の後、意を決したように彼の口から飛び出したのは、

「ごめん！！」

心の底からの謝罪の言葉だった。

目を丸くする。なのはだけではない。フェイトにアルフ、そしてユーノ、その場に居合わせた者全員が、である。解らない。なぜ、彼が謝らなければならぬのか。なぜ、頭を下げなければならないのか。

「ボクがもつと早く・・・結界を破壊していれば・・・こんな、ことには・・・」

なんということだろう。後悔の念にさいなまれていたのは、自分だけではなかったのだ。拳を悲痛に握りしめ、かわいらしい顔を歪めて絞り出すかのように謝罪する幼なじみに、なのはは首を横に振り、

いつも通りの優しい口調で語りかける。

「かおるちゃんのせいなんかじゃないよ……。
私が、あの子よりも……あの人よりも弱かった。
ただ、それだけだから……」

「君がいなかったら、救援にすら行けなかったんだ。
むしろ、ボク等は感謝してるくらいさ」

ユーノもおおるの肩に手を置き、励ましの言葉を贈り、フェイトとアルフもそれに同意する。次第に皆が笑顔になり、その場には明るい空気が満ちていった。

「そーいやぁ……アンタ、よくこっちに帰ってこれたね。
今、重要な任務中だ、ってクロノからは聞いてただけ……」

アルフの疑問に、フェイトとユーノが、ああ、そーいえば、とポンと手を打つ。事情をクロノから聞いていないのはは、頭の上に疑問符を浮かべている。

「……これを、見てください」

そう言つて、かおるは一つの画像を空中に展開する。どうやら、時空間における次元世界の分布図のようで、所々の世界にバツ印が記されている。

「？　これが、どうかしたの？」

「ボクが今担当している、

『魔導師襲撃事件』の被害が確認された世界をマークしたモノです」

フェイトの質問にかおるが答えるが、皆頭の上に疑問符を浮かべる。この映像と、彼が今ここにいることと、いったい何の関係があるのだろうか。

「・・・ッ!! これって、もしかして・・・!!」

突如として、ユーノが病院にいることも忘れて叫ぶ。何かに気付いたようだ。皆の視線がユーノに集まる。

「・・・どの世界も、なのはの世界からの個人転送が可能な世界だ・
・!..!」

その言葉に、なのは達が弾かれたようにモニターを見直す。ユーノの言うとおり、なのはとかおるの出身世界である『第97管理外世界』を中心としてバツ印が記されている。

「すでに捜査員にも、なのは同様の被害が及んでる・・・。
少なくとも、一連の事件の犯人は地球を拠点として活動しているんだと思う」

「・・・それが、あの人達・・・ってこと？」

なのはは幼なじみの言わんとしていることを察して疑問系で確認し、かおるは小さく頷き彼女の言葉を肯定する。

「なるほどねエ・・・。それで、なのはが危険だと思って駆け付けたのかい。」

妬けるねえ・・・お二人さん？」

皆が納得し、会話が一旦途切れる。アルフの一言になのはとかおる

の頬が弱冠染まり、その様子をアルフがニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべて見ていたのはご愛敬だろう。

「・・・そーいえばさあ・・・あの連中の魔法って、なんか変じゃなかった？」

突然思い出したかのように、またもやアルフが疑問を口にする。なのはとフェイトも同意見のようだ。

「アレはたぶん・・・『ベルカ式』だと思う」

「ベルカ式？」

ユーノが自分の予想を口にし、聞き覚えのない単語をなのはが疑問系で繰り返す。

「その昔、今ボク等の使ってるミッド式と勢力を二分した魔法体系だよ。

遠距離や広範囲攻撃をある程度度外視して、

対人戦闘に恐ろしいほど特化した魔法で、

優れた術者は『魔導師』ではなく『騎士』って呼ばれてる・・・

「そーいえば、あの人、自分のことを『ベルカの騎士』って言うてた・・・」

なのはの疑問に答えるように、ユーノは自らの知りうる知識をゆつくりと語る。フェイトも記憶の中の女性の言葉を反芻し、小さく呟く。

「最大の特徴は、デバイスに組み込まれた武装『カートリッジシステム』」。

儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組みんで、瞬間的に爆発的な魔力を得ることが出来る……。かなり危険な技術だよ」

かおるがユーノの説明にさらに知識を付け足したことで、なのは達は驚愕した。当のかおるは訳が分からないといった感じで、目を見開いて自分を凝視する四人をキョロキョロと見渡す。

「……かおるちゃん……なんでそんなに詳しいの？」

なのは達にしてみれば、当然の疑問だ。半年ほど前までなのは同様魔法に対して全くの素人だったにもかかわらず、しばらく会わない内に、正式な魔法教育を受けたフェイトやアルフ以上の魔法知識を得ていたのだから。

「ああ、この件の捜査を依頼される前は、色んな魔術書や記録書の類を読みあさってたから……。

記録の残ってる魔法やデバイスについての知識はだいたい覚えてるんだ」

目の前の少年は実に軽く言ってくれるが、実際はそんな気楽に得られるような知識ではない。部屋の隅では、自信喪失したユーノが暗いオーラを纏って何やらブツブツと呟いている。彼の天才的な頭脳の一端を、なのは達は改めて目の当たりにしたのだった。しかし、当の本人は全く自覚が無いようで、友人達——特にユーノの反応に疑問符を浮かべていた。

「じゃあ、悪いけどやる事があるから……。またね、みんな」

友人達の態度が気になったが、彼も仕事に追われ、忙しい身の上で

ある。短い別れの言葉を言い残し、天才は病室を後にする。残された少女達は、部屋の隅での字を書き始めた少年をしきりに慰めていた。がんばれユーノ……いつか必ず良い事あるさ。

同時刻、海鳴市にたたずむ一軒家・八神家では家族がそれぞれに夕食後の一時を過ごしていた。

長女であるはやと末っ子のヴィータは共にテレビを眺め、次男兼飼い犬のザフィーラはその傍らで伏せ、少女達を見守っている。次女・シャマルは台所にて夕食に使った食器を洗い、三女・シグナムはソファ―に腰を下ろし、夕刊を広げて情報の収集に勤しむ。そして、長男であり八神家の家長でもある少年、玄斗はシグナムの隣で愛読の書物を読みふけている。ちなみに題名は、『今日の献立百選』である。

「はやてちゃん。お風呂沸きましたよ」

食器洗いを終えたシャマルが、間延びした声と共に皆の集まるリビングへと入ってくる。はやては元気よく答え、脱衣所に向かうべくシャマルに抱きかかえられる。

「シグナムはどうする？」

新聞をたたみテーブルの上に置くシグナムに、はやてを抱えたままのシャマルが尋ねる。

「私は、今夜はいい。明日の朝にするよ」

「お風呂好きが珍しいじゃん」

シグナムの返答に、はやてと一緒に風呂に入ろうとシャルムの横に立つヴィータが頭の後ろで腕を組み、素直な感想を述べる。今夜の入浴を断った彼女は、八神家でも一、二を争う風呂好きなのだから当然だ。余談であるが、そのライバルは隣で愛読書を熟読している長男である。

疑問を浮かべるヴィータに、たまにはそんな日もあるさ、とシグナムは語る。一応の納得を見せ、三人はリビングから退室していった。

「・・・先程の戦闘かね？」

パタンと本を閉じる音と共に、それまで全く会話に参加していなかった長男が唐突に尋ねてきた。疑問系だが、どこか確信を持っているような口調だ。

「・・・さすがですね・・・なぜ、お分かりに・・・？」

「妹の異変を察知できない兄などいまい？」

長年を共に過ごしてきたシャルム達にすら悟られなかったのに、なぜ・・・？ シグナムは驚き、玄斗に尋ねるが、彼は口元に柔らかな笑みを浮かべ、さも当然のようにそう答える。そこにいるのは威風堂々とした武人ではなく、優しい一人の兄だった。シグナムは上着をへその上までまくり上げる。そこには一筋の赤い線があった。脇腹から中心にかけて走るそれは、間違いなく斬撃の痕である。

「お前の鎧を打ち抜いたか・・・」

「・・・ああ、良き師に学んだのだろう・・・澄んだ太刀筋だった・・・」

武器の差が無ければ、少々苦戦したかもしれん・・・」

伏せていたその身を起こし傷を見つめるザフィーラに、脳裏に相對

した少女を思い浮かべつつシグナムは答える。

「なるほど……。それに、心動かされた、ということか……」

少年の言葉にシグナムは疑問符を浮かべるが、次いで彼の口から出た言葉で言わんとすることはすぐに分かった。

「名乗ったのだろうか？ その少女に……」

「……はい……」

確かに名乗ってしまった。敵対する、管理局の魔導師相手に。今考えてみれば、浅薄極まりない行動だ。責められるかと思ったが、少年の反応は実に軽いモノだった。

「姿が知られたのだ。名前を知られたところで、大差ない。

それに……奴等も馬鹿ではない。

直にこちらの正体にも気付くだろうしね……」

そう言つて窓に歩み寄り、少年は夜空を眺める。

「……むしろ、好都合だ……」

口元を不敵に歪めたその眩きはとても小さく、誰の耳にも入らなかった。

本局ブリーフィングルームにアーススタッフ達は集結していた。その中には、なのはやフェイト達の姿も見える。

「さて、私達アースラスタッフは今回、『ロストログア・闇の書の捜索』

及び『魔導師襲撃事件』の捜査を担当することになりました。ただ、肝心のアースラが整備のためしばらく使えない都合上、事件発生地の近隣に臨時作戦本部を置くことになります」

リンディが皆の前に立ち、今後の対策と小隊メンバーの振り分けを言い渡す。引き締められたその表情には、普段の『優しい近所のおばさん』のようなゆったりとした雰囲気は微塵も感じられない。

「ちなみに司令部は、なのはさんの保護をかねて、なのはさんのお家のすぐ近くになります」

なのはのリンカーコアは完治するまでに時間を要する。それまで彼女は満足に魔法を使えず、かなり危険な状態なのだ。その言葉に、少女達が喜びの声を上げ、手を取り合って喜んでいるところに、リンディが人指し指を立てて「それから、もう一つ」と付け加える。

「今回の一件で、クロノ執務官がしばらく戦線を離脱することになりました。

よってその代行として、本局武装隊の捜査官が二名、本日より司令部に合流します」

室内がざわめく。クロノに匹敵する実力を持つ人材を、アッサリと確保できたことに驚いているのだ。なのはやフェイトも「怖い人だったらどうしよう・・・」などと、表情を強張らせてリンディの説明を聞いている。

「じゃあ、入ってもらえるかしら」

リンディがドアの向こうに入室を促し、一呼吸置いて二人の人物が規則正しい足音と共に室内に入って来た。一列に並び、ビシツと音の聞こえそうな敬礼をして、それぞれ自己紹介をする。

「本日より、負傷されたクロノ執務官に代わって

捜査及び現場指揮を執ることになりました！

春風がおる 一等空士であります！

若輩者ですが、よろしく願います！！」

「同じく、春風一士の補佐として派遣されました、リイナ・クルセイド 三等陸士です。

基本的に春風一士の指示にしか従いませんが、これからよろしく願います」

片や、かわいらしい顔に笑顔と緊張を貼り付けて、精一杯に大きな声で話す、よく見知った少年。そのやる気が空回りしなければいいのだが……。片や、綺麗な顔に表情を見せず、ハスキーボイスで冷静に話す、銀色のショートカットが印象的な、なのは達と同年くらいの初対面の少女。最後の一言が弱冠気になるが、悪い子ではなさそうだ。

それぞれの個性的な態度に苦笑するリンディだが、時間が押していることもあり、クルー達に自分の仕事にかかるように指示をする。その場には、リンディとエイミィ、なのはやフェイト達、かおるとリイナだけが残った。

「……えっと、急な派遣の事とか、気になる事が色々あるんだけど……

そっちの子は……誰かな……？」

かおるとリイナを交互に見ながら、真っ先になのはがかおるに質問する。その声は、心なしか震えているように思えた。

「えっと、その・・・彼女は・・・」

「先程、説明したとおりです」

説明しようとしたかおるの声を遮り、リイナが二人の間へ割って入る。なのはの眉尻が僅かに吊り上がり、リイナを見据えて話し始める。

「あの・・・私は、かおるちゃんとお話してるんだけど・・・」

「気安く彼に話しかけること自体が間違っています。」

「いったいなんなんですか、あなたは？」

「ッ・・・幼なじみです!!」

まさに火花を散らさんばかりの言葉の応酬である。その様子を、リンドイは「若いつて良いわねえ」と微笑ましそうに、エイミィとアルフはニヤニヤと嫌な笑みを浮かべて見つめ、フェイトとユーノは二人の放っているドス黒いオーラに恐怖し、お互いに手を握り合いガタガタと震え、言い争いの原因であるかおるは、眉間をもみながら深くため息をついている。

言い争いを続ける少女二人を尻目に、アルフがかおるに疑問を投げかける。

「アンタ、いつの間に正式入局してたんだい？」

それも、『一等空士』だなんて・・・」

「『小隊指揮権』の保有者が、

いつまでも『囑託』なのはいかなモノかって、

上層部の方で色々と議論になってね・・・。

短期育成メニューを経て、つい二週間ほど前に正式に入局したもらったのよ」

かおるの代わりにリンディが説明し、アルフはへえと納得の色を見せる。しかし、入局してわずか二週間で『一等空士』とはどういう訳なのだろうか。ユーノはまたもや頭を抱えだした。

「あ、そーだ、かおる君、

レイジングハート達のメンテナンスはどうなってる？」

ニヤニヤとした表情を真剣なそれへと変えて、今度はエイミーが尋ねてくる。

「正直、二機共破損が思いの外甚大で、大がかりな部品交換をしないと・・・」

そう語るかおるの声色と表情は心なしに暗く沈み、言葉も弱冠齒切れの悪いモノだった。フェイト達はかおるが自分達のデバイスの修理を行っている事実に驚嘆していた。この天才は、いつの間にか『デバイスマイスター』の資格も取っていたらしい。未恐ろしい少年である。

「そーいえばさ、聞いてる？ フェイトちゃんのこと」

「はい。リンディ提督やクロノさんの方から・・・」

唐突にエイミーがふった話の内容・・・それは、『フェイトの養子縁組』のことである。天涯孤独の身になったフェイトをリンディが養子として迎えたいと言ってきたのだ。実母のことでフェイトの心の整理が未だ不十分なこともあり、今は保留となっているが、フェイトもクロノもまんざらでもないようで、その内に良い返事が返ってくるだろう。頬を弱冠染めているフェイトに祝福の眼差しを送り、

「・・・どーやって止めればいいんだろ・・・」

自らの幼なじみと銀髪の部下に視線を戻す。

「砲撃で相手を吹っ飛ばすしか能の無い乱暴な人に、かおるさんは絶対に渡しません」

「・・・渡すとか、渡さないとか・・・かおるちゃんは物じゃないんだよ？」

そこには、ヒートアップして訳の分からない言い争いを続ける二人の少女がいた。だんだんと、なのはの口調も強くなり、眉間には青筋も浮かんでいる。並の魔導士ならば卒倒モノの怒気と殺気をぶつけ合い、言い争う少女達。かおるは肩を落とし、一層大きなため息をつくのだった。

「どーゆー状況なのよ、コレ・・・」

独り言のように疑問を口にする少女、アリサ・バニングスの表情は引きつっていた。隣に座る月村すずかも同様である。目の前では、親友と見ず知らずの銀髪少女が火花を散らせて睨み合っている。

現在彼女達は、なのはの新しい友達であるフェイトの歓迎会を兼ねたお茶会を、なのはの実家が営む喫茶店『翠屋』にて行っているのだが、開始早々険悪な雰囲気であった。かおるは額に人差し指を押しつつ、幾度となくため息をつき、フェイトに至っては今にも泣きそうな顔でオロオロとしている。ちなみにユーノとアルフは動物形態で、それぞれアリサとすずかの膝の上に避難していた。

「あの・・・かおるちゃん？」

フェイトちゃんは何度かビデオメールで見たから知ってるけど、

あつちの子は誰なの？」

緊迫した空気に耐えきれなくなったさすが、おそろおそろかおるに尋ねる。

「えっと、最近知り合った人で、リイナ・クルセイドさん」

悪い人じゃないんだけど、と苦笑しながらかおるは答える。アリサやすずかには魔法や管理局の存在を知らせていないので、弱冠眞実をばかして紹介するしかないのは少々心苦しい。ちなみに、なのはの家族も魔法については何も知らされていない。これでホントに良いのだろうか……。

「……ところで、すずかさん。

なのはもそうなんだけど、なんでボクを呼ぶとき『かおるちゃん』なの？」

「え、その……深い意味は、ないんだけど……昔からそう呼んでるし……」

話題を変えようとしたのだろうか。思い出したようなかおるの質問に、言いにくそうにすずかは答える。しかし、その隣の勝ち気な金髪少女が腕を組み、胸を張ってハッキリと言いつつ放った。

「だって、アンタぶっちゃけ女の子みたいじゃない」

それほど大きな声では無かったが、全く遠慮のない直球ド真ん中の発言はその場に良く響いたという。場の空気が一瞬固まった。

「初めて合った時なんか、すっかり女子だと思い込んでたもの。ね、すずか？」

「ア、アリサちゃん・・・！ そんなにハッキリ言っちゃ・・・」

瞬間、かおるに落雷のごとき衝撃が走った。口をあぐりと開け、硬直する。ガンという効果音が聞こえてきそうだ。

彼女達の発言は、別にいじめでもなんでもない。誰の目から見ても明らかな、真実である。初対面の人間は、必ずと言っていいほど彼を女子と誤認する。その理由としては、まず第一にその容姿があげられる。肩の高さで切りそろえられた綺麗な黒髪を揺らし、整ったかわいらしい顔に常に優しいげな笑顔を浮かべる。加えて、どこかの令嬢かと思わせるような仕草に、『かおる』というかわいらしい名前。どこから見ても美少女である。むしろ、誰がこの人物を『少年』だと思うだろうか。小学校に入学した当初は、誰もが彼を女子だと思いつ込み、一部の男子がファンクラブまで作った程だ。噂によれば、歪んだ趣味の人間が虎視眈々と、今でも彼を狙っているらしい。気がつけば、かおるは店の隅でうずくまり、のの字を書きながら落ち込んでいた。

「お待ちなさい！！」

かおるさんに対する暴言、見過ごせません！

なんなんですか、あなたは！！」

「・・・何よ、文句あるの？ アンタこそなんなのよ。

今日はフェイトの歓迎会なのに、

なのはと睨み合って険悪な雰囲気にしてくれてさ・・・。

かおるの知り合いとは思えないんだけど？」

テーブルをバンツと叩きながらリイナがアリサに詰め寄り、そのアリサも不機嫌オーラ全開で彼女を睨み付ける。なのはとすずかは落ち込んでいるかおるを必死に慰め、ユーノとアルフは身の危険を感じたのかどこかに逃げ出し、フェイトは二人を止めようとするものの、その気迫に押されて泣きそうになっている。

結果、アリサとリイナの静かな口論はその後しばらく続いたという。

第三話 「再会、そしてお引越し」（後書き）

作者「とゆー訳で、約一週間ぶりの投降でした。

いや、色々と大変だった」

かおる「今回もなんか地味な役だったなあ・・・。

主人公なのに・・・」

玄斗「私の本名もようやく出たな・・・」

リイナ「彼の場合、見た目そのまんまですけど、
私の名前の由来はなんなんですか？」

作「・・・テキトー・・・？」

リ「・・・なんですか、それ・・・？」

作「いや、なんか書いてたら、パツとひらめいたと言つか・・・」

玄「仮にも、なのは嬢の恋敵なのだろう？」

良いのか？ そんな適当なこと・・・」

リ「そーですよ！ もっと真剣に考えなさいよねッ！」

なのは「脇役の扱いなんて、所詮はそんなモノってことかな・・・」

フェイト「な、なのは？ なんか、すっごく毒舌だよ?」

リ「・・・クッ・・・！」

今のうちにせいぜい余裕をかましていなさい！
かおるさんは私のモノです！！」

な「そんなことさせないよ・・・？」

フ「な、なのは！？ デバイスなんか起動してどうしたのッ！？」

リ「いいでしょう、受けて立ちます！！」

玄「恋は盲目と言うが、結果は火を見るよりも明らかだと思っがね」

か「・・・話題の中心のはずなのに、

後書きですら影が薄い主人公っていたい・・・」

第四話 「新たなる力、起動！」

十二月四日 午後八時五十六分

かおるは今、エイミィと共にとある病室を訪れていた。自分の師とも言える尊敬できる先輩、クロノの入院している病室である。しかし、入室してみると、すでに先客がいたようで、提督の制服に身を包んだ初老の男性がクロノと談笑していた。

「かおるじゃないか。どうしたんだ、こんな時間に？」

老人が出入り口に背を向ける形で立っていたため、最初に彼の入室を察知したのはクロノだった。次いで老人も来客に気付き振り返る。

「えっと、お見舞いに来たんですけど……。そちらの方は……？」

「ああ、紹介するよ。ギル・グレアム提督。ボクの恩師で、フェイトの保護観察官だ」

「艦隊指揮官、執務官長にもなった偉い人なんだよ」

クロノの紹介にエイミィが捕捉を付け足した瞬間、かおるはビシッと敬礼をして自己紹介を始める。

「本局武装隊捜査官、春風かおる 一等空士であります！」

お噂はかねがね……。お会いできて光栄です！！」

「ハハハ……。そう固くならなくていいよ。なるほど、君がそうか……。」

クロノから話は聞いている。とても、優秀だそうだね？」

ガチガチに緊張しているかおるに苦笑しながら、グレアムは敬礼を

解くように促す。その顔には、歴戦の勇士とは思えない優しげな笑みを浮かべていた。

あまり長居をしても、クロノの養生の邪魔になるということで、グレラムはかおるが訪問して早々に退室していった。ドアの向こうに彼の姿が見えなくなると、クロノの顔は仕事をする時のソレに変わり、真剣な眼差しでかおるに尋ねた。

「それで？ わざわざどうしたんだ？ ただ単に見舞いに来ただけじゃないんだろ？」

「……ええ。今回の事件のことなんですが……」

察しの良い自らの師に苦笑しつつ、かおるは空中にモニターを展開する。そこには女性の胸に抱かれた金色の剣十字の装飾が表紙に輝く洋書が映し出されている。

「ッ！ これは……!!」

「やっぱり、間違いないみたいですな……」

瞬間、クロノの表情が驚愕で染め上げられ、その様子を見たかおるは自らの仮定を確信へと昇華させ、軽くため息をつく。エイミイはイマイチよく分かっていないのか、そんな二人を交互に見つめていた。

「えーと……その古そうな本が、どーかしたの……？」

「……少しばかり、嫌な因縁があるんだ……」

顔をのぞき込みながら尋ねてくるエイミイに、クロノは顔を弱冠歪め、呟くように小さな声で答える。それは痛みを耐えているかのよくな表情であった。

「第一級搜索指定遺失物、通称『闇の書』。

長きに渡って管理局を苦しめてきた、呪われた魔導書です」

「・・・最大の特徴は、そのエネルギー源・・・。

魔導師の魔力と魔法資質を奪うために、リンカーコアを喰うんだ。

喰ったリンカーコアの魔力や資質に応じて、ページが増えていき、

全ページを埋めることで、『闇の書』は完成する・・・」

クロノに代わってかおるがモニターに映された洋書の正体をエイミイに告げ、より詳細な知識をクロノが苦々しげに説明する。

「なるほどね。なのはちゃんのリンカーコアもその被害にあった、
ってことか・・・

ちなみにさ、完成すると・・・どうなるの？」

「・・・少なくとも、ろくな事にはならない・・・」

不安げなエイミイの問い掛けに、クロノは苦々しげに言葉を絞り出す。その場に暗い空気が漂い始めた。

「そういえば、フェイトはどうしてる？」

君達と同じ学校に編入したと聞いたんだが・・・」

クロノがふと思い出したかのように話題の転換を図り、エイミイはホッと胸をなで下ろす。

「まだ少しアタフタしてますが、直に慣れると思います。ただ・・・」

今朝のフェイトの様子を思い出しながら苦笑し、言い淀むかおるに

エイミイは疑問符を浮かべ、クロノは眉をひそめる。

「リイナさんが、なのはとアリサさんになぜか対抗意識を燃やして・・・」

いさめるのに一苦労してるみたいです・・・」

「・・・なのはちゃんに分かるけど、なんでアリサちゃんにまで・・・」

実は、フェイトと一緒にリイナも聖祥大付属小学校に編入したのだが、かおるの親友二人と顔を合わせるたびに口ゲンカをしているのだ。エイミイは訳が分からないと首をひねり、クロノはやれやれとため息をつく。

すると、病室に新たな人物が、乾いたドアの開閉音と共に入ってきた。

「あら、かおるさん、こんな時間にどうしたの？」

自分達の上司であるリンディだった。確かに、エイミイはともかく、かおるのような少年がうるつくには少々時間が遅く、彼女の疑問ももつともだろう。

「あ、その・・・クロノさんにも確認を、と思ひまして・・・」

「仕事熱心なのは良いけど、あなたくらいの年の子がうるついていい時間じゃないわ。」

こんな事言える立場じゃないけど、身体は大切にしなきゃ・・・

「

申し訳なさそうに話すかおるにリンディは苦笑し、優しく注意する。

「すみません・・・。やらなきゃいけない事とか、結構あるので・

・・・

それに・・・家に帰っても、どうせ一人ですから・・・」

俯きながらの暗く沈んだその言葉に、皆が押し黙った。リンディに至っては、「しまった」と片手で顔を覆い、肩を落としている。

彼に家族はいない。いや、正確には両親と妹がいたのだが、幼い頃に不慮の事故により他界してしまったのだ。奇跡的に彼は助かり、入院していた海鳴大学病院で、同じ頃に大ケガで入院していた父親の見舞いに来院していたのはと運命的な出会いを果たしたのだが、それはまた別の話。そんなわけで、彼は今一人で生活をしている。なのはの両親である土郎と桃子が再三にわたって同居を勧めているのだが、「迷惑がかかるから」と断り続けている。

場の雰囲気再び暗く沈み始めたその時、かおるの端末に通信が入る。モニターを開くと、そこにはエイミィとクロノの後輩である本局技術官、マリエル・アテンザの姿があった。

かおる君、例のインテリジェントデバイス二機なんだけど・・・
。

部品交換と修理は終わったのに、

『必要な部品が足りない』ってエラーコードが消えなくて・・・

こっちのアクセスをいっこうに受け付けてくれないのよ・・・

お手上げといった感じで相談してくる彼女に、かおるは二機が求めている部品の一覧を自分の方に転送するよう頼んだ。即座にデータは届き、彼はそれに目を通す。横から興味半分でエイミィがのぞき込むが、その瞬間彼女の顔色が代わった。

「・・・え・・・これってまさか・・・」

なのはとフェイトの愛機が望んでいる部品・・・それは、

「CVK-792・・・ベルカ式・・・カートリッジシステム・・・!?」

「・・・その手があった・・・!!」

目を見開いたエイミイの小さな呟きとほぼ同時に、弾かれたようにかおるが叫んだ。普段から物静かな彼とは思えないその行動にリンディ達も驚きを露わにする。

「マリーさん！ 今からそちに合流します！

それまでに、二機が要求した部品を用意しておいて下さい!!」
わ、分かった！

クロノとエイミイが、病室を飛び出そうとするかおるを止めた。正気の沙汰とは思えない。彼は『ミッドチルダ式』の繊細なインテリジェントデバイスに、『ベルカ式』のカートリッジシステムを組み込もうとしているのだ。どのような危険を伴うか、デバイスについては専門外のクロノ達でも想像に難くない。

「・・・今のままでは、彼等には到底敵いません・・・。

再び対峙しても、結果は同じです。それでは、意味がありません」

「それはそうだが・・・！

それなら、以前から君が研究していたミッド用の戦闘力増加の技術があるだろう!？」

研究はすでに完成していると、マリーからは聞いているぞ!」

そんなクロノの言葉を、かおるは首を横に振り否定する。

「技術自体はすでに確立されていますが、正確には、まだ完成は

してません……。

使用時における術者への反動が未知数で、安全面での不安がどうしても残るんです」

安全性を確認するには、まだしばらく時間を必要とする。しかし、敵は待つてはくれない。ならば、すでに使用者の存在が確認され、安全性もある程度確立されている『カートリッジシステム』を組み込んだ方が時間的にも都合がいい。幸いにも、課題は『デバイスの強度』のみ。こちらはいくらかでも調整することが出来る。かおるはそう考えていた。

自らの考えを静かに説明し、かおるはマリーの待つメンテナンスルームへと駆けていく。残されたクロノ達は『天才』^{かおる}の判断を信じ、彼を見送ることしか出来なかった。

翌日、八神家の長女 はやては朝食の準備をするべくリビングへと下りてきた。庭の方から風を切るような鋭い音が断続的に聞こえるが、長男が日課である朝の鍛錬をしているだけなので、なんの問題もない。今日も我が家は平和である。ふと、ソファに座りながら寝息を立てる三女の姿が目に入った。桃色のポニーテールを揺らしながら寝ているそのそばには、床に伏せて寝ている次男兼飼犬の姿もある。しょうがないな、と苦笑いを顔に浮かべ、はやてはそつと二人に毛布を掛けるのだった。

シグナムとザフィーラは、まな板を叩く軽快な音で目を覚ました。同時に、いつの間にか自分達に掛けられた毛布の存在に気付く。

「あ、起こしてもーた？ ごめんなあ」

声のした台所に目をやると、朝食を作りながら申し訳なさそうに謝るはやての姿があった。毛布をたたみながら、とんでもないと返事をするシグナムに、はやては温められたミルクを差し出す。曰く、身体を冷やして風邪を引いたら大変、だそうだ。そんな時、寢室の方からドタドタと騒々しい足音が近づいて来て、バーンと勢いよくリビングのドアが開いた。

「すつ、すみません、はやてちゃん！ 寢坊しましたあゝ！！」

寢癖のついたショートカットの金髪を直そうともせず、慌てた様子でエプロンを着用しながら、ドアを蹴破らんばかりの勢いで次女が入ってきたのだ。その後ろからは、赤毛の末っ子も目をこすりながらトボトボと頼りない足取りで、あくびの混じった朝の挨拶と共に入ってくる。お気に入りのウサギの人形を小脇に抱えているこちらは、見るからにかなり眠そうだ。

「・・・やれやれ、何やら騒々しいね」

先程の鍛錬で汗をかいただめ、シャワーでも浴びてきたのだろう。濡れた長髪をタオルで拭きながら、長男兼家長の少年がため息混じりに静かに入ってきた。愛用のシャンプーの良い匂いがリビングに広がる。

「・・・申し訳ありません、兄上」

「いや、なに・・・責めているわけではないよ。」

ただ・・・ケガだけはせぬように、それだけだ」

顔に柔らかい笑みを浮かべ、少年は困ったように言葉を紡ぐ。そんな少年に弱冠頬を染め、シグナムは手元のココアへと視線を移す。やはり、ここは温かい……。改めて、そう感じていた。

八神家の朝食は一般の家庭と比べ、けっこう量が多い。かかる食費はそれほどでもないが、いかんせん、おかずの種類が多いのだ。その理由としては、長男と長女が料理好きであり、その腕前もかなりのモノであることが挙げられるのだが、何よりも長男の持論の一つである『食事は三食キツチリ取る』が大きな影響を与えている。一食でも除こうモノなら、もれなく地獄の閻魔大王が降臨するだろう。

賑やかな朝食も終わり、はやてはシャマルと共に海鳴大学病院の掛かり付けの医師の元へ、そして残りの面々は、

「さて、私達も行くでしょう」

「管理局の動きも今までに比べ、本格的になるでしょう。」

少し遠くの世界での蒐集を・・・」

「油断するなよ、ヴィータ」

「わーってるよ・・・!」

今日も闇の書のページを蒐集するべく、四色の軌跡を描いて、思い思いの世界へと散っていくのだった。

海鳴大学病院の勤務医である石田幸恵は、最近頭を悩ませている。自分が主治医を務めている少女の病状が、いつこうに良くならないのである。『原因不明の神経性麻痺』、それが少女の病名ですらない病名だ。あらゆる治療法を試しているのだが、徐々に、しかし確実に麻痺は進行している。

「はやてちゃん、日常生活はどうです？」

「・・・足の麻痺以外は、至って健康なんですけど・・・」

今、彼女は少女の保護者の一人である金髪ショートカットの女性を相手に問診をしている。件の少女は、今は診察室前で待ってもらっている。以前は、たった一人の兄が相手であったこの問診だが、最近では親戚である目の前の女性を相手にすることが多く、異常なまでに妹思いの少年の姿を彼女はしばらく見ていない。

「お辛いと思いますが、私達も全力を尽くしています。

今は、なるべく麻痺の進行を緩和させる方向で進めてますが、これからだんだん、入院を含めた辛い治療になるかもしれない……」

話の内容に比例して、保護者である女性、シャマルの表情も自然と険しくなる。そんな彼女と車イスで生活している少女に申し訳なく思いつつ、石田は脳裏に一人の少年を思い浮かべていた。

一夜明けた本局医療施設の休憩所にて、かおるはエイミィと共に事件の経過をクロノに報告していた。未だ腕の包帯は取れず、少々痛々しい。

「グラム提督の口利きのおかげで、武装局員の一個中隊を借りられました。

現在、地球を中心に各次元世界で捜査に当たってもらってますが……」

「全っ然捕まってくれなくてさ……。これまでより少し遠くの世界で、イロイロとやってくれてるみたい。

昨日だけで、魔導師が十数人……野生動物が約十体……」

「・・・野生動物？」

いつもよりトーンを落としたエイミィの報告の内容に、クロノは怪訝な顔で疑問を口にする。

「魔力の高い、大型生物ですよ。」

リンカーコアさえあれば、人間じゃなくても蒐集可能みたいですよ」

「・・・まさに、なりふり構わずだな・・・」

苦笑しながら答えるかおるに、自分を完膚無きまでに倒した少年を思い浮かべながら、クロノもまた苦笑いで返す。

「・・・でもさ、なんなんだろうね・・・？ 闇の書って・・・」

唐突かつ静かにエイミィが自らの疑問を口にする。

魔力蓄積型のロストログア——『闇の書』。魔導師の

魔力の源であるリンカーコアを喰い、そのページを増やしていき、全ページである666ページを埋めることで、奪った魔力を媒介に、次元干渉レベルの強大な力を発揮するこの魔導書は、『本体を破壊』もしくは『所有者が死亡』しても、白紙に戻って別の世界の新たな主の元で再生するため、破壊することも止めることも出来ない危険な代物なのである。その出自も製造目的も、未だ深い謎に包まれているのだ。

「分かりません・・・。ただ、一つだけハッキリしている事があります」

「今回の事件の『カギ』を握っているのは、間違いなく『彼』だ」

かおるの言葉を肯定するようにクロノは頷き、目の前にモニターを

展開する。そこに映し出されたのは、あの黒髪の少年だった。

「確か彼は、なのはに自らを

『呪われた書の守護者を統べる者』と名乗っていた……。

これの意味するところは……」

「この子が、『闇の書の主』だ……って事……?」

「……確証はありませんが、可能性は非常に高いです……」

クロノの言わんとしていることをエイミイが代弁し、その意見をおるが静かに肯定する。この前の戦闘で彼が発揮した魔力値は、少なく見積もってもSランク以上。『闇の書の主』としての素質は十分である。しかし、かおるは何やら得体の知れない不安に襲われていた。このまま行けば、事件に関わった全員が不幸になる。そんな予感がするのだ。

その頃、なのはとフェイトは高町家のなのはの自室で、今後再びまみえる事になるであろう人物達について考えていた。

「なのはは、あの人達のこと……どう思う?」

「えと……私は、いきなり襲われて、すぐ倒されちゃったから・

・」

「よく分からない」と、頬をポリポリとかきながら、苦笑いでなのはは返す。

「フェイトちゃんは、あの剣士の人と何か話してたよね?」

「うん……少し、不思議な感じだった……」

記憶の中の長剣を携えた女性を思い浮かべながら、フェイトは言葉を紡ぐ。

「・・・うまく言えないけど、悪意みたいなモノを全然感じなかったんだ・・・」

「そつか・・・」

闇の書を完成させようとしてる目的とか、教えてもらえたらいいんだけど・・・

話が出来そうな雰囲気じゃなかったもんね・・・」

「強い意志で自分を固めちゃうと、周りの言葉って、

なかなか入ってこないから・・・」

私も・・・母さんに傷つけられても、疑っても・・・

それでも、絶対に間違ってたないって思ってた時は、

信じようとした時は・・・誰の言葉も入ってこなかった・・・」

フェイトの一言には弱冠影があった。彼女の過去には、幾分暗いモノが多い。なのはという親友に会えなかったら今頃どうなっていたか、想像することすら恐ろしい。心なしか、なのはの表情にも影が落ちる。

「で、でも、言葉を掛けるのは・・・想いを伝えるのは、絶対無駄じゃないよ・・・！」

母親のため、自分のためと、頑なに信じようとしていた自分でさえ、なのはの言葉で幾度となく心が揺れた、とフェイトは語る。言葉を伝えるために、戦い、勝つ事が必要ならば、迷わずに戦える、とも自分の思いを貫くため、二人の少女は互いに『強くなること』を再び誓い合うのだった。

ちなみにその頃、

「なんで私が、あなたと書類整理なんてしないといけないんですかッ！」

「しょーがないだろ!？」

かおるがクロノのところに報告に行つてて、まるつきり人手が足りないんだから！」

「・・・ケンカしながらそんだけ仕事できるって、ある意味すごいな・・・」

ハラオウン家リビングでは、リイナとユーノが言い争いをしながらも書類の山を黙々と処理していた。そばでアルフがスナック菓子をほおばりながら、あきれ顔でその様を眺めている。

「かおるさん・・・早く帰ってきてくれないかしら・・・」

リンディの深いため息は、赤く染まった空の彼方へと消えていった。

数日後、ハラオウン家リビングにて盛大にクラッカーの破裂音が木霊した。

「いやゝ、めでたいッ!!」

使用済みのクラッカーを片手に満面の笑みでエイミイはそう語る。何がそうめでたいのかというと、修理に出していたのはとフェイトのデバイスが、本日やっと持ち主の手に帰って来たのだ。同時に、なのはのリンカーコアも完治し、二重にめでたい。というわけで、

久々にエイミイの軽い性格が爆発したのである。しかしながら、この場にかおるの姿はない。マリーの話によれば、昨日から研究室に閉じこもり、何やら画面と壮絶ならめっこを繰り返しているらしい。当然ながら、なのはトリイナは残念そうに肩を落とし、終いには『かおるが来ないのは、あなたのせいだ』と、訳の分からない言い争いが始まる始末。

お祝いの席は、ものの数分で阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。バツクにハブとマングースを背負いながら、静かに火花を散らすのはトリイナ。ハイテンションになったエイミイが調子に乗って止めに入ったのだが、人間とは思えない怪力を発揮したトリイナに思いつきり投げ飛ばされ、現在粉々に割れた窓ガラスの向こうで布団よろしくベランダにぶる下がっている。フェイト、アルフ、ユーノの三人はリンディの背後に撤退し、涙目で嵐が過ぎるのを待っているが、壁にされているリンディはたまったモノではない。「誰かこの位置代わってちょうだい!」。そんな彼女の心の声が聞こえた気がしたと、そんな時、室内にアラートが響き渡った。

ヴィータとザフィーラは心の中で舌打ちしていた。蒐集を終え、家に帰ろうとした矢先に市街地の上空で管理局の魔導師達に包囲されてしまったのだ。ご丁寧に、街全体に捕獲用の結界まで展開している。

「……管理局か……」

「でも、チャライよ、こいつ等……」

数こそ多いものの、自分達にしてみれば雑魚ばかり。ヴィータは強行突破を心に決める。が、当の魔導師達は包囲を解き、二人からみるみる離れていく。不思議に思っていると、視界の端に巨大な魔力

の奔流が渦を巻いて天を突く姿が映った。そびえ立つ黄金と桜色。
ヴィータはそれに見覚えがある。

――親友より授かった新たな力をその手に、二人の
少女が降り立った。

第四話 「新たなる力、起動！」（後書き）

玄斗「・・・さて、何か言うことがあるのではないかね？」

作者「いや、まあ・・・なんと云うか・・・」

リイナ「十日以上も投降せずにほったらかした挙げ句、私をまるで脇役のように扱うとは、いい度胸です」

なのは「あれ？ リイナちゃんて脇役じゃなかったっけ？」

リ「・・・なんですって!？」

かおる「わぁッ!! ケンカしないでよ二人とも!」

フェイト「と、とにかく落ち着いて!」

作「・・・とりあえず、あいつ等は置いといて、ホントにッ! 申し訳ありませんでしたッ!」

玄「全くだね」

作「いつも以上に手厳しいね・・・」

最近、リアルが急がしくってさ、勘弁してよ」

クロノ「まあ、現実の生活があつての小説投稿だからな。分からなくはない」

作「オオッ! さっすが、現役執務官! 話が分かる!」

ク「ただ、事前に断りを入れるなりするべきだな。
死んだと思われても不思議はないぞ」

作「ごもつともな意見だけど、サラツと縁起でもないこと言ったよね！？」

だいじょーぶですよー！？ 生きてますよー！？」

エイミイ「クロノ君も毒舌だなあ・・・。

ところでさあ、グレアム提督って、

原作だと三話で登場してなかったっけ？」

か「あ、そー言えば・・・」

作「話の流れの都合上、四話に回しました」

玄「忘れてただけではないのか？」

作「ソナコトナイヨー？」

エ「あ、怪しい・・・」

ク「テキトーなやつだな、全く・・・」

な「それはそうと、今回は新しい設定がけっこう出てきましたよね」

リ「確かにそうですね。

かおるさんの家族のこととか、

この暴力ツインテールとの出会いとか」

な「・・・ナニカイツタカナ？」

作「殺気と火花をまき散らしながら

会話に混ざるのはやめてくれ。頼むから」

フェ「かおるの生い立ちは最初から決めてたんですか？」

作「うん。いつ頃明かすかは、決めてなかったけどね」

ク「ただでさえ暗い過去を持つ者が多いんだ。

やめておいた方がよかったんじゃないか？」

作「やっぱり主人公は不幸じゃなくちゃね！！」

か「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エ「主人公以外も意味なく不幸にしている気がするけどね・・・」

フェ「そういえば、リイナに思いつきり投げ飛ばされてたよね。

大丈夫なの？」

エ「いやゝ、すごい力だった。もうケンカの仲裁はごめんだよ」

作「まあ、リイナはこの小説の中で一番の剛力無双だからな」

玄「そんな裏設定があつたのか・・・」

作「あつたんだねゝ、実は」

な「人のこと乱暴なんて言うけど、

リイナちゃんの方が乱暴なんじゃない」

リ「ご心配なく。腕力とはかく、戦闘能力は最弱の部類ですので、
どこかの誰かさんみたいに、
実力行使な考え方は持ち合わせていません」

な「ううゝ・・・!」

か「また始まつちゃった・・・」

玄「なのは嬢の場合、原作からは考えられん反応だな」

エ「ケッコーそーゆーのあるよね。原作にはない設定とかさ」

ク「カートリッジとは別の技術とかな・・・」

作「原作そのまんまだとおもしろくないじゃん？
オリジナルの要素も少しはないと」

フェ「その割りには、題名が原作そのままなような・・・」

作「重要なのは、外見より中身だよ。

第一、語尾の『なの』が無いだろ？」

玄「もっともらしいことを言っではいるが、
要するにめんどくさかったのだろう？」

作「・・・あえて否定はしないよ。

でも、内容に関しては、けっこう考えてると思うよ?」

エ「そういえば、『闇の書の主』が玄斗君で確定しつつあるけど、アレがそうなのかな？」

作「まあね。主は原作通りはやてだけど、

『玄斗の真の目的』への伏線の一つだよ」

な「え？ 『闇の書の完成』が目的じゃないんですか!？」

玄「確かに、目的であるのは確かだ。

が、私にとっては、通過点に過ぎない。

ただそれだけの話だよ・・・」

リ「そういえば、

三話でも何やら意味深なセリフを窓際で言っていましたね」

作「彼の真の目的とは何か!？」

かおるはそれを突き止め、阻止することが出来るのか!？」

こうご期待ッ!!」

か「・・・そんな大それた役を任されていていいんでしょうか・・・?」

作「・・・空気読めよ、お前・・・」

ク「とても主人公とは思えないな」

第五話 「それは小さな願い 前編」

「二人とも、落ち着いて聞いてね。

レイジングハートもバルディッシュも新しいシステムを積んでるの」

「え……？」

「新しい……システム……？」

「そのコ達が望んだの……。自分の意思で……。自分の、想いで……」

「……レイジングハート……」

「……バルディッシュ……」

「そのコ達の、新しい名前は——」

「……レイジングハート・エクセリオン!!」

「……バルディッシュ・アサルト!!」

夜空に少女二人の声が木霊する。一度は砕かれた相棒を空高く掲げ、親友が授けたその名を天へと叫ぶ。白と黒、二人の天使がビルの屋上に舞い降りた。

「あいつ等のデバイス……アレって、まさか……!」

ヴィータは二人の携えた杖を凝視し、顔を驚愕に染めて叫ぶ。考え

られないと心が叫ぶ。しかし、外見的な差異はあまり無いが、ソノ中身はまさしく……

「……カートリッジ、システム……」

赤毛の少女は眉間にしわを寄せ、奥歯を噛みしめながら絞り出すかのように呟いた。

海鳴市の一角にたたずむスーパーで、はやてとシャマルは夕食の食材を選んでいた。今日は友人のすずかも夕食に呼んでいるため、賑やかな鍋にしようと考えている。商品の宣伝文句が各所で響く中、はやてが唐突に切り出した。

「そやけど、最近みんなお家におらんようになってしまったね……」

その言葉にシャマルはうつたえ、言葉を濁す。

「別に、私は全然ええよ。みんなが外でやりたい事とかあるんやったら、それは別に……」

気にしないで、と笑顔を作るが、そこには弱冠の影が見える。それに気付いたシャマルははやての目線までしゃがみ込み、彼女の目を見て告げる。

「大丈夫です！ 今は、みんな忙しいですけど……。すぐにまた、きつと……！」

必死に語りかけてくるシャマルに目を丸くしつつ、はやては無意識に口元を緩める。

「・・・今夜はすずかちゃんも来てくれるし、もう少し多めに買っとうか」

いつもおっとりした三女の言葉に幾ばくかの安心感を覚え、八神家随一の食欲を誇る少年を思い出しながら、食材をカゴに詰めていく冷たい風が吹く真冬。銀色に輝く月が夜空を優しく照らしていた。

市街地の一角を巨大な結界が覆っている。その内部では魔導師達と騎士、使い魔と守護獣が睨み合っていた。

「私達はあなた達と戦いに来たんじゃない。まずは話を聞かせて・・・」

「闇の書の完成を目背してる理由を・・・！」

フェイトが自分達に戦う意思が無いことを伝え、話し合いを提案し、なのははその言葉に具体的な内容を付け加える。

「あのさぁ・・・ベルカの諺にこーゆーのがあんだよ・・・。」

『和平の使者なら、槍は持たない』」

ヴィータが突然ベルカに伝わるという諺を持ち出したので、なのはとフェイトは首をかしげる。

「話し合いをしようってのに、武器を持ってやって来るヤツがいるか、バカッ！」

「・・・って意味だよ！　ヴァーカ！！」

グラフアイゼンを突き出して、ヴィータは屋上の上で疑問符を浮かべる少女達に言い放つ。その内容だけを聞けば、なるほど確かにと納得できるモノなのだがしかし、

「なっ・・・いきなり有無を言わず襲い掛かってきた子が、それを言う！？」

なのはの意見ももつともである。最初に敵意むき出しで攻撃したのは、何を隠そうヴィータ自身なのだから。

「・・・それに、それは諺ではなく、小話のオチだ」

加えて、味方であるはずのザフィーラの冷静かつ的確なツッコミがイタイ・・・。だが、当のヴィータは「細かい事はいいんだよ！」と逆ギレする始末。この少女、頭が痛くなるほど子供である。

と、その時、轟音と共にビルが一棟、跡形もなく崩れ去った。皆の視線がそちらへと移る。

「やれやれ、少々やり過ぎたか・・・」

「ここは結界の内部です。」

現実の世界にはなんら影響もありませんので、気にすることはないかと・・・」

真上から真っ二つにされたビルの成れの果てであるコンクリート塊の山。モウモウと土煙が立ちこめるそこには、見知った二つの人影が悠然と立っていた。

風になびく黒い長髪と白銀に輝く籠手が印象的な少年は、瓦礫の山を見つめてため息をつき、桃色の長髪を高く結わえた女剣士は、顔

色を変えることなく実に自然な口調で言い放つ。どうやら、外から結界を強行突破して来たその勢いで、ビルを破壊してしまったらしい。

「久しぶりだね、お嬢さん方。乱暴ですまない。
必要以上に丁寧なもてなし・・・嬉しく思うよ」

なのはとフェイトの視線に気付き、少年は丁寧に深々とお辞儀をする。なぜかその目にフェイトを見据えたまま。

「・・・なるほど。確かに良い目だ・・・」

瞬間、無表情だった少年の目がキラリと光り、口元が弱冠吊り上がる。その場にいた全員が、たった十二歳の少年に心の底から恐怖を抱いた。しかし、一番恐ろしく思っているのは、その眼差しを直接浴びせられているフェイトだろう。

「なっ・・・なんなんだい、アンタはッ!!」

顔を真っ青に染めるフェイトが心配になったのか、アルフが不気味に笑う少年へと叫ぶ。しかし、少年は至って平然としてフェイトに語りかける。アルフの存在など気にも留めていない。

「どうやら、君は私の同類のようだね・・・」

決して大きな声では無い。しかし、その言葉はその場の全員の耳にハッキリと届いた。

ある者は驚愕を顔に貼り付け、ある者は疑問符を浮かべ、ある者は悲しみに表情を歪め、ある者は静かに憤怒する。そして、フェイトは

「・・・同・・・類・・・?」

青かった顔色をさらに青くし、うつろな眼で少年を見つめていた。

「悲しみを知り、絶望を知り・・・それでもなお、前へと進もうとする者の目だ」

「・・・ッ!!」

フェイトは驚いた。それと同時に恐ろしく思った。抽象的にしか語らないが、この少年は自分の過去と現在をある程度理解している。そう思えてならない。母のため、犯罪行為に手を染めたあの頃を・・・。その母に捨てられ、絶望し、なのはやかおる達に支えられてあがく今を・・・。「目を見た」・・・たった、それだけの事で・・・。

「つまり、あなたも絶望を知った・・・ということですか・・・？」

そんな言葉と共に、後ろから少年ののど元に刃が突き立てられる。突如として少年の背後に現れた人影に、皆が絶句した。

晴天を思わせるような青い袴と、マントのように夜風に舞う藍色の羽織、その間から垣間見える雪のように純白な上衣が人の目をいっそう惹きつける。普段ならば、巫女のごとく神秘的な空気を纏ったその姿に見られるところなのだが、生憎とそのような余裕は無い。少年はもちろん、そのそばに控えたシグナムですら気配を察知できなかったのだ。シグナムの騎士としての本能が、いきなり現れた得体の知れない敵に警鐘を鳴らす。背中を嫌な汗が流れた。

「ほう・・・私はおるか、シグナムにすら気配を悟らせないとは・・・。」

なかなかやるな、少年……」

だがしかし、当の少年は至って平静だ。己の後ろを取った相手に賛辞を呈する。刃を突き付けた少年、かおるはほめられるとは思っていないかったのか、弱冠頬を染めて礼を述べる。

そんな時、周りの面々は長髪の少年の言葉に驚愕し、

オッ、オイッ、シグナムッ！ そいつ、女じゃないのか！？

あ、ああ……私も、てっきり女だと思っていたが……

だが、玄斗殿の洞察力に間違いがあるとも思えん。

……世界は未だに、謎が満ちていると言うことが……

ウッソ……。かおるの性別を一発で見抜きやがったよ。この

『真つ黒能面野郎』……

す、すごいね、フェイトちゃん……

う、うん……

な、なにげにひどいな……。まあ、否定はしないけど……

このように、少々緊張感に欠けた念話を行っていた。大丈夫か、こいつ等……。

一方、そんなことなど夢にも思っていない少年達は、緊迫した空気を漂わせている。

「名は、なんと言うのだ？ 少年……」

刃を突き付ける少年の目を肩越しに見据え、問い掛ける。

「時空管理局本局武装隊捜査官……春風かおる 一等空士です。クロノ執務官がケガで戦線を一時離脱されたため、その代役として派遣されました」

ハッキリとした口調のその言葉を聞き、玄斗は思考を巡らせる。自分には及ばなかったが、クロノはなかなかの強者であった。その代役を任せられる人材は、自ずと限られてくる。すなわち……

「……なるほど……」

クロノ・ハラオウンの言っていた『優秀な弟子』とは、君のこ
とか……」

事務処理能力だけでなく、個人の戦闘能力も高く求められる『執務官』が『弟子』と言ったのだ。ただのメカニックや事務方などではない事は容易に予想できた。同時に、クロノは『自分にはもつたない』、『天才』とまで言っていた。かなりの実力者であることは想像に難くない。自分の背後をいとも簡単に取り、身長の倍の長さはあるつかという薙刀型のデバイスを首筋に突き付けてくるこの少年こそが、以前戦った執務官の話に聞いた『天才』だと、玄斗は確信した。

「『青は藍より出でて藍より青し』と言うが、まさにそれだな」

「いえ、ボクはまだ修行中の身……まだまだクロノさんには及びません」

少年の口ぶりから察するに、どうやら予想は的中したらしい。世間話をするような二人の口調とは裏腹に、場の空気が一層張り詰める。

「謙遜することはない。少なくとも、私の後ろを取ったのは、君が初めてだ」

彼がそう告げた次の瞬間、轟音と共にかおるはビルへと吹き飛ばされる。

何も見えなかった。なのは達は何が起こったのか分からず、目を丸くするばかりだ。

「・・・だが、少々隙が多いぞ。春風がおる」

かおるのいたまさにその場所には、何事も無かったかのように立つ玄斗の姿があった。

静かにたたずむ彼だったが、唐突に背後へと右腕を振り上げる。硬い金属同士が打ち合うような、嫌な音が響いた。

「・・・ご教授、ありがとうございます」

「やはり、この程度ではかすり傷すら付かんか・・・そう来なくてはな・・・！」

いつの間にかかおるが背後へと回り、玄斗に斬り付けたのだ。白刃を振り下ろすショートカットの少年と、その一撃を銀の籠手により受け止める長髪の少年。口元に笑みすら浮かべた彼等の激突を合図に、皆がそれぞれの敵と対峙した。

市街地の上空を赤の光が駆け、その後を追うように桜色の光が尾を引いている。

「ハンツ！ 結局やるんじゃねーかよッ！！」

「私が勝つたら、お話・・・聞かせてもらうよ！？ いいね！？」

言うまでもなく、追われているのがヴィータ、追っているのがなのはである。

「やれるもんなら・・・やってみろよッ!!」
<シュワルベフリーゲン>

ヴィータは急に踵を返し、叫ぶと同時に四つの鉄球を撃ち出す。赤い魔力を帯びた鉄塊がなのはに迫るが、危なげなく上空に回避する。

「アイゼン！」
<ラケーテンフォルム>

ヴィータは自身のデバイス——グラーフアイゼンに叫ぶ。主の意思をくみ取り、カートリッジを装填した鉄槌がその姿を変貌させた。片側にスパイク、片側にロケット噴射口という突進力と破壊力に特化した形態に。

「でええええええい!!」

回転による遠心力も加えた一撃が、一直線になのはへと迫る。以前、なのはに決定的なダメージを与えた一撃が。

<プロテクション・パワード>

しかし、それはレイジングハートの一声によって防がれた。なのはとヴィータの間に桜色の障壁が展開され、破壊力を増したグラーフアイゼンの突撃を遮ったのだ。鉄槌と魔力の壁がぶつかり合い、火花を散らす。以前ならば、紙のように簡単に破られてしまった障壁だが、

「ッ!! かてえッ・・・!!」
「・・・ホントだ・・・」

障壁を展開した本人もビックリの強度を見せていた。

<バリアバースト>

レイジングハートが短く呟くと、鉄槌と障壁の接触部分に魔力が集中し、次の瞬間には大爆発が起こった。二人とも爆風に飛ばされ、距離が開く。

「アクセルシューター!!」

なのははすかさず体制を立て直し、魔力弾を生成して撃ち出した。十二発の弾丸が、尾を引きながらヴィータの周りを旋回し、包囲する。

「アホかッ! こんな大量の弾、全部制御出来るわけが・・・!!」

そう言いつつ、ヴィータは先程撃ち出したまま滞空させていた鉄球を再び操作した。拳大の鉄の弾が四方から唸りをあげて、なのはへと迫る。魔力弾の誘導操作に集中しているなのはは、十分な強度の障壁を展開することが出来ないため、絶体絶命と思った。しかし、彼女の能力はヴィータの予想を遙かに超えていた。縦横無尽にヴィータを取り囲んでいた魔力弾の中から四発を選択して、一直線に向かってくる鉄球を一つ残らず精確に打ち落としたのだ。残り八発の弾幕の中で、鉄の弾丸が粉微塵に砕け散る様をヴィータは啞然と眺める。誘導操作の精度もさることながら、その威力も数日前とは段違いであった。

「約束だよ? 私達が勝ったら、事情を聞かせてくれるって!」

小さな手を夜空に掲げ、なのはは叫ぶ。

<パンツァーヒンダネス>

グラーファイゼンの低い音声と同時に、ヴィータの周りをクリスタル状の障壁が包んだ。魔力弾による一斉攻撃の気配を察知し、絶対防御の態勢を取ったのだ。

「アクセル・・・シュ————トッ!」

そして、その時は訪れた。なのはが手を振り下ろすと、同時に桜色の弾丸が一斉にヴィータへと殺到し、次々と障壁に激突した。火花と共に弾かれてはいるものの、魔力弾は少しずつ確実に赤い結晶にヒビを入れていく。ヴィータは苦々しく唇をかみ、ひたすら耐えるしかなかった。

「はああああああ!!」

「ああああああ!!」

白い大剣と黒い斧が激突し、熾烈な鏖迫り合いが起こる。しばしの間、両者はそのまま睨み合っていたが、何を合図にしたのか互いに互いを弾き飛ばし距離を取った。

<プラズマランサー>

バルディッシュの低い機械音声と同時に、フェイトの正面に計八本の槍状の魔力弾が形成される。

「プラズマランサー・・・ファイアツ！」

叫ぶと同時にフェイトがバルディツシュを振るうと、金色の槍の群れが相対する女性——シグナムへと目にも止まらぬ早さで一直線に迫る。しかし相手も然る者。その手に携えた長剣——レヴァンティンを振りかぶり、並の人間ならば視認することも難しい槍の軍勢を一振り四方へと弾き飛ばした。が、フェイトは口元に余裕の笑みを浮かべている。

「ターン！」

金髪の少女のその声に反応した槍達が、その場で百八十度向きを変え、再びシグナムへと迫った。咄嗟の判断でシグナムは上空へと逃れ、槍同士はぶつかり合うが、相殺することもなくまたも方向を修正し、金色の軌跡を描いて討つべき敵へと迫る。このままではちが明かないと、シグナムはカートリッジで魔力を底上げし、剣圧によって弾くのではなく破壊した。

<ハーケンフォーム>

カートリッジの装填音と共に聞こえてきた低い音声の源へとシグナムが目を向けると、フェイトがすぐ目の前まで迫っていた。先程の槍の軍勢はあくまで囷。彼女の本命は魔力によって生成された鎌による斬撃だったのだ。

<シュランゲフォルム>

しかし、シグナムとて百戦錬磨の騎士である。咄嗟に相棒の形状を変え、迎え撃つ。以前よりもその大きさを増した金色の鎌と、大蛇のごとくうねる連結刃がぶつかり合い、爆発が起こった。巨大な魔

力の衝突時にたびたび起こる現象である。粉塵の中から姿を現した双方の身体には、僅かだが切り傷が見て取れる。数日前と違い、二人の實力はまさに互角だった。

「・・・強いな、テストロッサ・・・。それに、バルディッシュ！」

「あなたと、レヴァンティンも・・・シグナム！」

互いに賛辞を呈し、それぞれのデバイスが主に代わって礼を述べる。

「この身に成さねばならぬ事が無ければ、心躍る戦いだっただが・・・」

仲間達と主のため、今はそうも言ってもらえん」

レヴァンティンを剣の形状へと戻し、鞘に収めて居合いの体勢を取る。

「殺さずに済ます自信がない。この身の未熟を、許してくれるか？」

「構いません。勝つのは、私ですから」

互いに相棒を構え、見つめ合う二人の口元には微笑が浮かんでいた。

金属同士が打ち合う甲高い音が夜天に響く。ショートカットの少年が薙刀による疾風のごとき連撃を繰り返し、長髪の少年は腕に光る無骨な籠手でそれをことごとく防いでいる。まさに火花を散らす攻防である。

<ブラストバレット>

薙刀から発せられた澄んだ声と同時に、かおるの周りに計十発の拳大の魔力球が生成され、弾かれたように相對する敵へと高速で放たれた。避けきれないとふんだのか、玄斗は目の前に白銀に輝く障壁を展開し、迫り来る空色の弾丸を正面から迎え撃つ。

しかし、弾丸の一つと障壁が触れ合った次の瞬間、目の覚めるような轟音と共に玄斗は巨大な爆炎に包まれた。

『誘導速射爆裂弾』。仲間内でそうに呼ばれているこの魔法は、それぞれの分野で、なのはやフェイトには及ばないが、誘導性と速度を兼ねそろえている。玄斗が避けきれないと予想したのも、これに起因するのだが、最大の特徴はその性質にある。この弾丸は魔法・非魔法を問わず『物体』に触れた瞬間に、内部に圧縮された魔力を一気に解放し、大きく爆ぜるのだ。数発同時に使用すれば、爆破の連鎖反応を起こして威力も大幅に増大する。さらに、彼の魔力変換資質である『風』を加えることによって、その射程と効果範囲も何倍にも増し、実に凶悪な魔法に仕上がっているのだ。

「なるほど、『爆風の弾丸』、か・・・その名に恥じぬ、凄まじい威力だ」

だがしかし、それをまともに受けた本人は、涼しい顔で粉塵の中から姿を現す。傷どころかスス一つ付いていない。どうやら完全に防ぎきったようだ。

「あら・・・『アレ』、防いじゃいますか・・・」

「少々驚いたよ。顔に似合わず、なかなか凶悪な魔法だ」

軽めの口調とは裏腹に、かおるの頬に嫌な汗が伝う。並の魔導師な

らば、たった一発でも障壁を破壊され、確実に意識を失うであろう魔法を十発も受けた少年が、目の前で涼しい顔で立っているのだから当然だ。やはり、彼の防御魔法の性能は文字通り桁が違う。かおるは、そう痛感していた。

「・・・彼女達のデバイスに、カートリッジを仕込んだのは、君かね？」

「・・・そうですね、それが何か・・・？」

思考にふけっていると、目の前の少年は遠くで空中戦を繰り広げる少女達を見ながら、戦闘とまるで関係のない疑問を投げかけてきた。怪訝な顔をしながらも答える辺り、かおるはかなりのお人好しである。その答えを聞くなり、長髪の少年は小さくため息をつき、口を開く。

「私も人も事は言えないが、君はなかなか無茶をするな・・・。
先程の魔法しかり、カートリッジシステムしかり・・・」

どうやら、術式の違う魔法体系の技術同士を組み合わせることの危険性を指摘しているようだ。かおるは始め、豆鉄砲を喰らったかのように啞然としたが、次第に口元をほころばせ、クスリとかわいらしい微笑みを浮かべた。

「・・・やっぱり、あなたは良い人ですね・・・」

かおるがそう呟くと、少年の眉がピクリと動いた。

「・・・犯罪者が善人とは・・・君の感覚はおもしろいな。

私は仮にも、君の師を叩きのめした人間だよ？」

「こう見えて、人を見る目はあるつもりですよ？」

しばらく両者の間に沈黙が下りる。遠くで響く金属音や爆発音がやけに大きく聞こえた。

「私はただの犯罪者・・・私欲のために、不幸を振りまく愚か者だ。」

それ以上でも、それ以下でもない・・・！」

静寂を破るカートリッジを装填する轟音と共に、玄斗はかおるに向かって突撃する。左手を前に、拳を作った右手を後ろに構えた、限りなく攻撃的な姿勢だ。

「やれるよね？ フェザーハート」

<ドラフト>

主の声に応え、薙刀型デバイス——フェザーハートの刀身に空色の魔力が渦を巻き始める。信頼する相棒を上段に構え、突っ込んでくる少年目掛けて振り下ろした。

「なめるなッ！！」

それを見た玄斗は突きの体勢を保ったまま、瞬時に障壁を展開する。防御と攻撃、相反する二つの動作を一度に行おうとしているのだ。常識では不可能な戦術だが、かおるはもはや驚かなかった。目の前の少年を常識で縛ることなど出来ない。そう悟ったのだ。

むしろ

（・・・クロノさんが負けたのもうなずけるなあ・・・）

近接戦闘の技量にも目を見張るものがあるが、彼の防御力はまさに桁違いである。絶対的な魔力量によって生成された障壁は、魔力の低さを技術と経験で埋めるスタイルのクロノには相性が悪いだろう。自分の魔力でもこの障壁を破れないことは、先程のブラストバレットで確認した。自分へと迫る拳を見つめながら、ため息混じりにつくづく思う。

徹夜してまで、このプログラムを完成させておいてよかった、と。

——この状況を想定し、この一撃を選んだのである

斬撃と障壁が衝突し、火花が散る。玄斗が必倒の一撃を、がら空きになったかおるの腹部へ叩き付けようとした次の瞬間、轟音と共に高層ビルの一角へと叩き付けられた。

「……な……に……?」

訳が分からない。なぜ、自分の方が瓦礫に埋もれ、彼を見上げているのか。なぜ、薙刀を振り下ろした体勢で残心している少年の方が、自分を見下ろしているのか。おかしい。本来ならば、自分達の立場は逆だったはずだ。自分の防御力を超える魔力で障壁を破られたと考えれば、つじつまは合うし、決してあり得ないことではない。しかし、それが腑に落ちない。

（障壁を破られた感触は無かった……。どういうことだ……。？）

激突のあの瞬間、自分の障壁は少年の斬撃に見事に耐えきっていた。故に、自分は勝利を確信したのだ。しかし、結果は見ての通り、自

分は外壁に風穴の開いたビルの中で瓦礫に埋もれ、ショートカットの少年は夜の風を受けながら悠然と自分を見下ろしている。ある執務官の言葉を思い出す。

よ
君には想像も出来ないような『天才』がいるんだ

「……春風、かおる……」

思わず身震いした。年は幼いものの、自分と互角に渡り合い、なおかつ底を見せない戦術の多様性を持った魔導師。この時、彼は確信した。この少年こそ、自分の計画の最大の障害であり、最大の要^{かなめ}である。

状況は、あまり良くないな……。

シグナムやヴィータ、玄斗殿が負けるとは思わぬが、ここは退くべきだろう。

シャマル、なんとかできるか？

アルフとの熾烈な肉弾戦を演じながらも、ザフィーラは冷静に現状を分析し、結界外のビルの屋上に待機しているシャマルへと念話を送っていた。しかしながら、彼女は戦闘員ではない。外から大勢の局員が維持している強固な結界を破壊するには、彼女の魔力では役不足だ。

シグナムの『ファルケン』かヴィータちゃんの『ギガント』、あと、お兄さんの『月華^{げっか}』級の魔力を出せなきゃ……

残念ながら、三人とも目の前の敵で手一杯だ。ザフィーラは闇の書の魔力を使用するように促すが、シャマルはそれに反対する。闇の書は未だ未完成だ。今魔力を使えば、その分だけページが減ってしまう。彼女達にはあまり時間がない。時間のロスは極力避けたいのだ。あーだこーだと念話で議論を交わしていたその時、

「えーと、『搜索指定ロストログアの所持・使用の疑いで、あなたを逮捕します』」

魔方阵を展開しながら背後に降り立った人影が、突然にそう告げる。ユーノだ。結界内にいる四人が闇の書を所持していないため、もう一人の仲間が持っていると予想したかおるに頼まれ、周辺を調査していたのだ。

「『抵抗しなければ、弁護の機会があなたにはあります。同意するなら、武装を解除して下さい』・・・っと」

紙切れを見ながら、棒読みで投降を促してくる少年を不思議に思いながらも、シャマルは焦燥にかられていた。このままでは仲間に迷惑がかかってしまう。どうすればこの状況を打開できるか、頭をフル回転させて考える。

しかし、その思考は突然の風切り音と声にならない悲鳴に中断させられた。振り返ると、ユーノは向かいのビルで文字通り目を回して伸びており、入れ替わりに仮面で顔を隠した男が静かに立っていた。

「使え」

仮面の男は短くそう告げる。突然現れた男に困惑しながらも、シャマルは反論しようとするが、次に男の口から出てきた言葉に押し黙った。

「使用して減ったページはまた増やせばいい。仲間がやられてからでは、遅かるう？」

しばし考えた後、シャマルは意を決した。

みんな！ 今から結界破壊の砲撃を撃つわ！ 上手く躲して、撤退を！！

四人の返答を確認し、静かに詠唱を開始した。

巨大な魔力反応を感じ取り、夜空を見上げたかおるは驚愕した。結界の真上に不気味な暗雲が立ちこめ、渦を巻いたその中心で雷鳴が轟いている。

「残念だが、ここまでだ・・・」
げっか・うつき
<月華・卯月>

四発のカートリッジの装填音と共に、長髪の少年とそのデバイスの澄んだ声がかおるに届いた。次の瞬間には、白銀に輝く半透明の球体がかおるを包み、結果的に彼の動きを封じる。

「ッ！？ こ、これはッ！！」

数日前、なのは最大の砲撃を防ぎきった代物だ。予備動作無しにこのレベルの防御魔法を遠隔でも展開できることに弱冠驚きつつ、試しに斬り付けてみるが、案の定びくともしない。

「縁があれば、また合おう。春風かおる・・・」

そう言い残し、長髪をはためかせながら、彼は上空へと去っていった。

フェイトは突然の展開に驚愕していた。上空で轟く雷鳴を視認した次の瞬間には、正体不明の球体の内部に閉じ込められていたからだ。

「案ずるな、テストロッサ。ただの防御魔法だ」

剣を鞘に収めながら、シグナムが語りかける。

「アレは直撃を受けると、いささか危険だからな。兄上が気を遣ってくだされたのだろう」

空を見上げながらの彼女の呟きに、数日前の記憶が頭をよぎった。親友の最強の一撃を涼しい顔で受けきった、長髪の少年の威風堂々とした姿が。

「この勝負、預けたぞ」

短くそう言い残し、彼女は彼方へと消えていった。

「ヴォルケンリッター『鉄槌の騎士』ヴィータ・・・。アンタの名は？」

銀色の球体に閉じ込められているなのはに、ヴィータは名前を尋ねる。

「なのは……。高町なのは……。！」

「高町なぬ……。な……。ええい！ 呼びにくい！！」

「ぎゃ、逆ギレ！？」

が、どうやら口が回らないらしく、上手く発音が出来ない。それだけならばまだしも、自分の非を棚に上げて抗議する始末。あまりの身勝手さに、さすがのなのはもあきれ顔である。

「ともあれ、勝負は預けた！ 次は殺すかな！ ゼッテーだ！
！」

あまりにも物騒過ぎる捨て台詞を残し、彼女もまた彼方へと飛び去っていく。

「その中にいれば安全だ！ おとなしくしている！」
「ちよっ……。待ちなアンタ！！」

自分を包み込んでいる球状の壁をど突きながら、アルフは立ち去る巨漢に抗議するが、突然の轟音にかき消されてしまう。見上げると上空には絶え間なく放電を繰り返す魔力球が、はち切れんばかりにふくれあがっていた。そして、その時は訪れる。

爆音と共に一筋の巨大な雷が降り注ぎ、一瞬にして結界は消滅した。魔力の勢いは衰えを見せず、着弾点を中心に大規模の魔力爆発が巻き起こり、周囲の物体をその場に残った四人もろとも飲み込んでい

く。
闇が支配する夜の空を、巨大な光源が白く照らしていた。

第五話 「それは小さな願い 前編」(後書き)

作者「お待たせいたしました。約二週間ぶりの投稿となります。第五話です」

クロノ「全く・・・やる気あるのか？ 君は・・・」

作「前回も言っただけ、リアルの方が忙しくてね・・・

次もさらに遅くなると思います。申し訳ありません」

玄斗「凡人が身の程をわきまえず、小説投稿などしようとするからだ」

作「・・・・・・・・・・」

かおる「まあまあ、焦って書いても、良い作品は出来ないでしょう・・・・・・・・」

あまりせかさないようにしましょう?。」

作「優しいなあ、かおるは・・・(泣)」

エイミィ「かおる君、上機嫌だねえ。何かあったのかな?」

フェイト「なのは、何か知ってる?」

なのは「ほら、今回かおるちゃんの戦闘シーンがあったでしょ?

それがよっぽど嬉しかったみたいで・・・」

アルフ「あー、あったねえ。やたらとチートっぽかったけど・・・」

か「ああ・・・やっと・・・やっとこの日が・・・」

ク「五話目にしてようやくか・・・」

エ「長い道のりだったよねえ・・・（苦笑）」

フェ「でも、ホント凄かったよね、かおるの戦闘」

ア「あの能面野郎が思いつきり吹っ飛ばされてたからね。いい気味だったよ」

玄「メンバー中最強じゃないかね？」

作「それが、そーでもないんだよねえ・・・」

な「え？ 何ですか？」

作「かおるの潜在的魔力保有量は、なのはやフェイトと同等だからね。

純粋な魔力のデカさやそれを踏まえた戦闘能力を考えると、
玄斗の方がチートであり最強なんだよ」

フェ「で、でも、クロさんの防御魔法を・・・」

か「あれにはちょっと仕掛けがあって・・・」

ク「・・・仕掛け・・・？」

作「まあ、その事については、次回明かされるから。

かなり凶悪な魔法、とだけ言っておくよ」

エ「『プラスチックバレット』もかなり凶悪だったけどね・・・」

玄「速度は速く、誘導操作も可能・・・」

大きく回避するか遠距離で打ち落とすしか逃れる術が無いからね」

か「正面から障壁で受けきった人が言うのと、説得力ありませんね・・・」

ク「複数の爆発を連鎖させることで、威力も大幅に上がる訳か・・・」

作「加えて、『風』の魔力変換資質で効果範囲も飛躍的に大きくしてるし、

分類上は『射撃魔法』だから何発でも連続して作れるんだ」

な「・・・正直、防ぎきる自信ありません・・・」

フェ「・・・私も、避けきるのは無理かな・・・」

か「苦勞して開発した魔法だから、簡単に避けたり防がれたりしたら、

それはそれで色々と問題なんだけどね・・・」

ア「そーいやー、最初の頃は普通の魔力弾だったっけねえ」

エ「あれ？ 管理局との接触の時には、もうあんな感じだったけど？」

な「かおるちゃん、「このままじゃフェイトさんには勝てない」って元々あった『フェザーバレット』を一生懸命改良したんです」

一口メモ

『フェザーバレット』：誘導速射弾。

『ブラストバレット』の基礎となった射撃魔法。

物。

要は、なのはの『デイベインシューター』

の

速度を高めたモノで、その分、誘導性能

は劣る。

『風』の魔力変換資質を付与することで、射程距離と弾速を上げることも出来るが、フェイトにことごとくかわされ、

プログラムを現在の形に改良した。

なお、現在も使用可能である。

玄「・・・魔法知識が皆無にもかかわらずかね・・・？」

ク「・・・全く・・・末恐ろしいな、君は・・・」

作「コイツのキャラ設定は『天才魔導師』だからな」

ア「それを言ったら、なのはやフェイトも十分『天才』じゃない？」

エ「あ、それは言ってる」

作「そーゆー意味の『天才』じゃないんだよ。

魔導師としての才能や能力も凄いけど、

持ち前の頭脳で新技術や魔法を次々と開発し、

類い希な運動神経と判断力でソレを駆使して巧みに戦う・・・

どちらかというと、『頭のキレ』の方に重点を置いてるんだ」

な「そういえば、デバイスマイスターの資格持つてるんだよね」

フェ「指揮官としての才能もあるし・・・」

玄「前世は化け物か何かではないのかね？」

か「ガ————ン！！！！」

ク「・・・って、君も似たようなモノじゃないか・・・」

作「まあ、わかりやすく言うと、『魔力の高いクロノ』ってところだ」

ア「・・・十分チートだろ」

第六話 「それは小さな願い 中編」

「いやあゝ、ホント、無事でよかったよ!!」

ハラオウン家リビングにて、エイミイが笑顔で五人を出迎える。皆、目立ったケガもなく、リンディは密かに胸をなで下ろしていた。

「ホント凄かったです！ プロテクションとか、かなり堅くなつてたし・・・！」

「うん。なんだか前より、身体が軽かったし・・・」

なのはとフェイトが口々に感想を口にする。エイミイは腰に両手を当てて胸を張り、「そーでしょ」と自慢げだ。

「モードは、それぞれ三つずつ。」

レイジングハートは、中距離射撃の『アクセル』と砲撃の『バスター』、

フルドライブは『エクセリオンモード』。

バルディッシュは、汎用の『アサルト』、鎌の『ハーケン』、

フルドライブは『ザンバーフォーム』ね」

表情を引き締め、左右の手の指を三本ずつ立てながら、エイミイがそれぞれのデバイスの新しい形態と性能を順に説明していく。と、そこでののがかおるを見ながら疑問を口にした。

「あれ？ フェザーハートは？」

「ああ、かおる君の場合、言わなくても分かってるからねえ・・・」

「

説明する意味がないのだと、頬をかきながらエイミイは語る。

「そもそも、カートリッジシステムを三機に組み込んだのはかおるさんでしょう。」

なぜ、何もしていないあなたが、そんな自信満々なんですか・・
」

横からリイナの的確なツツコミが入られ、思わず後ずさるが、「細かいことは、気にしない！」と、瞬時に開き直るのだった。皆、苦笑いである。リイナだけはジト目で睨んでいたが。

「あらかじめ言っておくけど、カートリッジ自体、危険が全く無い訳じゃないんだ。少なからず、身体に負担はかかる。」

特になのはは、フレームの強化が終わるまで、フルドライブは起動しないでね」

極力、無理な使用は避けるようにと、苦笑しながらのかおるの説明に、なのはとフェイトは頷く。

「しかし、凄いいかおる君は！ おかげでみんな無事に帰ってこれたしね！

さすがは天才少年！ 住む世界が違いますなあ！」

調子に乗っているのか、通常よりもさらにテンションがハイになっているエイミイに対して、リイナの視線はどこまでも冷たかった。

「問題は、彼等の目的よね・・・」

頬杖を突きながら、リンディが脈絡の無い話題を口にする。長年の

付き合いである彼女は、ハイテンションになったエイミィの扱いについては、この場の誰よりも熟練である。どうやら、完全に無視しているようだ。

「・・・はい。クロノさんも、腑に落ちない、と・・・」

かおるもこの空気に居心地の悪さを少なからず感じていたのだろう。表情を引き締め、リンディの話題に加わる。

「彼等がまるで、自分の意思で闇の書の完成を目指しているように感じられます」

「？ それってなんかおかしいの？」

闇の書つてのも、要はジュエルシードみたく、

すごい力が欲しい人が集めるもんなんですよ？

だったら、その力が欲しい人のために、あのコ達がんばるつても、

おかしくないと思うんだけど・・・」

かおるの言葉に、アルフが疑問と自らの意見を述べる。実に筋が通った意見で、通常ならばその通りなのだが、

「第一に、闇の書の力は、ジュエルシードのように自由な制御の効くモノではないんです」

「完成前も完成後も、純粹な破壊にしか使えない・・・」

少なくとも、それ以外に使われたという記録は一度もないわ」

闇の書の特性上、使用場面・目的が限りなく制限される。そのような使い勝手の悪い力を積極的に集めるなど、よほどの馬鹿か精神異常者である。

「そして、もう一つ・・・」

「あの騎士達・・・闇の書の守護者の性質ね・・・」

かかるに次いで出たリンディの言葉に、エイミィ以外の面子が疑問符を浮かべる。

「あの人達は、人間でも使い魔でもない・・・。

闇の書に合わせて、魔法技術で作られた疑似人格・・・。

主の命令を受けて行動するための、『プログラム』に過ぎないはずなんです」

すずかを交えた夕食を終えた八神家では、長女はすでに寝静まり、長男を筆頭にリビングにて静かな会議が開かれていた。

「今でも信じられません・・・。兄上の防御が抜かれるなど・・・

「油断してただけなんじゃねーの？」

頭の後ろで手を組みながら、ニシシと笑うヴィータにシグナムが強い口調で注意するが、玄斗がそれを手で制する。

「油断していたと言えば、そうなのかもしれん・・・。

あの時、私の障壁は彼の斬撃を完全に防いでいた。

そのため私は、突きを当てていないにもかかわらず、勝利を確信してしまったのだ。

慢心が生んだ結果には変わりない・・・」

その言葉を聞いた瞬間、皆が押し黙る。破られたのならば、納得で

きないまでもあり得ない事ではない。しかし、今彼はなんと言った？ 『障壁が破壊されなかったにもかかわらず、攻撃を受けた』など、ほとんどんち問答である。矛盾する二つの真実に、守護騎士全員が首をひねった。

「いつたいうことなんでしよう……」
「少なくとも、得体の知れん『何か』があるのは確かだな」

シャルは困惑の表情を思いっきり表に出し、ザフィーラは冷静に自分の意見を呟いている。

「何……思い当たる節が無いわけではない……。彼のことは私に任せたまえ」

口元に笑みを浮かべ、それよりも、玄斗はシャルを見据える。

「何者なんでしょうか……。結果的に、あの人のおかげで助かりましたが……」

シャルを助けた仮面の男。当然ながら、知り合いにあのような人間などいない。玄斗は不機嫌そうに眉を寄せ、その存在を危惧していた。イレギュラーは多かれ少なかれ周りの状況に影響を及ぼす。自分の計画に支障をきたさなければいいが……。そんな思いを胸に、白い天井を見上げるのだった。

ハラオウン家リビングの中央に、巨大なモニターが展開され、守護騎士四人と闇の書の映像が映し出されていた。それを見た、なのは、フェイト、アルフ、ユーノの四人は、数が合わないことに疑問

を覚えるが、かおるやリンディの説明の最中なので、とりあえず保留にした。

「守護者達は、闇の書に内蔵されたプログラムが人の形を取ったモノで、

無限の転生と再生の間も、闇の書と共に様々な主の元を渡り歩いているんだ」

「意思疎通のための対話能力は、過去の事件でも確認されてるんだけどね、

感情を見せたって例は、今までに無いの」

「闇の書の蒐集と主の護衛・・・彼等の役目はそれだけですものね」

かおる、エイミィ、リンディと、打ち合わせでもしたかのようにスムーズな説明のリレーに、なのはとフェイトが異を唱える。

「でも、あの帽子の子、ヴィータちゃんは、怒ったり悲しんでたりしてたし・・・」

「シグナムからもハッキリ人格を感じました。成すべき事があるって・・・」

仲間と、主のためだって・・・」

「主のため・・・か・・・」

と、その時、ここにいるはずのない人間の声が聞こえたので、皆の視線がリビングの入り口へと集中した。そこに立っていたのは、包帯で腕をつつた黒髪の執務官だった。

「ク、クロノ・・・入院中だったんじゃない・・・」

「ただの全身打撲と骨折だ。動けない訳じゃない」

心配そうに尋ねるフェイトに、苦笑を漏らしながら答える。どうやら、ちゃんと外出許可を取って来たらしい。

「それで、かおる・・・どうだった？」

「・・・正直に言っ、かなりやつかいですね・・・」

あまりにも曖昧なクロノの質問に、かおるは巨大モニターの画面を切り替えながら答える。そこには、夜天に悠然と佇む『クロ』と名乗る黒髪の少年の映像とグラフのようなモノが映し出されていた。

「そうそうコイツだよ！ 『真つ黒能面野郎』！

コイツが一番『守護騎士』っぽいんじゃない？」

無表情だし、不気味だし、とアルフはさんざんにこき下ろす。かおるはその言葉に苦笑し、クロノは冷静に真実を告げる。

「残念だが、彼は守護騎士ではない。人間だ」

なのは達は息を呑んだ。それと同時に納得もした。だからこそ、かおるは守護騎士についての説明の際に、彼の映像を映さなかったのだと。

「じゃあ、もしかして・・・」

「この人が、闇の書の主・・・？」

「可能性は、限りなく高い。少なくとも、ボクとかおるはそう考えている」

おそるおそるといった感じで尋ねるのはとフェイトに、クロノはハッキリと自分達の予想を口にする。全員の視線が大画面に移る少年へと集中した。

「えーと、なになに・・・？ 推定魔導師ランクがあゝ・・・S
+ウー!?」

グラフに記された数値を読み上げ、エイミィが絶叫を挙げた。あまりに高すぎる能力値に、他のメンバーも自分の目を疑っている。クロノに至っては、弱冠顔をひくつかせていた。

「最大魔力発揮値・・・SS・・・。」

自己防衛能力値・・・SS+・・・。」

近接戦闘能力値・・・AAA+・・・。」何コレ・・・」

「ちよつと待ってよ、かおる。何かの間違いじゃ・・・」

ユーノは慌てて情報源に抗議する。化け物といっても過言ではない能力値の羅列を前に、至極当然の反応ではあるのだが、紛れもない事実であるのでどうしようもない。サーチャーも正常に作動しており、機械の故障による測定ミスでもないようだ。

「SSランクの魔力・・・確かに、闇の書の主としては十分すぎる素質ね」

リンディも納得のようで、頬に手を当てて、うんうんと頷いている。「どーりでクロノ君が手も足も出なかった訳だ」と、エイミィが乾いた笑みを漏らす横でなのは達はポカーンと画面を見つめていた。

「特に脅威と言えるのは、多彩な防御魔法の使い方とその強度です」

画面に映った映像を見ながら、かおるは自分の分析結果を口にする。闇の書の魔力によって結界が破られる直前の記録を見る限り、彼は

四つの防御魔法を同時に、かつ遠距離から精確に発動させている。通常、防御魔法は術者の周辺でしか発動できないモノだ。離れた場所に展開するとなると、それ相応の演算が必要となり、あのレベルの魔法を戦闘中に咄嗟に展開するなど基本的には不可能なのである。それをいとも簡単にやってのけている段階で、彼が最強レベルの防御の使い手である事は明白なのだが、さらに驚いたことに、その四つの障壁は闇の書による超大規模の魔力爆撃を防ぎきったのだ。複数の魔法を同時に発動した場合、その数に比例して、少なからずその性能は落ちるものだ。しかしながら彼の四つの障壁は、『防御魔法一つ』に集中したとしても限りなく防ぐことの難しい純粹魔力攻撃を受けて、びくともしなかった。互いに反比例する『数』と『性能』の関係を無視しているとは思えない。

「おそらく、この場の誰もあの人の障壁を破ることは不可能でしょう」

かおるの重い一言が、静かにリビングに響く。彼の言うとおり、现阶段ではこの場の誰も、件の少年の防御魔法を打ち抜くだけの魔力も技術も持ち合わせていない。すると、なのはが思い出したかのようにかおるに疑問を投げかけた。

「あれ？ でも、かおるちゃんの攻撃・・・障壁を破ってなかった？」

その場面がモニターに流れたところで「ほらココ」と指を差し、他のメンバーも映像を食い入るように見る。そこには、上段からのかおるの一閃を受けてビルへと突っ込む少年の姿が映し出されていた。

「・・・あ、ホントだ・・・！」

「スゴイじゃないか、かおるッ！！」

「あらまあ・・・」

「さつすが天才少年！ 文武両道だねッ！！」

「意見に同意はするが、テンションがいつになく高いな、エイミイ・・・」

「・・・ここにも化け物がいた・・・」

「ほお？ 私の前で、かおるさんの悪口ですか？ ユーノ・スクライア・・・」

皆、思い思いに感想を口にする。いくつか緊張感に欠けるモノがあるが、かおるはあえて気にしないことにした。部屋の外に引きずられていったユーノの断末魔が聞こえるが、おそらく気のせいだろう。

「あれは、ちよつとした裏技で・・・実際には、防壁は破つてないんだよ」

かおるのこの一言に皆が疑問符を浮かべる。『障壁は破っていないが、それを発動していた術者には攻撃を通せた』。矛盾も甚だしい告白である。リンディまでもが首を思いっきりひねって考え込んでいた。

「クロノさんの体験談と映像記録から、かなり堅い防御なのは分かっていたので、

事前に対応策を考えておいたんです」

力押しで障壁を破れなかった場合を想定し、かおるは全く新しい魔法を開発していたのだ。『破れないのならば、無理に破ろうとせず、攻撃だけを通せばいい』。発想の転換は至極簡単だったと、彼は語る。

『ドラフト』と名付けられたこの魔法は、魔力をフェザーハートの刀身に纏わせ、敵の防御魔法と接触した瞬間に発動する。術者が人

である以上、その生命維持には空気が必要となる。そのため、例えば術者を隙間無く覆うバリア系やフィールド系の防御であっても、障壁の向こう側には空気が存在する。『ドラフト』は、特殊な術式を組み込んだ魔力を斬撃に乗せて繰り出すことで、障壁と術者の間にある空気に振動を伝え、『斬撃』の威力をそのまま『衝撃波』として相手に届かせ、ダメージを与える魔法なのである。結果として、『防御しても吹き飛ばされる』という、反則的な魔法が誕生したという訳だ。

「・・・それを、フェイトやなのはのデバイスに組み込めるか？」

画面を使つてのかおるの説明に、皆が啞然とする中、クロノは実に冷静に尋ねる。この技術は、あの少年ばかりでなく、守護騎士達にとつても脅威だ。なのはとフェイトが使いこなせれば、彼等に対して切れるカードの枚数が増え、こちらがぐつと有利になる。そう考えているのだ。

「すみません。」

この魔法は、『風』の魔力変換資質を特殊な術式で制御して初めて発動するんです。

ソレを持たないなのは達には、技術的に不可能なんです・・・」

しかし、現実はそう甘くない。クロノだけでなくなのは達も肩を落とすが、言われてみれば確かに、そんな反則技が誰にでもほいほい使えたら、商売あがったりである。

「そうすると、彼に太刀打ちできるのは、君しかない訳か・・・」

「大丈夫ですよ。元々そのつもりでしたし・・・」

実際に会って、いくつか確かめたい疑問点もありますし・・・」

申し訳なさそうに話すクロノに、かおるは明るい微笑みで返す。と、そこで、かおるのセリフにリンディが興味を示し、尋ねてきた。

「疑問点？」

「単刀直入に言えば、『言動の印象の矛盾』です」

かおるの返答に、質問したリンディを含め、みんなが疑問符を浮かべた。ハッキリ言って、訳が分からない。

「簡単に言うと、ボクの彼に対する印象は、

『冷静かつ慎重で、思慮に欠けた行き当たりばったり。』

とても優しく、果てしなく意地悪』・・・ってことです」

「どっちだよッ!!」

ハリセンを使用したアルフのツツコミが綺麗に決まった。いきなりの行動にリンディも目を丸くするが、気持ちは分からないでもなかった。先程の返答より、さらに訳が分からないのだ。冷静で思慮に欠け、慎重で行き当たりばったりで、優しくて意地が悪い。完全に人格が矛盾してしまっている。

「・・・そう・・・彼の人格は矛盾しているんです」

アルフの渾身のハリセンを受けたにもかかわらず、何事もなかったかのようにかおるは呟く。あまりに真剣なその表情に、皆が息を呑んだ。

「・・・と言つと・・・?」

リンディに促され、かおるは自らの考えをモニターを交えて説明し

始めた。

当初、かおるは『魔導師襲撃事件』の犯人について、『戦力は侮れないが、思慮に欠ける人達』という評価を下していた。万年人手不足とはいえ、管理局という巨大組織が見守る中、隠れようとせず、おおっぴらに暴れ回る様は、捕まえてくれと言わんばかりで、よほど力に自信のある戦闘凶か、考え無しの馬鹿としか思えなかった。しかし、クロノから聞かされた体験談や映像記録を見ると、件の少年はとてもそのような人間には見えない。しゃべり口は冷静そのもので、口にする内容は端的かつ最小限。どう見ても、先を見通し、合理的かつ冷静に物事を考え、最小限の労力で目的を達成するのを好む人種だった。

そしてさらに、今日の戦闘において、彼はフェイトに対して嫌がらせと取れる言葉と視線を送っていたが、カートリッジシステムを使用するに当たって、彼女の身体を心配しているかのような言葉を残してもいる。

以上のことから、彼は『冷静かつ慎重で、思慮に欠けた行き当たりばったりであり、とても優しく、それでいて意地が悪い』という、訳の分からない人物像を作り上げているのだ。

「最後の爆撃の際、彼がボク達にあの魔法を掛けたのも、

追跡を阻むのと同時に、ボク等の身を守るためだったのでは無いでしょうか」

さすがに考えすぎじゃないかと、アルフは反論するが、なのは達は多かれ少なかれ納得の表情を見せていた。逃走の時間稼ぎのためならば、あれほど完璧な障壁を張る必要はないし、物理被害の無い魔力爆撃とはいえ、あの爆発に巻き込まれば、少なくとも無傷とはいかなかっただろう。彼等に見れば、こちらがしばらく動けなくなり、都合が良い。にもかかわらず、結果的に自分達はあの少年の防御魔法に守られ、今ここにいるのだ。

「・・・それに、あの魔法・・・なんだか、温かかった・・・」

フェイトの口から思わず出た呟きに、なのはが静かに首を縦に振って肯定し、アルフも「そう言われれば、確かに・・・」と、嫌々ながら頷いた。変えようのない事実である。あの球状の防壁内部には、悪意や殺意とは無縁の、友人や家族に対する思いやりのような温かさで満たされていたのだ。

広い室内を重い沈黙が支配する。永遠に続くと思われた時間は、手を叩く乾いた音によって終わりを告げた。

「まあ、この件に関しては追々考えましょう。今は、闇の書の確保を優先させるべきだわ」

「転移頻度から見ても、この世界に拠点があるのは間違いない。

案外、簡単に居場所が突き止められるかもしれないな」

ハラウン母子の言葉に皆が頷き、当面の目標を統一させる。

と、その時、なのはのケータイに一通のメールが届いた。送信者は、親友のすずかである。折りたたみ式のケータイを開き、内容を確認する。

「・・・ほうほう、月村さんは御友人宅で鍋料理ですか・・・。

確か、この世界のこの時期特有の家庭料理でしたね・・・」

「・・・って！　なんでリイナちゃんが先に読むの!？」

「え、えっと・・・すずかさんの友達ってどんな人なのかな?」

またもやつまらないことでケンカを始めようとする二人。なんとかしなければと思い、かおるは話をすり替えようと、普段なら口を挟まない友人の交友関係を話題にした。

「八神はやてという、同い年の少女だそうです。あ、写真も同封されています」

「だからなんで、私のケータイを勝手にいじくるの!？」

どうにもこの二人はいがみ合う運命にあるらしい。頭を痛めながら親友のそのまた友人の名前を聞き、ふと思い出す。

「もしかして、そのコ、車イスに乗ってたりする？」

その一言で、無意味な言い争いをしていた二人が固まった。ギギギと、壊れた人形のような動きで顔をこちらに向けてくる。

「・・・なんで、知ってるのかなあ・・・？」

「・・・彼女とは、どゆー関係なんですか？」

二人とも表情こそ笑ってはいるが、有り余る怒気が体中からにじみ出ている。ハッキリ言って、下手なホラー映画などより数倍怖い。

「知り合いのお医者さんが主治医をしてる女の子だよ。
何でも、原因不明の神経性麻痺なんだって」

その内容に一応の納得を見せ、なのはとリイナは引き下がるが、今度はクロノから疑問が投げかけられた。

「普通そいう話は、家族以外には他言無用じゃないか？
どうして君に話したんだ、その医者とは・・・」

「いや、治療法を知らないかって、前から相談を受けてたんです。
それでも、元々は小児外科医志望でしたから・・・」

天地がひっくり返る新事実である。しかし、クロノにとってはもは

や驚く事ではないようで、世間話をするようにさらに尋ねてくる。

「それで？ 何か分かったのか？」

「いえ、話に聞くだけではなんとも・・・

近い内に会ってみようかと思ってたんですが、

すずかさんのご友人なら、いくらか手間が省けそうです」

「今度、紹介してくれるって！ 楽しみだね、かおるちゃん！」

かおるを中心に、少年少女は会話を弾ませているが、視線を他に向けて、弱冠数名がぼーんと、部屋の真ん中で突っ立っていた。

「いやいやいや・・・さすがにおかしいだろあ・・・。

現役の医者が、仮にも九才のガキに相談するとかさ・・・」

「・・・常識ってなんだっけ・・・？」

「一段落したら、『魔導医師免許』の取得試験を受けさせてみようかしら・・・」

アルフはあぐりと口を開け、力のないツツコミをポツリポツリと呟き、ユーノは半ば放心状態で立ち尽くし、心の中に現実逃避している。他の二人よりも比較的冷静に自体を受け止めたリンディは、本人の許可もそこそこに、新たな才能の開花を予感して密かに心を躍らせていた。

第六話 「それは小さな願い 中編」(後書き)

作者「ども。かなり久しぶりの投稿となります。第6話です」

クロノ「ちよつと待て!」

かおる「なんで『中編』・・・?」

作「いやあ・・・なんか書いてたら、字数がとんでもないことになってさ、

いっそのこと、前・中・後編に分けてしまおうと思って・・・」

リイナ「そういえば、前回は軽く一万時越えてましたね」

なのは「本編に出てなかった脇役なのに、よく覚えてるね」

リ「ぶん殴ってあげましょうか?」

か「わあ!? ちよつと二人とも!」

作「前は戦闘描写があつたからなあ・・・」

フェイト「あの・・・ケンカは無視なんですネ・・・?」

作「いちいち相手にしてたら、身が持たないからな」

エイミィ「確かに・・・」

アルフ「経験者は辛いねエ、エイミィ・・・」

玄斗「貴様にも学習能力はあったのか」

作「・・・オレをいじめて楽しいか？」

エ「『おもしろくない』って言えば、嘘になるね！」

か「胸を張って言うことじゃないですよ・・・」

ク「同感だ。本編でもそうだったけど、やけにテンション高いな」

玄「そろそろ寿命かね？」

エ「し、失礼なッ！ 花も恥じらう16歳だよ私はッ！」

ア「てゆうーか、ハイテンションだと寿命が短いってどーゆー理屈だよ」

玄「おや？ 知らないのかね？」

常に興奮気味の人間と普通の人間では、平均寿命が十歳近く違うのだよ？」

な「ええッ！？」

エ「うつそお！？」

玄「うむ。嘘だ」

ア「なんじゃそりゃー！！」

リ「二段オチとは、やりますね・・・」

フェ「クロさんの場合、嘘かどうか表情で判断できないからなあ・・・」

な「内容もそれっぽいしね・・・」

ク「詐欺師にはもってこいの技術だな」

玄「・・・まあ、事実犯罪者だ。否定はせんよ」

作「実際は、せこい手なんか使わなくても、十分凄いなだけだね」

か「魔導師ランクS+には驚きました・・・」

リ「完全にチートですね」

作「だから前にそう言っただろ？」

な「そういえば・・・」

フェ「そんなこともあったような・・・」

玄「あまりに間が開きすぎて、記憶が曖昧になっているようだね」

作「・・・地味にイヤミだな・・・」

ク「ただの事実なだけだな」

エ「でもさ、かおる君の魔法も、ハッキリ言って反則だよな」

ア「存在自体が反則のような気がするけどね・・・」

作「だから言っただろう？ かおるは『天才』なんだよ！」

リ「意見には同意しますが、説明になっていません」

<一口メモ>ドラフト：かおるが徹夜で開発した、防壁浸透魔法。

空気の振動を利用して、

『衝撃』をそのまま相手にぶつける魔法。
故に、『魔力攻撃』ではあるが、

与えるダメージは物理的なモノである。
特殊な術式で『風』の魔力変換資質を
組み込んだ攻撃魔法を指しており、
斬撃そのものを指しているわけではな

い。

魔力弾にも付与できるが、
その場合の効果は半分以下、
有効射程も極短距離なので、
あまり使えたモノではない。

玄「『すきま風』・・・か。名前のわりに凶悪な魔法だったね」

ク「とてもじゃないが、即興で作ったとは思えないな・・・」

作「まあ、簡単に言うと、かおるは『知』で玄斗は『力』って事だ」

な「そんなに簡単じゃないような・・・」

リ「ま、あなたの小さなおつむじや理解できないでしょうね」

な「何か言ったかな？」

か「誰かこの位置代わって下さい・・・」

フェ「なんとかして下さい！ 作者の力で・・・！」

作「君達に任せる！」

エ「丸投げ！？」

ア「・・・ひどい作者もいたもんだ・・・」

ク「なんでもいいから、あの二人を止める！！」

玄「このままでは次元震に発展しかねんぞ！」

作「えゝ、意見・感想など、お待ちしております。

まだまだ若輩者なので、色々と言いたいことも多いでしょう。
としどし書いて下さい。よろしく願います」

か「現実逃避って、ある程度は必要だね・・・」

第七話 「それは小さな願い 後編」(前書き)

ただいま、 『お気に入り登録』 絶賛募集中です！

第七話 「それは小さな願い 後編」

「とりあえず、闇の書についてももう少し詳しい情報が欲しいな・・・」

あごに手を当てながらクロノは呟き、物色するように集まったメンバーを眺める。部屋の中央で放心している薄い金髪の少年へと、その視線を定めた。

「ユーノ、少し頼めるか？」

クロノは短くそう尋ねてくるが、ユーノには決定権も拒否権も無い。そのままずるずると、強制的に本局へと引きずられていった。片腕のケガ人とは思えない腕力だったと、後にユーノは語る。

家族の大半が寝静まった真夜中の八神家のリビングにて、三つの人影が大きなソファアーに腰を下ろしていた。

「何ヶ月だろうか・・・。守護騎士達おまえたにがウチに来てから・・・」
「半年程かと・・・」

銀色に光るブレスレットを磨きながらの呟くような少年の問い掛けに、その隣に静かに控えたポニーテールの女性が短く答える。

「この半年で、みんな変わりました。はやてちゃんと、お兄さんのおかげですね」

「『変わった』訳ではない。」

閉じこもっていた本音が『殻を破って出てきた』・・・それだけだよ」

金髪のショートカットを指で梳きながら、感慨深そうに語るシャマルに、腕輪を磨いていた手を止め、玄斗が語りかけるように言葉を紡ぐ。

懐かしく思ったのか、シグナムもまた、ポニーテールを揺らしながら少年の手にある腕輪を見つめ呟いた。

「思えば、用心深い兄上がすんなりと我等を受け入れて下さったのも、

その盾月デバイスのおかげですね」

「ハハハ・・・私の目は節穴ではない。悪人かどうかくらい、目を見れば分かったさ」

八神家三女のその言葉に、やれやれと、ため息混じりに玄斗は答える。

最近の現状に疲れがたまっているためか、はたまたただの現実逃避か、彼等は運命の歯車が回り始めた『あの日』のことを思い出していた。

――始まりは半年ほど前にさかのぼる――

六月三日

この日は、はやての九才の誕生日の前日だった。両親はすでに他界

し、たった一人の兄と暮らす毎日。不満など無かった。物心ついた頃から両足が不自由だった彼女だが、ご近所の皆さんは良い人ばかりで、親の遺産も父の友人が管理してくれているおかげで生活に困ることはない。何より、最愛の兄との二人きりの生活は、自然に心を満たしてくれていた。

明日は主治医の石田先生も一緒に祝ってくれるそうで、はやてはなかなか寝付けずにいた。元来、大勢で食事をするのが好きな彼女は、楽しみで仕方がない。読みかけの本を読みながら眠気が襲ってくるのを待ってみたが、気がつけば、日付をまたいでしまっていた。と、その時

「・・・え・・・？」

机の上に置いてあったが厚い洋書が、妖しげな光を放って宙に浮いたのだ。物心ついた頃からそばにあったその本は、自らを雁字搦めにしていて鎖を勢いよく引きちぎり、スムーズにそのページを一枚ずつパラパラとめくり始める。最終ページまでめくり終わると、バツと勢いよく表紙を閉じ、はやての目線の高さまで下りてきた。本の背後に、細かく文字の書かれた三角の紋様がゆっくりと回転しながら光を放って現れる。すると、洋書が一層強い閃光を放ち、はやては思わず目をつむった。

数瞬後、おそろおそろ目を開けると、信じられない光景が瞳に跳び込んできた。

「闇の書の起動、確認しました」

「我等、闇の書の蒐集を行い、主を守る、守護騎士にてございませう」

「夜天の主の元に集いし雲・・・」

ヴォルケンリッター
「『雲の騎士団』・・・なんなりと命令を」

真夜中の寝室に、見たことのない四人組がひざまずき、横一列に並んでいたのだ。桃色ポニーテールの女性、金髪ショートカットの女性、銀髪犬耳の男性、赤毛三つ編みの少女と、順々に言葉を繋いでいくが、当のはやてはそれどころではなかった。現状、不審者四人が自分の寝室に忍び込んできたのだ。頭の中は大パニックである。意識が薄れる中、最後に彼女が思い浮かべたのは、いつも隣で笑ってくれる一人の少年の顔だった。

気がつくと、はやては行きつけの病院のベッドの上だった。隣には、主治医の石田が心配そうに控えている。

「で、誰なの？ あの人達は」

石田の人指し指が指す先には、あの四人の姿があった。どうやら夢や幻覚の類ではなかったらしい。他の医師や看護師達に囲まれ、ポニーテールの女性と犬耳の男性は沈着冷静の無表情だが、ショートカットの女性と三つ編みの少女が弱冠 居心地悪そうにしている。

「どーゆー人達なの？」

春先とはいえ まだ寒いのに、はやてちゃんに上着も掛けずに運び込んできて・・・。

変なカッコしてるし、言ってることは訳分かんないし、どーも怪しいわ・・・」

「あゝ・・・えっと・・・その・・・なんと言いたそうか・・・」

どうやら気絶した自分を病院まで運び込んでくれたらしい。悪い人達ではなかったようなので、はやてはひとまず安心するが、別の問題が生まれてしまった。石田が、四人のことをかなり怪しんでいる

という事だ。確かに、着ている服は季節的に不自然なほど簡素で薄手な黒一色であるし、男性などは側頭部で犬耳がたまにピクピクと動いている。これでは、怪しむなと言う方が無理な話だろう。

ご命令を頂ければ、お力になれますが・・・いかが致しましょう不意にポニーテールの女性と目が合った時、はやての頭の中に声が響いた。突然のことに呆気にとられていると、再び同じ声が聞こえる。

思念通話です。心でご命令を念じていただければ・・・

・・・ほんなら、命令とゆうよりお願いや。ちょう、私に話合わせてな

一瞬思考を巡らせたはやては、言われたとおり心で言葉を念じる。普通ならば訳が分からずに混乱する事態なのだが、生来の素直かつ柔軟な性格が功を奏したようだ。もしくは、『兄の存在』が原因だろう。不思議に思いながらも、新しい主の言葉にシグナムは小さく頷く。

「石田先生！ 実はあの人達、私の親戚で・・・」

気を失う間際に四人が言っていたことも気になり、はやてはとりあえず誤魔化すことにした。自分の誕生日を祝うために遠い祖国から駆け付けてくれたのに、自分が必要以上に驚いて気絶してしまった。変な格好や犬の耳は、『仮装』という形で無理矢理に納得させた。

四人を引き連れ、家まで帰って来たのはいいが、一つ重要な人物をはやてはすっかり忘れていた。兄だ。石田先生はなんとか誤魔化せたが、彼はそうはいかない。自分を病院に運んでくれたのは彼女達だが、気絶した原因もまた彼女達だ。そうでなくとも、夜中に他人の家に侵入し、あまつさえ住人を外に連れ出すような人物を、あの兄がただで済ますとは思えない。口数が少なく表情の変化が乏しいので、初対面の人には誤解されがちだが、元来、人一倍優しく誠実で正義感の強い人なのだ。そして、極限られた人にしか知られていないが、彼は幼少の頃より数多の武芸をたしなみ、その実力はそこらの達人などよりも遙かに上である。『マスタークラス武術の天才』と言ってもいいかもしれない。その彼がもしも怒ったらと想像すると、背中に嫌な汗が伝うのも当然であつた。

「ただいま……」

おそろおそろといった感じで、帰宅の挨拶をする。はやての纏う空気を感じ取ったのか、守護騎士達の表情も戦の直前のように引き締められていた。そして、

「お帰り」

感情のこもっていない、底冷えするような低い声が玄関に響いた。声の主は腕を組み、仁王立ちで直立不動である。表情は無いが、確実に怒っている。守護騎士達はというと、彼の発する巨大な、それでいて絶対零度のごとき怒気をその身に浴びて、まさに身の凍る思いをしていた。

「石田先生から話は聞いた。

どうやら我が家には、夜中に不法侵入した挙げ句、

人の妹を無断で外に連れ出す親戚がいるようだが、後ろの連中

がそうかね・・・？」

少年が一つ言葉を発するたびに、凄まじい威圧感が守護騎士四人を襲う。あまりの気当たりに、百戦錬磨であるはずの四人の意識が飛びかけた。

「・・・まあ、立ち話もなんだ。入りたまえ」

しかし、寸前で彼から威圧感がピタリと途絶えた。それどころか、軽いため息を吐き、家に入るように促してくる。あまりの豹変ぶりに、はやてを含めて皆が啞然とした。

「なるほど、話はおおむね理解した」

「この子が、闇の書ゆうモノなんやね？」

リビングに案内された守護騎士達は、自分達の存在と闇の書について、事細かに二人に説明した。兄は腕を組みながら静かに頷き、妹は剣十字が光る洋書を手に取って疑問系で確認を取る。

「覚醒の時と寝ている間に、闇の書の声を聞きませんでしたか？」

シャマルの質問に、はやては「あまり覚えていない」と、曖昧な返事を返すしかなかった。当然だ。自分は魔法など使ったことが無いし、何より・・・

「私より兄ちゃんの方が詳しいやろ。なんか聞いたことある？」

その類の事は、兄の方がよく知っている。

「さて、私も漠然としか理解していなかったからね」

はやての問い掛けに苦笑を交えて答えると、玄斗はパチンと指を鳴らす。すると、リビングの奥——キッチンから紅茶の入ったティーカップと受け皿が、ちょうど人数分『宙に浮いて』運ばれてきた。

「ちょうど、紅茶が入った。温かいうちに飲んでくれたまえ」

この言葉に、守護騎士達は驚きを隠せなかった。記憶する限り、自分達にこのように接してくる人間など、存在しなかったからだ。四人は促されるままにカップを手に取り、なんとも言えない温かさを戸惑いながらも感じていた。

騎士達に始めに与えられたのは、『戦場』でも『闇の書蒐集の命令』でもなく、『衣服』であった。一通りの説明が終わって守護騎士達の同居が玄斗に承認されると、この世界で出歩くには少々不自然な格好の四人を家に残し、四人の体格にピッタリなモノを兄妹二人で見繕ったのだ。

「主として、みんなの『衣・食・住』の面倒は見な！」

小さな握り拳を作り、かわいらしい笑顔ではやては力説する。ちなみに、服は玄斗が、下着ははやてが選んだらしい。

賑やかな夕食の一時、食後のほのぼのとした安らぎの時間、各々にあてがわれた部屋で過ごす夜。それまでは考えられなかった扱いに、守護騎士達は覚醒初日から終始戸惑った。新しい主とその兄の彼女達に対する態度が、歴代の主達のように高圧的であったり、道具のような扱いではなく、まるで家族に接するかのようなモノだったからだ。

結局、はやてが闇の書の蒐集を望むことは無かった。「不自由な足

も治るはずだ」というシグナムの再三に渡る申し出にも、「たくさんの人に迷惑がかかるから」と、常に首を横に振る。

「私がマスターでいる間は、みんなの仕事は私達の家族として暮らす事や。」

闇の書の蒐集なんて、せんでええ」

年若い主は平凡ながらも温かな暮らしを望み、守護騎士達も主の願うままに、何事もない日々を過ごし始めた。

その後も、この世界におけるルールや一般常識を教えられ、元からそこにいたかのように、守護騎士達は自然に八神家に溶け込んでいった。いつしか彼女達は、玄斗を呼び方こそ違えど『兄』と慕うようになり、そう呼ばれる彼もその事を快く受け止めていた。家事の分担も成されるようになり、日替わりの当番で掃除や洗濯などを行っている。ただし、料理だけははやてと玄斗の二人だけで分担していた。それというのも、新しい家族達の料理のスキルが壊滅的だったからである。

一度、「はやてと玄斗の役に立ちたい」という彼女達の熱意に負けて台所を任せたことがあったのだが、結果は散々たるモノだった。シグナムはどう火加減を間違えたのか食材を全て消し炭にし、ヴィータは調理器具が全てゴミに成りはて、シャマルに至ってはもはや毒物であった。よくよく考えてみれば、かつてはまともな食生活すらしていなかった彼女達に料理など出来るはずがなかったのだ。その事を重々承知していたザフィーラが最初から参加せず、三人の奇行を無言で眺めていたその姿は、はやてと玄斗の記憶に印象強く残っている。

そんなある日、

「ほう、なかなか似合っではないか」

腕を組みながら玄斗は感心するように呟く。彼の目の前には、満面の笑みを浮かべるはやてと、気恥ずかしそうに並ぶ四人の騎士が立っていた。玄斗が賞賛しているのは、四人の着ている衣服である。

「せやろ？ 昔のアニメやら何やら見て研究したんや」

「・・・仮にも戦闘服なのだろう？ もう少し真面目に考えた方が良くはないかね？」

そう。今、四人の着ているのは普段着ではない。テレビの特撮番組などの登場人物が着ていそうな、『一応』戦闘服である。発端は三日前のことだった。シグナムとシャルが、『騎士甲冑』の作成をはやてに持ちかけたのだ。曰く、武器は各々持参しているが、甲冑は主からもらい受けなければいけないらしい。頭の中で想像すれば、騎士達の魔力で作れると言うので、はやてはその日のうちにシャルとヴィータを連れて、近場のデパートへとアイディアを探しに足を運んだ。その成果が、今こうして八神家家長の目の前に並んでいるというわけだ。

「ザフィーラはまだ良い・・・。しかし、女性陣のその格好は・・・」

「ええの！ 私はみんなを戦わせたりせえへんのやから、かつこよくて、可愛ければそれでええの！」

シャルとヴィータはロングスカート、シグナムに至っては生足である。『騎士甲冑』と称するには、あまりにも無防備かつ露出過多ではないかと玄斗は指摘するが、はやては頑なに自分の案を押し通そうと聞き入れない。時折見せるその頑固さに、変なところが自分

に似てしまったと、玄斗は小さくため息をつく。

「ちなみに、ヴィータの帽子のウサギは・・・？」

「なんや、えらい気に入ったみたいでな、せつかくやからアクセントとして付けてみたんや」

「かわええやろ」と、はやてが胸を張って自信満々に語る。アイデア考案の際に出かけたデパートのおもちゃ売り場でヴィータが偶然見つけたウサギのぬいぐるみは、すでに彼女のお気に入りでも、いつも持ち歩いているほどだ。

「・・・まあ、この世界には魔法技術が存在せんからな・・・。

甲冑の世話になるような事も滅多にあるまい。

皆がそれでかまわなければ、私は何も言わんよ」

あまりに嬉しそうに語るはやてに、ついに玄斗が折れた。この少年、妹のことになると兄バカ全開なのである。と、唐突にシグナムがその言葉に疑問をぶつけてきた。

「それについてなのですが、兄上はどうやって魔法をお使いになっ
っているのですか？」

長い間放置してきたが、当然の質問だ。魔法文化が存在しない世界で暮らし、異世界との交友も持っていなかったのに、なぜこの少年は魔法が使えるのだろうか。しかも、はやての話によれば、物心ついた頃にはすでに使えたらしい。『無機物を宙に浮かせる』。おそらく、飛行魔法の応用であろうが、それを誰に教わるでもなく自然に身に付けたと思うと、シグナムは思わず身震いした。『天才』の二文字が頭をよぎる。そもそも、飛行魔法自体がそれほど簡単なモノではない。天性の適性と類い希なセンスが要求されるのだ。『術

者自身が浮遊する』だけでも会得するのに相当の努力を要するが、彼は易々と『自分以外の物体を浮遊させている』。これには、通常の飛行魔法よりも複雑な空間把握と演算が不可欠であり、普通そのような計算はデバイス無しではなし得ないのだ。それが、魔法の基礎も知らない人間ならば、なおさらである。

「私にも、よく分からん。ただ・・・」

一旦言葉を句切り、玄斗は右腕を差し出す。そこには、弧を背中合わせに並んだ双子の月の紋章が輝く、銀色の腕輪が照明を反射していた。

「物心ついた時分から、私と共にあったこの腕輪・・・もしかしたら・・・」

最後まで言わなかったが、少年の言いたいことは理解できた。この腕輪は『デバイス』ではないだろうか、と。未だ起動はしていないが、腕輪に演算処理を無意識のうちに行わせ、術式を展開しているのではないだろうか。根拠は無い。完全に勘に頼った想像だったが、結果から言うと、その予想は当たっていた。シャマルが解析した結果、高性能の『アームドデバイス』であることが判明したのだ。起動方法も分かり、使用できる魔法の種類と機能も大幅に増した。この世界にデバイスがあること自体不思議なことだが、魔法自体は実に便利な技術なので、玄斗は気に留めることもなく、主に家事において重宝したのであった。

十月二十七日

しかし、永遠に続くと思われた幸せな時間は、突然に崩れ去った。

「命の、危険・・・!?」

はやての定期検診に付き添っていたシグナムとシャルマルは驚愕した。主治医の石田から聞かされた言葉は、とても信じられるモノではなかったのだ。

「はやてちゃんの足は、原因不明の神経性麻痺だとお伝えしましたが、

この半年で麻痺が少しずつ上に進んでいるんです。

この二ヶ月は、特に顕著で・・・。

このままでは、内臓機能の麻痺に発展する危険性があるんです」

そう告げられた瞬間、二人は目の前が真っ白になったように感じた。はやての足の麻痺は、病気ではなかった。彼女が生まれた時から共にあった闇の書がその身体と密接に繋がりを、抑圧された強大な魔力がリシンカーコアが未成熟な彼女の身体を蝕み、健全な肉体機能どころか生命活動さえ阻害していたのだ。そして、はやてが第一の覚醒を得たことで、ソレが加速したのである。守護騎士四人の存在を維持するために、極僅かであるが主の魔力を使用していることも、無関係な事ではなかった。

その日のうちに、シグナムとシャルマルはその旨をヴィータとザフィールに告げた。場所は夜の海沿いの公園だ。ここならば、はやてや玄斗に聞かれる心配は無い。

「はやてを・・・助けなきゃ・・・!」

ヴィータは治療魔法が得意なシャルマルに治してくれと涙ながらにせがむが、到底無理な話だ。闇の書の一部でしかない彼女に、『闇の書の呪い』とも言えるこの病を止める術など無い。なぜ、こんな事

になってしまったのだろうか。ただ平和な暮らしを望み、家族との平凡な一時を願った少女が、なぜこんな目に遭わなければいけないのか。自分達のせいだ。自分達の存在が、初めて護りたいと思えた主を・・・かけがえのない家族を苦しめている。そんな自分が情けなくて、悔しくて、ヴィータはその場に泣き崩れた。

「シグナム・・・」

「我々に出来る事は、限りなく少ない・・・」

涙声で絶叫を挙げる末っ子を視界の端に留めながらのザフィーラの声に、シグナムがその手に握った剣型のペンダントを見つめながら呟くように答える。

「『少ない』と言うことは、無くはない訳だね？」

突然、澄んだ声が夜の公園に響いた。四人は驚き、その声の主を見る。吹きすさぶ潮風に漆黒の長髪を舞上げ、固い意志を宿した剣のように鋭い目の少年が夜の闇の下に立っていた。

海鳴市内にある高層ビルの屋上に、五つの人影があった。一人を中心に、四人が円を描くように並んでいる。

「夜天に昇れ・・・『盾月』」
しゅげつ

<承知いたしました。御主人様>

少年の言葉に答え、腕にはめられたブレスレットが淡い光を放ち、無骨な籠手へと姿を変えた。身に纏う衣服も、銀色の装飾がちりばめられた漆黒の戦闘服へと変わる。

——主はやての身体を蝕んでいるのは、闇の書の呪いで
す

シグナムが愛剣・レヴァンティンを横一文字に構え、

「私の決断は、間違いなく『悪』だ。言い逃れるつもりなど、毛
頭無い」

少年は目をつむり、静かに言葉を紡ぐ。

——はやてちゃんが、闇の書の主として真の覚醒を得れ
ば

シャルが指に光る指輪・クラールヴィントに優しく口付けし、

「だが、例えば世界が私を否定し、神が鉄槌をくだそうとも
——」

少年を中心として、白銀に輝くトライアングルが薄暗い屋上を照ら
し、守護騎士達を円周上に置いてゆっくりと回転を始める。

——主の病は消えます。少なくとも、進みは止まるか
と

ザフィーラが両腕の手甲を激しく打ち鳴らし、

「このような戯けた運命など、認めるわけにはいかん!」

夜空に溶け込むような黒髪を突風になびかせながら、少年が決意の

光を宿した瞳を開く。

——— そのために、闇の書の蒐集が、どうしても必要なんだ！ ———

ヴィータが鉄槌・グラーファイゼンで虚空を殴る。

はやては、闇の書の完成など・・・他人に迷惑を掛ける行為など望んでいない。守護騎士達にも『お願い』という名の命令で蒐集行為を禁止した。心優しい彼女の意思を無視しての行動に、負い目を感じないわけではない。しかし、今の彼等にとって、自分の信念も主とのただ一つの契りも、彼女の命の前にはなんの意味も持たなかった。

「・・・許せ・・・はやて!!」

少年の呟きを合図に、五色の閃光がそれぞれの目指す世界へと飛び立っていった。

——— そして現在へといたる ———

八神家の家族全員が未だに眠る早朝の庭に長男は静かに佇んでいた。小学六年生であるため、普段は夕方からの限られた時間しか蒐集できないが、今日は十二月十一日月曜日。学校の創立記念日だ。

夕食の時間まで、ノンストップで次元世界中を飛び回ることができ
る。はやてにはあらかじめ、「朝早くから釣りに行く」と断りを入
れているので、何も問題は無い。本当ならば、普段から学校など休
んでもいいのだが、さすがに一ヶ月以上も連続で休学するのはあま
りにも不自然なので仕方がない。

「私は必ずあの日々を取り戻す・・・！ 他の全てを犠牲にして
でも・・・！！」

足下に魔方阵を展開しながら戦闘服と籠手を装着し、自分自身に言
い聞かせるように己の覚悟を口にする。

「そのために、君には礎いしづえになってもらうぞ・・・春風 かおる・・・
・！」

薙刀を携えた少年を思い浮かべ、申し訳なく思いながらも、玄斗は
前を見据えて迷わない。決めたのだ。はやてを助けるためならば、
例え悪魔にでも魂を売ると。悪となじられ、非道と恐れられ、邪悪
なその名を次元世界の歴史に永劫刻まれようと、必ずや、最愛の
妹だけは救ってみせると。歪んだ運命に神を呪いさえしたあの日の、
あまりに悲しい誓いを胸に、少年はただただ前へと進むのだった。

第七話 「それは小さな願い 後編」(後書き)

作者「お久しぶりです。ようやく、『それは小さな願い編』が終わりました」

クロノ「今回は、登場人物が少ないな」

作「まあ、『八神家の過去』が中心だったからな」

かおる「しく しく しく しく……」

なのは「ど、どうしたのかおるちゃん!？」

フェイト「すっごい号泣してるよ!？」

はやて「なんやなんや、聞くも涙 語るも涙の展開に感動したんか？」

エイミィ「って! なんではやてちゃんがここに!？」

玄斗「この段階での介入は、さすがにマズイのではないかね？」

作「所詮は後書きだし、いいんじゃない？」

アルフ「うっわ! めっちゃテキトーだよこの人!」

玄「今更言つほどのことでもあるまい」

シグナム「相変わらず、容赦がありませんね兄上」

フェ「シグナムまで!？」

ヴィータ「アタシ達もいるぞー」

シャル「今回は、私達メインの話なんですから当然です!」

ザフィーラ「それでも、私とお前は影が薄いかな・・・」

シャ「ガン!!」

は「私もヒロインの一人なんやから、
むしろ今まで後書きに参加しなかったことの方が不自然やろ」

な「それはそうかもだけど・・・」

フェ「時期的なモノだってあるだろうし・・・」

リイナ「他にも後書きに参加していない人は、けっこういますよ?」

エ「誰だろ?」

ク「なのはのご家族とかじゃないか?」

な「でも、ウチの家族は『本編に参加してる』とは言えないんじゃない?」
・・・

ア「確かに、セリフが全くなかったからねえ・・・」

フェ「アリサやすずかは?」

ヴィ「さすがに魔法の世界にかかわってない連中を出すのは、
まず
いんじゃない？」

シ「では、リンディ提督やレティ提督はどうだ？」

シャ「ああ！ あの人達、影薄いわよね」

ザ「お前が言うか・・・」

リ「彼女達は、仕事の都合で後書きに來られないだけです。
決して影が薄いわけではありません」

は「じゃあ、いったい誰なんや？」

作「他に誰かいたっけ・・・？」

ユ「ノ・・・あの・・・」

は「君、誰？」

ヴィ「こんなやついたっけ？」

ユ「酷っ!？」

シ「そうか！ さては、仮面の男の正体だな!？」

ザ「シャマル！ 捕らえて尋問しろ!」

シャ「分かってるわ!」

ユ「って、ちよつと待って！？ ボクの話を……！」

守護騎士「「「「問答無用！」」」」

ユ「ええええええええええ！？」

玄「落ちて着かんか!!!」

守「「「サー・イエツサー!!!」」」

フェース・スゴイ……」

「まるで軍隊のようですね」

な「そうだ！ ユーノ君だよ！ ユーノ君！！」

ク「そー言えば、すっかり忘れていたな・・・」

「全つ然、存在感無かつたもんね・・・」

ア「第一期の一話目から出てるんだけどねえ……」

か「……うわああああああああん！！！」

「……なんだ？　アレは……」

作「説明しよう」

「ヴィー、あ、作者が出た。すつげー影薄い作者が出た」

作「・・・見せ場減らすぞ、このロリッ娘！」

ヴィ「ジョートーだ！ やれるもんならやってみやがれ！！」

シ「熱くなるな。体力の無駄遣いだ」

は「で？ 何がどうしたん？」

作「実は今回、主人公の出番が全く無かつたんだよね（かおる）」

な「ええ！？」

フェ「そー言えば確かに・・・」

ア「てゆーか、アタシ達の出番も無かつたぞ！？」

作「そんなわけで、すっかり落ち込んだじゃってね」

リ「そこに直りなさい」

エ「リ、リイナちゃん？

気持ちとは分からなくてもないけど、とりあえず刃物はしまおう？
ね？」

リ「このような出来損ない・・・

私の手にかかって死ねるだけでも、身に余る光栄です」

ク「まずい！ 本気でキレてる！」

は「みんな！ 取り押さえて！」

シ・ザ「「心得ました！」」

シャ「了解です！」

ヴィ「おうよ！」

玄「やれやれ、大混乱だね」

な「こんな状況なのに、すごく落ち着いてますね・・・」

フェ「ホント、すごいよね・・・」

ア「魔法無しで守護騎士がびびるってのは、さすがに無いと信じた
いよ・・・」

エ「凄腕の武術の達人なんでしょ？

データでは近接戦闘能力A A A + ってたんだけど、
本当はもつとすごいんじゃない？」

作「純粋な体術だけなら、次元世界最強レベルなんだけど、
近接戦のランクがA A A +なのは、ちよつと理由があつて、
その話は次回って事で・・・」

ク「守護騎士も卒倒しかける体術最強か・・・チートだな・・・」

は「初対面の時は、守護騎士が本気で怖がつとつたしなあ・・・
ヴィータなんかは半分泣いとつた・・・」

玄「のんびり会話しているところ、悪いのだが・・・」

作「はい？」

玄「早急に逃げた方がいいぞ？」

リ「・・・覚悟はいいですね？」

な「リ、リイナちゃん！？」

フェ「う、嘘！？　だって、さっきシグナム達に取り押さえて・・・

」

シ「グウ・・・これほどの力を隠し持っていたとは・・・！」

ヴィ「あいつ・・・ホントにデスクワーク専門か・・・！？」

シャ「な、なんて重い一撃なの・・・！？」

ザ「障壁が・・・ただの腕力で破られるとは・・・！」

ア「うつそお！？」

エ「こつちも、ただ者じゃなかった！？」

ク「もう、なんでもありだな、この小説・・・」

第八話 「壊れた過去と現在と」(前書き)

2000ユニーク突破！ ありがとうございます！

この駄文に付き合って下さってる皆様のおかげです！！

現在、お気に入り登録者を募集中です。

ご協力下されば幸いです。

第八話 「壊れた過去と現在と」

現在、クロノ、エイミィ、ユーノの三人は本局のとある一室を訪れていた。大きなソファアーに並んで座る三人の目の前には、猫耳と尻尾をピクピクと動かしている二人の女性が座っている。ショートカットと長髪の違いはあるが、顔付きは実によく似ていた。

「エイミィさん、この人達って・・・？」

「ああ、クロノ君の魔法と近接戦闘のお師匠様達。

魔法教育担当のリーゼアリアと、近接戦闘教育担当のリーゼロツテ。

グレアム提督の双子の使い魔で、見ての通り、素体は猫ね」

右手で紅茶を飲んでいる長髪がアリア、左手で飲んでいるショートカットがロツテである。小声でのエイミィの紹介に、フェレットの姿の時に追い回された過去の経験から猫が弱冠苦手なユーノは顔をひくつかせる。

「二人に駐屯地方面に来てもらえると、心強いんだが・・・」

「武装局員の新人教育メニューが残っててね・・・」

「そっちに出ずっぱりにはなれないのよ・・・」

愛弟子の助けになれないことに、彼女達なりに申し訳なく思っているのだろう。「悪いね」と、短く謝罪を述べる。しかし、クロノはその事に対して特に気にしている様子も無く、本題を切り出す。

「今回の頼みというのは、ユー^{かれ}ノの無限書庫での調べ物に協力してやって欲しいんだ」

クロノが視線でユーノを指したその瞬間、灰色の混じった茶髪の上に鎮座する猫耳がピクリと動き、双子猫の好奇心旺盛な視線がネスミへと集中した。

その頃、リンディは駐屯しているマンションの一室で本局にいるレティとモニター越しに会話していた。手元は忙しくなくコンソールを連打している。

こっちのデータは以上よ。お役に立ってる？

「ええ、ありがとう。助かるわ」

話の内容から、どうやら今回の事件についての資料を回してもらっていたようだ、その口調が世間話でもするかのように軽やかなため、声だけを聞けば、とても仕事中には見えない。

ねえ、今日は本局に顔出すんでしょ？

「ええ、アースラの件でね」

時間合わせて、食事でもない？ あの子の話とか聞きたいし・

同期で入局した彼女達は、昔から仲が良く、食事を共にすることも多い。現在では、双方共に重要な役職に就いているため暇な時間もそうそう無いが、それでも友好を深めるために今回のような機会は有効に使っているのだ。

「あの子って・・・かおるさんの事？」

彼じゃなくて、ほら、あなたが預かってる・・・養子にしたいって言ってた子

「ああ！ フェイトさんね！」

そうそう、フェイトちゃん。元気にしてる？

彼女はフェイトが囑託魔導師の資格を取得した際にその試験官を務めていたため、その後の様子が気になるのであるう。

「うん。事件に付き合わせちゃって、ちょっと申し訳ないんだけど、

仲良しの友達と一緒にだし、なんだか楽しそうにやってるわ」

戦いの最中に親友が見せた柔らかな微笑みに、レティは安心したように、
「そう」と、短く、それでいて満足げに言葉を返した。

「ただ、かおるさんは今日はお休みしてるみたいだけど」

・ ・ ・ また本局に来てるの？

彼の頭脳は並大抵のモノではない。それこそ下手な学者よりもよほど多くの知識を有している。『一般の子供達』と共に『小学校』に通っている事自体が不自然な事なのだ。それを考えると、彼にとつて数日の欠席など取るに足らないモノである。直に切迫していくであろう状況を予想して、管理局の仕事に集中することにしたのだらう。必要以上に業務に対して生真面目な少年だけに、あり得るとふんでいたレティの予想だったが、リンディは無言で首を振り否定した。

「海鳴^{こうち}で搜索ですって。例の、黒髪の少年の・・・」

・ ・ ・ 確か、『クロ』君・・・だったっけ？

一瞬、二人の間に沈黙が下りる。

かおる君の事だから、何か考えがあるんだろうけど、正直、大丈夫なの？

手がかりも何もないんでしょ？

名前にしたって、たぶん偽名だろうし、向こうが動くのを待った方が・・・

「私もそう思ったんだけど・・・」

――話は昨夜のミーティング後にさかのぼる――

クロノがエイミィと一緒にユーノを本局に引きずっていった後、時間も遅いため、なのはは自宅に帰り、ハラウン家リビングに残っているのは、かおる、フェイト、アルフ、リイナ、リンディの五人となっていた。

「リイナさん、申し訳ないんですが、

明日からしばらくボクの捜査を手伝ってくれませんか？」

そんなかおるの何気ない言葉が事の始まりだった。当然のことながら、リイナはその申し出を快く受ける。

「そーゆー面倒なことは、下っ端に任せりゃいいんじゃない？」

が、そこでアルフが反論する。言い方はお世辞にも良いとは言えないが、その内容はもつともであった。アースラスタッフに加えて本局の武装隊を借りられた今、彼が現場で捜査をする必要は限りなく

皆無だ。と言うか、かおる自身に現場指揮の一部として大量の事務処理業務が回されているため、普通は捜査に加わるなど出来ないはずである。

「いえ、大人だと、怪しまれる可能性がありますから」

さも当然とばかりにかおるは答えるが、皆は一樣に首をひねる。かおるも顔が彼等に知られた以上、むしろ彼の方が裏方のメンバーよりも警戒されるはずなのだ。

「もう夜も遅いですから、説明は後日にでも・・・」

そう言い残して、かおるは静かに退室し、リイナも後に続く。残った三人は、しばらく頭上に疑問符を乱舞させていた。

・・・ごめんなさい。なんだか頭がこんがらがってきたわ・・・

モニターの向こう側で眉間にしわを寄せて苦悩している親友に、リンディは苦笑するしかできなかった。

「大丈夫よ。私も似たようなモノだから・・・」

リンディの言葉は気休めなどではなく、厳然たる事実なのだから始

末が悪い。結局のところ、彼女達に出来るのは、人智を越えた『天才』の判断を信じ、待つ事だけであつた。

管理局の管理を受けている世界の書籍やデータが全て納められた超巨大データベース『無限書庫』。『世界の記憶を納めた場所』と形容されるこの施設は、その名の通り、無限に広がっていると錯覚するほどに巨大な空間だ。辺り一面に巨大な本棚とそれを埋め尽くさんばかりの書物が並ぶその場所に、三つの人影が浮かんでいる。

「・・・とは言え、中身のほぼ全てが未整理のまま・・・」
「ここでの探し物は大変だよ？」

本来ならば、チームを組んで年単位で資料を探す空間なのだ。急務を要するこの状況で、たった一人の少年にそれを任せるなど、いかに愛弟子の発案兼頼みであるとは言え、アリアとロッテは先行き不安であつた。

「過去の歴史の調査は、ボクの一族の本業です。
この一点に関しては、かおるよりも優れていると自負しています」

「わ、私もロッテも仕事があるし、ずつつて訳にはいかないけど・・・」

「・・・可愛い愛弟子の頼みだし、なるべく手伝うよ・・・」

スクライア一族は、古代の遺跡発掘などを生業にしており、半年前の事件の中心であつたロストログア『ジュエルシード』も、彼が見つけ出した物だ。この手の資料の収集は、かおるよりも彼のほうが適任である。なぜか黒い笑みを浮かべて微妙に胸を張るユーノに弱

冠退きつつ、アリアとロッテがそれぞれに協力を約束する。暗いオ
ーラをうつすらとにじませている目の前の少年に、少しばかりの不
安を抱えながら。

海鳴市にそびえ立つ高層マンションの一室、ハラウン家のキッ
チンに住人とその友人が集まっていた。どうやら夕食の準備をして
いるようだ。

「艦長、もう本局に出かけちゃった？」

「うん。アースラの武装追加がすんだから、試験航行だつて」

「武装つてーと・・・『アルカンシエル』か・・・」

和気藹々としたキッチンでの何気ない会話内容に、エイミイは眉間
にしわを作った。「最後まで使わずにすめばいいんだけど・・・」
と、ため息混じりに漏らす。今回追加される武装は、よほど物騒な
代物のようだ。

「戻るまでは、エイミイさんが指揮代行だそうですよ」

「責任重だ〜い」

「たははは・・・そりゃまた物騒な話だ」

心配そうなのは報告に、肉をほおばっているアルフがからかい
ながらエイミイを横目で見る。エイミイは持ち前の空元気で笑って
その場を乗り切ろうとするが、ふと思い出した。

「・・・つて、あれ？ かおる君は？」

そつ、本来ならば、リンディが不在の今、現場の指揮を任されるの

はかおるのはずなのだ。部隊指揮において、彼の足下にも及ばないと確信している彼女には、リンディがかおるではなく自分を指揮官代行とした事が不思議に思えたのである。

故に、エイミイはかおるの名を出さずにはいられなかった。だがしかし、今この場で『それ』を口にする事は竜の逆鱗に触れるのと同じ義であつた。

「かおるちゃんなら、今頃リイナちゃんとイチャイチャしてると
思いますよ?」

今までに無い極上スマイルの笑顔で、なのはが質問に答える。しかし、付き合いの長い者には分かる。顔は笑っているが、心は決して笑っていない。むしろ、この上ないほど、はらわたが煮えくりかえっている
と。

「ちよっ・何々!? 何があつたの!？」

感情と表情が食い違っている。言ってみれば、それは超危険信号だ。これほどまでの威圧感を、普段温厚な彼女が発するなど、ただ事ではない。冷や汗をたらたらと流しながら、エイミイは半泣き状態のフェイトに小声で尋ねる。

「そ、それが、その・・・」

「かおるがリイナと一緒に、あの能面野郎の情報を探してるのさ。
なのはに何の連絡もせずに学校休んだから、
すっかりヤキモチ焼いちゃってねえ・・・」

恐怖のあまりにテンパっているフェイトに変わり、アルフがため息混じりに事のいきさつを説明する。「こっちは、いい迷惑だよ」と、肉をほおばりながら子犬が愚痴をこぼす様は、なかなかシニール

だ。

「そ、そうなんだ・・・」

天使の皮を被った地獄の鬼の負のオーラを全身に浴びながら、エイミイは引きつった笑顔を浮かべる。原因である二人が、一秒でも早く帰ることを願わずにはいられなかった。

と、その時、けたたましく警報が室内に鳴り響いた。それは、敵の動きを察知した証のだが、今のエイミイには天の恵みのように感じられた。

一面を砂漠が覆い尽くす殺風景な世界の一角に、巨大な砂煙が天高く上っている。

「なるほど・・・ヴィータが苦戦するわけだ・・・」

荒い息を整えながら、シグナムはため息混じりに愚痴をこぼした。目の前でうごめく長く巨大な生物を睨みながら、使用済みのカートリッジをレヴァンティンが排出する。

硬い鎧に身を包んだ巨大なミミズのような魔法生物。今回、彼女が蒐集対象として選んだ個体だが、見た目通りの頑丈さと大きな凶体とは裏腹な敏捷性を前に、珍しくも苦戦していた。砂煙の中からミミズが大きな口を開けて鎌首をもたげてる。どうやら目の前の存在を『餌』と認識したようだ。シグナムもまた、愛剣を構えて突撃する。巨大生物と白刃の刃が激突すると思えたその刹那、何本もの黄金の大剣がミミズの鎧を貫いた。

苦しげなうめき声を上げる巨体の真上に、シグナムは小さな人影を見つける。ただの二回、刃を交えた金色の少女の姿を。

「ブレイク!!」

少女の声と同時に、巨体を貫いていた刃が雷撃を伴って一斉に爆ぜ、断末魔と共にミミズを物言わぬ肉塊へと変えた。

静寂を取り戻した砂漠の世界で、白と黒、対照的な衣装を身に纏った二人が睨み合う。

「手助けの礼は言わんぞ、テストロッサ」

「お邪魔、でしたか・・・？」

シグナムの鋭い眼差しに、一瞬怯む。真剣勝負に水を差したことに對して、引け目を感じているのだらう。おそろおそろといった感じで尋ねた。

「・・・蒐集対象を潰されてしまった・・・」

「まあ・・・悪い人の邪魔が、私の仕事ですし・・・」

死んでしまえば、魔力を蒐集することは出来ない。彼女の憤りは、むしろそこにあった。

「・・・そうか・・・。悪人だったな・・・私は・・・」

フェイトの一言を心の中で反芻し、『あの日』の少年の言葉を思い出す。すでに騎士としての誇りは捨てた。自分達が犯罪者だという自覚もある。しかし、それでも譲れない思いがある。剣を構えるその目に宿しているのは、ただ一つの決意の炎だった。

その頃、本局のとある執務室で、アースラの試験航行を済ませたリンディは顔なじみとお茶をしていた。

「久しぶりだね、リンディ提督」

柔らかな微笑みと口ひげが印象的な好々爺。ギル・グレアム提督である。

「闇の書の事件・・・進展はどうだい・・・？」

「なかなか難しいですが、上手くやります」

お茶を飲みながらの会話にしては、いささか暗いが、本人達に氣にした様子は無い。紅茶を口に運ぶ仕草は、普段と何ら変わらない。

「君は優秀だ。私の時のような失態はしないと信じているよ」

一瞬、グレアム提督の表情が一層暗く沈んだ。

彼もかつて、闇の書への対策を講じた一人であった。しかし、結果は失敗。部下であり友人でもあった男を失ってしまったのだ。それが、リンディの伴侶であり、クロノの父、クライド・ハラウン提督である。

「夫の葬儀の時に申し上げましたが、あれは提督の失態ではありません。」

あんな事態を予測できる指揮官なんて、いませんから・・・」

リンディはティーカップを置き、微笑みながら『事実』を述べる。

『アレ』からすでに十一年。自分達は前へと進んでいる。そう、自分と目の前の上司に言い聞かせるように。

照りつける灼熱の太陽と無限に広がる砂漠が支配する無人の世界で、大小二つの人影がそれぞれの相棒を手に対峙していた。砂の大地の上を走る一陣の風が、金色と桃色の長髪を巻き上げる。

「預けた決着は、できれば今しばらく先にしたいが、速度はお前の方が上だ・・・」

逃げられないのなら、戦うしかないな」

「はい。私も、そのつもりで来ました！」

互いの意思を確認し合い、ほとんど同時に砂を蹴り上げる。凄まじい剣速で振るわれた漆黒の戦斧と白刃の大剣が激突し、遮蔽物の無い晴れ渡った大空に火花を散らしながら重い金属音が木霊した。

「はあああああああああ！！！！」

「あああああああああ！！！！」

一瞬の拮抗の後、互いに相手を弾き飛ばしてさらに激突する。刹那、フェイトの姿がかき消え、次の瞬間にはシグナムのすぐ後ろに斧を振り上げて迫っていた。

電光石火の神速に一瞬 驚愕するものの、シグナムはその鋭い一閃を愛剣の鞘で受け止め、すかさず踏み込んで切り付ける。フェイトは咄嗟に戦斧の柄で受け流すが、力で押されて数十メートル後退した。

「サンダー・・・」

「飛竜・・・」

黒い手袋に包まれた掌にバチバチと放電を繰り返す光球が現れ、上

段に構えた大剣が渦巻く奔流と化した魔力と大気を従える。

「スマツシャー！！！！」

「一閃！！！！」

ほぼ同時。大気を振るわせる轟音と共に、雷鳴を伴う少女の砲撃と渦巻く炎を纏った連結刃の刺突が激突する。波と波がぶつかり合っ
てさらなる大波へとその姿を変えるように、金と紫の魔力光が螺旋状に天へと登り、灼熱の空へと砂塵を巻き上げた。

シグナムとフェイトが激闘繰り広げている場所から数十キロばかり離れた地点でもまた、彼女達の連れによる激しい空戦が繰り広げられていた。拳闘士を打ち合わせる屈強な男女、アルフとザフィーラである。

「アンタも使い魔・守護獣ならさあ・・・！」

「ご主人様の間違いを正そうとしなくていいのかよ！？」

「闇の書の蒐集は、我等の意思だ。」

主のためならば、自らの手を汚すこともいとわず・・・

お前もそうではないのか？ 我と同じ守護の獣よ・・・」

距離を取り、自分の想いをアルフはぶつける。彼等の通っているのは、かつて自分とフェイトが通った道だ。あの時、自分のしている事が『間違っている』と確信しながらも、主人であるフェイトを止めることが出来なかった。その事は、今でも『後悔』として彼女の心に残っているのだ。

「・・・ッ！ そうだよ・・・だけど、ただどさあ・・・！！」

『主のため』に犯罪に手を染める彼等を、かつての自分と重ね合わせているのだろ。彼女の表情は、普段のひょうひょうとした態度からは想像も出来ないほどに、悲しく歪んでいた。

「あの方は、我等を受け入れ、共に居たいと言って下された・・・。

やっと出会えた最高の主に、我等は忠義を尽くしたい！

例えそれが、望まれぬ形であつたとしてもだ・・・！」

拳を強く握りしめ、ザフィーラは吠える。『あの日』に立てた誓いを、確認するかのように。二人の守護の獣が、それぞれの決意と想いを胸に、再び空を駆け、拳を交えた。

シグナム達が戦っている次元世界から少しばかり離れた地点にある世界。無人の世界であるという点では変わらないが、こちらは一面を砂漠ではなく森林が埋め尽くしている。その上空を赤い閃光が高速で飛翔していた。

シグナム達が！？

うん。砂漠で交戦してるの・・・。テストロッサちゃんと、その守護獣のコと・・・。

長引くとまずいな・・・。助けに行くか・・・。ッ！？

シヤマルからの報告を聞き、ヴィータは思考を巡らす。しかし、それも長くは続かなかった。

急に制止し、前方を睨み付ける。

ヴィータちゃん！？

クソオ・・・こつちにも来やがった・・・！ 例の白服・・・

「高町・・・ナントカツ！！」

仲間との通信を切り、自分の行く手に立ちふさがる少女の明らかに間違った名前を叫ぶ。名字はともかく名前の方は、結局覚えることは出来なかったようだ。空中にもかかわらず、思いつきなのはがズッコケている。

「『なのは』だってばあ！ 『な・の・は』ッ！！」

両手を上下にブンブンと振り回して文句を言う姿は、はたから見るとなかなか可愛嬌があるが、本人にしてみればマジメに大問題であろう。珍しく張り上げた彼女の抗議の声が、無人の世界に虚しく響き渡る。白と赤の少女の間に、形容しがたい沈黙が流れた。

見渡す限りの砂以外は何も無い殺風景な世界に、美しい黒髪とそれを首の後ろで束ねている銀色の布をなびかせながら佇む少年がいた。真剣のように鋭く光る眼差しは、遙か向こう、少女と騎士の激しい戦闘が行われているであろう場所を見つめている。

「助太刀には、行かないんですね・・・」

背後から、砂を踏む音と共に澄んだ声が投げかけられた。事実上、背後を取られた危機的状况なのだが、少年に焦りの色はない。

「・・・それは、いささか無粋というものだろう・・・」

後ろを振り返ることなく、ただ前を見据えて答える。必要が無いからだ。その声と気配、『自分の背後を取った』という事実だけで、人物の特定には十分だった。

「そして、その言葉、そのまま君に返そう・・・春風かおる・・・」

ただ一人、自分と互角以上に渡り合い、一撃の下に『叩き落とした』張本人。自分の計画の『最後の力ギ』を握っている少年が、砂を巻き上げながら吹きすさぶ風に藍色の羽織をなびかせていた。

「ボクも、そういう事は頑なに止められてまして・・・」

かおるは苦笑しながら、黒髪の流れる背中を見据えて答える。

「でも、大丈夫です。フェイトさんは強いですから」

「奇遇だな。私の家族も相当強いぞ？」

二人の少年は、決して目を合わせることなく、会話を続ける。その間を、一陣の風が吹き荒れ、砂塵を巻き上げた。

刹那、二人の姿がかき消え、金属同士が激突したかのような鈍い音が木霊する。立ちこめていた砂埃が晴れると、そこには手刀と薙刀で激しい鏝迫り合いをしている黒と青の少年達の姿があった。

「そろそろ、本気を出した方がいいのではないかね？ 管理局の天才よ！」

玄斗は叫ぶと同時に、力任せにかおるを弾き飛ばす。袴を模した青いバリアジャケットが風にあおられ、激しく揺れた。

「・・・ボクは、真面目にやっているつもりですが？」

「とぼけても無駄だ・・・。君のデバイスは、一度も形状を変えていないだろう？」

察しの通り、かおるの相棒・フェザーハートには、なのはやフェイトと同様に、三つの形態が設定されている。しかし、今まで彼はどのような状況においても、第一の形態『三日月』クレセントモード以外を使用したことがない。『手を抜いている』と取られても仕方がなかった。

「でしたら、あなたの方こそ力を隠すのをやめて下さい」

今度はかおるが、ため息混じりに要求する。実際、彼がデバイスの形態を変化させなかったのは、力の温存のためでもあるが、第一に『その必要が無い』と判断していたからだ。

「あなたが今までに使った魔法は、防御、飛行、身体強化だけ・・・。

ただの一度も、『攻撃魔法』を使用したことがない・・・！」

玄斗は『攻撃』はしてくるものの、それはあくまで『身体強化による打撃』のみであり、シグナムやヴィータのような純粋な『攻撃魔法』は一度として使ったことが無かった。かおるはそれを『手加減』と見ていたが、真実はそうではない。

「・・・『使わない』のではなく、『使えない』のだよ・・・」

意外な言葉が、玄斗の口から飛び出てきた。かおるは一瞬、呆気にとられる。が、合点がいった。そういう事ならば、一見無茶に見える先日の特攻にも納得出来る。彼には、接近戦以外の選択肢が無い

のだ。だからこそ、無理にでも敵の懷に潜り込む必要があった。もつとも、並外れた体術と防御の腕が無ければ、成立しない戦法ではあるのだが。

「だが、あまり『闇の書の主』を見くびらないことだ」

そんな彼の呟きとほぼ同時に、なんの脈絡もなく巨大なミミズが砂の下から現れ、玄斗に鎌首をもたげて背後から襲い掛かってきた。

げっかあっさい
<月華圧碎>

少年の腕に光る籠手の澄んだ声が響いた次の瞬間、巨大な銀色の球体がミミズの頭部目掛けて落下し、硬い鎧に覆われたそれを無残に押し潰した。巨大生物を一撃で物言わぬ肉塊へと変えた玉を見て、かおるは言葉を失った。自分の目の前で、ミミズの命を奪った魔法は、紛れもない『防御魔法』なのだから。

「『最強の盾』は、使い方を変えれば『最強の矛』にもなり得るのだから・・・」

身を守るための『防御』で敵を倒すなど、見たことも聞いたことも無い。文字通り、『攻防一体』の魔法である。かおるは改めて、目の前で肉塊を背にして立つ少年に恐怖した。

密林の上空で、二人の少女が相対していた。

「ヴィータちゃん・・・やっぱり、お話聞かせてもらうわけにはいかない？」

もしかしたらだけど、手伝えることとか、あるかもしれないよ？」

戦う意思が無い事を、伝えようとしているのだろう。白服の少女はバリアジャケットは展開しているが、武器は待機形態である宝玉のまま、首に掛けている。

「うるせエツ！ 管理局の人間の言うことなんか信用できるか！」

しかし、赤い少女は敵意を全面に出し、とてもではないが、まともな会話や説得が出来る雰囲気には見えない。

「私、管理局の人じゃないもの……。民間協力者……。」

それでも、なのはは優しく語りかける。両手を広げ、完全な無防備になることで、ヴィータの警戒心を解こうとしているのだ。彼女の柔らかな微笑みが、はやてと重なって見える。

（・・・闇の書の蒐集は、魔導師一人につき、一回……。)

つまり、コイツを倒しても、ページにはなんねーんだよね……

だが、心が揺れたのは、ほんの一瞬だった。自分達の目的を思い出し、冷静に思考を巡らす。『後ろ盾』の無い自分達は、極力、カートリッジの無駄遣いは避けたいところだ。今は、目の前の少女の相手をしている余裕は無い。

「ブッ倒すのは、また今度だッ！」

決断の叫びとほぼ同時、小さな掌に、赤く輝く球体を生み出し、

「吠えろ！ グラーフアイゼン！！」

<アイゼンゲホイル>

その手に握った鉄槌で、力の限りに殴打する。刹那、耳をつんざくような轟音と衝撃波が、大気と森林を大きく揺らした。あまりの音量に、なのははほぼ無意識に目と耳をふさぎ、嵐が過ぎるのを待つ。その隙にヴィータは大きく距離を取り、次元転移魔法を発動しようとした。と、その時、信じられない光景が目飛び込んできた。

「撃つ気か！？ あんな遠くから！？」

遙か彼方の空中で、レイジングハートを砲撃用の第二形態『バスターモード』に切り替え、超長距離砲撃を行おうとしているなのはの姿が。すでに魔力の充填は完了しているようで、デバイスの切っ先に展開された魔力球は、はち切れんばかりに巨大なそのエネルギーを解き放つ瞬間を、今か今かと待ちわびているかのようだった。

<デイベインバスター・エクステンション>

「デイベイイイイイン・・・バスターアアアアア！！」

美しい電子音と澄んだ声が木霊し、滞空していた魔力がその力を解放する。太く巨大な桜色の魔力の奔流が、その威力を減らすことなく一直線にヴィータへと迫り、爆発音と共に直撃した。

「・・・ちよつと、やり過ぎちゃったかな・・・？」

<いいのではないでしょうか>

予想以上の自らの砲撃の威力に、立ちこめる煙を眺めて弱冠不安に

なるが、レイジングハートの言葉で少しばかりの安心感を得る。例の黒髪の少年ほどではないが、彼女は防御の上手い騎士だ。大事には至っていないだろう、と確信する。しかして、煙が徐々に晴れ、赤毛の少女の姿が見えるようになると、予想外の状況になのはの思考が一瞬止まった。

先日、ユーノを蹴り飛ばした仮面の男が、自分と彼女の間に割って入っていたのだ。胸の前に斜めに突き出された右腕から少量の煙が風に揺れているのを見ると、どうやらアノ砲撃を片手で受け止めたらしい。考えられなかった。なのはの砲撃魔法の威力と射程は、間違はなくメンバー中最強である。その全力の一撃を射線に割り込みつつ咄嗟に受け止めるなど、出来る者はこの次元世界にそうそういない。せいぜいで、あの長髪の少年くらいだろう。

焦燥にかられながらも落ち着こうと杖を構えようとしたその刹那、なのはは周囲の異変を感じ取った。見ると、自分を取り巻くように群青色のリングが発生していた。逃げようとするが、時すでに遅く、一瞬のうちにリングが引き絞られ、拘束されてしまった。

「バインド!? あんな遠くから、一瞬で!？」

細い魔力の輪が華奢な身体に幾重にもきつく食い込み、想像を絶する圧迫感を少女に与える。苦痛に顔を歪めながらも、なんとか拘束を解くが、後の祭りだった。すでに、仮面の男もヴィータもそこにはおらず、広大な密林の上空には、純白のロングスカートが風を受けてなびいているだけだった。

乾いた砂の上に、大粒の汗が一つ二つとしたり落ちる。青い袴に包まれた片膝が、ガクリと地に突いた。

（クツ・・・まさか、これほどとは・・・！）

すでに肩で息をし、ゼエ、ハア、と荒い呼吸を繰り返すかおるの目の前には、巨大な砂の壁がそびえ立っていた。

「まだ、力を出し惜しみする気かね？」

その壁を背に空中に悠然と立つ少年は、右手に薙刀を握る少年を文字通り見下ろしていた。初めて出会ったあの時と同じ、なんの感情も見せない冷めた瞳で。

（飛行魔法を、こんな形で使うなんて・・・！）

正直かおるは、彼の能力には感心を通り越してあきれてしまっていた。極一部の身体障害者がまれに超人的な感覚や能力を身に付けるように、目の前の少年は『攻撃魔法』が使えない代わりに、その他の能力が明らかに人間離れしているのだ。異常としか思えない防御の堅さと圧倒的な近接戦闘の腕、そして極めつけは、『無機物操作』とも取れる

『飛行魔法の応用』——目の前に立ちただかる砂の壁である。まるで少年の手足のごとく自由自在に動き回る砂の嵐に、かおるはいよいよに弄ばれていた。厳密には『補助魔法』なのだが、とんでもない。もはやこれは『中・遠距離攻撃魔法』と言っても差し支えないモノである。

「・・・仕方ない・・・フェザーハート・・・！」
<イエス、マスター。爆風>

出来れば力は後々まで温存させておきたかったが、これ以上は危険と判断し、第二形態の機動をデバイスに命じた。カートリッジが一

発弾き出され、薙刀がその姿を見る間に変えていく。長かった柄は、その長さ太さをさらに増し、三日月のようだった片刃の刀身は、かかるの身体がスッポリと隠れるほどに巨大でぶ厚い両刃の刃へと変貌した。

「・・・ほう・・・」

刀身だけでも優に二メートルはあろうかという、あまりに巨大な矛を肩に担ぐその勇ましい姿に、玄斗は感嘆の声を漏らす。

すると、かかるはおもむろに矛を空に掲げ、片手首を軸にしてその巨体を回転させ始める。重く鋭い風切り音が響き渡り、一つ回転するごとに砂塵を巻き上げ、当たりの空気も彼を中心に回転を始めた。そして、回転している大矛の真上に青く輝く巨大な魔力弾が生成される。

<ブラストバレット・ファットマン>

デバイスの澄んだ機械音と共に、矛の柄をつかんで大きく振りかぶり、そのまま勢いよく振り下ろす。魔力弾は一直線に玄斗へ向かって突き進み、彼を覆うように展開された白銀に輝く障壁に遮られた。先日の『爆裂弾』の威力強化版と見た玄斗は、『砂』ではなく『障壁』による防御を選択したのだ。結果から言えば、彼の読みは当たっていた。しかし、読み違えていた。

ドゴオオオオオオオオオン！！！！

青と銀の魔力が接触した瞬間、かつて無い轟音と爆風がその場の全てを閃光と共に吹き飛ばした。直径数キロにも及ぶ爆炎と砂煙が、その強大な破壊力を物語る。

「・・・凄まじいな・・・」

自分の背後にそびえ立っていた砂の壁を爆風によって全て吹き飛ばされ、切れた頬から流れ出る血をぬぐいながら、玄斗は素直な感想を呟く。完全に読み違えていた。これほどまでに威力が跳ね上がるなど、思いもしていなかった。『爆発』という性質上、効果は瞬間的な物だが、その威力はなのはの『スターライトブレイカー』と大差ない。身体や騎士服が所々切れているにもかかわらず、展開した障壁が未だに健在なところを見ると、先程の魔法には『ドラフト』が付与されていたのだろう。

「・・・なるほど、接近戦でなければ、威力は大幅に落ちる、という訳か・・・」

大気と大地を揺るがす大規模な爆発だったわりに、防御を抜けてきた衝撃波の威力が弱いことから、玄斗が推測を口にする。ハッキリと仕組みが分かったわけではないが、現状からとりあえずそれだけは言えた。

「間髪入れずに追い打ちを掛ける判断能力と戦術・・・その年ではないものだ」

素速く視線を自らの頭上へと移す。そこには、青い魔力を付与した巨大な刃を振り下ろさんとしている、かおるの姿があった。威力の爆発的な上昇を旨とした形態での一撃で、勝負を決しようとしているのだ。常人では視認することすら出来ない高速の斬撃が、玄斗に迫る。『ドラフト』が付与されたそれは、例え防御しようとも、確実に敵の意識を刈り取るだろう。

だがしかし、次の瞬間にそこにあったのは、予想外の光景だった。大矛は虚しく空を切り、かおるの鳩尾には銀色の籠手が突き刺さっ

ていたのだ。

「どのような裏技か知らんが、躲してしまえば、ただの斬撃だ」

肺から空気が一気に抜け、苦悶の表情を露わにするかおるの耳元で、生徒の間違いを指摘する教師のような口調で呟く。至極明快な解答だった。『ドラフト』はその性質上、障壁に『触れなければ』その威力を発揮できないのだ。しかしながら、そのような猿でも分かる事を『天才^{かおる}』が考慮しないはずもない。万が一にも回避されないように、例えば玄人^{くろひと}でも『防御』しか選択肢の取りようのない、絶妙な距離とタイミングで必倒の一撃を放ったのだ。それを躲され、逆に拳を入れられるなど、信じられなかった。

打撃による痛みと一時的な呼吸困難によって薄れていく意識の中で、玄斗の反則的な戦闘能力をかおるは否応なく再認識させられることとなった。

第八話 「壊れた過去と現在と」 (後書き)

作者「と言うわけで第八話でした」

クロノ「今回は意外と早かったな」

玄斗「寿命が近いので、早めに完結させようと思ったそうだ」

なのは「ええッ!？」

フェイト「大丈夫なんですか!？」

作「ンなわけあるかあッ!！」

かおる「あ、もしもし、ボクです。おしよう様、ついに作者さんが・
・・」

作「人の話を聞け!！」

玄「冗談はさておき、こういった風の吹き回しかね？」

エイミイ「じよ、冗談だったんだ・・・」

アルフ「全然笑えないけどね・・・」

玄「別段、笑いを取ろうと思ったわけではない。ただの気まぐれだ」

作「気まぐれで人を殺すんじゃない!！」

玄「あきれてモノも言えんな」

ク「どーりで更新速度が遅いわけだ・・・」

エ「ところで、話はガラツと変わるけど、クロ君のデバイスは形態変化しないの？」

作「形態は変わらないけど、性能は大きく変わるぞ？」

玄「身体の強化に重点を置いた『襲月^{しゅうげつ}』、機動力に重点を置いた『駿月^{しゅんげつ}』、

防御に全ての力を注いだ『月華^{げっか}』の三つだ」

ア「でもさ、今まで『月華^{げっか}』しか使ってないじゃん」

か「そうでもありません。

相手に近づく際には速度が、必殺のカウンターの際には一撃の重さが

それぞれ飛躍的に上昇していますから・・・」

ク「要するに、名前そのものを口に出してないだけで、使ってはい
るわけか・・・」

作「はたから見たら、ただの打撃と速度の上昇だけだからな。

いちいち名前を言うのもなあ、って感じた」

な「砂を操ってたアレは、技じゃないんですか？」

玄「実に難しいところなのだが、厳密には『飛行魔法の応用』だからね。

『技』とは言えないのだよ」

フェ「でも、すごいですよ。広範囲攻撃として使えるんじゃないか、
作「確かにそうなんだけど、あまりに大きい物体は重くて操れないから、

砂とか水とか、操ることの出来る物体が無ければ使えないんだ」

エ「でもさ、名前がないのは後々面倒じゃない？」

玄「では、『操月^{そうげつ}』とでも名付けよう」

ア「・・・安直だねえ・・・」

<一口メモ>操月^{そうげつ}：ある程度の質量の物質を浮遊させる魔法。

単体の質量が大きすぎる場合は持ち上げることが出来ず、

砂地や水場など、持ち上げることが可能

な物体が

存在する空間でしか使用できないため、

使いどころが難しい。

理論上では生物の身体も操ることが可能

だが、

極めて複雑な演算を必要とするため、あ

まり多用できない。

ク「そうになると、かおるの方も色々としにくいかな？」

ただの誘導操作弾が広範囲攻撃になつてぞ・・・？」

か「機動力と小回りのきく斬撃を主とした『クレセントモード』に

対して、

『ブラストモード』は魔法の出力と刀身の重量を乗せた重い斬撃に重点を置いてますから」

作「ちなみに、『ファットマン』ってのは、1945年に長崎に落とされた原爆の名前だ」

な「えええええ！？」

フェ「そんなにすごいですか！？」

作「一瞬とはいえ、スターライトブレイカーなみの威力が出せるかな。

気持的にそんなくらいの破壊力ってことだ」

エ「平和主義にケンカ売ってるとしか思えないね・・・」

ア「・・・何かしでかす前に、警察に突き出した方がいいんじゃない？」

第九話 「悲しい決意、勇気の選択」(前書き)

ありがとうございます！ とくに一万アクセス突破しました！
ユニークも三千いきそうです！

これも全ては広い心を持った読者さんのおかげです！
感想やお気に入り登録は常時募集しています！

第九話 「悲しい決意、勇気の選択」

アースラの薄暗いミーティングルームに、七つの人影があった。広い部屋の中央に鎮座する大きな長方形の机を囲むようにして席に着いている。

「フェイトさんは、リンカーコアに酷いダメージを受けてるけど、命に別状はないそうよ」

上座に座るリンディが優しい笑みを浮かべ、医務室で未だ眠っているフェイトの現状を告げる。なのはの時と同様に、闇の書による蒐集を受けてしまったのだ。

「アースラの稼働中で助かりました。なのはの時以上に、救援が早かったですから・・・」

おかげで深刻な事態にならずにすんだと、かおるも僅かに笑顔を作る。

「出勤してしばらくして、駐屯所の管制システムが、クラッキングであらかたダウンしちゃって・・・」

それで、指揮や連絡が取れなくて・・・」

「責任は自分にある」と自責の念に駆られ、かおるの向かい側に腰を下ろしているエイミイが肩を落とす。

「ンなこたないよ。」

エイミイがすぐシステムを復帰させたから、アースラに連絡が取れたんだし、

仮面の男の映像だつてちゃんと残せた」

そんな彼女を励ましながら、右隣に座るリーゼロッテがコンソールを操作して一つの画像を展開する。そこには、フェイトの胸元を左腕で串刺し、その手に金色に輝くリンカーコアを握る仮面の姿が映し出されていた。

フェイトは、シグナムとの決闘に敗れたわけではない。一騎打ちの最中に突如として割り込んできた仮面の男に、背後からの不意打ちという形で襲撃されてしまったのだ。結局、勝負は行方はうやむやとなつてしまった。

「でも、おかしいわね。

駐屯所むすうの機材は、管理局で使っているモノと同じシステムなのに、

それを外部からクラッキングできる人間なんて、いるものなのかしら……」

リンディがあごに手を当てながら、こちらから見て右側の席に座るかおるを横目で見る。

「？ あの、ボクの顔に何か付いてます？」

「あら、ごめんなさい。そうじゃなくてね……」

かおるさんだったら、それくらいは簡単にできるかなあ……
つて思っただけ」

不思議そうに小首をかしげるかおるに、リンディが素直な意見を述べる。その場の全員が、それぞれ個性的な納得の表情を見せた。

「当然です。かおるさんにかかれば、

管理局の安っぽいセキュリティなど、紙くず同然ですから」

かおるの左隣に座っているリイナが、腕を組みながら小さな胸を誇らしげに張った。

「・・・それって、自信満々に言うことなのかな？」

「・・・アンター応、管理局員なんだろ・・・？」

その態度に、かおるの右隣のなのはとエイミイの左隣で背もたれに体重を預けているアルフが、静かにツツコミを入れる。実際、胸を張っている場合ではない。管理局のセキュリティは、断じて安っぽくも紙くずでもないのだ。何重にも組まれたセキュリティシステムを素通りし、外部から侵入されたとなると、よほど大規模な組織が、敵側にかおると同等の頭脳の持ち主がいることになる。

「・・・『内部犯』という可能性は、考えられないでしょうか・・・」

「」

「・・・裏切り者がいる、という事かしら・・・？」

机に肘を立て、両手の指を組んだ姿勢で、かおるが自らの見解を静かに告げる。メンバーが一瞬どよめくが、あり得ないことではない。むしろ、内部からならば、ある程度の知識さえあればシステムへの侵入はそうそう難しい事ではなく、『外部犯』よりは遙かに現実的だ。

「どちらにしても、問題はその目的です」

かおるがコンソールを連打し、空中に展開されていた仮面の男の映像が再生される。

男がシグナムに、フェイトのリンカーコアの蒐集を促した直後、上空から急降下してきた玄斗が、その仮面目掛けて鋭い蹴りを入れて

きた。男は間一髪でそれを避け、綺麗に着地した玄斗と睨み合う。とてもではないが、仲間同士とは思えない張り詰めた空気が漂っている。

かおるはそこで映像を止め、この会議に参加しているメンバーをゆつくりと見渡した。

「この映像を見る限り、クロさんや守護騎士の方々が、

この仮面の人物と友好的な関係であるとは思えません」

「闇の書の主と守護者の関係者でないとすると、

管理局の人間であつてもそうでなくても、

そんな人物がなぜ彼等に協力するのか・・・確かに謎ね・・・」

珍しく重めの口調で切り出したかおるの意見に、リンディが同意する。現状から見て、仮面の男の目的は、『闇の書の完成』とするのが妥当だが、その動機が全く想像できないのだ。薄暗い室内に、重い沈黙が流れた。

翌日・早朝。八神家のリビングでは守護騎士達が集まり、静かな会議が行われていた。現在時刻は午前六時。長男は日課のジョギングで家を空け、長女は未だに夢の中である。

「助けてもらったって事で、いいのよね・・・？」

「少なくとも、仮面^{ヤッ}の男が闇の書の完成を望んでいるのは確かだ」

議題はもちろん、例の仮面の男についてである。シャマルの不安げな呟きに、シグナムが今までの経緯を総合して不動の事実を告げる。

「完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれない・・・」

「ありえねえ！　だつて、完成した闇の書は、マスター以外には使えねえじゃん！」

ザフィーラの言葉に、ヴィータがソファから立ち上がり反論する。その意見はもつともだ。闇の書が完成した時点で、その主は絶対的な『力』を得る。脅迫や洗脳は無意味であり、彼が闇の書の力を行使して『何か』を成すなど不可能なのだ。彼にはリスクはあつても利益が無い。

敵意を明らかにしている玄斗の指示により、昨日から家の周りにはセキュリティーが張り巡らされている。万が一にも、はやてに危害が加わると思えないが、不安は募るばかりだ。

「とにかく、用心に越したことはない。シャマルは出来るだけ、主はやてのそばに」

「知ってるぜ、そーゆーの。『割り箸をたたき割る』って言うんだろ？」

「・・・それを言うなら、『石橋を叩いて渡る』、だ」

将の決定に湖の騎士が静かに頷き、鉄槌の騎士のとんちんかな知識に守護獣がさりげないツッコミを入れる。長男不在の対策会議は、重苦しくも軽い空気のまま幕を閉じた。

アースラの一室。壁も天井も白一色で統一された簡素な医務室で、フェイトはうつすらと赤い瞳を開けた。少しぼやける視界には、こちらのをのぞき込んでいるリンディの姿が映る。

「フェイトさん、目、覚めた？」

「リンディ・・・提督・・・」

未だ体調は万全ではないらしく、上半身を起こそうとするものの、上手く力が入らずに苦勞する。リンディが手助けしてようやくだ。すると、視界の端に赤い長髪が映った。アルフだ。ベッドに体重を預け、腕を枕にした状態で眠りこけている。

「アルフも夕べから、ずっとあなたに付いてたから・・・」

リンカーコアの蒐集を受けてから、ほぼ一日眠ったままだったのだ。いくら命に別状が無くても、心配にはなる。なのはも残りがったが、家族が心配してはいけないと、昨日のうちに帰らせた。

「・・・私、やられちゃったんですね・・・」

「管理局のサーチャーでも確認出来なかった不意打ちよ？ 仕方ないわ」

あからさまに肩を落とすフェイトに、リンディが励ましの言葉を贈る。その手は自然に、少女の小さな手を包み込んでいた。

「・・・あ・・・」

「あ、ごめんなさい。ヤだった？」

頬を紅潮させて小さく反応するフェイトに、リンディは咄嗟にその手を離す。しかし、フェイトの口から漏れた言葉は、拒絶ではなく、一種の照れ隠しであった。

「少しうなされてたみたいだから・・・でも、良かったわ、あなたが無事で」

「・・・すみません。ありがとうございます」

今日は火曜日だが、学校にはすでに『家の都合』という形で欠席の連絡を入れている。フェイトにしばらく休むように勧め、おもむろに立ち上がった。

「何か、軽い食事と飲み物を持ってくるわ。何がいい？」

実質、夕べから何も口にしていないのだ。成長期の子供には、この事実は大問題である。

フェイトは顔を赤らめ断ろうとするが、リンディに押し切られ、結局は提督の『お任せ』になった。快く引き受け、リンディは医務室を後にする。多少ぎこちなさがあるものの、そのやりとりと雰囲気はまさしく――

「まるで、本当の母娘おやめみたいですね」

狭い通路に少年の声が響いた。リンディが後ろを振り向くと、そこには大量の資料を小脇に抱えているかおるの姿があった。

「ありがと。かおるさんもお見舞い？」

「あ、いえ、本局にあるボクの研究室をアースこうちラに移そうと思ひまして・・・」

「お見舞いは、その後に・・・」と、申し訳なさそうに後頭部をかきながらかおるは話す。

「・・・やつぱり、気になる？ 彼がなぜ、あなたから蒐集しなかったのか・・・」

「・・・え・・・？」

そんな少年の顔を見つめながら、唐突にリンディがそう切り出した。

呆気にとられた表情で、かおるもリンディを見つめ返す。

「あなたが友達よりも仕事を優先させるなんて、ちょっと珍しいな
って思ってたね」

ここ数日、かおるは友人達との時間よりも今回の事件の捜査を重視している。会える時間があるのにそれをしないなど、今までの彼を考えるとあり得ないことだ。他の何よりもなのはを第一に考え、自分と似た境遇のフェイトを気に掛けていた彼が、彼女達よりも仕事を選ぶなど異常としか言いようがない。彼を知る者ならば、何か悩みを抱えていると一目で分かる。ましてや、リンディは昨日の戦闘で、かおるのリンカーコアを黒髪の少年が蒐集しなかった事に彼自身が深い疑問を持っていた事を知っている。その事で悩んでいると結論づけるのは当然だ。が、彼女の予想は微妙に外れていた。

「それもあるんですが・・・」

なんでクロあのひさんは、守護騎士プログラムの起動後、

すぐに蒐集活動をしなかったのか・・・それがずっと、引つか
かっているんです」

「・・・なんで、そう思うのかしら？」

かおるの悩みの内容を聞き、リンディは不思議に思った。「彼等が蒐集を始めた一ヶ月前よりもずっと以前に、すでに守護騎士達は目覚めていた」と、彼は言っているのだ。普通に考えれば、事件発生と守護騎士達の起動はほぼ同時期であると思われるのに、目の前の少年はなぜ、そのように考えるのか、と。

「守護騎士達は、クロかれさんのことを一様に『兄』と呼び、
まるで本当の家族のように接していました」

それは、今までの戦闘記録からリンディも承知している。主が自らの守護者に自分を兄と呼ばせ、家族のような関係を築くなど、今までは無かったことだ。しかし彼女は、相手が子供ということもあり、彼の『趣味』と認識し、あまり深く考えていなかった。

「でも、元は他人だった人間と家族として接するなんて事が、一ヶ月やそこらで出来るものでしょうか・・・」

その言葉に、リンディは目を見開く。確かにその通りだ。現に自分は、フェイトとの付き合いが半年ほど前から続いているのに、未だに会話にギクシャクしたモノがある。かの少女が人一倍内向的な性格であることも原因だが、常識で考えて『他人を家族として認識する』には、それなりの時間が必要だ。それが、『^{プログラ}厳密には人でない存在』ならばなおさらだろう。しかしどうだろう、彼等の関係はギクシャクしているところか、自分達が『家族』である事になんの疑問も持っていないように見える。あまりに自然に振る舞っていたために、リンディもすっかり失念していた。

「もしかしたら、初めは単に『家族』として暮らしていたのかも
しれませんが・・・」

彼等が元から蒐集をするつもりだったのならば、過去のようにすぐさま行えばいい。わざわざ『家族』としての関係が確かなモノになるのを待つ必要など皆無なのだ。ならば、『家族として暮らす事』それ自体が当初の目的だったのではないだろうか。通常ならば、「何を馬鹿な」と一蹴されてしまうであろう見解だが、考えれば考えるほど、筋の通った推測にしか思えない。

「だとすれば、何か理由があるはずです。」

彼等が『蒐集しなければならなくなった何か』が・・・！

リンディは急に恐ろしくなった。目の前の少年は、ごく少数の手がかりから、少しずつ確実に真実へと近づいている。自分達が今回の任務に就いてからおよそ十日。アースラのクルーや本局の武装局員だけでは、ここまでの進展は難しかっただろう。今回の任務に『天^{ある}才』がいたことを、改めて天に感謝するのであった。

海鳴大学病院の一室に、玄斗とザフィーラを除く八神家の面々に加えて主治医である石田が集っていた。皆の視線の先は、ベッドの上でいつも通りの笑顔を作るはやてに向けられている。

「大丈夫みたいね。よかったわ」

「はい。ありがとうございます」

石田医師の言葉に、いつも通りの笑顔ではやては答える。

「は、ほっとしました」

「せやから、ちょう めまいがして、胸と手えつつただけやって
ゆうたやん」

シヤマルが思いっきり胸をなで下ろし、はやては「みんなして大事にするんやから」と、首を横に振ってあきれた様子を見せる。

「でも、頭 打ってましたし・・・」

「何かあつては大変ですから・・・」

シヤマルとシグナムは、なおも不安の色を隠せない。

「まあ、来てもらったついでに、ちょっと検査とかしたいから、もう少しゆっくりしてってね」

「・・・はい・・・」

石田の提案に、弱冠元氣なくはやてが答える。それに笑顔で頷くと、石田はシャルとシグナムの二人を連れて、病室を後にした。

「今回の検査ではなんの反応も出てないですが、『つつただけ』という事はないと思います」

病院の廊下で聞かされた石田の見解に、シグナムが頷く。

今朝、玄斗が登校した直後に、はやては自室で胸を押さえて倒れたのだ。真っ青に染まった顔に脂汗を大量ににじませるあの姿を見れば、例え素人であってもただ事ではないと気付くだろう。

「麻痺が広がり始めてるのかもしれませんが・・・。
今まで、こういう兆候は無かったんですよね？」

石田の質問にシャルとシグナムは頷くが、一概には言い切れずに困惑する。玄斗もそうだが、はやては『苦痛』や『悲しみ』といった負の感覚を家族に隠す傾向がある。ハッキリと「今までも無かった」とは、言い切れないのだ。

「発作がまた起きないとも限りません・・・。
用心のためにも、少し入院してもらった方が良いでしょうね。大丈夫でしょうか？」

「・・・はい」

石田の提案に、シグナムは静かに短く頷いた。

検査も無事に終わり、夕暮れが空を赤く染め上げる時分にシャマルが短期入院の旨をはやてに伝える。はやては不安そうに眉尻を下げ、シャマルとシグナムが励ますが、少女の不安は『入院』そのものよりも別にあつた。

「・・・いや、入院はええねんけど・・・ご飯、どうするつもりや？」

その一言に、皆が頭を打ち付けたかのような衝撃を受けた。

現在、八神家の食事は、そのほとんどを長女^{はやて}が作っている。以前は、長男たる玄斗と当番を分担し、1：1の割合で調理していたのだが、最近は蒐集に専念するため、食事に關しては、はやてに任せきりとなっている。余談であるが、その際の名目は『生徒会執行部の業務』である。

ともあれ、そんな彼女が入院となると、必然的に誰か代役を立てねばならない。玄斗に任せるという手もあるが、生徒会・・・もとい、蒐集で忙しい彼に調理など、毎日は無理である。かといって、シグナムやヴィータに任せるとキッチンが半壊しかねないし、シャマルなどはもつてのほかだ。

いい代案が見つからず、部屋に沈黙が流れ始めたその時、

「安心したまえ。家族の食生活は私が保証しよう」

病室の扉を開けて入ってきた長男の一言が、気まずい空気をぶち破った。

「で、でも、兄ちゃん生徒会の仕事があるって・・・」

学校指定の鞆を片手に見舞いに来た兄の言葉に、はやては一瞬安心するが、すぐに問題点を指摘する。

「私がおらずとも、彼等は確実に仕事をこなす。私がどのように仕込んだ。問題は無い」

すると、言い淀むことのないすてきな返答が帰ってきた。生徒会メンバーに何をしたのか疑問が残るはやてであったが、とりあえず問題の解決を素直に喜ぶ。

「ほんなら私は、三食昼寝付きの休暇をのんびり過ごすわ」

はやての着替えを取りに行くため、玄斗達は一旦帰宅することになった。

「シャル、すずか嬢に連絡を・・・」

病院の自動ドアを出たところで、はやての友人への連絡をシャルに任せ、玄斗は高くそびえ立つ病棟を仰ぐ。闇の書の侵食は確実に進行している。もはや一刻の猶予もない。

（・・・計画を早めるか・・・）

玄斗は悲しい決意をさらに固め、夕暮れの赤に染まった摩天楼を後にした。

その頃、アースラの薄暗いモニタールームには、本局の無限書庫からの現状報告が送られていた。

『闇の書』は、かの魔導書の真の名ではなく、正式な名称は『夜天の書』であり、本来は、各地の偉大な魔導師の技術を収集し、研究するために作られた、主と共に旅する記録用の魔導書であった。

破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かがプログラムの改変したためであり、その影響を受けて、旅をする機能と破損したデータを自動修復する機能が暴走しているのだ。『転生』と

『無限再生』は、これが原因である。

もつとも酷いのは、持ち主に対する性質の変化だ。一定期間『蒐集』をしなければ、持ち主自身の魔力や資質を侵食し始め、完成すれば、無差別破壊のために持ち主の魔力を際限なく使わせ、死に至らしめる。どちらに転んでも、『主の死』は確定しているのである。

完成前に停止させようにも、闇の書が『真の主』と認めた者でなければ、システムへの管理者権限が使用出来ないため、プログラムの停止や改変が出来ず、加えて、無理矢理に外部から操作しようとすれば、主を吸収して転生する機能も含まれているため、手が出せない。故に、闇の書の完全封印は不可能とされているのだ。

「元は健全な資料本が、なんと言つかまあ・・・」

「闇の書・・・夜天の魔導書もかわいそうにね・・・」

聞けば聞くほど酷い話だ。ユーノからの報告の内容に、ロツテとエイミイはそれぞれの感想を口にする。

結果から言えば、かおるの予想は当たっていた。彼等はおそらく、主の命を繋ぐために、やむを得ず蒐集を行っている。しかも、それを短くとも数ヶ月の長きに渡り行わなかったということは、主の身体に何かしらの異常が見られるまで闇の書の侵食に気付かなかったということだ。それはつまり、守護騎士が『闇の書の真実』を知らない可能性が極めて高いということでもある。事態は思った以上に

深刻だった。

現時点では、分かったのはここまでだけど、まだ色々調べてる
「じゃあ、すまんが、もう少し頼む」

さらなる調査の継続を依頼し、そこで通信を切る。

「ユーノ君すごいねー」

「うん。アタシも正直 驚いた」

エイミイとロッテが、たったの一日でここまでの資料を搜索してきた少年の手腕に感心する。普通にやれば、資料が出てくるのは事件終了後だっただろう。クロノの人は、大当たりだったようだ。

「・・・エイミイ、仮面の男の映像を」

そのクロノの頼みに答え、コンピュータールームの大画面に謎多き男の映像が大きく映し出される。

「この人の能力もすごいというか・・・けっこうあり得ない気がするんだよね」

エイミイの感想も当然だろう。昨日、なのはとフェイトがそれぞれに守護騎士と相対していた二つの世界は、最速で転移しても二十分はかかる距離に位置しているのだが、この男はなのはの新型砲撃の直撃を防御しつつ長距離からのバインドをアツサリ行い、それからわずか九分後に、フェイトに気付かれることなく後ろからの一撃を与えている。

「かなりの使い手だな・・・ボクにも、おそらくはかおるにも不

可能だ」

この常軌を逸した能力を目の当たりにして、『かなりの使い手』程度で片付けられるクロノも大概だなあと、エイミイは思ったが、ひとまず言葉を飲み込んだ。さすがは仮にも天才かあるの師匠と言えるだろう。

「ロツテはどうだ？」

「あゝ……無理無理。アタシ、長距離魔法とか苦手だし……」

クロノの問いに、ロツテは左手を左右に振って否定を表す。

「アリアは魔法担当、ロツテは物理担当フィジカルで、キツチリ役割分担してるもんね」

容姿はうり二つの猫姉妹だが、その能力は清々しいほどに正反対なのだ。その分、それぞれの得意分野の实力は、他の魔導師とは一線を画しているが。

「昔はそれで、酷い目に遭わされたもんだ……」

「その分 強くなつたろ？ 感謝しろっつーの」

ため息混じりに愚痴をこぼすクロノに、ロツテが身を乗り出して抗議する。はたから見れば、『師弟』というよりも『姉弟』といった感じの二人を眺め、エイミイは終始笑顔だった。

翌日、フェイトの体調も戻り、久しぶりにかおるとリイナを含めた全員が登校していた。当面の間はできるだけ、呼び出しがあるま

では海鳴市で静かに暮らすように、とのリンディの指示だ。

「え？ 入院？」

始業前になのはの机の前に仲の良いメンバーが集まって談笑するいつもの光景だが、今朝に限っては明るいとは言えない話題で幕を上げた。以前から話に聞いていたすずかの友人である八神はやてが、検査のために数日入院することになったとの連絡が、シャルルからきたのだそうだ。

「じゃあ、放課後 みんなでお見舞いとか行く？」

近い内にみんなに紹介する予定だったこともあって、アリサの提案に皆が賛成し、すずかがその旨をシャルヘメールで伝える。都合が悪かったらはやてに見せて欲しいと、励ましの言葉を書いた模造紙を中心に集まったみんなの写真を最後に添えて。

突然の事態に、玄斗と守護騎士は大いに焦った。はやての友人たる月村すずかが以前から紹介したいと言っていた友人達が、管理局の魔導師達だったのだから。

しかし幸いにも、はやての主としての資質のほとんどが闇の書の中にあるため、詳しく検査されたり玄斗や守護騎士達と鉢合わせない限りは、はやてが闇の書の主だと気付かれることはないだろう、という結論にたつした。はやてや石田には守護騎士達の話は伏せておくように頼み、友人の見舞いの際には席を外すことにして、とりあえずの対策を講じた。

そんな事が裏で行われているとは夢にも思っていない面々は、予定通りにはやての病室を尋ねていた。意外にも顔色の良い少女に、と

りあえずは胸をなで下ろす。

一応病院内なので、控えめに談笑していた時、主治医の石田が病室に入ってきた。

「かおるちゃん、ちょっと・・・」

手招きしながらかおるを室外へと連れて行くその光景に、はやて、すずか、アリサは首をかしげ、その様子を見ているのはとフェイトは乾いた笑みを漏らしていた。

「どうかしら？」

「正直、現時点の医療技術では、治療法は皆無だと思います」

人気のない廊下での主語の抜けた石田の質問に、かおるは表情を暗く沈ませつつ、事実を告げる。

石田は以前からかおると連絡を取り、はやての治療法についての助言を仰いでいた。こんな小さな少年に頼るなど現役の医師としてはあつてはならないのだが、そんな事を言っている状況ではなかったのだ。はやての病状は、日に日に悪化している。あらゆる書物を読みあさり、名も知らぬ医者に相談するも、結局解決の糸口はつかめない。苦肉の策として、以前この病院で知り合った天才少年の頭脳にすがりついたのだが、彼の見立ても自分や他の医者と同様だった。

「・・・そう・・・」

頼みの綱が切れ、自然と石田の肩と声のトーンが落ちる。

「気を落とさないで下さい。治療がないのは、あくまで『現時点』での話ですから」

しかし、かおるが次に紡いだ言葉を聞き、弾かれたように少年の顔を見る。そこには、自信と確信に満ちた曇りの無い笑顔があった。

なのは達が帰路に就いた頃、シャマルが見舞いに来た。話によると、玄斗は夕食作りの最中なのだそうだ。

「お友達のお見舞い、どうでした？」

「みんなええ子やったよ。また来てくれるて」

小さな友人達が持ってきた花束を花瓶に入れながら、シャマルが優しい口調で尋ね、はやては満面の笑みでそれに答える。

「そやけど、もうすぐクリスマスやなあ。」

みんな守護騎士とのクリスマスは初めてやから、

それまでに退院して、パーッと楽しくできたらええねんけど・

・

十二月十三日水曜日と記された日めくりカレンダーを横目で見ながら、シャマルはその言葉に「そうですね」と、当たり障りのない返事を返した。闇の書の侵食の速度は、日を追うことに増している。はやくタイムリミットまで時間がない。時が過ぎるのを心待ちにする主と、いつそのことが止まる事を望む守護騎士。当事者達の意味などお構いなしに、運命の時はゆっくりとすぐそこまで迫っていた。

本局の執務室で、グレアムは室内の照明を切り、闇の書の資料を大画面で閲覧していた。開始から数時間、一通りの作業を終え、モニターを閉じて照明を付ける。すると、ドアの乾いた開閉音と共に二つの人影が入ってきた。

「父様、あんまり根を詰めると、身体に毒ですよ？」

「そーだよ」

彼の双子の使い魔、アリアとロッテだ。

「どうだい？ 様子は」

突然の訪問者に驚くこともなく、グレアムは使い魔姉妹に問い掛ける。

「まあ、ボチボチですね」

「クロノ達も頑張ってますけど、闇の書が相手ですから、一筋縄では……」

「……そうか……すまん、お前達まで、付き合わせてしまつて……」

主語の欠落した問い掛けであつたが、付き合いの長い彼等には、それで十分だった。愛弟子とその仲間達の奮闘ぶりを間近で見ているが、管理局において『解決不可能』とされた『闇の書事件』は、やはりそう簡単に朗報を聞けそうにない。その旨を聞いて、グレアムは膝の上で組んだ左右の拳を見下ろし、力無く謝罪する。

「何言つてんの、父様」

「私達は父様の使い魔……。父様の願いは、私達の願い」

グレアムの口から出た言葉に、リーゼ達は困ったように眉を寄せながら反論する。あくまでも、自分達は自分達の意味で行動しているのだ、と。

「大丈夫だよ、父様。『デュランダル』も、もう完成してるし」
「闇の書の封印・今度はきつと、大丈夫ですよ」

よく似た優しげな笑顔を浮かべ、父を励ますように双子の猫が静かに語りかける。『準備』はすでに整っている。後は、ただ時期を待つばかり。過去の因縁と悲しみを断ち切るため、この時のために『ここ』までこぎ着けたのだ。必ず成功する——いや、『させる』。笑顔の裏のそんな決意を感じ取り、グレアムは静かに目を閉じた。

第九話 「悲しい決意、勇気の選択」（後書き）

作者「え、そんなわけで、第九話でした」

玄斗「とりあえず、齒を食いしばりたまえ」

かおる「ちょ、ストップ！ ストップ！」

クロノ「なんでしょっぱなからケンカ腰なんだ君は！？」

作「オレがいったい何をした！？」

玄「自分の胸に聞いてみたまえ」

なのは「な、なんだかよく分かんないけど・・・」

フェイト「と、とにかく、落ち着きましょう？ ね？」

玄「私はいたって冷静だ。しかし、この男の原作無視は目に余る」

アルフ「原作無視・・・？」

作「いや、それは話の都合で仕方なく・・・」

玄「前回の戦闘描写の弱冠の違いについては目をつむったとしても・
・・・」

エイミィ「・・・作者の言い分は無視・・・？」

玄「今回のような時系列の歪みを見逃すことなどできん！」

リイナ「時系列……ですか……？」

エ「……私も無視された……」

作「まあ、なんだ、強く生きよう。お互いに……」

ク「こんな男に同情されるとは……」

ア「エイミイも気の毒にねえ……」

か「なんか作者さんが気にも留めてないんですけど、

そう言われてみれば、はやてさんが倒れたのは原作では早朝でしたね」

な「シャルさんと石田先生の会話も無かったし……」

作「だから、それも話の都合で仕方なく……」

フェ「それくらいだったら、別に怒らなくてもいいんじゃないですか？」

玄「それもあるが、私が最も腹に据えかねているのは、日付と曜
日だ」

リ「……はい……？」

玄「なのは嬢達がはやての見舞いに来た日付と曜日を思い出して
みたまえ」

ク「十二月十三日の水曜日だが、それがどうかしたのか？」

か「・・・原作では、十三日の火曜日、でしたよね・・・」

エ「細かつ！？」

ア「誰も気にしないだろそんなの！？」

玄「何を言うか！ 気にしなくてはならんだ！」

な「な、なんだかクロさんが珍しく熱くなってるね・・・」

フェ「うん・・・。でも、こういうクロさんもカッコイかな・・・」

ア「不注意な発言は控えておくれよ、フェイト・・・」

玄「このままいけば、

なのは嬢達の終業式があるはずの二十四日が日曜日となつてしまふのだ！」

か「！ そ、そういえば確かに・・・！」

ク「話が変に歪む前に曜日を修正した方がいいんじゃないか？」

作「・・・実は、もう手遅れなんだよね・・・」

リ「嫌な予感がしますが、とりあえず聞きましょう。なぜですか？」

作「ここで曜日を直しても、

今度はフェイトが転入してきた当日が日曜になっちゃうんだよ」

フェ「ええええええええええ！？」

エ「まさかとは思うけど・・・」

小説書き始めた時、そーゆーコト時間軸考えてなかったでしょ・・・」

作「・・・はい・・・」

ア「それはさすがにマズイだろ！？ 何も考えずに書いたのか！？」

作「かおると玄斗の頭脳戦をいかにそれっぽく書くかに気を取られてました」

リ「バカとしか言いようがありませんね・・・」

な「ちよつと言い過ぎだけど、その気持ちは分かるよ・・・」

か「この先どうなるんだろ・・・」

玄「とりあえず、話の内容が原作と大幅に変わる可能性が高いな」

作「面目次第もございません」

全「全くだ！」

第十話 「クリスマス・イブ」 (前書き)

三千ユニークとつくに突破！ この数字が今の私の心の支えと言っても過言ではありません！

稚拙な駄文ではありますが、これからもよろしく願います！
お気に入り登録や感想などを絶賛受付中です！

第十話 「クリスマス・イブ」

十二月二十二日

岩山が地平線の彼方まで延々と立ち並ぶ異世界の空を、銀の軌跡が疾走していた。

ここまでは、うまくいってます

「うむ、地球そちゅうに戻らなくなった分、管理局も我々を追い切れていないようだ」

はやてが入院して以来、彼女の護衛としてシャマルが残ったが、他の守護騎士は地球に戻ることが無くなった。玄斗も『家庭の事情』と、ここ数日学校を休んで飛び回っている。そのため、アースラスタッフは彼等の動きを把握できず、仮面の男の横槍があつた先の戦闘以来、管理局の魔導師とは遭遇していない。

「・・・はやては、寂しがってはいないか？」

私には、何も・・・。ただ、おともだちなのはちゃん達はよく来てくれるみたいです

そういう意味では、玄斗にとってなのは達の存在は有り難い。元来寂しがり屋のはやてにとつては、じふたたち家族に変わり、大きな心の支えになっているだろう。全てが終わった後もその関係が続くことを玄斗は願う。

「あまりに顔を見せないのも心配させる。数日中には戻るよ」
はい。お気を付けて・・・

通信を切り、手近な岩山に降り立つと、脇に抱えていた洋書のペー

ジをパラパラとめくる。そのほとんどのページを解読不能な古代文字が埋めているのを確認し、

「あと、六十ページ……。やっと、終わる……」

天を仰ぎ、悲しげな瞳で彼方を見つめた。『あの日』決意し、ようやく『かおる』を見つけ、自らの蒐集の先の計画が成就しようとしている。悔いは無い。恐れも無い。あるとすれば、刃を交えた少年達や自分の家族達に対する、深謝の念だけだ。

そんな少年の後をつける二つの人影があることを、彼はこの時 気付いていなかった。

地球軌道上に浮かぶアースラの船内。薄暗い通路を三つの人影が歩いていた。

「かおるちゃんは、まだ研究室に……？」

「そーなんだよね……」

はやての見舞いに行つて以来、かおるは本局からアースラに移動させた自らの研究室にこもつて、何やらモニターと睨み合つてコンソールを連打している。食事もその中で取り、かなり不健康な生活が続いているのだ。もちろん、学校の方は長期欠席中である。

「イブにみんなで、はやてのお見舞いに行くことになったんだけど……」

「うん……。ちよつと、難しいかな……」

心配そうに呟くフェイトに、エイミィは苦笑いを浮かべながら答え

る。先日、すずかやアリサと相談して、明後日に迫ったクリスマス・イブにプレゼントを持参の上、本人とその家族にも内緒で見舞いに行こうということになったのだが、このままだと高確率でかおるは不参加となりそうだ。

「リイナちゃんもリイナちゃんで、どこにいるのか分からないし・
・・」

エイミイがため息を盛大に漏らす。リイナは現在、かおるの指示で海鳴^{げんち}での単独操作をしているのだが、連絡がさっぱり取れないのである。

「私がどうかしましたか？」

唐突に背後から声を掛けられ、三人は弾かれたように振り返る。そこには、ぶ厚い資料を両手で胸に抱いて立っているリイナの姿があった。

「およ、お帰り。・・・どしたの、ソレ」

おどけたようにエイミイが挨拶し、大量の紙の束を指さして尋ねる。

「例の少年の身元に関する調査の中間報告です」

が、リイナの解答は三人の予想の斜め上に行くモノだった。彼女の抱えている資料は並の量ではない。よもやこれほど大量の情報が集まっているなど、夢にも思っていなかったのだ。三人は一樣に表情を驚愕で染め上げ、資料を手につ少女へ詰め寄る。

「もしかして、分かったの！？ クロさんの正体！！」

「・・・私は『中間報告』と言ったはずです。馬鹿ですかあなたは・・・？」

三人を代表してなのはが単刀直入に聞いたですが、リイナは残念なモノを見るような目で、心底うつとうしそくにその期待を切つて捨てた。要するに、まだ正体が判明するには至っていないらしい。馬鹿と言われているのはがリイナを阿修羅のごとく睨み付けるが、当の本人はその視線を軽く受け流している。

「しかし、当然と言えば当然ですが、かおるさんの予想は当たっていたようです」

「・・・どういうこと？」

意味深なリイナの言葉にフェイトが反応し、ずしりと重い資料の束を受け取り、パラパラとめくって内容を見ている。

「・・・！これって・・・」

なのはとエイミイも横からのぞき込み、エイミイが代表して驚愕の声を上げた。

『小中学生に絡んでいた不良の退治』

『空き巣や銀行強盗の捕縛』

『人命救助』

『ボランティア活動への積極的な参加』

などなど、そこにはおよそ犯罪者とはほど遠い、むしろ感謝状モノの黒髪の少年の行動の数々が、白い紙の上に所狭しと並んでいたのだ。

「海鳴市にお住まいの方々に、彼の顔写真を見せた上で聞き込みをした結果です」

エイミイは、以前にかおるが「大人だと、怪しまれる可能性がある」と言っていた理由を理解した。転移頻度から、件の少年が海鳴市に居を構えていると推測し、かおるは『黒髪の少年自身』を探すのではなく、『少年の情報』を海鳴市民に聞き込んでいたのだ。確かにこれは、一般の管理局員がやるには難しい。地球の警察官でもない人間達が、白昼堂々少年の写真片手に住民にあちこちで根掘り葉掘り話を聞いたら、普通に考えて不審者にしか見えない。その点、かおる達であれば、そこまで怪しまれることはないだろう。

「それにしても、やけにいっぱいあるね・・・」

「本名や住所などは一切が謎ですが、存在自体は海鳴市でも有名な人だったようで、

当初のかおるさんの予想よりも多くの情報が集まりました」

これだけ大量の情報があれば、正体が割り出せそうなモノだが、用が済むと名乗ることなく去っていくため、名前や住所を知っている人間がいなかったのだ。エイミイの呟きに答えたりイナの言葉に、なのはが「そういえば・・・」と思い出す。何年も前から、海鳴の子供達の間を流れている大人気の噂だ。『悪い人』に襲われた時、漆を塗ったかのように美しい黒髪を持った少年が、どこからともなく現れて颯爽と助けてくれる、と。

「・・・都市伝説かと思ってた・・・」

あまりに都合のいい噂だったため、なのは達仲良し四人組は幼い頃から『作り話』だと思っていた。実際、その話を聞いただけで信じる人間が何人いるだろうか。・・・いないと信じたい。

「残念ながら事実です。そこに記したのは、全てが体験談ですか

ら

しかし、銀髪の少女が長年の予想を全否定する。確かに、これほど多くの体験談があるのなら、噂が真実であると認めざるをえない。

「つてことは……やつぱりクロあのひとさんは『良い人』つて事になるよね……？」

フェイトがおずおずと呟いた。そう、報告書の内容を見る限り、少年の行いは紛れもない『善行』ばかりで、とても次元犯罪に手を染めるような人物には見えないのだ。聞き込みをした人々も、かおるが予想した通り、「優しい少年だった」と口々に言っている。そんな彼が、なぜ犯罪に走ったのか、少女達には理解できなかった。

「かおるさんは、そちらのテストロッサさん同様、何か『特殊な理由や環境』があるのでは、とおっしゃっていましたが……」

リイナのその一言に、フェイトが少年の言葉を思い出す。

悲しみを知り、絶望を知り、それでもなお――

「……なのはちゃん達には……まだ言っていなかったんだけど……」

リイナに横目でチラリと見られ、エイミイが話を切り出した。クロノやかおると相談し、『闇の書の真実』をいつ少女達に告げようかと迷っていたところに、今回の報告書だ。今が『その時』だと思ったのだろう。

「・・・！ そんなっ！ それじゃ、クロさんは・・・！！」
「うん・・・。蒐集し続けなければ、生きていけない身体なのよ・
・・・」

エイミイの話の内容に、なのはが目に涙をためて叫ぶ。他人を虐げることでは生きられず、犯罪に『手を染めなければならない』心境はいかほどのモノだろう。

「でも、闇の書が完成しても結局は・・・」

フェイトが顔を俯かせ、最悪の結末を震える声で絞り出す。あんまりではないか。ただただ平和に暮らしていただけの少年が、なぜこのような仕打ちを受けなければならないのか。運命とやらがあるのなら、なんて残酷なのだろう。

「悲しんでいても始まりません。」

今、私達の成すべき事は、一刻も早く彼等を見つけることです」

そう言い残し、リイナは資料を抱いてかおるの研究室へと歩いて行く。残された三人も、冷静な少女の言葉に諭され、自分出来る事をしようと、それぞれに足を動かすのだった。

同時刻

アイスラのモニタールームに無言でコンソールを連打するクロノの姿があった。すでに骨折は完治し、腕の包帯も取れている。

——クロノさん、防御と攻撃で利き手を使い分ける変わった魔導師

を知りませんか？――

きっかけは、優秀な愛弟子のそんな小さな質問だった。映像を見直してみた。確かに違っていた。なのはの砲撃を防御した時は右手、フェイトを奇襲したときは左手。仮面の男は、咄嗟であるはずの行動で、使う手を変えていたのだ。驚愕と同時に一つの仮説と不安が頭をよぎった。

連打音が次第に大きく早くなる。頬に一筋の汗を流しながら、クロノは自分の予想が外れていることを一心に願った。

十二月二十四日

世の中が浮き足立つこの日、当初の予定通り、なのは達はクリスマスプレゼントを片手に、はやての入院している病院に向かっていた。かおるは結局、研究室にこもっているため不参加となってしまった。先日のリイナの報告以来、さらに忙しくしているようだ。アリサとすずかの反応はというと、

「まったく、リイナも来られないって言うし、どーなってんのよ」
「お家の事情じゃ仕方ないよ・・・私達だけでも行こう？」

こんな感じである。

なのはとフェイトも乾いた笑みを漏らしつつ、クリスマス・イブの突然の訪問に友達サブライズがどんな反応を見せてくれるのか、期待に胸を膨らませていた。ほんの一時、辛い真実を忘れて。

はやての病室には、シャマルの他に久しぶりにシグナムとヴィー

タが見舞いに来ていた。ザフィーラは自宅の留守を守っており、玄斗はしばらく後に来るそうだ。久しぶりの穏やかな団欒に、守護騎士は度重なる戦闘の疲れを一時忘れ、自然と笑顔を作っている。と、その時、不意にノックの音が病室に響き、

「こんにちは」

運命の扉が、唐突に開いた。

薄暗い研究室の奥でかおるはいくつものモニターを展開し、コンソールを叩いていた。画面に映る文字が上から下へと高速で流れ、その画面自体も開いたり閉じたりが断続的に行われている。

「かおるさん！」

自動扉の乾いた開閉音と共に、普段は冷静な副官の叫び声が舞い込んできた。ただ事でない声色に、現在進行中の作業の手を止める。

「ど、どうしたんですか!？」

「例の少年の身元が判明しました！」

本名・八神玄斗。海鳴市立第一小学校六年生。八神はやての実兄です！」

その瞬間、かおるの脳内でバラバラだったパズルのピースが次々と形を成していく。

一見してあまりに無計画かつ不可解な行動、性格と言動の著しい矛盾、守護者も知らないであろう闇の書の真実、妹の病

——今、全ての謎が繋がった。

「まずい！　すぐに玄斗さんを見つけないと！」

思考の海から戻るやいなや、勢いよく立ち上がり、部屋の外へと一目散に駆けだした。数瞬遅れて、慌ててリイナも後を追う。

「闇の書の主は玄斗さんではなく、はやてさんかれです！」

至急、リンディさん達に連絡を！」

「なっ！？　で、では、主の身柄確保が先決では！？」

普通ならば、リイナの意見が正しいが、今回の事件はそんな単純なモノではない。

「人命が懸かった緊急事態です！　そちらは、なのは達に任せます！」

自分の予想が正しければ、この事件にかかわった全ての人間が例外なく不幸になる。勝者も敗者も存在しない。後に残るのは悲しみと後悔だけだ。『それ』だけは、なんとしても回避しなくてはならない。脳裏によぎる最悪の結果を必死に振り払い、狭い廊下を小さな少年が疾走した。

「はやてちゃんが・・・闇の書の主・・・！？」

病院からほど近い海鳴市内の高層ビルの屋上で、なのはとフェイトは驚愕の事実を守護騎士の口から聞かされた。色々と聞きたいことはあるが、今はそれどころではない。

「悲願はあと僅かで叶う・・・」

「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも・・・!」

冷静に処理しようとするシグナムとシャマルだが、内心では動揺していた。ここまで来て管理局の魔導師と鉢合わせるなど、夢にも思っていなかったのだ。

「ちょっと待って! 話を聞いて下さい!

ダメなんです! 闇の書が完成したら、はやてちゃんは・・・!」

なのはは必死に真実を伝えようとするが、その叫びは鉄槌の一撃によつて途中で遮られてしまう。障壁もろとも吹き飛ばされ、後方にあるフェンスへと激突してしまった。

「ッ! なのはは!」

フェイトは親友の身を案じるが、それどころではない。目線をそらした彼女目掛けて、体重を乗せたシグナムの重く鋭い一閃が振り下ろされた。間一髪で避けたが、大きく砕けたコンクリートの床がその威力を物語る。

「管理局に、我等の主のことを伝えられては、困るのだ・・・!」

「私の通信妨害範囲から、出すわけにはいかない・・・!」

シグナムがゆらりと立ち上がり、シャマルが拳をきつく握りしめる。過去、自分達は幾度も『これ』を繰り返してきた。主にあだなす者を退け、その存在を知った者の口を封じる。それが自分達の存在理由であり、そうすることが当然だと思っていた。だから、他人をその手に掛けることに疑問など持っていなかった。

しかし、そんな終わりの見えない闇の中で、彼女達は『光』に出会ってしまったのだ。言葉にすればたった半年、その短期間で彼女達は明らかに変わった。だからこそ、今、自分達がしていることに、嫌悪を覚えずにはいられない。

「邪魔すんなよ．．．。もう、あとちょっとで助けられるんだ．．．！」

はやてが元気になって、アタシ達のところに帰って来るんだ．．．」

うずくまるのはに、ヴィータが目に涙をためながら鉄槌を構えてにじり寄る。全ては『あの日々』を取り戻すため。自分達が間違っていることなど百も承知している。それでも、誰より優しい主にはやてに再び笑って欲しい。生きていて欲しい。

「必死に頑張ってきたんだ．．．！　もう、あとちょっとだから．．．だから！！」

邪魔、すんなああああああ！！！！」

カートリッジを装填し、力任せに得物を振り下ろす。刹那、圧縮された魔力が彼女の激しい感情に呼応するように弾け、なのはのうずくまっていた屋上の一角を燃えさかる火の海へと変貌させた。

息を荒げ、地獄のような目の前の光景を見つめる。普通ならば生命活動の維持さえ困難であろうその炎の中で、なのはは確かに立っていた。すでに白い戦闘服に身を包み、左手に杖を握っている。背後に地獄の業火を背負うその姿も相まって、頭の両側で結んだ栗色の髪が、まるで二本一対の角であるかのようにヴィータは錯覚した。

「．．．．悪魔め．．．．！！」

自然とそんな言葉が口から漏れるのも、無理からぬ事だ。自分達の行く手を阻む彼女は、ヴィータにとって極悪非道の大悪党以外の何者でもない。

「悪魔で、いいよ・・・」

一瞬、悲しげな表情を見せたものの、レイジングハートを強く握りしめて赤毛の少女を迷いのない眼差しで見つめ返す。分かっていたから。言葉だけでは、何も変わらない。自分出来るのは、全力でぶつかって想いを伝えることだけなのだ。

「悪魔らしいやり方で、話を聞いてもらっから・・・！」

その瞳には、決意の炎が赤く静かに燃え盛っていた。

「闇の書は、悪意ある改変を受けて壊れてしまってる。

今の状態で完成させたら、は yet は・・・！」

「我々はある意味で、闇の書の一部だ」

フェイトの説明をレヴァンティンの切っ先を向けて制する。永遠とも言える長く遠い時を共に過ごしてきた。守護騎士にとって、『闇の書』はは yet や玄斗以上に身近な存在なのだ。自分達ほど闇の書を理解している者はいない。

「だから当たり前だ！ アタシ達が一番闇の書のことを知ってるだ！！」

「じゃあ、どうして闇の書なんて呼ぶの！　なんで本当の名前で呼ばないの！？」

なのはの叫びに、わめき散らしていたヴィータの思考が一時止まっ

た。

「ホントの・・・名前・・・」

闇の書と同様に守護騎士プログラムも異常をきたしているため、彼女達は真実を知らないのだ。

かなり前から感じていた違和感、こんなはずじゃないと訴える自分の心に疑問を抱いていた。しかし、気のせいだと思っていた。そう思い込もうとしていた。面と向かって指摘されたことで、ウィータの心が僅かに揺れる。本当にこのままでいいのか、改めて疑問を感じ始めていた。

その頃、家の留守を守っていた守護獣が、夜の空を疾走していた。

「誰にも通信が通らん……。いったい何があった……。！？」

胸騒ぎがする。何か良くないことが起こる前触れのような。自分の動物的直感が間違っていることを祈りつつ、言いようのない不安と焦燥にかられ、冷たい夜空を一直線に飛んでいった。

<バリアジャケット・ソニックフォーム>

黒い戦斧の低い声と共に、柔肌に張り付くような薄い生地が控えめに発育したスレンダーな身体を包み込む。鎌と化したデバイスを構えるその様に、シグナムは驚きを隠せなかった。

「・・・薄い装甲を、さらに薄くしたか・・・」

「その分、速く動けます」

装甲は身体を守ると同時に少なからず重りにもなっている。フェイトはその重りをほぼ完全に取り払い、自身の持ち味である速度を極限まで高めたのだ。

「緩い攻撃でも、当たれば死ぬぞ・・・。正気か？ テスタロツサ・・・」

「あなたに、勝つためです」

フェイトが思い描き、かおるが完成させたこの装束は、言ってしまうに諸刃の剣だ。それまで必要最低限の防御を担っていた魔力をも速度へと費やし、ほとんど生身の状態なのだ。人の限界を超えた超神速を得たものの、その状態で攻撃を受ければ命の保証はない。しかし、シグナムの疑問にフェイトは淀みなく答えた。一撃の威力も剣術も全てが自分の上に行く強敵、そんな彼女に勝つためには、唯一の能力的アドバンテージである『速度』で圧倒するしかない。そう考えた末の結論だった。

「・・・こんな出会いをしていなければ、

私とお前は、いったいどれほどの好敵手ともになれただろうか・・・

「

確かな決意の灯った赤い瞳を見て、シグナムは言いようのない嬉しさを覚えた。目の前の少女は自分が命を懸けて相対するに値する。彼女との戦いは、どれほど血湧き肉躍るモノになっただろうか。

「まだ、間に合います」

しかし、フェイトの言葉に対する彼女の答えは、

「止まれん・・・！」

愛剣を正眼に構えた上でのハッキリとした拒絶だった。

「我等守護騎士、主の笑顔のためには、騎士の誇りさえ捨てると決めた・・・。

もう、止まれんのだ！」

闇じぶんたちの書の過去の罪を共に背負い、今を生きようと言ってくれた主とその兄のため、誇りも教示もかなぐり捨てて戦ってきた。例え望まれぬ形でも、小さな主の小さな日常を護る、それさえ出来ればそれでいい、他に望むモノはない。そんな決意に目の前の少女の存在が大きなヒビを入れていく。出来るならば、もっと早くに出会いたかった。後悔が涙となって頬を伝う。しかし、もはや後戻りは出来ない。感じる違和感も渦巻く疑問も関係なく、自分達に残された道は、たった一つしかないのだ。

「止めます・・・！ わたしとバルディッシュが・・・！」

自分達の全てをぶつけ合い、全ての決着を付けるべく、二人の魔導師と二人の騎士が己の相棒を構えて同時に駆けだした。

「時は来た」

しかし、その行動の全ては、感情のこもっていない冷たい一言によって遮られる。

唐突かつ完璧に、その場にいる全ての人間に群青色のバインドが四重に掛けられたのだ。あまりに突然の事態に、全く反応できなかった

た。

「！ 貴様は・・・！」

シグナムの視線の先、黒く塗りつぶされた夜空を背に、悠然と佇む仮面の男の姿があった。彼の周りにはバインドと同色の光を放つカードが、円を描くように囲んでいる。

「やはり、敵か！」

と、そんな彼の背後に新たな人影が降ってきた。銀髪の左右に狼の耳を鎮座させる主を護る盾の獣が右腕を振りかぶり、重く鋭い一撃を男の後頭部目掛けて振り下ろした。確実に決まったと思われた一撃はしかし、第三者の手によって遮られてしまった。

「なっ・・・！？」

「二人組・・・！？」

皆が一様に驚愕を露わにする。それも当然だ。ザフィーラの拳を左腕で受け止めたその人物は、カードに囲まれて腕を組んでいる男と同様の衣装と仮面でその身を包んでいたのだから。

予想外の事態に、ザフィーラの動きが一瞬止まる。それは、致命的な隙であった。

「そうか・・・もう一匹いたな・・・」

仮面の下から漏れる呟きと共に、ザフィーラもまた四重のバインドで拘束されてしまう。

あの日、仮面の男は二つの世界を移動したわけではない。最初からそこにいたのだ。そうとなれば、不可能に見える次元世界間の短時

間転移も、あまりに高すぎる能力値も納得できる。要するに、遠距離と近距離の戦闘力がバランスよくかつ高い水準でまとまっているのではなく、初めから二人で得意な分野を役割分担していたのだ。見たところ、右利きが遠距離担当、左利きが近距離担当のようだ。

「さあ・・・闇の書の主の、目覚めの時だ」

一人の男の右手が光り、屋上の中央に丸いミッド式の魔方陣が浮かび上がり、その中心に寝巻き姿のはやてが現れた。はやて本人を含め、一同に動揺と混乱が走る。

「因縁の、終焉の時だ」

もう一人の男の左手に、剣十字が表紙に輝くぶ厚い洋書が現れた。守護騎士達が敵意をむき出して仮面の二人を睨み付ける。

「貴様！ どこでそれを・・・!!」

シグナムの怒号が飛ぶ。当然だ。男が手にしている本は、今頃こちらに向かっているはずの八神家の長男が持っているはずのモノなのだから。

「テメエ等！ 兄貴に何しやがった!!」

今にも噛みつかんばかりの剣幕で叫ぶヴィータを一別し、仮面の男が本を持っていない右手を差し出した。

「貴様等の兄とは、コレのことか？」

全員の視線が集まったその手の中には、血に塗れた一束の黒髪と、

ひび割れた銀色の腕輪が握られていた。

一瞬、時が止まる。聡い彼女達がそれらの意味するモノを悟るのに、さほど時間はかからなかった。

[illegible]

突如として、シグナムとザフィーラが仮面の男目掛けて怒号混じりに飛びだした。怒りにまかせた突撃だ。後のことなどまるで考えてはいない。それでもヤツは許せない。必ずや一矢報いて、兄の無念を晴らす。

しかし無情にも、その決死の特攻が仮面の男に届くことはなかった。闇の書が輝き、二人の姿が霞のごとくかき消える。

「シグナム！ ザファイラ！」

「最後のページは、不要となった守護者自らが差し出す……
これまでも幾たびか、そうだったはずだ……」

シャマルの悲痛な叫びなど気にも留めず、仮面の下から冷たい声色で淡々と告げる。

「なんなんだ……いつたいなんなんだよ、デメエ等!!!」

「プログラム風情が、知る必要は無い」

大粒の涙を流しながらヴィータが叫ぶが、眼中に無いとばかりに吐き捨てた。表情の見えない仮面を闇の書が淡く照らし、残った守護騎士二人も無へと帰っていく。

何が起きているのか分からない。見たこともない仮面の二人組が、拘束された家族達を次々と消していくという、あまりに突然で脈絡の無い光景に、はやては思考がプツツリと停止していた。

不意に軽く無機質な落下音が屋上に響き、音源へと視線を落とす。大きくヒビが入り、月明かりを弱々しく反射している腕輪と、黒く変色した血液がベツタリと付着している一束の黒髪。紛れもなく、どちらも最愛の兄のモノだ。

「・・・あ・・・ああ・・・あ・・・」

無意識のうちに腕輪を手に取り、その感触を確かめた。焦点の定まらない視界が、にじみ出る涙でさらにぼやける。家族六人で過ごした平凡で幸せな半年間の思い出が、走馬燈のように頭の中を駆け巡った。小さな少女に、あまりに辛い現実が重くのしかかる。不自由ながらも幸福だった生活が、大きな音を立てて崩れていく。突如、ズキリとこれまでに幾度か味わったモノとは比較にならない激痛が胸を走り、足下に雪のような純白のトライアングルが浮かんだ。闇の書の拍動と同調するかのようにその光は次第に淀み、深い闇色に染まっていく。

「ううあああああああああああああああああッ！！！」

突然に何もかも全てを失った理不尽な現実を受け入れられず、少女はのどが張り裂けんばかりに慟哭した。これは嘘だ。こんなことがあるはずがない。自分は今、『タチの悪い悪夢』を見ているだけなんだ。

大粒の涙を止めどなく流し、悲しみと憤怒と困惑と怨嗟と絶望をまき散らしながら、少女は暗い闇へと飲み込まれていった。

「はやてちゃん！」

「はやて！」

やつの事で、なのはとフェイトが拘束を引きちぎるが、何もかもが遅い。轟く雷鳴と天を引き裂く闇色の雷の中、夜を統べる闇の王は真の覚醒を迎える。主の身体と意識を取り込んで、その忠実なる僕が^{しもへ}ついにその姿を現した。

「我は闇の書。我が力の全ては・・・」

デアボリック・エミツション

美しい銀色の長髪を夜風になびかせ、深紅の瞳から悲しみの涙を流しながら、漆黒の衣装と翼を纏った女性が夜空に右手をゆっくりと掲げた。闇の書から機械的な音声が響き、掌の上に深い闇色の球体が放電を伴い生成され、徐々にその大きさを増していく。

「主の願いの、そのままに・・・」

終わりの見えない悲しい夜が、静かに幕を上げた。

第十話 「クリスマス・イブ」(後書き)

作者「とゆーわけで、前回の後書きで説明した通り、イブが終業式ではなくった第十話でした！」

クロノ「ちよつと待て！」

なのは「この際、時間軸の歪みとかは置いて・・・」

フェイト「なんで玄斗さんが死んじゃってるんですか!？」

かおる「これも急な変更か何かですか・・・？」

作「いんや。元々こーゆー流れで行く予定だったぞ？」

エイミイ「オリジナルキャラクターが、こんな早く死んじゃっていいの!？」

作「いいのいいの」

アルフ「キャラクターの扱いがぞんざいなあ・・・」

作「いや、そーでもないよ？」

全「どこがだつ!!?」

作「玄斗は『はやてに絶望を与える』^{かれ}という、彼にしかできない大仕事をやってのけたのさ！」

な「・・・確かにそーですけど・・・」

か「・・・まさかとは思いますが、そのために玄斗さんを登場させたんですか・・・？」

作「そんなことないぞ？ 玄斗はあくまで『主人公の最大かあるのライバル』として考えたキャラだしな」

フェ「じゃあ、なんで殺したりしたんですか・・・？」

エ「・・・フェイトちゃん、とりあえずバルディッシュはしまつと
こうか？」

作「よく考えてみなよ。」

例え守護騎士達が消えたとしても、玄斗が残りアニキてたら、はやて
が絶望するわけないだろ？」

ク「・・・確かに、一理あるな・・・」

作「真の主として覚醒する際に、はやてが絶望する必要がある、
そのためには『玄斗の死』が必要不可欠だったわけだ」

ア「よーするに、初めから殺すつもりだったわけじゃないけど、
話を考えてたら『殺した方がいい』って結論に至ったってコト
かい？」

作「そ。

あと、原作にあまりにも『死』の危機感が無さ過ぎたから、
ちよーどいいかって考えたってのもあるんだけどね」

か「そう言われれば、三作品通して危険物の関連した事件なのに、犠牲者が少ないですよね」

ク「確かに、命の懸かった仕事という概念が薄れがちではあるな・・・」

作「そこら辺の緊張感を高めるための演出でもあるわけだよ」

エ「みんなが助かれば、それに越したことはないけど・・・」

フェ「やっぱり難しいよね・・・」

作「つーか、個人的にはハッピーエンドよりバッドエンドの方が好きだ（笑）」

ア「・・・アンタって人間は・・・!」

な「・・・少し、頭冷やそうか・・・」

登場人物能力比較（前書き）

有り難うございます！ 皆さんのおかげで一万五千アクセス突破です！

加えて、お気に入り登録や評価をして下さった親切な方々に、この場を借りてお礼申し上げます。

これを励みに、さらに頑張っていきたいです。

読者の方々の意見や感想は本当に貴重なので、お手数ですが協力していただくと有り難いです。

さて、それはともかくとして、執筆が詰まったので、作者の自己解釈バリアリの登場人物能力値を簡易的に比較してみました。

よかったら何かの足しに見ていつて下さい。

登場人物能力比較

・高町　なのは

潜在魔力量：S

魔力運用：A A A -

近距離戦闘能力：A +（体術：D）

中距離戦闘能力：A A A +

長距離戦闘能力：S +

防御能力：S

速度：A A

機動力：A A A -

補助：A A +

魔導師ランク：空戦A A A

<メモ>

『ミッドチルダ式魔導師』の一般的なスタイルを体現した極めて優秀な『魔導師』。相手の攻撃を防御しながらの中〜長距離を得意とし、その実力はすでに管理局内でも指折りのもの。元々運動に対して苦手意識があつたために体術に関しては極めて未熟だが、けして運動神経が無いわけではないので今後の成長に期待する。

・フェイト・テスタロッサ

潜在魔力量：S

魔力運用：A A A -

近距離戦闘能力：A A A（体術：A A +）

中距離戦闘能力：A A A

長距離戦闘能力：A A A -

防御能力：A +

速度：S +

機動力：S

補助：A A

魔導師ランク：空戦A A A

<メモ>

近々長距離戦闘をバランス良くこなすオールラウンダーであり、その実力も高い水準でまとまっている。全体的に魔法が『攻撃』に偏り、『防御』の技能が少々低いが、それを補って余りある速度と機動力を誇り、その二点において彼女に勝る者は存在しない。幼さゆえの腕力の無さから近接戦闘における一撃の威力は低い、武器捌きは鋭く速い。

・春風 かおる

潜在魔力量：S

魔力運用：A A A -

近距離戦闘能力：A A A +（体術：A A A +）

中距離戦闘能力：A A A +

長距離戦闘能力：A A A +

防御能力：A A A

速度：A A A

機動力：A A A +

補助：A A A -

魔導師ランク：空戦A A A +

<メモ>

なぜ小学校に通っているのかと、周囲からの疑問が絶えない『天才少年』。その能力値の全てがバランス良く、かつ高レベルの数値を示している。なのはやフェイトのように一つ抜きん出た能力はないが、どんな状況にも即対応出来るため、あらゆる戦闘で欠かせない存在。また、指揮官、技術者としても極めて優秀で、クロノが不在の現場を仕切り、この事件でなのは達や彼自身が使用した数々の新魔法の生みの親でもある。なお、体術に関しては、高町家の男達と切磋琢磨した結果であるらしい。

・クロノ・ハラウン

潜在魔力量：A A +

魔力運用：S +

近距離戦闘能力：A A A（体術：A A A）

中距離戦闘能力：A A A +

長距離戦闘能力：A A A -

防御能力：A A A

速度：A A +

機動力：A A A

補助：S -

魔導師ランク：空戦A A A +

<メモ>

生来、魔力が高いとは言えず、技術と経験でカバーしている。大威力の砲撃や堅い防御、ずば抜けた速度などは持っていないが、繊細な魔力制御や設置型拘束魔法の運用など、堅実かつ頭腦的な戦闘技能を有した極めて優秀な魔導師である。常に冷静沈着で執務官としての威厳が漂うその姿にかおるから憧れを抱かれ、かなり強引に弟子入りを志願された。

・ユーノ・スクライア

潜在魔力量：A +

魔力運用：A A A

近距離戦闘能力：A（体術：B -）

中距離戦闘能力：B

長距離戦闘能力：F

防御能力：A A -

速度：A +

機動力：A A +

補助：S +

魔導師ランク：総合A -

<メモ>

魔力が低く、『結界魔導師』であるため、直接的な戦闘能力は低い。しかし、結界や拘束魔法などの補助魔法の技能には目を見張るモノがある。ヴィータの怒濤の攻めを躲し続けられる運動神経も持ち、決して頭脳労働専門のインドア派というわけではない。今後の成長が楽しみなダークホースである。

・アルフ

潜在魔力量：A +

魔力運用：A A A -

近距離戦闘能力：A A +（体術：A A -）

中距離戦闘能力：A +

長距離戦闘能力：F

防御能力：A A

速度：A A A -

機動力：A A A

補助：A A A

魔導師ランク：総合A A -

<メモ>

主人であるフェイトの影響か、彼女も他の能力よりも速度や機動力が比較的高い数値を示しており、手数で一撃一撃の威力を補っている。おおざっぱな性格と口調のわりに魔力制御と補助魔法を得意とし、障壁破壊などの繊細な技を多用する傾向がある。

・八神 はやて

潜在魔力量：S S +

魔力運用：B

近距離戦闘能力：F（体術：F）

中距離戦闘能力：A

長距離戦闘能力：S S

防御能力：A A +

速度：C -

機動力：E

補助：B

魔導師ランク：総合A A A -

<メモ>

魔法の使用経験自体が皆無のため、魔力の制御についてはやや苦手としている。幼少の頃からの車イスでの生活や、さらには彼女の魔法資質も相まって、近距離での戦闘力や速度、機動力は壊滅的。しかしながら、膨大な魔力を使った長距離砲撃や広域空間攻撃の威力と射程距離は、なのはすら上回っている。

・八神 玄斗

潜在魔力量：S S S +

魔力運用：A A A

近距離戦闘能力：S S +（体術：S S）

中距離戦闘能力：A ｝A A A +

長距離戦闘能力：F ｝A A A

防御能力：S S S +

速度：A A A

機動力：A A A +

補助：A A A -

魔導師ランク：空戦S + ｝S S

<メモ>

マスタークラス

武術の才に恵まれ、齡十にして達人の域にまで上り詰めた『神童』。高い機動力と洗練された体術を駆使し、膨大な魔力と圧倒的な防御の堅さで他の追隨を許さず、近接戦闘においては間違いなく最強の存在である。また、管理外世界の出身ながら、幼少の頃から魔法の使用が日常的であったため、極めて高いレベルの魔力制御を行うこ

とも出来る。ちなみに、中・長距離戦闘能力と魔導師ランクの数値変動は、『操月』が使用可能な状況であるかどうか起因する（『操月』については、第八話の後書き参照）。

・シグナム

潜在魔力量：S

魔力運用：A A A -

近距離戦闘能力：S +（体術：A A A）

中距離戦闘能力：A A A

長距離戦闘能力：A A -

防御能力：A A A -

速度：A A A

機動力：A A A +

補助：A A +

魔導師ランク：空戦A A A

<メモ>

近々中距離からの重い斬撃による一撃必殺の戦闘を得意とし、携えた武器の特性から遠距離をやや苦手としている。フェイトほどではないが、速度や機動力が高く、基本的には一気に相手の懐に入って一刀のもとに斬り捨てるスタイル。守護騎士四人の将としての立場からリーダーシップが強く、決断力もある。

・ヴィータ

潜在魔力量：S

魔力運用：A A A -

近距離戦闘能力：S -（体術：A A +）

中距離戦闘能力：A A A

長距離戦闘能力：A A A -

防御能力：A A A +

速度：A A

機動力：A A A

補助：A A

魔導師ランク：空戦A A A

<メモ>

ベルカの騎士にしては珍しく、近々長距離を比較的バランス良くこなすオールラウンダー。防御が堅く、鉄槌や鉄球による一撃は強烈だが、その反面で大ぶりで隙が出来やすい。些細なことですぐ頭に血が上る短気な面があり、口調や態度はぶっきらぼうだが、同時に人一倍優しく責任感もある。守護騎士一のムードメーカー！。

・シャマル

潜在魔力量：A A

魔力運用：A A A

近距離戦闘能力：B（体術：C）

中距離戦闘能力：B +

長距離戦闘能力：A

防御能力：A A +

速度：A -

機動力：B

補助：S -

魔導師ランク：総合A A

<メモ>

バックアップのエキスパートとして守護騎士を支える参謀役。その役回りから、ユーノと同様に直接的な戦闘能力は低く、補助魔法に特化し、特に治療や回復系、リンカーコア捕縛の腕前は超一級品。家事もそつなくこなすお姉さん気質だが、壊滅的な料理の腕前はいつこつに進歩を見せていない。

・ザフィーラ

潜在魔力量：A +

魔力運用：A A A

近距離戦闘能力：A A A -（体術：A A A +）

中距離戦闘能力：A

長距離戦闘能力：E

防御能力：S

速度：A A

機動力：A A

補助：A A -

魔導師ランク：総合A A

<メモ>

玄斗ほどではないが、『盾の守護獣』の名に恥じぬ見事な防御能力を見せている。アルフ同様、体格に似合わせぬ繊細な技術を持ち、魔力制御を得意としている。しかし、機動力はそれほどもなく、手数よりは一撃の重さで勝負するタイプ。実は守護騎士の中で一番の博識だったりする。

・闇の書の管制人格

潜在魔力量：S S +（はやてに由来する）

魔力運用：S

近距離戦闘能力：S S（体術：S）

中距離戦闘能力：S S

長距離戦闘能力：S S S

防御能力：S S

速度：A A A

機動力：A A A

補助：A A A +

魔導師ランク：空戦S S

<メモ>

はやてに由来する膨大な魔力を駆使し、全ての能力が極めて高い数値で統一されている。基本的には広域殲滅型だが、近々中距離もそ

つなくこなし、魔導師から蒐集したあらゆる魔法を使いこなすため、彼女の対処が可能な魔導師は極めて限られる。

登場人物能力比較（後書き）

とゆるわけで、玄斗がいかにかチートな存在であるかがよく分かる結果となりました。条件さえ整えば、闇の書の管制人格とも互角に渡り合います。体術に関しては次元世界最強と言っても過言ではありません（笑）。『玄斗』という名前の由来も、達人という意味の『玄人』から来ています。以前に本編でデータ化されていたランクと違いますが、アレはあくまで『少なくとも見積もったランク』なので、あしからず。

かおるはもう、ホントに平均的です。飛び抜けて得意なモノは無いけど、苦手なモノも無いっていう、フェイト以上にオールラウンドな子です。でも、いくつも隠し球を持っているので、全キャラクターの中で一番得体の知れない子でもあります（笑）。

そして、本編であまり目立っていない不幸な方々にも、私なりの解釈の元で裏設定を用意させていただきました。

ユーノ君は補助系最強です。無印から出てるのに、なんの能力的アドバンテージも無いんじゃ、あまりに面白いそうだと思います・。

ザフィーラが、実はかおると玄斗に次いで博識だったり、アルフが魔力運用が得意だったりも、ほとんど私の妄想です。いずれも個人的に好きなキャラなので、何かいいところを作ってあげたくなったのです。

でも、アニメとかを見直していると、この設定もあながち間違いじゃないかなあゝなんて思ったりしてます。

私個人の勝手な解釈を幾分か含んでいます。これでオリキャラ達や原作キャラ達の力関係が少しでも読者の方達に理解していただけ

たなら、嬉しい限りです。

とまあ、そんなこんなで『本編』の残り話数もあと僅か。いくつか回収していない伏線を回収しつつ、エンディングに向かって突っ走ろうと思います！

が、どーも最近忙しい＆文章に詰まってしまったので、次の投稿はいつになるのやら……。出来るだけ早く仕上げるようにしますの
で、見捨てず気長にお待ち下さい。

第十一話 「運命」(前書き)

四千ユニーク突破!! 感動のあまり泣きそうです!
と、それはさておき、こうしてやっとこさ投稿できたわけですが、
次の話が全くできてない・・・。
どうしたもんか・・・。

第十一話 「運命」

次元の海を渡る一隻の艦船を混乱と焦燥が支配していた。アラートがけたたましく鳴り響く中、何十人ものクルーが慌ただしく廊下を駆け、この船から脱出しようとしている。

こちら、二番艦・エステリア！ 闇の書の暴走、止まりません！

艦船エステリアの艦長であるクライド・ハラOWN提督から送られるノイズ混じりの通信を、艦隊指揮官であるグレアムは眉を寄せながら静かに聞いていた。

この日、グレアム率いる艦隊は捕らえた主と闇の書本体を嚴重に封印した上で、しかるべき法的処置を検討するために留置所へと護送中だった。しかし、その道中で予想外の事態が起こってしまった。闇の書の護送を担当していた艦船エステリアが、暴走を起こした闇の書に乗っ取られてしまったのだ。それまでに吸収してきた生物の生体パーツに艦内は侵食され、操舵システムや主砲・アルカンシエルを含むほぼ全ての機能のコントロールを奪われていた。クライドはクルーを避難させつつ、未だ闇の書の手の及んでいないコントロールルームを守りながら、グレアムへ現状を報告している。

「エステリア、アルカンシエルのチャージ反応！」

「発射軌道上に、本艦隊！」

クライドの報告と自らの艦船の管制官やリーゼアリアの叫びを聞き、グレアムは司令官として決定を下した。こうなっては、侵食された艦船や主と闇の書をアルカンシエルで葬り去るしかない。

「クライド提督、脱出を急げ！ エステシアは、破棄する・・・」

・・・先程、全クルーの避難を確認しました。

こちらのアルカンシエルのチャージは、まもなく完了してしま
います

こちらはすでにチャージを完了しており、グレアムの指示さえあればすぐにでも発射可能だ。未だに艦内に残っている彼さえ脱出すれば、被害は一隻の艦船だけですむ。しかし、続くクライドの言葉に、グレアムは戦慄した。

こちらのチャージタイムのカウントを出します。発射前に、
墜として下さい

カウントを送るためには、今現在彼のいるコントロールルームから離れるわけにはいかない。それでは彼が巻き添えになってしまうとグレアムが立ち上がるが、モニターの向こうで彼が静かに敬礼すると同時に画面がいつそう乱れ、酷いノイズ音と共に通信が途絶えた。

「・・・エステシア、チャージ終了まで、残り三十四秒・・・」

アリアからの報告に、グレアムは悲痛に顔を歪めた。その短時間でエステシアから脱出するのは不可能とは言えないが、正直に言つて微妙だ。もしも脱出が間に合わず、エステシアのアルカンシエルが火を噴けば、艦隊に所属する多くのクルーが犠牲になる。クライドは自分一人のために多くの命を脅かすことを良しとしなかった。故に、自ら死を選んだのだ。

「・・・アルカンシエル、バレル展開。カウントゼロの前に、エ
ステシアを墜とす・・・」

グレアムは苦渋の選択の結果、部下であり親友でもあった青年の最期の願いに応えたのだった。

あれから十一年、クライドの殉職は、今もグレアムの心に大きな影を残していた。

（私のミスだった・・・。

闇の書の暴走が、艦船のコントロールを乗っ取るほどのモノだとは、

予想できなかった・・・）

暗い執務室のソファーに腰掛け、ハラウン親子の写真を手に取る。まだ幼いクロノをクライドが抱きかかえ、その横でリンディが笑顔で寄り添っている。どこにでもある普通の家庭、しかし彼等にとつてはこの上ない幸せな日々であつただろう。この笑顔を壊したのは、他ならぬ自分だ。あの時、闇の書の危険度をもっと深く考えていれば、あのような事態にはならなかったかもしれない。クロノやリンディ遺族に対する深謝の念とどうしようもない後悔だけが募っていく。あの悲劇を二度と起こしてはならない。その一念だけが、年老いた老提督を駆り立てていた。

暗く冷たい夜空の下に異質な光景が広がっていた。闇色の光が照らす高層ビルの屋上に、天を揺るがさんばかりの雷鳴が轟く。

「デアボリック・エミッション・・・。」

激しい放電を繰り返す闇色の魔力球の下、覚醒した闇の書の管制人格が静かに呟いた。それと同時に巨大な魔力球がその体積を一気に縮める。

「ッ！！ 空間攻撃・・・！」

彼女が何をしようとしているのかを察し、その姿を見つめていたなのは達はほとんど反射的に距離を取った。

「・・・闇に、染まれ・・・」

一際激しい雷鳴と共に、闇色の魔力が辺り一面を凄まじい速度で飲み込んでいく。なのはが咄嗟に障壁を展開し、フェイトの盾となった。この濃度の魔力を防ぎきるのは、防御より回避を念頭に置いた戦闘スタイルのフェイトでは難しいと判断したのだ。とはいえ、比較的に防御の堅いなのはにとっても決して楽なことではない。激しい雷撃に苦悶の声を漏らす彼女の頬に、一筋の汗が光った。

そんな様子を二人の仮面が離れたビルの屋上から眺めていた。

「・・・もつかな？ あの二人・・・」

「暴走開始の瞬間までは、もって欲しいな・・・」

と、その時、お互いの顔を見合わせて会話する二人の足下が輝き始めた。突然の事態に狼狽する二人の身体に水色の魔力系が幾重にも絡みつき、拘束する。

「ストラグルバインド・・・」

なんの前触れもなく降ってきた眩きに仮面達が夜空を見上げると、拘束を解こうともかく彼等の頭上には、自身のストレージデバイス――S2Uを握りしめるクロノの姿があった。

「相手を拘束しつつ、強化魔法も無効化する・・・。」

あまり使いどころのない魔法だけど・・・こういう時には、役に立つ」

言葉を紡ぎながら屋上に降り立つと、右手に手首を軸にして杖を回転させ、硬い床をその先端で軽く叩く。するとどうだろう、拘束された二人の身体が光に包まれた。

「変身魔法も、強制的に解除するからね・・・。」

光が収まった次の瞬間そこにあったのは、かつてのクロノの恩師である双子の猫の使い魔の姿だった。

外れていることを願った予想が見事に的中し、クロノは複雑な心境だ。かおるに仮面の男が使った腕の違いを指摘された時、すぐに彼女達へと疑いの目を向けた。直接の接点がなかったかおると違い、長年付き合ってきたクロノにとってこの可能性に行き当たるのは難しいことではなかったのだ。内心でまさかとは思いつつも彼女達の行動を確認した。するとどうだろう、仮面の男が姿を現した時間の前後だけ、彼女達は本局からその姿を消していたのだ。クロノの中で仮説が確信へと姿を変えた。おおかた、なのはの砲撃を防いだのがアリア、フェイトへ不意打ちをしたのがロツテだろう。

「クロノ・・・！ このおっ・・・！」

「こんな魔法・・・教えてなかったんだけどなあ・・・。」

「一人でも精進しろと教えたのは、君達だろう・・・アリア、口ッテ・・・!」

悔しげに愛弟子を睨み付ける使い魔二人に、彼は今までに無い悲しげな視線をぶつけていた。

体勢を立て直すため、なのは達は手近なビルの陰に隠れていた。なのはは額にしわを寄せ、右手首を押さえている。先程の広域魔法を受け止めた時に、手首を痛めてしまったらしい。

「なのは、ごめん・・・大丈夫・・・?」

自分の盾となつて傷ついた親友に心配そうに尋ねるフェイトになのはは笑顔を作り、「大丈夫」と返事を返す。

「・・・あの子、広域攻撃型だね。避けるのは、難しいかな・・・」

広範囲を攻撃してくる相手に、極限まで装甲を薄くした『ソニックフォーム』は明らかに不利だ。そう判断したフェイトは、バリアジヤケットを通常の『ライトニングフォーム』へと戻した。

頬を伝う涙を人指し指の背でぬぐい、銀髪の女性が静かに呟く。

「主よ、あなたの望みを叶えます・・・」

愛おしき守護者達と最愛の兄君を傷付けた者達を・・・今、破

壊します」

その言葉と同時に、彼女を中心とした辺り一帯の空が歪んだ色で染まった。魔力を持った者を強制的に閉じ込める結界を展開したのだ。

「スレイプニール・・・羽ばたいて・・・」

小さな呟きと同時に、彼女の背中の四枚二対の黒い翼がその大きさを増し、力強く羽ばたいた。ゆつくりとその身を大空に躍らせる様子は、獲物を狙う猛禽類を彷彿させる。彼女の目的はただ一つ。優しい主のはかなく悲しい願いを叶えることだけだ。

アルフとユーノが合流した直後、町全体に結界が展開され、なのは達は内部に閉じ込められてしまった。以前にヴィータが使用した結界と同種のモノだ。闇の書の管制人格は、明らかになのは達を狙っている。

「かおるから話は聞いた。今、クロノが解決法を探してる。

援護も向かってると思うけど、まだ時間が・・・」

「それまで、私達でなんとかするしかないね・・・」

ユーノの説明にフェイトが頷き、自分達の取るべき行動を確認する。

「かおるちゃんは・・・？」

「玄斗さんを探しに行つて、それっきり連絡が取れてない。

『命にかかわる事態だ』って言つてたみたいだけど・・・」

ユーノの返答になのはとフェイトの表情があからさまに暗くなった。

唇を噛みしめ、顔を悲痛に歪めている。何事かとアルフが問いただし、その理由に驚愕した。『あの』少年が死んだなどと、にわかには信じられない。例えば地球が滅亡しても、彼だけは何事もなかったかのように生き残っていきそうだった。少なくとも、彼女達はそう思っていたし、あの少年はそれほど圧倒的な存在感を持っていたのだ。

「・・・かおるは、間に合わなかったんだね・・・」

そんなアルフの呟きで、場の空気が重さを増す。とても信じられない。しかし、かの天才の残した意味深な言葉が、その信じられない事実を全力で肯定する。改めて、少年の死を感じ取り、四人の間を悲しい沈黙が流れた。

本局のギル・グレアム執務室の前に、二人の武装局員が直立不動でデバイスを構えている。現在、室内では今回の事件の捜査妨害の疑いが掛けられたグレアムとその双子の使い魔が、事実上拘留されているのだ。

「リーゼ達の行動は、あなたの指示ですね？ グレアム提督・・・」

「違う！」

「アタシ達の独断だ！ 父様には関係ない！」

限りなく確信を持ったクロノの質問に、グレアムの両脇に控えた双子の姉妹が異を唱えた。あくまでも、自分達の単独行動であり、グレアムは今回の一件に関係していないと主張する。

「ロツテ、アリア、いいんだよ・・・。クロノはもう、粗方のこ

とをつかんでる」

が、当の本人はアツサリとクロノの問いを肯定した。淀みのない目でかつての教え子を見つめ、「そうだろう？」と、問い掛ける。数多くいる弟子の中で最も優秀な彼がここまで確信に満ちた瞳で問い掛けるのは、すでに証拠をつかんでいるからだと判断したのだ。

「・・・十一年前の闇の書事件以降、提督は独自に闇の書の転生先を探していましたね」

クロノは浅く息を吐き、言葉を紡ぎながら空中にモニターを展開し、剣十字が光るぶ厚い洋書と茶色がかったショートカットの少女の映像を映し出した。

「そして、発見した。闇の書のありかと、現在の主 八神はやてを・・・」

しかし、覚醒前の主を捕らえても、あまり意味はない。主を捕らえようが、本体を破壊しようが、転生機能によつて闇の書は永遠に転生を繰り返し、次代を担う子や孫の世代で悲劇が再び起こるだけだからだ。

その問題を打破するため、グレアムはこの十年間、闇の書の永久封印の方法を探し、そして発見した。超高度な氷結魔法によつて主ごと凍結させてしまうのだ。あとは、人の手の届かない次元の狭間か氷結世界に永遠に閉じ込めればいい。これならば、闇の書の転生機能は働かず、かといって暴走もしない。いわゆる仮死状態というやつだ。

「だから、監視をしながら、闇の書の完成を待った・・・」

ただし、この方法でも闇の書完成後の暴走直前、それも主と魔導書を同時に封印しなければまるで意味がない。故に、グレアム達はその瞬間を待っていた。

「・・・両親に死なれ、身体を悪くしていたあの子とその兄を見て、

心は痛んだが・・・運命だとも思った・・・。

孤独な子であれば、それだけ、悲しむ人は少なくなる・・・」

「彼女達の父の友人を語って生活の援助をしていたのも、提督ですね・・・？」

「・・・永遠の眠りに就く前くらい、せめて、幸せにしてやりたかった・・・」

グレアムは俯いた目をつむり、自分の言葉を「偽善だな」と苦笑しつつ自ら切り捨てる。事実、彼のしようとしていたことは、管理局の人間として許されるモノではない。暴走前の主は永久凍結を受けるほどの犯罪者ではなく、明らかに違法なのだ。しかし、これにロツテが異を唱える。

「そのせいで！ そんな決まりのせいで、悲劇が繰り返されてんだ・・・！」

クライド君だって・・・アンタの父さんだって・・・！」

「・・・そうかもしれない・・・。

だが、八神玄斗・・・彼を殺害する必要はあったのか・・・？」

クロノの言葉に、身を乗り出していたロツテが押し黙った。アリアも顔を俯かせ、苦痛に表情を歪めている。

「・・・すまないことをしたとは思っている・・・。

しかし、闇の書封印の瞬間ときを邪魔されるわけにはいかない・・・

。

他に、方法が無かったのだ・・・」

妹を異常なまでに大切にしている彼のことで、はやてそのようなコトの封印を黙って見過ごすはずがない。必ず何かしらの妨害をしてくるだろう。極度の集中と絶妙のタイミングが要求される作業だけに、それだけではどうしても避けたかった。

約二ヶ月間に渡って日常生活と蒐集を休み無く行い、玄斗はあらゆる意味で限界だったはずだ。いかに魔力や戦闘力が抜きん出ていたとしても、そのような体調では全く意味がない。グレラムやリーゼ達は、極限まで疲弊した彼ならば殺すことなく取り押さえるのも、さほど難しくないと考えていた。『コト』が済むまでどこかに拘束して、自分達の邪魔が出来ないようにするだけに留めるつもりだったのだ。

しかし、その予想は無残に碎け散ってしまった。彼の能力と精神力チカラは、グレラムの予想を遙かに凌駕していた。限界近くまで身体を酷使し、足下をふらつかせながらも、睡眠不足による深いクマを刻んだその双眼には闘志が満ち満ちていたのだ。リーゼ姉妹が二人がかりで捕縛を試みるも、手加減などする余裕はまるで無かった。むしろ、手を抜こうモノなら、やられていたのはこちらだったとリーゼ姉妹は語る。

広い執務室に、なんとも言えない沈黙が流れた。が、クロノはソファーからゆっくりと立ち上がり、グレラム達に背を向けて諭すように言葉を紡ぎ始めた。

「法 意外にも、提督のプランには問題があります・・・」

そもそも、外部からの凍結の解除はそう難しいことではない。人間は、とても弱い生き物だ。どこに隠そうと、どんなに守ろうと、いつかは誰かがその力を手に入れ、使おうとするだろう。

悲しみ、怒り、妬み、傲慢、強欲……この世はあらゆる負の感情に満ちている。世界に溢れているそれらが、封じられた力へと人々を導いてしまうのだ。かつて、プレシア・テストロッサが亡き一人娘を蘇生させようと、御法度であるクローン技術に手を出し、さらには伝説上の聖地へと旅立つためにロストロギアである『ジュエルシード』を求めたように。

「……現場が心配なので、すみませんが、一旦失礼します」

そう言つてドアの前に立ち、退室しようとしたところで、クロノはグレアムに呼び止められた。

「アリア、デュランダルを彼に……」

「父さま……！」

「私達に、もうチャンスは無いよ。持っていたつて、役に立たん」

主人の言葉にアリアは目を見開き、抗議の声を上げるが、グレアムはそんな彼女を短い一言で諭す。事実、容疑者として拘束されている彼等に、今回の事件に関わる機会はあるもはや無い。

「どう使つかは、君に任せる」

ならば託そう。これから次代を担っていく若い魔導師達に。

「氷結の杖……デュランダルだ」

アリアが差し出した雪原を思わせる純白のカードの中心には、青く澄んだ宝石が日の光を浴びるしずくのように小さく輝いていた。

その頃、なのは達は苦戦を強いられていた。相手ははやての身体を媒体にした闇の書の管制人格ただ一人だが、その能力は全てにおいてなのは達のソレをことごとく凌駕していたのだ。

ユーノとアルフがバインドで拘束しても容易く破り、なのはとフェイトの同時砲撃も眉一つ動かさず易々と防ぎきる。極めつけに、なのはの最強の砲撃である『スターライトブレイカー』すら放とうとしているその姿は、あの玄斗がかわいく見えるくらいの無敵ぶりである。

以前になのはのリンカーコアを蒐集した際に所有している魔法もコピーしたのだろうが、正直そんな悠長なことを考えている暇など無かった。弱冠一名の例外がいきなり思い当たるが、あの凶悪極まりない砲撃は、至近距離で受ければ防御魔法もまるで意味を成さない防ぐためには、発射地点から出来るだけ距離を取る必要がある。

そんなわけで、なのはをフェイトが、ユーノをアルフが引つ張る形で二組に分かれて安全圏まで移動しようとしていたのだが、

「・・・な、なのは・・・？」

「・・・フェイト・・・ちゃん・・・？」

神の啓示か運命のいたずらか、なのはとフェイトは驚愕をその顔に貼り付けている親友二人と、高層ビルが建ち並ぶ十字路の中央で見つめ合っていた。

本来ならば、こんなコトはあり得ない。闇の書がこの辺り一帯に展開した結果は、現実の空間から切り離れたその内部に魔力保有者のみを閉じ込めるモノで、魔力を持たない人間は、自動的に捕獲対象から除外されるはずなのだ。

だが事実として、彼女達は自分達の目の前にいる。これが単なる事故による偶然なのか、闇の書の意味なのかは分からないが、今はそんな事を考えている余裕などありはしない。今まさに闇の書の手か

らスターライトブレイカーは放たれ、着弾点を中心として放射状に桜色の魔力が凄まじい速度で町を飲み込んでいく。

二人を連れてあの砲撃から逃れるのは、とてもではないが不可能に近い。かといって、親友である二人を見捨てるなどあり得ない。なのはとフェイトは、ここで魔力の奔流を食い止めることを心に決めた。

「二人とも、そこでジツとして！」

<デیفエンスー・プラス>

バルディッシュの機械的な男声と同時に、金色に輝く半球状のバリアがアリサとすずかを包み込む。さらに、迫り来る桜色の嵐と彼女達の間になのはとフェイトが防御能力の高い順に立ち上がり、各々の利き腕を前に突き出し障壁を展開する。これで、少なくとも一般人であるアリサとすずかに危害は無いだろう。数瞬後、少女達は轟音と共に巨大な桜色の激流に飲み込まれていった。

青空と白い雲が天を覆い、ゴツゴツとした岩山がどこまでも続く未開の世界を、藍と青の衣装を風になびかせてかおるは飛んでいた。辺りを見回し、何かを探しているようにも見える。

そんな時、顔の横に突然モニターが開き、血相を変えたエイミイといつもの無表情を貫いているリイナの顔が映し出された。

よ、よかった！ やつと繋がった……！

至急、帰還して下さい！ 闇の書が主を取り込み、なのはさん達に攻撃を……！

彼女達の報告を聞き、ある程度状況を理解したかおるは、一瞬の迷

いもなく即座に返事を返した。

「玄斗さんの搜索が、まだ終わっていません。そちらは、なのはに任せます」

その言葉に、エイミィとリイナは目を見開いた。

ちよ、ちよっとちよっと、らしくないよ！？ かおる君・・・
！

残念ながら、彼はすでに死亡しています。これ以上の搜索は無意味かと・・・

なのは達に危害が加わっていると知ってなお、かおるは玄斗の搜索を優先した。エイミィが何か変だと思うのも無理からぬ話だ。そんな彼に、現場やクロノからの話をまとめ、現在搜索中の少年の死亡をリイナが報告した。

「誰も、彼の『死体』を見たわけじゃない。死んだと決めつけるのは、あまりにも早計です」

しかし、彼女の話を聞き終えても、かおるは頑なに戻ろうとはしない。よしんば本当に死んでいたとしても、せめてその遺体を見つけてあげるべきだと、かおるは語る。

で、でもさ、かおる君・・・
「それに・・・！」

なおも帰還を促そうとエイミィが口を開いた瞬間、強い口調でかおるがそれを制する。

「それに、ボクがそちらに行っても、なんの役にも立てませんから……」

力無い少年の言葉は、どこまでも広がる青い空へと吸い込まれていた。

魔力の激流が収まり、辺りは不気味なほどの静寂で満ちていた。

「もう、大丈夫……」

「すぐ、安全な場所に運んでもらうから……」

あまりの恐怖に互いを抱きしめ、子猫のように震える親友達に、フエイトとなのはが声を掛ける。結果として、無傷で防ぎきったよう

「あの……なのはちゃん、フエイトちゃん……」
「ねえ、ちよつと……」

色々とあり得ないモノを見てしまった身としては、問いただしいことも少なからずあるだろうが、今はとりあえず説明している時間はない。この結界内は、魔法も何も持たない彼女達にはあまりにも危険すぎるのだ。幸いにも、この結界の構造自体は以前にかおるが解析を終えているため、二人を『外』に転移させるのは難しいことではない。困惑の表情を見せる少女達の足下に純白に輝く円形の魔方陣が展開され、二人の姿は音もなく消えていった。

「……見られ、ちゃったね……」
「うん……」

出来るならば、あの二人には『こちら側』の世界を知って欲しくはなかったが、知られてしまったのならば仕方がない。あとでちゃんと説明しなくては心に決めつつ、万が一を考えてユーノとアルフに二人の護衛を頼んだ。

なのはちゃん、フェイトちゃん、かおる君から連絡！
はやてちゃん
闇の書の主に、投降と停止を呼びかけてって・・・！

そんな時、唐突にエイミイからの音声通信が入った。話の内容から察するに、音信不通であつたかおると連絡が取れたようだ。

エイミイさん、かおるちゃんは・・・！？

玄斗が死んでしまった今、敵味方を問わず現時点での最高戦力は間違いなく彼だ。明らかに劣勢であるこの戦況で、その存在は実に有り難い。そもそも団体戦チームにおいて無類の強さを誇る彼にとって、一対多数のこの状況は限りなく有利にコトを運べるはずだ。

別件で忙しいため、こちらにはしばらく合流できないそうです
・・・そ、そう、なんだ・・・

が、続くリイナの声によつて、そんな淡い希望はもろくも崩れ去つた。自然と返す返事も弱々しいモノになる。

あら、普段は威勢がいいクセに、いざとなつたらずいぶんと弱腰ですこと

しかし、小馬鹿にしたようなリイナの言葉に反射的に眉をつり上げ、なのはは額に青筋を浮かべた。音声のみでの通信のためその顔を見

ることは出来ないが、口元を手で押さえ、オホホホホと笑う姿が容易に想像できる。

・・・かおるさんは、あなたに全てを託すとおっしゃいました。彼女達を救えるのは、あなたしかいない、と……。もつと、自身を持ちなさい

なんという、どんでん返しの連続だろうか。通信相手の銀髪少女は、馬鹿にしてきたと思えば、今度は励ましてくる。調子を崩されたなのは、まともな返事など出来るはずもない。

また私に馬鹿にされたくなければ、救ってみせなさい！ あなたの『魔法』で！

ッ！ うんッ！！

犬猿の仲であるはずの少女に激励され、決意の炎を再びその瞳にともし、なのはは力強く頷いた。

なのは達との通信を切り、リイナは背もたれに体重を預けて薄暗い天井を見つめた。

「ちよつと、ビックリだったなあ……。。」

リイナちゃんなのはちゃんにあんなコト言っなんて……。。」

その隣に座っているエイミイがコンソールを叩きながら、からかうように声を掛けた。

「私は、かおるさんの副官ですから。」

あの方の想いを、無駄にしなくなかったです」

エイミィのそんな口調など気にすることもなく、リイナは淡々と言葉を返した。

ん
ボクの魔法は、敵を『倒す』コトしか出来ませ

先程の通信のかおるの言葉が脳裏を横切る。

でも、なのはの魔法は、人の心を『救う』コトが出来
るんです

今回の事件は、闇の書を倒せば解決などという単純なモノではない。
だからこそ、この戦いに自分は不要だと彼は言った。むしろ、足手
まといになる、と。

以前から、かおるは事あるごとに語っていた。同じ『打ち抜く力』
でも、自分と幼なじみの魔法は大きく異なっている。自分の魔法は
『敵』を打ち抜く力、対してなのはの魔法は『運命』を打ち抜く力
だと。

『ただ敵を倒すだけならば、それこそ猿にでも出来る。理想かつ究
極の魔導師とは、傷付き疲弊した人の心をも救ってしまえる存在な
のだ』。それが、天才少年・春風かおるの持論であり、目標でもあ
る。なのははそれを、意図せず、自然にやっつけてしまうのだ。
彼女の笑顔と言葉で救われた人間が、いったい何人いるだろうか。
今回の件に、彼女以上の適任者はいない。『闇の書の真実』を知っ
た時から、かおるはそう考えていたという。

（・・・そんなコトないのに、なんであなたは・・・）
「普段は犬猿の仲なのに・・・仕事熱心だねえ・・・」

自分の世界に浸ろうとしているところで、リイナは再びエイミィのからかうような軽い呟きによって現実に引き戻された。

「・・・どれほど好ましい人物であろうと、『恋敵』に日頃から愛想を振りまくほど、

私は愛嬌のある人間ではありませんので・・・」

内心で弱冠うんざりしながらも、会話が無いのはそれはそれで息が詰まるので、仕方なく返事を返す。しかし、その内容にエイミィがめざとく反応した。

「あつれ〜？　じゃあ、『なのはちゃん』のコト自体は、そんなに嫌いじゃないんだ？」

「・・・一ヶ月間を病室のベッドで過ごしたくなければ、

余計な詮索をしないことをお勧めします」

「・・・スミマセンデシタ・・・」

が、絶対零度の怒気を浴びせられ、それ以上の深入りは出来なかったようだ。以前にケンカの仲裁をして理不尽にも投げ飛ばされたトラウマが残っていたのだろう。

（見せてもらいますよ・・・。かおるさんが崇拜すらした、あなたの『魔法^{チカラ}』を・・・）

リイナとて、興味がないわけではない。はたから見て魔力がただ大きいだけの幼い少女に、悲しい夜をさまよいつける魔導書を救うことが本当に出来るのか。戦いの行く末を見守るべく、いつになく鋭い眼差しで銀髪少女はモニターを見つめていた。

リイナとの通信を切ったのはとフェイトは、暗い夜空に佇む闇の書へと停止を呼びかけ、自分達の身の潔白を必死に訴えた。玄斗達を傷付けたのは、自分達ではない、と。

「我が主は、この世界が・・・」

「ご自分の愛する者達を奪ったこの世界が、悪い夢であってほしいと願った・・・」

我はただ、それを叶えるのみ・・・！」

しかし、闇の書はいつこうにその行動を止めようとはしない。そもそも、こちらの言い分を聞いているのかどうかさえ怪しい。

「主には、穏やかな夢の中で永久とわの眠りを・・・」

そして、愛する兄君と騎士達を奪った者には、永久とわの闇を・・・

！」

「闇の書さんッ・・・！！」

つむっていた深紅の瞳を開き、目の前に手をかざして足下に闇色のトライアングルを展開する。彼女はあくまでも、なのは達と戦うつもりだ。しかしながら、それは少女達の望むモノではない。悲鳴にも似たなのはの叫びが冷たい空に木霊する。

「・・・お前も・・・その名で、私を呼ぶのだな・・・」

それまで表情の見えなかった顔が悲しげに歪む。

突如として、コンクリートの大地に亀裂が広がり、そこから無数の触手が湧き出てきた。コレまで玄斗達が蒐集してきた生物の生体パ―ツだ。咄嗟のことで反応が遅れ、なのはばかりか速さに定評があ

るフェイトまでもが絡め取られてしまった。華奢な身体を幾重にもとぐろを巻くように強く締め上げられ、二人の口から思わず苦悶の声漏れる。

「それでもいい……。私は、主の願いを叶えるだけだ……」

遙か昔から、そうやってきた。他になせることなど、何もないから。

「……願いを、叶えるだけ……？」

そんな願いを叶えて……。それで、はやてちゃんは本当に喜ぶの!？」

体中を走る痛み能耐えながら、なのはは叫ぶ。心を閉ざし、思考をやめ、主の願いを叶えるだけの道具としてあるだけで、本当にそれでいいのか、と。とてもそうとは思えない。見てしまったから。深紅の瞳の奥に宿る暗い闇を。

「……私は魔導書……。ただの、道具だ」

「だけど！ 言葉を使えるでしょ!？ 心があるでしょ!？」

あくまでも淡々と、感情の見えない声で言葉を紡ぐ闇の書に、なのはは声をからさんばかりに叫んだ。なぜなら、自らを『道具』と断ずる彼女は、痛みに耐えるように顔を歪め、深紅の瞳から止めどなく涙を流しているのだから。

「そうでなきゃおかしいよ……。本当に心が無いなら、泣いたりなんか、しないよ!！」

「この涙は、主の涙……。私は道具だ……。悲しみなど、無い……」

刹那、少女達を金色の魔力光が包み込み、その身体を緊縛していた触手は一本残らず消滅した。

「悲しみなど無い・・・？」

そんな言葉を、そんな悲しい顔で言っただけ・・・誰が信じるもんか！！」

バリアジャケットを『ソニックフォーム』へと変え、フェイトが叫ぶ。自らの心に背を向けている彼女と、過去の自分を重ねているのだろう。

「あなたにも心があるんだよ・・・。悲しいって言っているんだよ・・・？」

あなたのマスターは・・・はやてちゃんは、きっとそれに答えてくれる、優しい子だよ！？」

「だから、はやてを解放して！ 武装を解いて！ お願い！！」

守護騎士達の罪を受け止め、共に生きようとしていたあの少女のこ
とだ、目の前で泣いている壊れた古書の悲しみも後悔も全てを受け
止めてくれるだろう。管制人格かのじよや主はやての協力さえあれば、まだ希望がある。なんとか心を開かせようと、なのはとフェイトは必死に叫んだ。

その時だった。脈絡もなく大地が大きく震え、町の至る所からコンクリート突き破って激しく燃えさかる火柱が天へと突き刺さる。

「早いな・・・。もう、崩壊が始まったか・・・。私もじきに、意識を無くす・・・。」

そうなれば、すぐに暴走が始まる・・・。意識のある内に、主の望みを、叶えたい・・・。」

ついに、破滅へのカウントダウンが始まったのだ。残された時間はあと僅かしかない。暴走が始まれば、主の願いも自分の意思も関係なく破壊と殺戮の連鎖を繰り返すだけだ。その前にせめてと、闇の書はその手に魔力を込める。どうあっても、考えを改めるつもりはないらしい。

「この・・・だっ子・・・!!」

<サンダードライブ>

堂々めぐりも甚だしい会話にしびれを切らしたのか、フェイトが漆黒の戦斧を振りかぶる。彼女の四肢で輝く雷で編まれた翼が、バルデッシュの声と共に一層強く羽ばたいた。

「言うこと・・・聞けえッ!!」

相棒を両手で強く握りしめ、金色の閃光が空気を切り裂きながら突撃する。極限まで高めた速度にさらにブーストを掛けたため、その姿はもはや目に映ることもままならない。

しかし、闇の書は慌てた様子もなく静かに左手をかざして、下から斬り上げられた漆黒の一撃を障壁によって難なく受け止めた。

「お前も、我が内で、眠るといい・・・」

そんな呟きと共に傍らに浮かぶ洋書が怪しく輝き、フェイトの身体が淡い光に包まれる。

「全ては、安らかな眠りの内に・・・」

次の瞬間、携えた戦斧もろとも光の粒子となって、少女は跡形もなく夜の空へと溶けていった。

第十一話 「運命」(後書き)

作「とゆーわけで、主人公がまさかの戦線離脱宣言をした第十一話でした」

エイミィ「ホントに、こんなんで大丈夫なの？」

リイナ「なのはさん達だけでは、あまりに役不足だと思いますが？」

リンディ「実際、かおるさんの方が、なのはさん達よりも魔導師ランクが上なのよねえ・・・」

クロノ「前回の『能力値比較』を考慮しても、かおるという戦力は外せないんじゃないか？」

作「いや、この戦いは本編でかおるが言っているように、はやてと闇の書を『救う』戦いだからな。

効率よく敵を倒す戦闘しかできないかおるでは、むしろ足手まといなのさ」

エ「・・・よく分かんないなあ・・・」

リン「まあ、戦闘は常に、何かあるか分からないモノ・・・。ランクが絶対とは言い切れないけど・・・」

ク「それでも、少し無謀すぎると思うがな」

リイ「フェイトさんも最終的に消えちゃいましたしねえ」

作「そう、次回でなのは達は自分達の実力や心と一対一^{サシ}で対峙するのだ！」

そこに余計な横槍や不要な人間はいらない！
じゃないと、彼女達の見せ場がなくなっちゃうじゃないか！」

ク「なんだかんだと理屈をこねて、結局それが本音か・・・」

作「あと、リイナがなのはを励ますシーンをどうしても入れたかったしネ」

エ「あゝ、あれは意外だったねえ・・・」

リイ「私は、かおるさんの意思を伝えただけです」

エ「またまたあゝ。素直じゃないんだからあゝ」

リン「これが、俗に言う『ツンデレ』なのかしら？」

ク「・・・変な単語を覚えないで下さい」

リン「若いつていいわねえ」

ク「・・・頼むから、急に老け込まないで下さい・・・」

作「今回の後書きは本編で暇をもてあましてる皆さんでお送りしました」

全「誰が暇かッー!!」

作「それでは、いつになるか分かりませんが、また次回でお会いし

ましよう
「

全「話を聞けッ！！！」
」

オリキャラ設定資料

明けましておめでとうございます。いやあ、最近やたらと寒いですなあ。

と、それはさておき、いつの間にか2万アクセス突破しました！ユニークも5千に届きそうだし、お気に入り登録人数もいつの間にやらかなり増えてるし・・・

人生は何が起きるか分らない・・・。

とにかく、この場を借りてお礼申し上げます！

今年も頑張つて書いていきますので、なにとぞよろしくお願いします。

あ、感想なども、できればご協力お願いします。

オリキャラ設定資料

作者「とゆーわけで、今回はオリキャラ達の設定資料を公開しよう
と思います」

はやて「ちょい待ち。本編はどーしたんや、本編は」

作「えー、現在、執筆が行き詰まりまくっておりますて・・・」

フェイト「それで、苦し紛れにこんなコトを・・・」

作「さ、さて、暇つぶしにでも見ていって下さい（汗）」

なのは「分かってはいたけど、いーかげんだなあ・・・」

氏名：春風 はるかぜ かおる

立ち位置：なのはの幼なじみ、本作の主人公

所属：私立聖祥大附属小学校、時空管理局 本局武装隊
階級：一等空士

役職：捜査官

取得資格：小隊指揮権、デバイスマイスター

性別：男

年齢：9歳

身長：フェイトと同程度

魔導師ランク：A A A +

魔力光：空色

レアスキル：魔力変換資質『風』

魔法：ミッドチルダ式

デバイス：アームド型インテリジェントデバイス『フェザーハート』。

クレセントモード：三日月型の刀身を持つ薙刀。機動力重視の基本形態。

ブラストモード：長い柄と巨大な刀身を持つ大矛。攻撃・防御能力重視の形態。

グングニルモード：円錐型の長大な槍。^{ランス}一切の汎用性を捨て、魔力の

出力向上と大威力砲撃に

全ての力をつぎ込んだフルド

ライブ形態。

待機形態はレイジングハートとは色違いの青色の宝玉バリアジャケット：純白の上衣、青い袴、藍色の羽織。

ぶつちゃけ、青い袴の巫女さんが羽織を羽織った感じ。

外見：クセのないショートカットの黒髪、

丸みを帯びた目とかわいらしい顔立ちで、一見すると美少女にしか見えない。

性格：物静かでおとなしく、引っ込み思案。

何気ない仕草にもどこかのお嬢様のような気品を感じさせる。

（→女子にしか見えない最大の原因はコレ）

一方で、自分の信念と理想を追いかけ、

何事にも最善を尽くそうとする強い面もある。

あらゆる分野の知識に精通しており、

通学している聖祥大附属小学校ではその名を知らぬ者はいない『天才少年』。

趣味は料理とお菓子作り。

CVイメージ：日高 のり子

作「本作の主人公だな。」

名前の由来について言うと、『春風』は風使いであることから、『かおる』は名字になぞらえて、それっぽくて可愛いのを選びました。

詳しいことは、広辞苑とか国語辞典を参照して下さい」

な「魔力変換てレアスキルなの？」

フェ「うん・・・そんなことないと思うけど・・・」

作「『魔力変換』自体が珍しいのではなく、

『風』に変換出来る事が珍しい、という設定です」

は「あ、なるほどなあ」

フェ「私としては、9歳で指揮官の資格持つてる方が不思議だけど・・・」

な「そこら辺はまあ・・・かおるちゃんは『天才』だから・・・」

は「私もそんな頭脳欲しいわあ・・・」

作「こいつの唯一にして絶対の特徴だ。

容姿端麗で超天才で運動神経もあって性格もいい『完璧超人』
なんだけど・・・」

な「女の子よりも男の子にモテるんだよね・・・」

フェ「・・・へ・・・？」

作「まあ、決して女子に人気が無いわけではないんだがな」

な「ファンの男女比が、男：女＝7：3で・・・」

は「・・・男子の圧勝やな・・・」

な「未だに女の子だと思ってる人もいるみたいなんだ・・・」

フェ「は、はははは・・・なのはにとっては、よかったんじゃない？」

は「まあ、女の子みたいな名前と外見の上に、

ＣＶのイメージがこの人じゃあ、しゃあないな・・・」

作「オレの理想としては、

『犬夜叉』の桔梗姉様と『らんま1/2』のあかねを足して割った感じだ」

フェ「・・・男の子の声じゃない・・・」

作「それがかおるの個性だからな！」

は「かわいそすぎるやろ・・・」

もーちよい、名前だけでもどーにかならんかったんか？」

作「他に考えたのは、『はるか』とか『さくら』とか・・・」

は「・・・もーえーわ・・・」

作「だいたい、主人公はかわいそうなくらいが丁度いいんだよ。

短所が無くちゃつまらないじゃないか！　ただでさえ能力が高いんだから！」

な「短所と言うより、トラウマなんじゃ・・・」

作「はっはっはっ！　神よ！　彼に七難八苦を与えたまえ！！」

な・は・フエ「・・・サイテーだ、この人・・・」

氏名：八神 玄斗^{やがみ　くると}

立ち位置：はやての実兄、主人公のライバル

所属：海鳴市立第一小学校

階級：無し

役職：生徒会会長

取得資格：古流武術『止水流水流』^{しすいけうすい} 免許皆伝

性別：男

年齢：12歳

身長：クロノより少し高いくらい

魔導師ランク：S＋SS（詳しくは『登場人物能力比較』参照）

魔力光：白銀

レアスキル：古代ベルカ式魔法

魔法：古代ベルカ式（『防御』『飛行』のみ。『攻撃魔法』は一切使用できない）

デバイス：インテリジェント搭載型アームデバイス『盾月』^{しゅんげつ}。

駿月^{しゅんげつ}：速度・機動力重視の形態。

襲月^{しゅうげつ}：身体強化重視の形態。

月華^{げっか}：全魔力を防御のみにつぎ込んだ形態。

魔法・物理を問わず全方位からのいかなる攻撃にも耐えうるが、

燃費はすこぶる悪く、長時間の展開には向かない。

起動形状に変化はなく、いずれも肘まで両腕を覆う鋼の籠手。

待機形態は二つの三日月が掘られた銀色の腕輪。

バリアジャケット
騎士甲冑：黒いチャイナドレスにズボンという、

典型的な中国武術家のイメージそのまんま。

外見：腰まで伸ばしたストレートの黒髪、

刃のように鋭い眼差しが印象的な整った顔立ちの超二枚目。性格：常に沈着冷静で表情の変化が少なく、基本的には質実剛健の正義の人。

溢れる正義感でもって鎮圧せしめた事件は、大小合わせれば挙げると切りがない。

しかし、家族や知り合いが絡むとお人好しで甘い面を見せることも。

世話好きで頼まれごとは冷淡な態度を取りながらもついつい引き受けてしまうため、

現在は生徒会長の職に就いている。

八神家一の大食漢で、大の風呂好き。

趣味は読書や料理、庭木の手入れなど意外と多い。

CVイメージ：成田 剣

作「こいつは主人公の最大かあるのライバルとして当初から考えてたキャラだな。

文武両道、冷静沈着なクールガイ、超イケメンと、三拍子そろったチート野郎だ」

フェ「武術の達人なんですよね？」

作「そ。だから名前も、達人・専門家を意味する『玄人』^{けんじん}からきてる」

な「もしかして、モテるんですか・・・？」

作「はい、めちゃくちゃモテます！ それもおるとは違って、相手は100%女子です！」

フェ「・・・いや、そーだな」

は「って、兄ちゃんのCV、成田さんなん！？」

な「ど、どうしたの？ はやてちゃん」

は「どーしたもこーしたも、成田さんって言えば、

『ストライカーズ』のスカリエッティ役の人やん！！」

作「・・・そーいや、そーだな」

フェ「『そーだな』じゃないですよ！ 何を考えてるんですか！？

よりによって、スカリエッティと同じ声だなんて・・・！」

作「んなコト言われても、オレのイメージは『犬夜叉』の殺生丸だもん。

外見だって、ぶっちゃけ殺生丸の背が縮んで

顔の模様が無くなって髪と目が黒くなっただけだし」

な「またソレですか・・・てゆーか、もっと物騒なんじゃ・・・？」

作「だいじょーぶ。性格はまるで別人だから。同じくらい無表情ではあるけどね。」

無言のまま通行人を一刀両断したりはしないよ」

フェ「一刀両断で・・・」

は「ちゅーか、声質低すぎなんやないか？ 兄ちゃん、まだ12やで？」

作「いや、本編でも『少年とは思えない低い声』みたいな描写があるし、

むしろピッタリじゃないか？ ちょっと早い声変わりってことだな」

な「早すぎないかな・・・」

フェ「かおると玄斗さん、両極端だよね・・・」

は「短所も無いしなあ・・・」

作「オレが思いつく限りの最強バグキャラにしてみたぜ！」

な「バグって・・・」

作「でもま、万能じゃあないんだよ。

使える魔法が『防御』と『飛行』だけだったり、月華は燃費が悪かったり・・・」

は「まあ、妥当なハンデやろな」

フェ「それでも充分すぎると思うけど・・・」

氏名：リイナ・クルセイド

立ち位置：かおるの部下、なのはの恋敵

所属：時空管理局 本局武装隊

階級：三等陸士

役職：捜査官補佐、管制官

取得資格：1級通信士資格

性別：女

年齢：9歳

身長：なのはと同程度

魔導師ランク：無し

魔力光：無し

レアスキル：剛力無双（ただの馬鹿力）

魔法：無し

デバイス：無し

バリアジャケット：無し

外見：ショートカットの銀髪、雪のように白い肌が印象的な美少女。

カワイイ系というよりはキレイ系。

性格：根はいい子だが、普段は無口、無表情の取っつきにくいクールな子。

他人にも自分にも厳しく、言にくいことでもストレートに言ってしまう超毒舌。

かおるを心から慕っており、基本的には彼の指示にしか従わない。

そのためか、幼なじみであるなのはにジェラシーを感じ、事あるごとに衝突している。

趣味は読書。

ＣＶイメージ：林原 めぐみ

作「こいつは元々、登場させる予定は全く無かったんだよねえ」

な「ええ!？」

作「よって、名前もテキトーです」

は「ひどいなあ・・・」

作「書いてる内に、なんと云うか『お遊び』のようなモノが欲しくなりまして・・・」

フェ「と言うと・・・?」

作「かおるを主人公として目立たせるためには、

クロノには一旦リタイアしてもらわないとアレなんだけど、

貴重なツツコミキャラである彼が現場から消えるから、

下手にボケを入れるとキャラ達が永遠にボケ続けるし、

かといって、ずっとシリアスなのは息が詰まるし・・・ってことで、

いっそのことツツコミ要因を追加するか、て閃いたわけさ」

な「で、なんで私の恋敵にしたんですか・・・?」

作「恋愛モノで三角関係って定番じゃん!？」

は「・・・まあ、そうやな・・・」

作「プラス、なのはのケンカ友達みたいのを出したいと、とーとつ

に思いついたから♪

周りが仲良しこよしな友達ばかりだから、キャラが被らないようにしたかったのだ」

フェ「レアスキルの『剛力無双』っていうのは・・・」

作「ツツコミ役なんだから、並の人間には荷が重いし、かといって、戦闘要員にすると他のキャラの見せ場が減るし・・・

・
つて、考えに考えた結果、『腕力最強の事務職員』
という非常識なキャラクターになりました」

は「レアスキルになってるのはなんでや？」

作「それぐらい常軌を逸した怪力つてコトさ」

な「えーと・・・玄斗さんと腕相撲したら・・・」

作「よーでリイナが勝つ！

でも、戦闘訓練なんてしてないから、戦闘力自体は最弱だ」

は「・・・強いのか弱いのか分からん・・・」

フェ「えと、CVのイメージはもしかして・・・」

作「『名探偵コナン』の灰原さんをイメージしました」

な「やっぱり・・・」

は「つて、みんな『サンデー』のマンガやないか!」

作「いーじゃねーか！ 好きなんだよ！！」

な・は・フエ「」「逆ギレ！？」」「」

オリキャラ設定資料

というわけで、いかがだったでしょうか？

冒頭で申したように本編の方が行き詰まったため、設定資料を写したモノにヒロイン達のコメントを入れてみました。ハッキリ言って、苦し紛れ以外の何物でもありません・・・。

しかしまあ、前々回の『登場人物能力比較』では紹介できなかったリイナの設定やかおると玄斗の細部設定を紹介できたので、作者としては嬉しい限りです。

文章中にもあるように、自分は『サンデー』マンガの大ファンです。『らんま1/2』『犬夜叉』『MAJOR』『名探偵コナン』etc・・・みんな傑作だと思います！

と言うわけで、オリキャラ達の外見や性格はこれらの作品のキャラを参考にしてたりします。性格はともかく、キャラの外見的特徴を考えるのが死ぬほど苦手なモノで・・・(汗)。

かおるは本文にもあったように、あかねの容姿と桔梗のような落ち着いた声質をイメージしました。この二人のCVが奇しくも同一人物なのは、運命と言ってもいいかもしれませんね(笑)。

しかし、性格の方は彼女達ほど『強く』はありません。もちろん、根っこには『強さ』を持っているのですが、基本はあくまで『お嬢様みたいな子』なのです。

玄斗はメンバー随一のイケメンという設定ですが、イメージは本文通りもろ殺生丸です。彼は私の中のイケメンキャラランキングの上位五指に入る人物(?)です。

敵や気に入らない相手には彼と同様に冷徹な態度を取りますが、家族や親しい相手には不器用ながらも優しい一面を覗かせます。

とは言え、性格に関して言えば、彼よりは映画三作目に出てきた彼の父親が一番近いのかもしれませんが。

リイナの容姿は、『クールで知的な女の子』をイメージしました。灰原さん以上にクールで、『犬夜叉』の七宝以上にツツコミのキレがいい毒舌さんです。

彼女にだけは恨まれないようにした方がいいかもしれませんね。きっとあまりに真実をついた毒舌でトラウマになります（笑）。

さて、残すところあと数話ですが、原作とは弱冠違うラストになる予定です。更新自体は遅くなると思うので、気長にお待ち下さい。はあゝ・・・一日が72時間くらいあればいいのに・・・。

第十二話 「聖夜の贈り物」 (前書き)

五千ユニーク、とつくに突破してました。久しぶりに本編を更新です。

今回は^{わたし}作者的にも予想外の展開となっております(汗)。
無計画な自分の性格が恨めしい・・・。

第十二話 「聖夜の贈り物」

暗く冷たい夜空の下で、なのはただ呆然と立ち尽くしていた。それも当然だろう。目の前で、親友が光の粒子となって跡形もなくなき消えてしまったのだから。

しっかりしなさい！！

あまりの出来事で停止していた意識に、銀髪少女の叱咤の声が割り込んできた。

フェイトさんの生命は未だ健在です！^{バイタル} 闇の書の内部空間へ幽閉されただけです！

彼女の情報処理能力はかおるにも匹敵する。加えて、根拠のない気休めなどは一切言わない性格。よくケンカをする犬猿の仲だが、だからこそ、なのははリンディやエイミィ達よりも彼女のそんな部分を熟知していた。かおるとはまた違った安心感が、純白の戦闘服に覆われた胸の中に広がっていく。

「我が主もあの子も、覚めることない眠りの内に、終わりなき夢を見る……。」

生と死の、狭間の夢……それは、永遠だ……」

「……永遠なんて、無いよ……。」

みんな変わってく……変わっていかなきゃ、いけないんだ……！」

そこにいるのはもはや、親友の消滅に狼狽する少女などではなく、

「私も、あなたも！」

大いなる誓いを胸に、悲しい運命へと真つ向から挑むべく自身の相棒たる杖を構える、一人の戦乙女^{ヴァルキリー}であった。

フェイトはゆっくりと重いまぶたを開けた。目の前に広がるのは、見覚えのある青い天井。窓から漏れる日の光と小鳥たちのさえずりが、朝の訪れを優しく告げている。

未だ眠気が退かない目をこすりつつベッドから身体を起こすと、信じられない光景がその赤い瞳に跳び込んできた。自分とそっくりな金髪の少女が、子犬形態のまま寝返りを打っているアルフのすぐ隣でかわいらしい寝息を立てているのだ。

「フェイト、アリシア、アルフ、朝ですよ」

状況が理解できずにいると、突然に広い寝室のドアがノックされ、向こう側から聞き覚えのある女性の声が聞こえてきた。

（まさか・・・）

あり得ない

「おはよ、フェイト」

隣で寝ていた少女も『彼女』の声で起きたのか、自分と同じ赤い瞳を眠たそうにこすりながら、あくび混じりの朝の挨拶をしてくる。

あり得ない

「みんな、ちゃんと起きてますか？」

「はい」

「んゝ・・・眠い・・・」

扉を静かに開けて入ってきた、ボーイのような帽子と身体のラインを強調するかのように肌にピッタリと張り付いている服が印象的なショートカットの女性に、それまで眠っていた少女とアルフが眠たそうに返事を返す。

あり得るはずがない

「二人とも、また夜更かししてたんでしょお」

「ちよつとだけだよ」

窓のカーテンを開けながら柔らかく注意する女性の言葉に頬を膨らませながら反論し、「ねゝ」と、少女とアルフはお互いに笑い合う。息がピッタリだ。

「早寝早起きのフェイトを見習って欲しいですね。アリシアはお姉さんなんですから」

女性のその一言に、少女はさらに頬を膨らませた。

なぜなら

「あの・・・リニス・・・？」

「はい、なんですか？ フェイト」

自分は彼女達を知っている。彼女は自分の幼い頃の世話係であり、家庭教師でもあった母の使い魔。

「・・・アリシア・・・？」

「ん？」

彼女は自分の『姉』とも言える少女。だからこそ、信じられなかった。

彼女達は、すでにこの世にいないのだから――

「・・・ふー、前言を撤回します。今朝はフェイトも寝ぼけ屋さんのようです」

ため息混じりのリニスの言葉に、アリシアが無邪気な笑いを漏らす。

「さあ、着替えて。朝ご飯です。プレシアはもう食堂ですよ」

パンと両手を打ち合わせつつリニスが口にしたその単語に、反射的にフェイトの身体がビクリとはねた。

あまりにも高い天井と特大の長テーブルが目を惹く食堂で、紫の長髪が印象的なその女性は朝の紅茶を味わいつつ静かにイスに腰掛けていた。プレシア・テストロッサ。かつて『大魔導師』と謳われ

た凄腕の研究者である。

「母様、おはよー」

「おはよー、プレシアー」

アリシアとアルフがその傍らに駆け寄り、個性豊かな朝の挨拶をする。優しい眼差しを向けつつ、答えるプレシアであったが、ふと人数が足りないことに気がついた。不思議に思い、愛娘達との教育係兼お世話係である自らの使い魔——リニスへと問い掛けるような眼差しを向けると、彼女は苦笑しながら背後の円柱へと視線を向けた。

「ほら、フェイト」

リニスの言葉に促され、プレシアのもう一人の娘——フェイトが、おずおずと柱の陰からその姿を現した。心なしか、その瞳には困惑と恐怖がない交ぜになっているようにも見える。

「フェイト、どうしたの？」

「どうも、何か怖い夢でも見たらしくて……今は夢か幻だと思ってるみたいですよ」

俯いたままの愛娘へのプレシアの問い掛けに、リニスが自分の予想を含めて簡潔に代弁した。勉強のしすぎではないかと、アリシアとアルフはからかい半分に笑っている。

「フェイト、いらっしやい」

そんな母の優しい声と手招きに誘われ、フェイトはゆっくりと彼女の傍らへと歩み寄る。顔を強張らせた少女の両頬をプレシアの手が包み込んだ瞬間、フェイトは思わず肩を振るわせ、戦慄した。ム

チを振り下ろす母の姿が脳裏にフラッシュバックする。

「怖い夢を見たのね……。でも、もう大丈夫よ。

母さんもりニスもアリシアも、みんなあなたのそばにいるわ」

しかし、目の前の母は少し心配そうな顔で、自分を優しくなだめ、励ましてくれた。過去の記憶の、そのままの表情^{かお}で。

そんなプレシアの言葉に、アルフが不満げに抗議を漏らす。彼女の言う『みんな』の中に、自分が含まれていなかったのが気に入らなかったようだ。尻尾を激しく振って自己主張する子犬に、プレシアは眉尻を下げて本当に申し訳なさそうに謝罪を述べる。「私も年かしらね……。」などという小さな呟きが聞こえたのは、気のせいではないだろう。

「まあ、朝食を食べ終わる頃には、悪い夢も忘れるでしょう」

「さあ、席について。せっかくの食事が冷めてしまうわ」

リニスとプレシアに促され、フェイト達はそれぞれ自分の席に座り、静かながらも楽しげで温かな朝食を取り始めた。

……違う。これは夢だ。フェイトは、そう直感していた。プレシアがフェイトに対してこのように笑ったことなど、一度足りとて無かった。アリシアやリニスも、すでにこの世にはいない。こんなコトは、あり得ないのだ。しかし……

「ねえ、今日はみんなで町に出てみましょうか」

「フェイトに新しい靴も買ってあげないといけませんし」

「あゝ、フェイトばかりずるゝい」

「魔導試験満点のご褒美だつてさ。アリシアもガンバレ」

コレは、間違いなく、自分が望んでいたモノだ。記憶のままの優し

い母親。温かな家族。自分が望んでやまなかった、しかし手に入らなかった幸福が、今ここにある。

気がつけば、白い頬に、涙が一筋流れていた。

なのはと闇の書の戦闘は、海上へとその舞台を移していた。旗色
は、決断しているとは言えない。繰り出される拳を障壁で防いでも、
それは一瞬でしかなく、

「ッ・・・！ ああッ！？」

一撃で守護の盾を破砕され、続く二撃目をまともに食らい、冷たい
海へと叩き付けられる。圧倒的魔力と実戦経験に裏付けられた実力、
まるで玄斗を相手にしているかのような。誰の目から見ても、力の
差は歴然である。

しかし、疲労から肩で息をしながらも、少女の目には有り余る闘志
がみなぎっていた。

「マガジン残り三本・・・カートリッジ十八発・・・。
スターライトブレイカー、撃てるチャンスあるかな・・・？」

彼女との能力的アドバンテージの差は、生半可なことでは到底埋め
られない。真正銘全力全開の一撃を見舞うしか方法は無いが、ア
レはチャージ時間が長すぎる。ただ単に単発で撃っても、避けられ
るか、発射前にこちらが墜とされてしまうだろう。何か他に方法は
無いものかと、なのはは考えを巡らしていた。

<手段はあります>

しかし、レイジングハートが即座に朗報を告げた。愛機の自信に溢れた即答に、なのはは耳を傾ける。

<『エクセリオンモード』を起動して下さい>

が、その提案は、とても了承できるモノではなかった。幼なじみの少年の忠告が、頭をよぎる。

「ダメだよ！ あれは本体を補強するまで、使っちゃダメだって・・・！」

私がコントロールに失敗したら、レイジングハート、壊れちゃうんだよ!？」

元々、ミッドチルダ式のインテリジェントデバイスであるレイジングハートは、ベルカ式のアームドデバイスに比べて遙かに繊細だ。本来であればカートリッジシステムを組み込むこと自体が無茶であり、これまでの戦闘でも多くの負荷がかかっている。補強作業が終了していない今、フルドライブたるエクセリオンモードを起動すれば、本体の耐久性を越えた出力によってレイジングハートが破砕してしまうかもしれない。今まで幾度となく共に危機を乗り越えてきた相棒を自分の力不足で失ってしまうかもしれない。なのはは脅えていた。

<起動して下さい、マスター>

しかし、魔導の杖の意志は固かった。何度も同じ言葉を連呼する。希代の天才、春風がおるが主に託した切り札を起動するように、と。信じているのだ。かおるが開発したシステムを。そして何よりも、自分が自らの意思で選んだ最高の主を。

光の無い、暗く静かな世界。はやては、そんな世界を愛用の車イスに腰を下ろし、今まさに深い眠りに落ちようとしていた。

（私は、何を・・・望んでたんやっけ・・・）

頭がボーッとする。思考がまとまらず、誰ともなく虚空に問い掛けた。

<夢を見ること・・・悲しい現実は、全て夢となる、安らかな眠りを・・・>

答えは、すぐに返ってきた。とても優しそうな、悲しそうなそんな声が。

（・・・そう、なんか・・・？）

閉じていた目を薄く開く。そこには、綺麗な銀色の長髪をなびかせる美しい女性が、寂しげに笑っていた。

冷たい夜風が吹きすさぶ中、両者は互いの目を見つめ、対峙している。

「お前も、もう眠れ」

「いつかは眠るよ・・・だけど、それは今じゃない・・・」

今は、はやてちゃんとフェイトちゃんを助ける・・・！ それから、あなたも・・・！」

主の決意の声と同時に、レイジングハートからカートリッジが一発弾き出された。

もう迷わない。きっと大丈夫。この時のために、悲しい運命を打ち抜くために、自分は魔法を学んできたのだから。

「レイジングハート、エクセリオンモード！ ドライブ！！」
<イグニッション>

魔導の杖が、その形を見る間に変えていく。想いを貫き、運命を打ち抜く力、そんな彼女の魔法を具現化させた、最終形態。金色に輝く美しい槍。

「繰り返される悲しみも、悪い夢も、きっと終わらせられる……！」

心を通わせた愛機と、世界で最も信頼できる技術者から受け継いだ魔法がある。あとは、自分と相棒を信じて、この想いを貫くだけだ。

青々とした草が茂る野原に、ぽつんと一本の大樹が佇んでいる。そんな木の下で、フェイトは空を見上げながら考えにふけり、アリシアは少し離れたところで愛読の本を読んでいた。すると、どこからか雷鳴が聞こえ、晴れ渡っていた空は徐々に暗くなっていく。

「あれ……？ 雨になりそうだね……。フェイト、帰ろう？」

傘を持ってきていないため、このままでは雨に打たれてしまう。アリシアは本をたたみ、フェイトに帰宅を促した。

「ごめん、アリシア……。私はもう少し、ここに……。」

しかし、フェイトは帰ろうとはしない。その瞳には、かすかだが寂しげな光が揺れていた。

「そうなの？　じゃ、私も！」

そんな妹を不思議に思いながらも、アリシアは彼女の隣へと駆けていく。

「一緒に、雨・宿・り♪」

アリシアがフェイトの左隣に腰を下ろして間もなく、本当に雨が降り出した。それほど強くはないので、木下にいれば濡れることはなさそうだ。

「……。ねえ、アリシア……。これは、夢……。なんだよね……？」

しばらく続いた沈黙を、フェイトの呟くような問いかけが破った。

「わたしフェイトとあなたアリシアは、わたし同じ世界にはいない……。
あなたアリシアが生きてたら、わたしフェイトは……。生まれなかった」

フェイトは、魔導炉の爆発事故で亡くなったアリシアの遺伝情報から、プレシアの手によって生み出されたクローン体だ。アリシアが死んだからこそフェイトは生まれ、アリシアが生存していればフェイトが生まれることはなかった。同じ次元には、二人は存在し得ない。

リニスにしてもそうだ。彼女はプレシアがフェイトを一流の魔導師に育てるために生み出した使い魔であり、その役目を終えた彼女もまた、とうに天に召されたはずなのだ。

「そう、だね・・・」

それまでフェイトの言葉をただ聞くだけだったアリシアが、戸惑いながらもその事実を肯定する。

「母さんも、フェイトには・・・あんなに優しくは・・・」

クローン技術で生み出された命とは言え、完全に元となった人物にはなり得ない。実際、フェイトとアリシアは性格も魔力資質も、利き腕さえも違っていた。『フェイトはアリシアではない』事実には、プレシアは再び絶望し、『アリシアの形をただけの、ただの人形』として、酷い仕打ちを繰り返していたのだ。

「優しい人だったんだよ・・・だから、壊れたんだ・・・。
死んじゃった私を、生き返らせるために・・・」

「・・・うん・・・」

それは、フェイトも知っている。『アリシア』の記憶の中にいる母は、いつも優しい笑顔で語りかけてくれるから。

「ねえ、フェイト・・・夢でもいいじゃない。ここにいます
と一緒に・・・」

私、ここのなら、生きていられる・・・。フェイトのお姉さん
でいられる・・・。

母さんとアルフとリニスと・・・みんなと一緒にいられるんだ
よ？

フェイトが欲しかった幸せ、みんなあげるよ?」

寂しげな姉の言葉が、フェイトの心に染み渡る。この世界は、間違はなく自分が望んだ世界。優しい母親、楽しい家族との団欒、幸せな日々、全てがここにあるのだろ。少女の心は、夢と現実の狭間で揺れていた。

「私が、欲しかった幸せ・・・」

<健康な身体・・・愛する者達との、ずっと続いていく暮らし・・・。>

眠って下さい。そうすれば、夢の中であなたはずっと、そんな世界にいられます>

目をつぶりかけた少女の脳裏に、今は亡き兄の顔がよぎった。少女は頭を振り、目の前の女性を強い眼差しで見据える。

「・・・せやけど、それはただの夢や」

闇と桜、二色の閃光が夜の空で幾度となく交差し、一度距離を取った。

「一つ覚えの砲撃・・・通ると思ってか・・・」

漆黒の衣装にホコリ一つ付けることなく、管制人格は無謀にも自分に向かってくる少女を冷たい目で見下ろす。

「通す・・・！ レイジングハートが力をくれてる！ 命と心を懸けて応えてくれてる！」

しかし、なのはの心は揺らがない。槍と化したレイジングハートからカートリッジが二発弾き出され、槍の側面に巨大な桜色の翼を広げた。

「泣いてるコを、救ってあげてって・・・！！」
< A・C・S、スタンバイ >

足下に展開された魔方陣が夜空を淡く照らし、

「アクセルチャージャー起動・・・ストライクフレーム！」
< オープン >

槍の先端に細く鋭い魔力刃が生成される。高密度の魔力で生み出されたその色は桜ではなく、紅色だ。

「エクセリオンバスター A・C・S！ ドライブ！！」

六枚三対の翼がいつそう大きく羽ばたき、目標目掛けて一直線に突き進む。管制人格が展開した障壁へと激突し、文字通りに激しい火花を飛び散らせた。

「届いて！！」

願うように叫んだ次の瞬間、紅色の魔力刃が障壁を突き破る。瞬時にカートリッジを三発ロードし、

「ブレイク・・・」

「ツ……まさか……!？」

「シュ——トッ！！！」

（ほぼ零距离・・・バリアを抜いての、エクセリオンバスター直撃・・・これでダメなら・・・）

しかし、そう簡単に倒せるような相手ではない。煙の晴れたその先には、かすり傷一つ無い管制人格が悠然と佇んでいた。

「もう少し、頑張らないとだね……！」

どう考えても、絶望的な状況だ。しかし、それでも少女の心は折れなかった。主の意思に應えるように、レイジングハートも力強く答える。自分達は、まだやれる。けして諦めるわけにはいかない、と。

どこまでも暗い闇の書の内部空間。そんな場所で、二人は見つめ合っていた。

「私、こんな望んでない！ あなたも同じはずや！ 違うか！？」

＜私の精神は、騎士達の感情と深くリンクしています。

だから騎士達と同じように、私もあなたを愛おしく思います。

だからこそ、あなたを殺してしまう自分自身が許せない・・・＞

愛する主を否が応でも自らが死に追いやってしまう。これほど辛く、救いがたい現実があるだろうか。

＜自分ではどうにもならない力の暴走・・・

あなたを侵食することも、

暴走してあなたを喰らい尽くしてしまうことも・・・止められない・・・＞

それが、闇の書とその主の運命。完成しようがしまいが、あるのはただ、絶望の終演のみ。何百年も前、旧暦の時代から受け継がれてきた呪われた歴史だ。

「・・・覚醒の時に、今までのこと、少しは分かったんよ・・・。
望むように生きられへん悲しさ・・・私にも少しは分かる・・・
！」

シグナム達と同じや・・・。
ずっと悲しい思い・・・寂しい
思いしてきた・・・」

幼い頃に両親を亡くし、車イスでの生活を余儀なくされた少女。たった一人の兄にも、そのせいで今まで数え切れない苦勞をさせてきた。その事が後ろめたくて、兄に苦勞ばかりを掛ける自分が情けなくて、はやてはいつも笑いながらも泣いていた。だからこそ、よく似た境遇の彼女の心が痛いほどに分かる。助けたくとも助けられず、

愛する者を傷付けるしかないそんな闇の書の苦悩と悲しみの日々が。管制人格も、そんな少女の心中を察したのだろ。表情を歪め、悲しげに俯く。しかし、次に主が紡いだ言葉は、信じがたいほどにとっても力強く明るいモノだった。

「せやけど、忘れたらあかん・・・！」

そんな主の言葉に顔を上げてみれば、そこには優しい満面の笑み。はやての右手が、彼女の左頬にそつと触れる。

「あなたのマスターは、今は私や。マスターの言うことは、ちゃんと聞かなあかん！」

暗闇に浮かぶ二人の足下を、純白のトライアングルが明るく照らし始めた。

「ごめんね・・・アリシア・・・。だけど、私は行かなくちゃ・・・」

姉の言葉と気遣いは、とても嬉しい。しかし、自分は夢の世界にいつまでも留まるわけにはいかない。こうしている間も、自分を救ってくれた親友が、たった一人で戦い続けているはずだから。

「そう・・・」

呟くアリシアの瞳は、心なしか悲しげに揺れていた。しかし、フェイトを引き止めるようなことはしない。ゆっくりと差し出された姉の左手を見れば、金色に輝く三角形。フェイトの相棒、

バルディツシュが握られていた。

彼女は祝福してくれたのだ。自分の新たな旅立ちを。感極まったのか、フェイトの目から涙がにじみ出る。けして出会うことのなかった姉妹が、別れを惜しむかのように抱き合った。

「ありがとう・・・ごめんね、アリシア・・・」

「いいよ、私は、フェイトのお姉さんだもん」

大粒の涙を流す妹をあやし、勇気づけるように、アリシアは語りかける。

「待つてるんでしょ？ 優しくて、強い子達が・・・」

姉の後押しを受けて、フェイトは小さく、しかし強く頷いた。

「じゃあ、行ってらっしゃい、フェイト」

「・・・うん・・・」

旅立つ妹を見送る姉と、その言葉に今度こそ大きく頷く妹。

「現実でも、こんなふうに、したかったな・・・」

心残りが無いわけではない。でも大丈夫。自分は彼女でもあり、彼女は自分でもあるのだから。目を閉じれば、いつでも会える。

アリシアの身体が光に包まれ、輝く粒子となってかき消えていく。

「それから、そのコも・・・」

天へと上っていく姉の声にふと右の手首に目を向ければ、そこには双子の三日月の装飾が背中合わせに掘られた銀色の腕輪。

「一緒に連れて行ってあげて。」

そのコもそのコのご主人様も、フェイト達のこと、ずっと心配してみたいだから・・・」

そんな姉の最後の一言でふと思い出す。数日前の砂漠の世界で薄れる意思の中感じた、腕輪の持ち主たる少年の温もりを。よくよく考えれば、異性に抱きかかえられたのはあれが初めてだった。今更ながらに恥ずかしさを覚え、涙で濡れた頬が熱くなり、紅葉のように赤みを増した。

「名前をあげる・・・。もう『闇の書』とか『呪いの魔導書』なんて言わせへん・・・！」

私が呼ばせへん・・・!!」

小さな掌で自分を包み込み、必死に語りかける主の姿に、管制人格の頬を熱いしずくが伝う。

「私は管理者や。私には、それが出来る・・・!!」

<無理です・・・。自動防御プログラムが止まりません・・・。

管理局の魔導師が、戦っていますが・・・それも・・・>

そんな主の気持ちは嬉しいが、あまりにも無謀だ。表で暴走している防御プログラムを鎮めない限り、システムへの介入は不可能だ。応戦している魔導師との力の差は歴然、万に一つも勝ち目はない。

「止まって・・・!!」

足下の純白の魔方陣が、はやての心に呼応するかのようにつそう強く輝き始めた。

なのは不思議に思った。突然、闇の書の身体が硬直し、その動きがまるで錆び付いたロボットのようにぎこちないモノになったのだ。

<外の方！ 管理局の方！ そこにいる子の保護者、八神はやてです！>

「はやてちゃん!？」

そして、次に聞こえてきた声にさらに驚愕し、思わず声を上げた。その声を聞いたはやてが、戦っている魔導師がなのはである事実に驚くが、今はそれどころではない。

<ゴメン、なのはちゃん、なんとかその子、止めたげてくれる! ?>

魔導書本体からコントロールを切り離れたものの、やはり防御プログラムが表に出ている限りは管理者権限が行使できないらしい。

(闇の書完成後に、管理者が目覚めてる……!? これなら……!)

今まではあり得なかったその事実に驚きつつ、離れた場所でコトの次第を聞いていたユーノはこの僥倖に活路を見いだした。

なのは！ 分かりやすく伝えるよ!？

今から言うことをなのはが出来れば、はやてちゃんもフェイトも外に出られる！

どんな方法でもいい！ 目の前の声を、魔力ダメージでぶっ飛ばして！

全力全開、手加減無しで！

主の意識が完全に目覚めた今ならば、防御プログラムを沈黙させることも容易い。そうなれば、主と管制人格がコントロールを奪い返すことが出来るだろう。闇の書内部の仮想現実からの脱出も、容易になる。

「・・・！ さっすがユーノ君！ 分っかりやすい！！」
<まったくです>

細かいことを抜きにしたユーノの簡単明瞭な念話での説明に、なのはとそのデバイスが心からの賛辞を贈り、未だにぎこちなく動こうとしている闇の書へと矛先を向ける。

「エクセリオンバスター、バレル展開！ 中距離砲撃モード！」
<バレルショット>

桜色の翼が大きく羽ばたき、砲撃のように撃ち出された不可視のバインドが闇の書を夜空に縫い付けた。

「夜天の主の名において、汝に新たな名前を贈る・・・。
強く支える者・・・幸運の追い風・・・祝福のエール・・・。
リイン、フォース・・・」

泣き続けている空の下、アリシア^{あね}から手渡された自らの相棒を、
フェイトはバリアジャケットの展開と共にその手に起動し、地面と
水平に構える。

「ここから出るよ、バルディッシュ。ザンバーフォーム、いける
ね？」

<ザンバーフォーム>

カートリッジを二発装填し、漆黒の戦斧が、刀身を魔力によって生
成された両刃の大剣へとその形を変えた。黄金色に輝く刃に紫電が
轟き、大気を揺るがす。

四発のカートリッジが装填され、闇の書へと向けられた魔力刃の
先端に、桜色の魔力が徐々に充填されていく。

「エクセリオンバスター、フォースバースト！」

環状の魔方陣によって幾重にも囲まれた魔力球が、その力を解き放
つ瞬間を今か今かと待ちわびていた。

時として、世界はとても理不尽で、残酷で・・・だからこそ、人
はそれを認められずに幻想を抱いて逃避する。しかし、それではな
んの解決にも成りはいしない。例えどのような辛い現実だとしても、
人は、過ぎ去った過去^{とき}の上に生きていくしかないのだから。

悲しみを知り、絶望を知り――

ふと、すでにこの世にはいない黒髪の少年の顔と言葉が脳裏をよぎった。自らの右腕に光る銀色の腕輪が視界に映る。

それでもなお、前へと進もうとする者の目だ――

そうだ。確かに自分は、未来を見据えて歩み始めていた。かおるに諭され、なのはに勇気づけられ、アルフやクロノ達に支えられながらも、確かな一歩を踏み出していたのだ。過去を捨てたわけでも、母を忘れたわけでもない。きっと、これからもそれは変わらない。親友達と笑顔で過ごすために、これからの日々を始めるために、『今』を精一杯に生きる。ただ、それだけだ。

雨音が次第に弱くなり、雲の切れ間から幾筋もの陽光が降り注いだ。まるで、少女の旅立ちを祝福するかのよう。

唇をギュツと結び、赤い瞳に静かな決意の炎をともし、頭上に振りかぶった金色の大剣を振り下ろす。幻想の世界に亀裂が走り、鏡を割ったような乾いた音と共に砕け散った。

そんなフェイトの一撃とほぼ同時、極限まで魔力を充填した砲台が、ついに火を噴いた。

「ブレイク、シュ――

ト!!」

視界の全てを桜色の閃光が支配し、生じた爆風が周囲の大気を押し

流していく。

閃光が収まり、ふと上空に目をやれば、そこには大剣を構える金色の少女の姿があった。どうやら、無事に内部空間から抜け出したようだ。使い魔のアルフはその少女の名前を笑顔で叫び、親友であるなのはも彼女の無事を確認して胸をなで下ろす。

先程までとは打って変わった光溢れる温かな空間に、はやては浮かんでいた。

<新名称、『リインフォース』認識。管理者権限の使用が可能になります>

しかし、防御プログラムの暴走は、依然として止まらない。管理から切り離された膨大な魔力が、じきに暴れだすことになるだろう。

「うん……。まあ、なんとかしよ……」

楽天家なのか、はたまた芯が強いのか。そんなことを言っただけの小さな主の目の前に、魔導書が現れ、彼女はそれを優しく抱きしめる。

「行こか、リインフォース」

<はい。我が主……>

夜天の主とその従者が、決意を新たに今飛び立つ。

再開もつかの間、戦闘空域である海上では、突然の地鳴りと見たこともない光景に少女達が戸惑いの顔を見せていた。目の前に突如として出現した、胎動する球状の『闇』。否が応でも、不安が積もる。

みんな！ 下の黒い淀みが、暴走の始まる場所になる・・・！
死にたくなければ、クロノ執務官が到着するまで、
無闇に近づかないことをお勧めします

そんな管制官二人の通信に、なのは達は力強く答える。彼女達の口ぶりからして、クロノには何かしらの解決策があるのだろう。今はクロノが到着するまで、あまり動かないのが得策だ。
と、そんな時、視界の端に白い光が見えた。

白く輝く光球の中、はやてはかつての闇の書の意味であり、今は彼女の家族の一員でもあるリインフォースと対話していた。

「管理者権限発動・・・」

<防衛プログラムの進行に、割り込みを駆けました。
数分程度ですが、暴走開始の遅延が出来ます>

リインフォースが防衛プログラムの進行を抑えている間、はやてはそれとは別にあることを行っていた。

「うん。それだけあったら、充分や」

赤青緑紫の四色の光が彼女を囲むように現れる。

「リンカーコア送還。守護騎士システム、破損修復・・・」

四つの光がその輝きをいつそう増した。

「おいで、私の騎士達・・・！」

はやては一度消滅した自分の家族を、今一度復活させようとしていたのだ。

虚空に佇む純白の球体。突然現れたその存在になのは達が驚いてみると、その光球に背を向け、囲むように四つの人影が現れた。まるで球体を守護するかのように並び立つその姿は、よく見知った人物達だ。

「我等、夜天の主の下に集いし騎士・・・」

剣の騎士、シグナム。

「主ある限り、我等の魂朽ちること無し・・・」

湖の騎士、シャマル。

「この身に命ある限り、我等は御身の下にあり・・・」

盾の守護獣、ザフィーラ。

「我等が主、夜天の王・・・八神はやての名の下に・・・！」

鉄槌の騎士、ヴィータ。

仮面の男達によって消滅させられた夜天に集いし雲、守護騎士達であった。彼女達の無事な姿に、なのはとフェイトが驚きと嬉しさが入り交じった声を上げる。

その声とほぼ同時、白い光球の表面にヒビが走り、ガラスを砕くような乾いた音と共に砕け散った。中から現れたのは、黒に金色の装飾が成された騎士甲冑を纏い、剣十字の杖を携えたショートカットの少女。夜天の主、八神はやてだった。

「夜天の光よ、我が手に集え！ 祝福の風、リインフォース、セーリットアップ！」

杖を夜空に掲げ、声も高く叫んだ。するとどうだろう、彼女の髪と瞳の色が見る間に薄くなっていく。

リインフォースの実態は、主と融合し、共に戦う『融合騎』だ。髪と瞳の変色は、融合デバイス使用者特有の者であり、融合の成功を顕著に物語っている。

新たに腰布や白を基調としたジャケットと帽子が騎士甲冑として追加され、その姿は九歳の少女とは思えないほど凛々しく、威厳に溢れていた。

それからしばらくは、微妙な空気が場に流れていた。守護騎士達にしてみれば、主との約束を破ったばかりでなく、救うつもりが逆に命の危険に陥れ、あまつさえ最愛の兄をむざむざと殺させてしまったのだから、何も言えないのは当然だ。だがしかし、そんな空気ははやてが口にしたたった一言で吹き飛んでしまった。「おかえり」という、たった一言。しかしながら、この世に存在するどんな言葉よりも、騎士達の心を洗う言葉だった。ヴィータは号泣しながらは

やてに抱きつき、他の守護騎士達もそれぞれに至福で表情を満たす。そこになのは達も合流し、戦士達が互いに再開を喜んでいると、上空から黒いバリアジャケットに身を包んだ一つの人影が舞い降りてきた。

「水を差すようですまない。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。

そちらの詳しい事情は後で聞く。今はとにかく、事態収拾の協力をしてもらいたい」

突然のことにもかかわらず、クロノの言葉にはやてや守護騎士達は力強く即答で頷く。ごちゃごちゃと話している場合ではないと分かっているのだろう。

「あ、そうだ・・・はやて・・・コレ・・・」

そんな緊迫した空気の中、フェイトが自分の腕から外し、おそろおそろ差し出したモノ、それは、別れ際にアリシアから託された銀色に輝く腕輪。間違いなく、はやての兄・八神玄斗のデバイス、盾月だった。

はやてはおそろおそろ手を伸ばし、乾いて黒く変色した血痕が付着したそれを受け取る。

「ッ・・・兄ちゃんッ・・・!」

兄の形見を、小さな胸で思い切り抱きしめる。分かっではいたが、改めて現実を目の当たりにすると、やはり辛い。奥歯を噛みしめたのどの奥から嗚咽が漏れ、頬を滝のような涙が伝う。あの温もりも、あの声も、もう感じることも聞くことも出来ない。そう思うと、もはや涙をこらえることなど出来なかった。

集まった騎士や魔導師達も、そんな彼女にどんな言葉を掛けていいのか分からず、顔を歪めていた。それどころか、同じように涙を流している者もいる。どんなに技術があってもどんな魔法があっても救えない命がある。その事実が、彼女達にとっても重くのしかかっていた。

皆が悲しみに打ちひしがれる中、無情にも夜風は冷たく吹きすさぶ。その時だった。聞き慣れた声が一同の耳へと届いたのは。

「やはり、飛行魔法というのは扱いが難しいな。」

デバイスが無いだけで、自分の身体を浮かせるのも一苦労だ」

それは取るに足らない、独り言のように小さな呟きだった。日常生活の中でなら、別段気にすることもなく聞き流すような。しかし、そこにいた全ての人間はその一字一句を聞き漏らすことなく聞き取り、様々な感情がない交ぜになった顔を弾かれたように音源へと向ける。

あり得ない。しかし、その凜とした低めの声を聞き間違えるはずがない。一度は絶望に染まった心に差し込む一筋の光の先には、

「・・・兄・・・ちゃん・・・？」

鋭い刀剣のような眼差しと月明かりを受けて輝く黒髪を持った少年が、その頭と腕を白い包帯に包まれながらも悠然と立っていた。

皆の顔が驚愕に染まる。つい今し方、皆でその死を悲しんでいた少年が目の前にいるのだから、それも当然だろう。

「ば、馬鹿な・・・君は死んだはずじゃ・・・」

「ええ。あと少し治療が遅ければ、非常に危険な状態でした」

比較的早く我に返ったクロノが、未だに思考を停止させている面々

の心の弦きを代弁し、青空のように澄み切った優しげな声がその疑問に答えた。

「かおるちゃん・・・！」

笑顔で叫ぶなのはに優しく微笑みながら、かおるは玄斗の隣に並ぶ。その瞬間、全員がコトの顛末を理解した。

おそらく、リーゼ姉妹に襲われた後、玄斗は完全には息絶えていなかったのだろう。いかに疲労で意識も身体も限界に達していたとはいえ、彼の实力は彼女達よりも数段は上である。彼女達が殺し損ねたとしても、なんら不思議ではない。そこに彼の命の危険を察したかおるが駆け付け、治療を施したのだ。管理局医療班顔負けの医学知識と技術を持った彼ならば、多少の致命傷であればなんとか出来ただろう。

「兄ちゃんツー!!」

大粒の涙を目にためながら、はやてが玄斗へと飛びついた。両腕を彼の背中に回し、力の限り抱きしめる。間違いない。この温かさも、その年に不釣り合いな厚い胸板も、最愛の兄のモノだ。一度は失ったその存在を確かめるように、その胸に涙と鼻水で汚れた顔を押しつけ続ける。

「・・・すまない・・・心配を掛けた・・・」

そんな謝罪の言葉を呟きつつ妹の髪を優しくなでる彼の瞳には、いつも見せていた武人のような強く鋭い輝きではなく、どこにでもいる優しげな兄のぬくもりと悲しげな光があった。

映画の名シーンさながらの二人のやりとりに、周りは声を発することと忘れて見入っていた。同じ家族であるはずの守護騎士達も二人

の再会を温かく見守るだけだ。

だがしかし、その雰囲気に一石を投じる者がいた。

「もつと、謝った方がいいんじゃないありませんか？

何しろあなたは、ずっとみんなに嘘をつき続けていたんですから」

別段声を張り上げたわけでもないそんなかおるの言葉は、冷たい夜空によく響いた。玄斗の眉がピクリと動き、はやてをなでる手を止めて無言で彼を見つめる。微妙な空気がその場を流れた。

「ど、どうということなの？ かおるちゃん・・・」

感動の再会のはずが、唐突に張り詰めた空気に早変わりしたため、不安に思ったのだろう。幼なじみに尋ねてくるなのは声は、いっになく震えていた。

このひと

「玄斗さんの本当の目的は、

ボクたち

管理局の目の前で『闇の書の主』を抹殺することだったんだ」

衝撃の真実が、天才少年の口から紡がれた。

第十二話 「聖夜の贈り物」(後書き)

と、ゆーわけで、玄斗君復活です(汗)。つい前々回に死んだ彼が、なんでこんなに早く復活しているかというですね・・・不用意にも彼の真の目的を明かす前に殺してしまったからです。・・・前回の投稿の後、小説を読み返してみても伏線が全く回収できてないことが発覚しました(汗)。

彼を『殺した状態』で次回の大暴露大会をやると、死人にムチを打つみたいで後味が悪すぎるため、急遽、彼に復活してもらいました。(ホントは最終回辺りで復活させる予定でした)

とまあ、本当に殺す気は全くなかったんですけどね？ 元々、気に入っていたキャラだし、殺したのも話の流れ的に仕方なくだったし・・・。(第十話のあとがき参照)

そんなこんなで、次回は玄斗が守護騎士達にすら秘密にしていた『本当の計画』が明かされます。勘づいてる人もいるかもしれませんが、とりあえず見てやって下さい。

それでは、またお会いしましょう。

第十三話 「夜の終わり、旅の終わり」(前書き)

6千ユニーク突破&意外と早めに更新できたので、テンションがウザいくらいに高くなってる荒唐井蛙です!!

というか、他の作者さん達はなぜ一週間ごととか二、三日ごととか更新できるのでしょうか? 軽く疑問です・・・。

まあ、それはともかくとして、やっとここまで来ました! 防衛プログラムフルボッコの回です(笑)!

と、その前に、玄斗の真の目的大暴露です! 彼が何を考えていたのかとつくに気付いている方もいるかもしれませんが、とりあえず見てやって下さい。

感想なんかも頂けると作者が泣いて喜びます。

第十三話 「夜の終わり、旅の終わり」

海鳴市の一角に佇む一軒家。こうこうと電灯の光が照らすリビン
グに、身を寄せ合う二つの影があった。

「兄ちゃん、ほんまにこの刑事ドラマ好きやなあ」

八神家長女 はやてが兄の肩に頭を乗せながら、そんな事を口にする。二人の醸し出す雰囲気も相まって、それは小さな恋人同士のようだ。

「他の刑事モノとは一線を画す『何か』があるものでね」

長男 玄斗はそんな妹の行動に慣れているのか、特に気にした様子もなく、テレビ画面を見つめたまま、淡々と返事を返す。

夕食後の安らぎの一時だ。本を読んだり、作り置きしておいたデザートを食べたり、やることは特に決まっていない。その日その日の気分にならせている。

今夜は、長男のお気に入りである刑事ドラマの放送日なので、兄妹仲良く鑑賞していた。今は丁度本編が終わり、エンディングに入ったところだ。はやてはドラマ本編というよりはむしろ、今流れているエンディングテーマソングの方が好きなので、それ目当てだったりする。

若く才能溢れる敏腕刑事が主役の連続推理ドラマなのだが、はやてにはその内容が難しすぎるため、ちんぷんかんぷんなのだ。

「せやけど、今回の犯人・・・ちよつとかわいそうやったなあ・・・」

今回も内容のほとんどを理解できなかったが、その一点のみは強く印象に残っていた。

最愛の恋人を殺され、復讐に走った犯人を主役である刑事が追い詰めるが、結局犯人は自決をしてしまう。大まかに話すと、そんな感じの内容だ。さらに細かく言つと、警察組織内部の黒い部分やら、社会の闇やら、他にも色々あったような気がするが、幼いはやてにはコレが限界だった。

「そうかね？ 私は、それほど同情は出来なかったが・・・」

返ってきたその言葉に、はやては驚きを隠せない。心優しい兄ならば、哀れな犯人に対して自分と同じような感情を少なからず抱くだろうと思っていたのに、その答えが全く逆のモノだったからだ。

「なんや。兄ちゃんて、けっこー冷たいトコあるんやなあ・・・」
「いかなる理由があろうとも、大罪を犯したことに変わりはない。その事実を忘れて犯人を擁護できるほど、私は聖人君子ではないよ」

いたずらっぽく小さく笑うはやてに、玄斗は淡々と自身の持論を語る。

「出た出た♪ 兄ちゃんの自己流正義論♪」

潔癖なまでに『悪』を嫌うこの少年は、十歳というその年に似合わない、理想がかなり高い。周囲から堅物と言われる理由の大半はコレなのだが、常に彼と共に過ごしているはやてに言わせれば、そこもチャームポイントの一つである。

「・・・むしろ、気の毒なのは刑事の方だと、私は思うがね」

「え？　なんで？　犯人が死んだ他は、ハッピーエンドやったん？」

犯人は死んでしまったものの、主人公は警察内部の不正を明らかにすることができ、甘い蜜を吸っていた真の悪人達は破滅の道を歩んでいった。はやてにはよく分らないが、視聴者のにも胸がスツキリするラストだったはずだ。それなのに、真実を解明して目的を達成した刑事に対して、なぜ、かわいそうだと思ふのだろうか。はやては小首をかしげ、頭上に疑問符を乱舞させた。

「殺人犯とはいえ、目前で人が死ぬのを止めることが出来なかったのだ。

少なからず、責任を感じているだろう。正義感の強い者なら、なおさらね」

そう言つて微笑む兄のその横顔は、心なしかとても悲しそうだった。

「このひい玄斗さんの本当の目的は、
ボクたち管理局の目の前で『闇の書の主』を抹殺することだったんだ」

いつものかおるからは想像も出来ないほどの冷たい口調で、静かに真実を告げる。瞬間、その場の全員の表情が凍り付いた。皆の脳裏にあるのは、「信じられない」の一言である。

「な、何言ってるの？ かおるちゃん・・・」

「そーだ！ 兄貴が、はやてを殺そうとするわけがねえッ！」

一呼吸置いて、なのはとヴィータが反論する。当然だ。今回、闇の書を完成させ、はやての命を救いたいと一番に思っていたのは、他でもない玄斗自身なのだから。彼は守護騎士達からの誤った情報を鵜呑みにし、自分の身体を顧みず一ヶ月以上に渡って次元世界中を飛び回っていた。殺すつもりの人間をそうまでして救おうとするなど、矛盾が過ぎるというものだ。完成した暁に主を殺すという『闇の書の真実』を最初から知っており、それを利用しようとしたのなら納得できないでもないが、それでは方法があまりにもまどろっこしい。第一、守護騎士が現れる以前から近所でも評判の『仲の良い兄妹』であつたのだから、殺害にいたる動機がない。

しかし、次にかおるの口から出る言葉は、そんな彼女達の予想の斜め上をいつていた。

「ボクは別に、『はやてさんを殺そうとしていた』なんて言つてませんよ」

沈黙がその場を支配する。『闇の書の主』とは、つまり『はやて』の事である。『主を殺そうとしていたが、はやてを殺そうとしていたわけではない』など、明らかに話がおかしい。いつもの事ながら、かおるの話は頭がこんがらがる。そう思いながら、少女達や守護騎士達は頭の上に大量の疑問符を浮かべた。ヴィータなどは文字通り目を回している。ただ一人、話題の中心である玄斗を除いて。

「・・・最初から疑問に思っていたんです」

しかし、そんな彼女達のことなど気にすることもなく、かおるはゆつくりと落ちて着いた口調で語り始める。そんな彼の様子を玄斗はい

つも通りの無表情を顔に貼り付け、無言で見つめていた。

「彼は管理局ボクたちに自らの存在を故意に認識させておきながら、自分へと繋がる情報を何一つしゃべりませんでした・・・」

よくよく考えれば、当然のことだが、たった数回まみえただけとはいえ、情報を漏らさないように注意しながら行動するのは至難の業だ。自分の身元を知られたくないのならば、最初から派手に動かなければいいだけの話であって、彼のように「見つけて下さい」と言わんばかりに蒐集を行ってにおいて、いざ見つかったら細心の注意を払って身元を隠すなど、ハッキリ言って行動に無駄が大きすぎる。聡明であるはずの彼がとったそんな行動はとても不可解に感じたとかおるは語る。それこそ、水面下でギリギリの活動をして管理局から見つかりにくくするか、腹をくくって身分も何もかもをさらけ出して『蒐集』に専念した方が、どちらもそれなりにデメリットはあるが、精神面において比較的に楽なはずだ。

「しかし、そんな彼がたった一つだけ、複数回に渡って自ら提示した情報があります」

そう、彼は幾度も「自分は闇の書の主だ」と言わんばかりの言動を残している。その結果として管理局かおるたちは、彼の高すぎる『主』としての資質もあつて、彼を『主』と仮定し、次第にソレは確定へと変わった。一つでも情報が欲しい管理局は、彼の口から出た僅かばかりの手がかりにすぎるしかなかったのだ。そもそも、普通は「自分が闇の書の主だ」などと嘘をついたところで、デメリットはあれど、メリットなど無いのだから、それが真実だと誤認しても仕方ないと言えは仕方ない。

「彼の計画の第一段階は、

管理局に『彼』という『闇の書の主』の存在を認識させる事だった……」

「……しかし……それになんの意味がある？

確かに局の目は『八神はやて』から逸れるが、

自分に注意が集中する分、蒐集がやりにくくなるだけじゃないか？」

かおるの言葉を一旦遮り、クロノが自分の意見を口にする。

実際、彼の意見は間違いではない。この事件は、主を捕らえれば手取り早く片が付くのだ。当然、管理局は玄斗あるじを捕らえることを最優先にして行動することになる。それでは蒐集活動に少なからず支障をきたしてしまうだろう。

そのような大きなデメリットを負ってまで『闇の書の主』を名乗る必要があったのか、クロノが疑問に思うのも当然と言える。

「これは単なる布石に過ぎません。彼は、管理局という組織を甘く見てはいませんでした」

が、かおるはその疑問を一旦放置し、説明を続ける。実際、玄斗は常に敵を見下すかのような態度をとり続けていたが、その実、守護騎士達よりも遙かに次元の守護者の存在を警戒していた。その証拠に、アースラが正式にこの任務に就いてから交戦した回数は、今回も含めて僅か三回だ。一ヶ月近くに渡って管理局が全力で捜査していたにもかかわらず、この回数はいささか少なすぎる。それだけ、玄斗が管理局という巨大な組織を危険視し、慎重になっていたということなのだ。

しかし、この言葉に皆がそろって眉をひそめた。それではなおさら腑に落ちないからだ。そこまで警戒心を持っていたのなら、もっと慎重に行動していたはずなのだ。心理と行動が明らかに矛盾してしまっている。

考えがまとまらず、煙を上げそうになる思考を必死に冷却しながら首をひねる一同に、かおるが声のトーンを一段階下げて真相へと迫る次の言葉を紡ぐ。

「当然、考えたはずです。」

闇の書を完成させたとしても、管理局はいずれ、真の主^{はやてさん}にたどり着く、と……」

「……ッ!!」「」

守護騎士達が皆、言葉を失った。当初、彼女達が玄斗に説明したとおり、闇の書の完成によつてはやてが助かり蒐集活動を行わなくなったとしても、当然、管理局は闇の書とその主の搜索を続行することになる。そうなれば、はやてや守護騎士が見つかつてしまうのは時間の問題だつたろう。それでは、なんの意味も無い。彼女達は、『闇の書の蒐集そのもの』にばかり目がいつていたため、『蒐集後の対策』が思い切り欠如していたのだ。

「『闇の書の主』が生きている限り、管理局の搜索は続く……。ならば、『主』が死ねば、搜索は一度打ち切られ、

局がはやてさんにたどり着くことはなくなる……。あなたはそう結論を下した」

主の死亡が確認されれば、闇の書が新しい主の元に再び転生するまで、管理局はただ待つことしか出来ない。現に、これまでもそうだったのだから。少年は確信した。『主の死』さえ周知のものになれば、はやてや守護騎士達は管理局の追跡から永遠に逃れることが出来る、と。そして、悪魔のささやきに耳を貸したのだ。

かおるは玄斗を見据えて、衝撃的な真相を静かに、しかし強い口調で語る。

「あなたは、闇の書完成の暁に死ぬつもりだった！
管理局に、自分を『闇の書の主』と誤認させたまま！」

当人達を除く全員が、それぞれに驚愕の声を上げる。クロノやザフィーラといった、普段は冷静な面子までもが目を見開き、顔を青ざめさせた。

「でも、悲願を達成したはずの主が『自殺』をしては、あまりに不自然です。

おそらくは、『管理局に殺される』……そういう計画だった。
……」

この計画には『玄斗を殺す魔導師』の存在が不可欠だが、彼の騎士としての実力は文字通り桁外れだ。並の魔導師では相手にもならない。必然的に、彼と同等かそれ以上の実力を持った存在を見つける必要があった。そのため、自分の存在を管理局に見せつけるように派手に動き回り、襲い掛かってくる武装局員を返り討ちにする事で、実力者が前線に出て来るように仕向けたのだ。そして、『春風かおる』という存在を見つけた。以前に砂漠の世界でかおるの魔力を蒐集しなかったのも、肝心な時に万が一にも彼が戦闘不能になることを恐れたからだ。

そして、闇の書の完成後、管理局との決戦の最中に『敗れて死ぬ』ことで、闇の書は転生したことになり、管理局の捜査はそこで途絶える。目的は達成されるはずだった。

「違いますか？」

語尾は疑問系だが、その瞳は確信の色に染まっていた。そして、その視線を浴びる少年の反応を、皆が生唾を飲み込み、見守っている。

「その通りだ」

その短く簡潔な返答に、皆の表情がさらに強張った。その原因の多くは、玄斗が肯定した『受け入れがたい事実』ではなく、その彼の『態度』にある。『ソレ』があたかも当然であるかのように、悪びれもせずに平然と言つてのけるその姿に、一同は言いようのない恐怖すら感じた。

「フエイトさんへの嫌がらせのような言動など、必要以上に『悪役』に徹しようとしたのも、

ボクたち 管理局が『子供の死』を比較的軽く受け止められるように……ですか？」

玄斗は深くため息をつく。ここまで深く正確に、自分の思惑を解明されるとは思ひもなかった。それも、自分より三つも年下の少年に。

「この短期間で、よくも、そこまで見抜いたモノだ……」

「いえ、ボクだけの力では、ここまでたどり着くのは不可能でした」

実際、この推測のヒントとなつた要因の数々は、偶然手に入れたモノが多い。当初はかおるも彼に対して、『言動と性格が矛盾し、主であることを強調する奇妙な人』という印象しか持っていなかった。リイナとの地道な現地調査の結果やユーノが調べ上げた闇の書の実、石田医師やすずかを介したはやてとの偶然の出会い……。いくつもの偶然や仲間達の協力が重なった結果の結論なのだ。

「……なんで……？」

弱く小さな呟きが、夜の空に響いた。

「……なんでなん……？　なんで、そこまで……」

自分の胸の中で絞り出すかのように呟く少女——はやてを、玄斗はただ無言で見つめる。

「私、そんなん、ちつとも嬉しくない……！」

兄ちゃんが死んでもうたら、私はどないしたらええんやツ……！」

大粒の涙を流しながらの嗚咽混じりの叫びが、静かな夜に木霊した。

「……家族ならば、シグナム達がいる。

私一人の犠牲で、『あの日々』が帰ってくるのなら、安いものだ」

玄斗は深いため息をつきながら、月の無い暗い夜空を見上げる。その瞳には、何もかもをあきらめたかのような力の無い光が宿っていた。

「……ッ！　帰ってくるわけないやろ……！」

とたんに、はやてが泥や土埃で汚れた胸元に掴み掛かった。

「例え、守護騎士みんながおつても！

兄ちゃんのおらんウチなんて、『八神家』やないツ！」

目に涙をためながら、鬼のような形相で詰め寄る。

「一人でも欠けたらあかんのや・・・！
六人全員、みんなそろって、『八神家』やる！？」

兄がいなくなれば、例え守護騎士達が残っても『八神家』は永遠に帰ってこない。はやては、そう主張する。初めて見せる妹のその姿に、玄斗は驚きの表情を隠せなかった。彼女がここまで激昂する事など、九年間を共に暮らしてきたが、一度も無かったのだ。

「・・・すまない・・・。しかし、私は所詮、罪人だ・・・」

少年は俯き、小さく謝罪を述べる。その声色は、普段の彼からは想像も出来ないほどに弱々しく、今にも消えてしまいそうだった。

「『お前を救うため』と、大義名分をかざしたところで、その事実が変わりはしない。

汚れきったこの身が、お前の傍らでのうのうと生きるなど、あってはならんのだ」

その場の全員が、先程まで声を荒げていたはやてまでもが言葉を失った。見てしまったのだ。小さな手を力の限りに握りしめ、唇をかむその様を。普段 無表情な少年の顔が、必死に痛みに耐えるかのように歪んでいた。

—— いかなる理由があろうとも、大罪を犯したことに変わりはない ——

はやての脳裏に、かつての兄の言葉がよぎる。そうだ、自分は知っていたはずだ。あまりに真っ直ぐに『善』を尊び、潔癖なほどに『悪』を嫌う彼の性格を。

——その事実を忘れて犯人を擁護できるほど、私は聖人君子ではないよ——

元来が、頑固で融通の利かない正義感の塊のような人柄だ。「人命のため」と、繰り返し自分に言い聞かせようと、他人を巻き込む犯罪に手を染める事に、その手伝いを自らの家族にさせる事に、最愛の妹を『犯罪者の妹』にしてしまう事に、どうしても耐えられなかったのだ。

「失礼します」

凜とした短い声と共に、パンツという乾いた音が夜天に響く。皆が息を呑んだ。シグナムが、玄斗の左頬を平手で強く打ったのだ。さすがの玄斗も突然のことに頭がついてきていないようで、啞然としている。

「主との誓いを破ったあの日、申し上げたはずです。

決して、お一人で全てを背負われませぬよう、と・・・」

右手を振り抜いた姿勢のまま、シグナムは静かにハッキリとした口調で語りかける。目元にうつすらと涙をにじませ、少年の心境を察する事の出来なかった自分に憤慨しながら。

「いつつもそうだ・・・！ なんでもかんでも一人で背負い込んでさ！

そんなこと言ったら、アタシ達だって同罪じゃねーかッ！！」

「少しは自分達に相談しろ！」と、赤い三つ編みを振り乱し、ヴィータが叫ぶ。かつて彼女達は、数え切れないほどの命を手にかけてきた。同罪どころか、玄斗よりも遙かに罪深いだろう。

「私達、『家族』なんでしょう？」

お兄さんとはやてちゃんが、そう言ってくれたじゃないですか」

それでもなお、彼は彼女達を家族として受け入れた。共に罪と戦い、共に生きよう、と。大粒の涙を流しながら、玄斗の手をシヤマルの両手が嗚咽混じりに優しく握る。

「『家族』とは、いかなる時も喜びを分かち合い、痛みを共有する・・・

それが自然に出来るモノなのだと、以前にお借りした書物に記されていました」

ザフィーラも少年の傍らに立ち、不器用ながらも自分の想いを告げる。玄斗が守護騎士の罪を受け入れるのであれば、その逆もしかり。痛みも苦しみも、自分達に分けてほしい、と。

「お願いやから、一人で傷つかんといて・・・」

誰がなんと言つても、兄ちゃんは私にとって、世界一の兄ちゃんや。

そやから、そんな悲しい事、言わんといて・・・」

犯罪者だとか、資格だとか、そんなことは関係ない。『八神玄斗』は自分の兄であり、掛け替えのない家族だ。彼が罪の重みに耐えられないというのなら、自分も喜んでその罪を背負おう。それが『家族』というモノだから。

「・・・すまない・・・」

震える声で、玄斗は謝罪と感謝が入り交じった短い言葉を呟く。心

なしか、黒髪で隠れた目元に、小さなしずくが輝いて見えた。
夜天と雲が月を優しく包み込み、その場が温かな空気で満たされる。
なのはやフェイト達の目にも自然と涙があふれていた。

「あー・・・取り込み中悪いんだが、続きはアレをなんとかして
からにしてくれないか？」

と、その時、感情に流されにくいクロノが海上に浮かぶ闇の書の防
衛プログラムを指差しながら、ばつが悪そうに会話に割って入って
きた。一同はすっかり忘れていたようで、弾かれたように防衛プロ
グラムを見据える。ヴィータとアルフなどは、「そーいえばそんな
モノがあつたっけ」と言わんばかりに手をポンと打ってしまった。

「闇の書の防衛プログラムは、あと数分で暴走を開始する。
ばくらはそれを、なんらかの方法で止めないといけない」

クロノは現在考えられる二つの対処手段を簡潔に説明した。
一つ目は、『極めて強力な氷結魔法』でその機能を停止させること。
二つ目は、軌道上に待機しているアースラの魔導砲、『アルカンシ
エル』で消滅させることである。

「えーと・・・最初のは、たぶん難しいと思います。」

主の無い防衛プログラムは、魔力の塊みたいなモノですから・・・

・

「凍結させても、コアがある限り再生機能は止まらん」

シヤマルがおずおずと右手を挙げて自分の意見を控えめに告げ、シ
グナムが凜とした態度でその意見に詳しい補足を付け足した。

「アルカンシエルも絶対ダメーッ！！」

こんなところでそんなモン撃つたら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんかー!」

ヴィータが両手でバツテンを作り、二つ目の案も大声を張り上げ断固拒否する。

「そ、そんなに凄いの・・・?」

「発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起こさせる魔導砲・・・って言うと、だいたい分かる?」

ヴィータの反応と言葉に不安を感じたのはがユーノに尋ねる。即座に質問の答えが返ってくるが、その内容になのはだけでなく、そばで聞いていたフェイトまでもが顔を青ざめさせた。

「あのっ! 私もそれ反対!」

「お、同じく、絶対反対!」

自分達の家族や友人を含め、無関係な人々にまで被害が及ぶのは、なんとしても避けたい。なのはとフェイトがクロノに詰め寄り、ハッキリと拒否の意思を示す。

「クロノさんもリンディさんも、使いたいわけじゃないよ・・・」

しかし、防衛プログラムの暴走が本格的に始まれば、触れた物を侵食して無限に広がっていくため、その時の被害はアルカンシエルのそれなど比較にもならない。かおるが言うように、クロノもリンディも使わずに済ませるに越したことはないと考えてはいるが、本当に最悪の場合には嫌でも使わざるを得ないのだ。

「・・・何か無いか・・・？」

一番長く闇の書と共に過ごしてきたであろう守護騎士達を見つめ、ダメ元でクロノが代案の提示を促す。

「すまない・・・。あまり役に立てそうもない・・・」

「暴走に立ち会った経験は、我等にもほとんど無いのだ」

しかし、やはりと言うべきか、シグナムとザフィーラの答えは、喜ばしいモノではなかった。考えてみれば当然の話だ。闇の書同様に改変の影響を受け、そのプログラムの破損にすら気付いていなかった彼女達に、暴走時のまともな記憶が残っているはずがない。

「でも、なんとか止めないと・・・」

はやてちゃんのおウチがなくなっちゃ、嫌ですし・・・」

「・・・いや・・・そーいうレベルの話じゃないんだが・・・」

弱冠、争点のスケールがずれているシャルに、クロノが口元を引きつらせながら柔らかくツツコミを入れる。

「戦闘地点をもっと沖合に移動できれば・・・」

「海でも空間歪曲の被害は出るだろう。得策とは言い難いな」

あごに手をやりながらユーノが呟くが、その意見は玄斗によって冷静かつ的確な反論をされてしまった。代案が出ないまま、時間だけが刻々と過ぎていく。暴走開始まで、さほど時間は残されていない。

「あゝッ・・・！　なんかごちゃごちゃ　うつとーしーなあっ！

みんなズバツとぶっ飛ばしちゃうわけにはいかないの!？」

空中であぐらをかくという器用な芸当を見せながら、アルフが頭をガリガリと掻きむしって苛立ちを爆発させる。元来、考えることがそれほど得意ではない彼女にとって、意見が飛び交うだけで全く進展しないこの状況は苦痛以外の何物でもないのだろう。

「いや・・・これは、そんな簡単な話じゃ・・・」

「そも、それが出来るのならば、

今こうして私達が頭を悩ませることも無かっただろうからな・

」

通常の方法では破壊が不可能とされたために、今日まで転生を繰り返してきた魔導書だ。例えこの場にいる全員が束になつとしても、おいそれと破壊できるモノではない。アルフの気持ちは分からないでもないが、あまりにも的外れな発言だったため、クロノと玄斗がため息混じりに正論で諭す。結果、アルフだけでなく、周りのメンバーも押し黙った。出せる案を出し尽くし、どうしようもなくなったのだ。

しかし、沈黙が流れ始めたその空間に、一石を投じる者がいた。

「・・・ねえ、かおるちゃん、アルカンシエルってどこでも撃てるのかな？」

「・・・え・・・？」

「たとえば、今アースラがいる軌道上とか・・・」

幼なじみのおそろおそろといった質問に、かおるは怪訝な表情を返す。アルカンシエルを使用しないことを前提に話を進めているのに、なぜこのタイミングでそんな事を聞いてくるのか不思議で仕方がない。が、とりあえず質問には答えなければと、お人好しな少年は口を開いた。

「それは・・・もともと発射する時は軌道上からの予定だったから、出来るけど・・・」

そこまで言った瞬間、かおるの脳裏に先程のユーノとアルフの一言が木霊した。

――戦闘地点を移動できれば・・・――

――ズバツとぶっ飛ばしちゃうわけにはいかないの！――

？

次の瞬間、何かに気付いたように目を見開き、空中にモニターとコンソールを展開してひたすらに何かを打ち込み始める。

「・・・出来る・・・これなら、不可能じゃない・・・！」

会話の内容を飲み込めていない皆が唖然と見守る中、コンソールを連打する手を止め、かおるはとびきりの笑顔でなのはに叫ぶのだった。

「・・・なんとというか、君達は相変わらず無茶苦茶だな・・・」

なのはが思い付き、かおるが成功確率を検討した結果、実現可能とされた作戦は、まず、魔力と物理の複合六層式である防衛プログラムの障壁を皆の波状攻撃で破り、本体へ一斉砲撃を撃ち込んでコアを露出させ、あとは強制転移魔法でアースラの目の前に転送し、アルカンシエルの砲撃によって宇宙空間で処理するという、シンプル

かつ無茶苦茶なモノだった。

『ジュエルシード事件』の時もそうだったが、^{この}なのはとかおるコンビの無茶苦茶には色んな意味であきれ返る。クロノは改めて、ため息混じりにそう感じていた。

「・・・実に個人の能力頼みで、ギャンブル性の高いプランだが・・・」

まあ、やってみる価値はある・・・！」

だが、いつものコトながら発想自体は悪くない。確かに、防衛プログラムを完全に破壊することは通常の魔法攻撃では不可能だが、障壁を破り、コアを護る外装を壊すことくらいは出来る。コアさえ捕獲できれば、転送魔法も使用可能だろう。エース級の人間が八人もそろい、後方支援組も充実しているこのメンバーならば、かおるの言うとおり、理論上では決して不可能ではないのだ。むしろ、最善策とすら言えるだろう。

各々がデバイスを構え、所定の位置に付き、暴走が始まる『その瞬間』を静かに待つ。かおるに応急処置を施されていた玄斗や傷付いていたなのはやフェイトも、シャルの治療魔法で回復し、準備は万端だ。

「始まる・・・！」

そんなクロノの声を合図に、胎動する球体からいくつもの闇色の柱が天を突いた。

「夜天の魔導書を、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム・・・
闇の書の・・・闇・・・！」

闇色の球体が弾け飛び、はやてが『闇』と形容したのもうなずける

ほど世にもおぞましい物体が、中からその姿を現した。これまでに魔力を蒐集した生物達の生体パーツをツギハギにして構成されたかのような醜い怪物が産声を上げる。

「チエーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

アルフとユーノが荒れ狂う触手を各々のバインドによって拘束し、

「縛れ、鋼の軛！」
くびき

それを見計らって、ザフィーラがそれらをなぎ払い、攻撃陣が障壁を破壊する際に邪魔となるバリケードを排除した。

「ちゃんと合わせろよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

出会ったのは、たった一ヶ月前のこと。当初は名前すらも覚えてもらえなかったわりに、二人の息はピッタリだ。

「鉄槌の騎士・ヴィータと、鉄の伯爵・グラーフアイゼン！」

カートリッジが二発装填され、鉄槌が巨大な大槌へと変形。

<ギガントフォーム>

それを頭上に振りかぶると、その大きさはさらにふくれあがり、見る者を圧倒する。巨人というその名にふさわしい、威圧感溢れる風貌だ。

「轟・天・・・爆・碎！ ギガントシューラク！！」

力の限りに『殴る』という単純明快な一撃は、それ故に極めて強力な破壊力を誇る。大型の対象や建築物の破壊といった状況突破のための破壊行動に高い性能を発揮するこの形態は、今回の状況には最適と言えるだろう。結果、障壁が一つ、いとも簡単に破碎した。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、行きます！」
<ロードカートリッジ>

カートリッジを四発装填。全力の砲撃を叩き付けんばかりに愛機を振りかぶる。

「エクセリオンバスター、ブレイク・・・」

桜色の砲撃が障壁へと激突し、

「シュート！！」

気迫の叫びと共にその太さがふくれあがる。魔力の奔流に耐えきれず、あっけなく障壁が吹き飛んだ。

「剣の騎士・シグナムが魂、炎の魔剣・レヴァンティン・・・」

烈火の将が愛剣を天高く掲げ、

「刃と連結刃に続く、もう一つの姿・・・！」

剣の柄と鞘を重ねると、それらは一体化し、二つのカートリッジスロットを備えた弓へと変形した。

<ボーゲンフォーム>

二発のカートリッジ装填によって生み出された矢を引き絞り、狙いを定める。これは発動・発射に多大な隙を生じるが、到達速度・破壊力においては、彼女が保有する魔法の中でも最大級の性能を誇っている。

「駆けよ！ 隼！！」

<シュツルムファルケン>

解き放たれた矢が、音速に近い速度で一直線に標的へと迫る。それはまさに、『蛇』をも凌ぐ速度と猛々しさ。その名に秘めた猛禽類にふさわしい一撃だ。着弾と同時に紅蓮の炎と轟音を轟かせ、一瞬のうちに障壁が弾け飛んだ。

「フェイトテストロッサ、バルディツシュ・ザンバー、行きます
！」

カートリッジが三発ロードされ、金色の魔力刃に紫電が走る。その威力は、振るった衝撃波で触手が切れるほど。

「打ち抜け！ 雷神！！」

<ジェット・ザンバー>

雷撃を纏ったその一撃は、障壁を易々と両断し、生体パーツの一部を切り落とした。

「砲撃の射程と威力ではなのはに敵わない。フェイトさんほどのスピードも無い。

防御性能は、玄斗さんの足下にも及ばない……。けど……

！」

<ロードカートリッジ>

かおるの握るフェザーハートがりボルバー式のカートリッジを三発装填し、大矛の切っ先に生まれた空色の光球が乱気流のように幾重もの渦を巻く。

「こと『貫通』に関しては、誰にも負けるつもりはありません！」

<スパイラルカノン>

砲弾のごとく撃ち出された巨大な螺旋は、彗星のように尾を引きながら障壁へと着弾。防壁ばかりでなく本体を覆う生体パーツの中央を一瞬のうちに貫通し、見事なまでの風穴を空けた。

「さて、しんがりは私か。行くぞ、盾月」

<カートリッジ装填>

残り一つの障壁を破壊すべく、玄斗が両腕を身体の前で交差させ、勢いよく左右に振り下ろす。同時に両腕の籠手から六発づつ、計十二発のカートリッジが弾き出された。上空に、月のような神々しい銀の光を放つ球が現れる。その数、十二。同時に展開できる最大数だ。

「受けてみたまえ！ 月の鉄槌！！」

<月華圧砕・師走>

玄斗が叫ぶと同時に、万有引力に加速を加え、防衛プログラムへと十二の月が殺到する。障壁を粉碎し生体パーツを押し潰すにとどま

らず、その衝撃によって大量の海水を大きく跳ね上げた。

これで、防衛プログラムを護る全ての障壁が消滅したことになる。

「彼方より来たれ、宿り木の枝、銀月の槍となりて、撃ち貫け！」

はやての正面に浮かんだトライアングルから七つの球体が出現し、丸腰になった防衛プログラムへと狙いを定める。

「石化の槍・ミストルティン！！」

七本の長大な純白の槍が突き刺さり、そこから見る間に石化していく。が、効果は薄いようだ。石と化してもなお、再生を繰り返し、新たな生体パーツが顔を覗かせる。女性陣はあまりにもおぞましいその風貌に例外なく眉をひそめた。しかし、魔導師達は攻撃の手を緩めない。効果が薄いと言っても、全く効いてないわけではないからだ。

「行くぞ、デュランダル！」

<オーケー、ボス>

恩師から受け取った切り札を手に、クロノが構える。

「悠久なる凍土、凍てつく死の棺にて、永久の眠りを与えよ・・・」

「

詠唱すらも終わっていないというのに、防衛プログラムを中心とした海面が、徐々に凍り付いていく。

「凍てつけ！！」

<エターナルコフィン>

その一言で、生体パーツ全体が完全に凍結し、自重に耐えきれなかった一部が折れ、崩れ落ちた。

「全力全開！ スターライトオ……」

桜色の流星が一点に集い、

「雷光一閃！ プラズマザンバー……」

天より降り注ぐ紫電が轟き、

「響け、終演の笛！ ラグナロク……」

剣十字に夜天の光が収束する。

防衛プログラムの動きが停止したのをコレ幸いに、三人の天使が各々最強の砲撃を構える。持てる全ての魔力とカートリッジを総動員させ、終わらぬ夜を終わらせるため、それぞれの手に携えた相棒を振りかぶった。

「……ブレイカアアアアアア——！！！！」

砲撃とも爆撃とも形容しがたい三色の光の嵐。あまりも暴力的で圧倒的な魔力が、凍り付いた闇を打ち据える。耳をつんざく激しい轟音と爆風の中、これで全てが終わる。皆がそう思っていた。しかし、

「ダ、ダメだわっ……」

悲鳴にも似たシャルの叫びが安堵しかけた心に突き刺さった。

「コアが露出してない！ もっと外装を壊さないと！」

エース達の息もつかせぬ連続攻撃を浴びてなお、防衛プログラムはその本体たるコアを守り抜いていた。さすがは第一級に指定されているロストロギアだ。コアを捕獲しなければ転送魔法の発動は不可能であり、このままでは作戦は失敗に終わる。

シャマルの言うようにさらなる攻撃を加えるしかないが、もはや戦士達に余力は残っていなかった。

「お、おい、どーすんだよ！？ カートリッジ、全部使っちゃったぞ！？」

「わ、私も・・・」

ヴィータが悲鳴にも似た叫び声を上げ、なのはも震える声で独り言のように呟いた。コレで最後とばかりに後先考えずカートリッジを連続で使用していたのだから、当然の結果と言えるだろう。

「クッ・・・！？」

「シ、シグナム！？」

唐突に烈火の将が苦しげに片膝を突き、フェイトが足下をふらつかせながらも心配そうにそばに駆け寄る。寝る間も惜しんで一ヶ月以上もの間戦闘に明け暮れた挙げ句、今回の大威力魔法の使用だ。彼女達の体力と魔力は、とうに限界を超えていた。

周りに目を向ければ、皆似たようなモノで、肩でせわしく呼吸を繰り返している。カートリッジは弾切れ、魔力も体力も疲弊きつたこの状態で再び一斉攻撃を仕掛けるのは、とてもではないが無理だ。

「くそっ、どうする！？ かお・・・る・・・」

最悪の事態に焦燥を顔に貼り付け、クロノが今作戦の提唱者へと詰め寄った。やはり、地上でアルカンシエルコンを使うしかないのか、とだがその時、クロノは見てしまった。自分の隣に立つ少年の瞳が、まるで絶対零度のごとく冷たい光を放っているのを。暗い感情を押し殺すかのような心の底から底冷えする眼光に、玄斗の目とはまた別の恐怖を感じた。

「玄斗さん！ みんなの周りに『月華』を！」

クロノが恐怖に固まっていることに気づきもせず、かおるは珍しく声を張り上げ、玄斗に最強の障壁の展開を要求した。

メンバー全員がカートリッジを使い果たし、かおる自身も残ったカートリッジはわずかに三発のみ。よく考えなくとも、無限の再生能力を誇る防衛プログラムを相手にするには力不足だ。しかし、かおるは望みを捨てなかった。ぶつつけ本番のため不安要素はいくつか残るが、八人の波状攻撃が通用しなかった以上、もはや悠長なことは言っていられない。

「展開後、ただの一瞬も消さないで下さい！」

グングニルモード
<神槍>

そう叫ぶやいなや、かおるは眼下の『闇』を見つめつつ、大矛を構える。カートリッジが二発装填され、巨大な両刃が最終形態へとその姿を変えた。太い円錐形の棒の先が鋭く尖ったそれはまるで、中世の騎士が携えていそうな槍ランスを連想させる。長さは優に四メートルはあり、異常な威圧感を纏っていた。

<ストームブレイカー>

最後のカートリッジの装填音と共に、周囲の大気と魔力を収束させつつ、長槍の先端部に青く輝く魔力球が生成される。周囲の大気を巻き込みつつ徐々にその大きさを増していくソレはまさしく、なのは『スターライトブレイカー』と同系統の魔力収束砲であり、春風がおる最強の砲撃魔法『ストームブレイカー』であった。効果範囲や射程こそスターライトブレイカーには及ばないものの、その貫通力は間違いなく最強である。

「ま、待てかおる！　いくら何でも、一人じゃ無理だ！」

顔を青くしながらクロノが叫ぶ。当然だ。八人ものエース級の魔導師と騎士の波状攻撃が通用しない相手に、最強の一撃とは言えたかった一人の、しかもカートリッジ一発分の砲撃魔法が効くとは到底思えない。しかし、天才^{かおる}の用意した一手はストーム^{これ}ブレイカーだけじゃなかった。

「コード・『宵の明星』！　封印解放！」

<コード承認。『^{ノクターン}夜想曲』発動>

かおるの声に、長槍と化したフェザーハートが答える。刹那、玄斗の背中をかつて無い悪寒が走った。咄嗟にかおる以外の全員を計十一個の月華で包み込むのとはほぼ同時、夜の空を突く轟音と共に強い閃光が辺りの景色を飲み込んだ。

あまりのまぶしさに目をつむったのは達がうつすらと薄目を開けると、すでに閃光は収まっており、代わりに目に飛び込んできたのは、苦悶の表情で額に汗を流す玄斗の姿だった。

「……この私が、障壁を維持するだけで……精一杯とは……！！」

苦しげに声を漏らす少年の視線の先を見れば、そこには荒れ狂う魔力の奔流の中心に悠然と立つかおるの姿があつた。よく見れば、月華の壁がビリビリと振動し、今にも砕け散りそうである。カートリッジによる防御出力の向上が出来なかつたとはいえ、ただ『魔力を放出している』、ただそれだけで。

「・・・なんだ！？ この魔力光は・・・！！」

シグナムが顔色を青くし、震える声で叫んだ。本来のかおるの魔力光は『青』。しかし、今まさにかおるから流れ、月華を襲っている魔力光は『漆黑』だ。星の見えない夜空のように、全てを押しつぶす深海のように、暗く、重く、どこまでも黒い色がそこにある。これは本当にあの優しげな少年の発する魔力なのだろうか。年端もいない少女達は、言いようのない不安と恐怖を感じていた。

「クツ・・・！ 皆、私のそばに集まれ！ このままでは長く持たん！！」

いくつかの月華にヒビが入り始めたため、珍しく必死の形相で玄斗が叫んだ。今、なのは達がバラバラの地点にいるため、玄斗はその全員の覆うべく直径3メートルほどの月華を人数分展開している。燃費の悪い『月華』の性質上、この数を維持するだけでも相当の魔力を消費するのだが、さらに外から大きな圧力が加われば、その強度と展開時間は大幅に減少する。維持し続けるためには、月華の数を減らす必要があるのだ。

「完成したとは聞いていたが・・・『ノクターン夜想曲』・・・これほどとは・・・」

「あの魔法、知ってるの！？ クロノ君！」

呆けたように呟くクロノに、ものすごい剣幕でなのはが詰め寄った。他の面子も玄斗の近くに集まりつつ、クロノの顔を見る。

「カートリッジシステムに着目するずっと前に、
かおるが開発していたミッド式魔導師の戦力強化技術だ」

魔力の渦の中心たる少年から目をそらす事なく、クロノはかおるから聞かされていた新技術の大まかな内容を説明し始める。

通常、魔導師や騎士は大気中に存在している『魔力素』をリンカーコアに取り込むことで『魔力』を得て、それを『魔法』として生成している。一般に言う『魔力量』というのは、正確には『個人が大気中から取り込める魔力素の総量』を示しているのだ。これは訓練などでは鍛えにくく、生まれながらの才能によって大きく左右される。そういう意味で、他の追従を許さぬ魔力量を保有しているのは、フェイト、かおる、はやて、玄斗の五人は『天才』と言えるだろう。

そして、自身の『魔力量』以上の魔力を生成することは、戦闘区域に満ちた使用済みの『魔力』を再利用する『収束砲』などの一部の例外を除いて不可能とされている。

しかし、かおるはその常識をひっくり返した。『魔力素』を吸収して生成した『魔法』をリンカーコアに再度吸収させることによって、リンカーコアを強制的に活性化させ、理論上では通常時の十〜十萬倍の魔力素の吸収ができる技術を考案し、完成させたのだ。

術者自身の魔力限界値以上の魔法を行使でき、吸収した魔法の魔力量・濃度・性質によってその効果が大きく変わる奇跡の技術。あまりに強大かつ高圧・高濃度の魔力を得ることで、魔力光の色が『濃くなる』を通り越して夜空のごとく『漆黒に染まる』その様から、

『^{ノクターン}夜想曲』と名付けられた。

クロノの説明を聞き、一同が驚愕で顔を染めた。かおるとの付き合いの短い八神家の面々は特にだ。いくら何でも無茶苦茶である。先

人達によって長年培われてきた技術と常識が、今まさにたった一人の少年の手で打ち砕かれてしまったのだから。ここまで来ると、もはや天才や鬼才を通り越して異常と言う他ない。

「シャルさん！」

話題の中心である少年にいきなり名前を呼ばれ、シャルがビクリと肩を振るわせる。

「勝負は一瞬です！ 転送の準備を！」

「は、はいっ！」

視線の遙か先で長槍を構える少年に、思わず敬語で答えてしまった。それほどまでに、今の彼の存在感と威圧感は巨大なモノなのだ。玄斗のように瞳を剣のように鋭く尖らせ、威風堂々としたこの姿を見て、この少年が普段は柔らかい物腰と優しい目が印象的な『一見するとお嬢様』だと、誰が思うだろうか。

「ツバ刺突……ツバ絶衝……！」

長槍の矛先に、渦巻く魔力の嵐が巻き付くように収束していく。『ストームブレイカー』を彼の最強の砲撃魔法とするなら、これは最強の『突撃魔法』。なのはの瞬間突撃システムの基にもなった、捨て身の魔法。

＜オーディンブロー風神の槍撃＞

巨大な魔力の塊と化した少年が、再生を続ける『闇』へと迫る。大気を巻き上げ、海を割り、黒い軌跡を描いて、『黒い竜巻』が『闇』へと激突した。常識では考えられない衝撃波が、堅牢な障壁に護ら

れているはずの一同をも襲い、この世の物とは思えない『闇』の断末魔が夜空を貫く。高速で再生を続ける外装をそれ以上の速度でさながら削岩機のごとくに砕き、削っていくその様に、誰もが恐怖を抱いた。

数瞬の拮抗の末、響き渡る轟音と、少女達の悲鳴を効果音にして雌雄は決した。

「ッ！！ リンカーコア、露出！！ 捕まえ・・・た！！」

歓喜に満ちた叫びと共に、シャルが『闇』のコアを捕縛した。あまりの質量に一人では荷が重く、ユーノとアルフの協力を得て、軌道上で待機するアースラの矛先へとすぐさまコアを転送する。

不安そうに皆が天を仰いで見守る中、数瞬後に、夜空の一角で火花を打ち上げたかのような火花がうつすらと見え、リイナとエイミイからの嬉しい知らせが舞い込んできた。

お疲れ様です。 状況、無事に終了しました

この後まだ、残骸の回収とか市街地の修復とか色々あるんだけど、

みんなはアースラに戻って一休みしてって

夜天の書を闇の書たらしめていた全ての元凶は消え去り、一同が達成感と喜びを噛みしめる。一息つく者、戦友と目で語り合う者、友人とハイタッチする者、行動は皆それぞれだが、全員がたった一つの事実を共有し緊張していた表情を緩めている。水平線に目をやれば、太陽がその姿をのぞかせ、夜空をうつすらと白く照らし始めていた。

いにしえ
古の時代より長きに渡って続いた暗く悲しい夜が、今ようやく明けたのだ。

第十三話 「夜の終わり、旅の終わり」 (後書き)

とゆーわけで、玄斗の計画大暴露&防衛プログラムフルボッコの回でした。

なんでこーゆー展開にしたかというですね、アニメを見ていてふと疑問に思った点をうまくまとめたからです。具体的には、「守護騎士達こくしだい、行動が派手すぎるし、闇の書が完成した後のこと考えてなくね？」とか「長い間 管理局を苦しめてた最悪のロストロギアの割りには、アツサリやられすぎじゃね？」です。

後者はともかく、前者は明らかに思慮が欠けているとしか言えませんが。まあ、彼女らがそれほど焦っていたということなのでしょうが・・・。しかし、それでも、私としては『玄斗』というキャラをおる並のキレ者として設定していたので、『いくら追い詰められていたとしても、凡人わたしでも疑問に思うような凡ミスを犯すはずがない』、そう思えてなりませんでした。

不自然さを無くしつつ、さりとて物語の大筋を曲げることなく、玄斗に知恵者として振る舞わせるにはどうしたらいいのか・・・？

考えに考えあぐねた結果、一つの単純明快な案を思いついたのです。『元から逃げる気が無ければ、不自然ではないのではないか』、と自分一人で罪を被り、最終的には自殺する・・・刑事ドラマなんかでよく見るベタな展開だけど、即興で思いついた割りにはけっこうイイんじゃない？ そう思ったのです。

← 魔力を蒐集しつつ、派手に動き回って管理局に自分を認知させる

← 襲い掛かる雑魚の局員を返り討ち

← 手練れが前線に出てくる

← 自分が『主』だと、それとなく悟らせる

← 闇の書完成

← 手練れと決闘・バレない程度にわざと負ける

← 『主』死亡により、捜査一時断念

こんなふうを考えをまとめてみたら、割と筋が通っていたので、採用しました。思い付きつて怖い……。同時に、玄斗の以外に『弱い』部分も描けたので、作者としては嬉しい誤算でもありました。あ、かおる達の話し方が刑事ドラマっぽいのは、単なるノリです（笑）。一度やってみたかったんですよ、これ！

次にフルボッコのラストですが、こちらは特に考えなどはありません。闇の書の最期も、原作は原作で後味スッキリでしたから。ただ、主人公にしては今まで存在感とか微妙すぎたかおる君に最後のおいしいところで活躍してもらいたかったのです。ちょっとチートすぎる気がしなくてもありませんが、まあ……。仮にも天才ですから、これくらいのこととはしてもらわないと逆に困ります。

ノクターン
夜想曲：カートリッジシステムとは別に、かおるが考案・開発していた新技術。

使用済みの『魔力』を一点に集めて撃ち出す『収束砲』からヒントを得た、

一度生成した『魔法』をデバイスを介してリンカーコアに吸収させ、

魔力を驚異的に増幅させる技法。

吸収された『魔法』とリンカーコアが共鳴し、爆発的な活性化を得ることで、

術者の魔力限界値以上の魔力素を取り込むことを可能にしている。

それによって、術者は一時的に常識外れの魔力を手に入
れ、

その際の魔力があまりに高濃度なため、元の魔力光に関
係なく漆黒に染まる。

吸収した魔法が大きければ大きいほどにその効果は増し、
理論上ではアルカンシエルと同等か、それ以上の威力を
発揮出来る。

オーディンフロウ

風神の槍撃：防御を度外視し、貫通力を極限まで高めた突撃魔法。

瞬間加速による速度と竜巻のように槍本体を取り
巻く魔力によって、

対象を削り、砕き、貫通するため、その殺傷能力
は極めて高い。

相手にも自分にも危険な魔法のため、実践で使用
したのは今回が初。

いやあ、これでやっと伏線も全部回収できたかな？ あと二話ほ
ど後日談が残っていますので、そちらを出来るだけ早く書き上げよ
うと思います。

それでは、またお会いしましょう。

第十四話 「夜のわすれもの」 (前書き)

三万アクセス突破あゝ

十四話ですよ、十四話！ 感無量ですなあ・・・。

飽きっぽい私がここまで何かを続けられるなんて、明日以降 何かあるかもしれないな（笑）。

とまあ、冗談はさておき、どうぞ見てやってくださいえ。

第十四話 「夜のわすれもの」

ピチヨンッ

小さなしずくが床へと落ちた。

ピチヨンッ

書類に埋まった薄暗い部屋に小さな音が木霊する。

ピチヨンッ

アースラのカフェテリアに五つの人影があつた。なのは、フェイト、アルフ、ユーノ、クロノ——『闇の書事件』解決の功労者達である。広いテーブルに、なのは達が横一列に並んで座り、その正面にクロノが一人で座っている。

「……え……?」

「どういうことなの? クロノ……」

なのはとフェイトの力の抜けた眩きが漏れる。蚊の鳴くような小さな声だったが、しんと静まりかえった遮蔽物の無い広い空間には良く通った。

「言葉の通りだ。リインフォースはここ数ヶ月の内に消滅する」

クロノの無慈悲な言葉が現実を四人に告げる。クロノ自身、口調はいつも通りだが、その表情には弱冠の影が見えた。

「な、なんで！？ 闇の書の闇は、ちゃんと壊したんじゃ・・・」
「確かに破壊した」

納得できないと身体を乗り出し、クロノに詰め寄るなのはの言葉を第三者の声が遮った。その声は間違いなく、話題の人物である――

「リインフォース・・・さん・・・」

――銀色の長髪と赤い瞳が印象的な、夜天の書の管制融合騎だった。その後ろにはいつの間にか、はやてや玄斗、守護騎士達の姿もある。

「しかし、防衛プログラムの切り離しの際に、

夜天の書の根幹を成していた機構の大半を同時に失ってしまった。

もはや、私はただの残りカス同然なのだ・・・」

防衛プログラムと共に彼女を構築する基礎的な部分まで切り離してしまったため、今の彼女はこの世に姿をとどめる事すらままならない状態らしい。

「クロノ、失った部分を補うことは出来ないの？」

「不可能だ。夜天の書の内部構造についての記録は無限書庫にも存在しない。」

データが無ければ、プログラムの作りようがない」

フェイトの提案兼疑問をクロノが即座に否定する。

「でも、それじゃ・・・ヴィータちゃんやシグナムさん達まで・・・」

膝の上の拳を白くなるまで握りしめ、なのはが言葉を絞り出す。

「・・・いや、消滅するのは、リインフォースだけらしい」

「・・・え・・・？」

クロノの言葉になのはやフェイト達は疑問符を浮かべる。

「守護騎士プログラムの維持は、すでに主はやてにお任せしている。」

逝くのは、私だけだ・・・」

寂しそうに、しかし嬉しそうに語るリインフォースを、なのは達はただ無言で見つめるしかなかった。

「だいじょーぶや！ 消滅ゆうても、今日明日のことやない・・・」

残り少ない時間を精一杯過ごして、沢山思い出作ればええんや！」

「そもそも、これは私の責任だ。」

君達が無用に悲しんだり、責任を感じる必要はない」

車イスの妹と長髪の兄は、柔らかな笑顔でそう語る。強いな、と思った。自分達のほうが悲しいはずなのに、現実を受け入れ、未来に目を向けている。これからどうするのがベストなのか、考えている。涙よりも笑顔を、悲しみよりも喜びを。残された時間が僅かなら、後悔など残らないほど幸福な思い出で満たせばいい、と。

「何、辛気臭い話をしているんですか、あなた方は・・・」

突然聞こえた声と現れた人影に、皆の視線が集中する。そこには腕を組んで軽いため息をつく、銀髪ショートカットの少女の姿があった。

「あれ？ リイナちゃん、かおるちゃんは？」

なのはのその言葉に、リイナは口を意地悪く歪め、

「あら、なあ〜んにも聞かされてないんですね・・・」

やっぱり、かおるさんも乱暴な人に愛想を尽かしたのかしら」

あからさまにケンカを売ってきた。なのはの額にクツキリと青筋が浮かび、どす黒いオーラがはるか頭上の天井まで立ち上る。歴戦の騎士ですら恐怖するその姿は、さながら鬼神のようだ。レイジングハートを起動させようとしたので、慌ててユーノとアルフが取り押さえた。しかし、乙女の怒りは恐ろしいモノだ。火事場の馬鹿力と言うべきか、運動神経が皆無の普段からは想像も出来ない怪力を発揮したため、ユーノとアルフが力負けし始めた。よって、ヴィータとシグナムも鎮圧に参加することになり、先程までの静けさは一転し、カフェテリアは一気に騒がしくなった。

騒ぎが収まったのは、それから約三十分後のことである。

「で、君は何をしに来たんだ？ クルセイド三士・・・」

本当に疲れた表情で、深いため息混じりにクロノが尋ねる。

「かおるさんからの伝言を届けに参りました」

その問いに、いつもと変わらない落ち着いた表情と声でリイナは答える。視界の端でなのは黒いオーラを未だに発し続けているが、クロノは気にしない。

「『リインフォースさんを助けられるかもしれない』・・・だそうですよ、皆さん」

次の瞬間、真顔でリイナが口にした言葉に、その場の全員が己の耳を疑った。

「・・・ちよつと待て、今、なんて・・・」

「だから、その管制融合騎は消滅せずにすむかもしれないそうです」

親指と人指し指で眉間をもみつつ怪訝な表情で聞き返すクロノに、リイナはやれやれとため息をつきながら再び答える。

「ふざけるなッ！！！」

次の瞬間、シグナムの怒号が室内に木霊した。

「気休めなどいらん！ 修復方法の分からぬモノを、どうやって

直せると言っただッ!!」

リイナの胸ぐらをつかみ、羅刹のような表情で怒鳴り散らす。一見乱暴だが、彼女の意見はもつともだ。しかし、

「方法が分かっているとしたら、どうですか？」

「・・・何・・・？」

大の大人でも震え上がるほどの怒気を浴びつつ、リイナは涼しげな表情でシグナムに問い掛ける。当然、みんなが怪訝な表情を見せるが、リイナは気にせず言葉を紡いだ。

「かおるさんがなんの考えも無しに、

ただ突撃するなどという無謀かつ無意味なことをすると思いますか？」

あの瞬間^{とき}、彼は闇の書の基礎構造をデバイスに分析させていました」

皆、驚愕した。玄斗でさえも普段無表情な瞳を丸くしている。確かに、リイナの意見はもつともだ。突撃という攻撃方法は、威力が高いがリスクも高い。おいそれと出来る戦法ではないのだ。賢明な彼が、ただ闇雲にそんな行動に出るはずがない。

しかし、それでも信じられなかった。とてもではないが、攻撃の最中にそのような芸当が出来るとは思えなかったからだ。よしんば出来たとしても、

「しかし、夜天の書のデータ容量は半端じゃない！

リインフォースの消滅まで、およそ二ヶ月！間に合うわけが・・・」

「あの方を甘く見てもらっては困ります。すでに解析作業はおお

むね終了。

確かに、かなり複雑かつ膨大なデータだとはおっしゃってましたが、

彼の手にかければ、一ヶ月ほどで新しい基礎プログラムが完成するでしょう」

クロノの主張を遮ったリイナの言葉は、専門知識が無い者でも信じられないモノだった。

しかし、

「・・・マジかよ・・・」

「正直、信じられんが・・・」

「・・・かおるちゃん・・・ッ！」

『あの少年ならやってくれる』、そう思えてならない。なのは達ミッドチルダの魔導師だけではない。守護騎士達までもが、一人の少年の言葉に希望を見いだしたのだ。泣く者もいる。笑う者もいる。歓喜の声がカフェテリアを覆い尽くし、アースラ中に響き渡った。

クリスマスも無事に終わり、戦士達は平和に流れる穏やかな日々
に、その疲れ切った身体を休めている。

結局、なのは達は『魔法』と『管理局』の存在を高町家の人々やアリサ、すずかといった友人達に明かし、今後、かおる同様に正式な局員として入局する旨も伝えた。それぞれ反応は弱冠違ったが、なのはの性格を熟知しているため、引き止める者はいなかったとか。クロノやかおるが尽力したこともあり、はやてと玄斗、守護騎士達は保護観察処分となった。フェイト同様に、管理局に勤めながら、罪を償っていくことになる。

グラム提督と双子の使い魔は、今回の責任を取り、希望辞職という形で管理局を去ることになった。故郷のイギリスに帰り、静かに暮らすそうだ。はやて達への支援は今まで通りに続け、事件の真相については、時を見て、自分から彼女達に話すとも言っている。

そんなある日、リンディとレティの二人は、本局の長い廊下を歩いていた。

「あれ以来、車イスで生活してるけど、大丈夫なの？」

「身体への物理的なダメージが酷いけど、時間を掛ければ、十分完治できるそうよ」

今回の事件で、一番の重傷者はかおるである。『^{ノクターン}夜想曲』によって得られた超高濃度の魔力は、彼の身体に顕著な代償を与えた。全身に及ぶ骨折など、肉体の破壊である。先日の精密検査の結果、他に異常は見られなかったが、半年間の車イス生活を余儀なくされた。

「そう、よかったわ・・・」

将来有望な少年の無事を確認し、レティは胸をなで下ろす。と、そこに小さな少女達が駆け寄って来た。

「あら、なのはさんにフェイトさん。どうしたの？」

「リンディさん、かおるちゃん見ませんでした？」

「病室に行っただけど、いなくて・・・」

彼女達の言葉にリンディとレティが首をかしげていると、今度は逆の方向からはやてとヴォルケンリッター達が歩いて来た。

「なあ、ウチの兄ちゃん知らん？」

はやてのその一言で、皆がまたもや首をひねる。怪我人と保護観察者の行方がつかめない。結局、彼女達は仲間達に緊急集合を掛け、行方不明者二名の搜索を開始した。

本局の一角にある休憩スペースに、車イスの少年と備え付けのベンチに座る少年の姿があった。

「全身に及ぶ骨折とは、なかなか無茶をするね？」

「妹のために死のうとしていたあなた程じゃありませんよ」

自販機で買った飲み物を飲みながら、苦笑混じりに会話をしている。

「そこだ。ずっと引つかかっていた」

「何がです？」

「なぜ、私が死ぬ気だと分かったのか、とね・・・」

一瞬、二人の間に決戦前のように張り詰めた沈黙が流れた。

「『闇の書完成後に、私は別の世界に逃亡するつもりだった』

・・・という可能性は考えなかったのかね？」

この方法でも、はやてを管理局の目からそらす事は不可能ではない」

「もちろんそうですが、その方法は現実ではありません」

地球が活動の拠点だった以上、管理局はそこを中心に搜索を続けるだろう。それでは、捜査の手がはやてに行き着く可能性も否定できない。加えて、玄斗がいつまでも逃げ続けられる保証なども無い。それを踏まえての判断だった。

「だが、世の中にこのような馬鹿なことを考える者など、そうはいまい。」

この短期間で、なぜそのような発想が出来たのか・・・
私が言うのもなんだが、不思議で仕方ない」

「・・・たぶん、ボクがあなたの同類だからだと思います・・・」

例え身内のためであっても、自らの命を投げ捨てるような人間など極一部である。玄斗の指摘に少し戸惑いながらも、かおるはまるで独り言のような小さな声で呟いた。

「今、自分の妹が死にかけてて、ボクの死で確実に助かるなら、ボクもあなたと同じ事をする・・・そう、思ったから・・・」

顔は俯き、その手に握る緑茶の缶と声は悲しげに震えていた。

「・・・やはり、そうか・・・」

かおるは幼い時に両親と妹を事故で失っている。なぜあの時、自分は三人を助けられなかったのか。なぜ、魔法を使えなかったのか。積み重なる後悔は、悪夢へと形を変えて毎晩のように彼を襲った。だからこそ、知っている。すぐそこに助けを求める人がいるにもかかわらず、それを救えなかった時がどんなに苦しいか。かおるは玄斗の立場を自分に置き換え、感情移入した。結果として、同じような境遇の者同士、考えることは一緒だったというわけだ。

実を言うと玄斗は初めて会った時すでに、その目に宿る暗い闇を感じていた。巧みに隠してはいるが、心の奥に抱えている大きな悲しみを。玄斗は自分のカンが当たっていたことに、表情を苦々しく歪める。

「当時は、神を呪いました。あの時ほど、世界が憎いと感じたことはありません」

だからこそ、玄斗と守護騎士の気持ちはよく分かる。そう語る彼の目には、僅かに涙がにじんでいた。

「でも・・・」

深い絶望の闇の中で、一点の光に出会った。見る者を魅了する優しい笑顔で、その少女は小さなその手をさしのべてくれた。その後、何があったのかは、正直に言っあまり覚えていない。ただ一つ、天使のような笑顔と、少女が言った一言だけが印象強く残っている。「友達になろう」と。それが、幼なじみであるなのはとの出会いであった。

懐かしげに思い出話を語るかおるを無言で眺めていた玄斗は、予想を確信へと変えた。

「なるほど。それ以来、なのは嬢にゾッコンという訳か」

突然に図星を突かれ、かおるは飲んでいた緑茶を人目もはばからず思いっきり吹き出してしまった。

少年二人の会話を、数人の人物が柱などの陰から盗み聞きしていた。二人を捜していたなのは達である。

「・・・なんだか、とんでもない場面に出くわしちゃったわね」
「相変わらず直球だなあ・・・兄貴は・・・」

リンディとヴィータが苦笑を交えて気まずそうに呟く中で、なのはとリイナは食い入るように聞き耳を立てた。

「なっ、ななななっ・・・なんでそんなッ・・・!!」

普段の物静かな様子など微塵も感じられないほど取り乱し、かおるは必死に否定しようとしている。顔を耳まで真っ赤に染めて、実にかわいらしい。

「私に隠し事など不可能だ。その反応だけで、状況証拠には十分だよ」

玄斗のその一言で、赤い顔がさらに赤みをます。まるで茹でダコのようだ。

かおるはそれつきり恥ずかしそうに床を見つめ、しばらくの間一言も話そうとしなかったが、気持ちの整理が出来たのかゆっくりと言葉を紡ぎ始める。

「・・・なのはは、ボクの憧れなんです」

蚊の鳴くような小さな呟きだったが、その場の誰も聞き逃すことはなかった。

「優しくて、強くて・・・」

理屈じゃない、何か特別な力を持つてる・・・そう思いました。憧れました。すごく、とてつもなく・・・」

その少女は、人としてとても素晴らしい才能を秘めていた。言ってみれば、『人の心を救う天才』である。人の悲しみや苦しみを感じ取るだけでなく、その感情を共感し、まるで自分の事のように悩み、

悲しむことが出来る彼女は、その仕草と言葉で自然と他者を癒やしてくれる。ふさぎ込んでいた少年も、ケンカで知り合った少女達も、悲しい目をした少女も、皆一様に彼女の笑顔と言葉に救われたのだ。憧れた。出会った当初は崇拜に近かったかもしれない。そして、一つの感情が少年に芽生えた。彼女のように、人々に希望と笑顔を与えられる存在になりたい。そうでなければ、彼女の隣に立つ資格が無い、と。いつしか少年は、いつまでも彼女と共に生きたい、と思うようになっていった。

「・・・要するに、好きなのだな？」

気持ちの整理が出来たのか、かおるは戸惑いながらも玄斗の問いに無言で小さく頷く。その光景に、なのはは嬉しそうに頬を赤らめ、リイナはそんな少女に激しい怒気を叩き付けた。周りのメンバーが一步後ずさり、緊急避難の用意をしていたその時、

「そ、そう言う玄斗さんこそ、フェイトさんのこと、どう思ってるんですか!？」

仕返しとばかりに、今度はかおるが玄斗に爆弾を投下した。戦闘状態に入ろうとしていたなのはとリイナが動きを止め、フェイトは僅かに身を乗り出す。

「・・・なんのことだね？」

「とぼけたってダメです。」

フェイトさんを見るあなたの視線が、日に日に熱を帯びていることくらい知ってます」

冷静に切り返す玄斗に、かおるが追い打ちを掛ける。洞察力ならば、かおるも玄斗に負けていない。出会った当初からフェイトを気に掛

ける言動を繰り返していた彼が彼女に対してある種の感情を隠していることなど、お見通しだったのだ。とは言っても、一般人から見ればいつも通りの無表情にしか見えず、視線の温度の上昇など、僅かすぎて感知できないのだが。

「私は未だに学生の身だ。そのようなコト色恋沙汰は、いささか早い」
「・・・否定はしないんですね・・・」

フェイトは紅潮した顔を恥ずかしそうに俯かせてしまった。後ろの方では、シグナムがレヴァンティンを起動させようとしているのを、リンフォースとシャマルとユーノが必死に押さえ込んでいる。

「あはは、カワイイネエ」

「本人達にしてみたら、笑い事じゃないと思うぞ、エイミィ・・・」

傍観者としての立ち位置を確立しているエイミィは楽しそうに現状を眺め、苦労人気質のクロノはエイミィにツツコミつつ、この力才な事態をどうやって収めるか本気で頭を悩ませていた。

「兄ちゃんも、恋とかするんやなあ・・・」

普段から色恋沙汰に興味を見せなかった玄斗が、自分の友人を恋愛対象として見ていた事実には、はやては驚きつつも僅かばかりの嬉しさを覚える。

「若いつていいわね・・・」

「あの能面が恋とか・・・全っ然想像できないんだけど、アンタどう思う?」

「・・・ノーコメントだ・・・」

どこか遠くを見つめながら、レティがかすかに頬を紅潮させて呟く。その横では、何やら失礼な一言をアルフが漏らし、沈黙を守っているザフィーラに同意を求めている。

かつては敵と味方に分かれて刃を交えた者達が、なんの気兼ねもなく言葉を交わす。世代と時を越えた長く険しい戦いの果てにあったのは、平穏を取り戻した日常と新たな友情だった。

それからさらに数週間後、なのは達はアースラのとある個室の前に立っていた。現在、かおるがリインフォースの基礎構造を解析及び製作している研究室である。ここ数日、かおるは部屋にこもり、作業に没頭している。食事もともに取っていないようだ。という訳で、彼の身を案じた友人達がなんとか休養を取らせようと、外に連れ出すべく勢揃いしたのである。

「うつわ！？　なんだコレ！？」

「はあゝ・・・すつごいなあ・・・」

「まるで迷路ですね・・・」

部屋に入るなり、ヴィータは思いつきり嫌そうに叫び、はやては対照的に瞳を輝かせる。室内は大量の書物が所狭しと山積みになれ、まるでバリケードのようになっていた。リインフォースの『迷路』という表現も、あながち間違っていない。照明は点いているようだが、天井まで積まれた本によつて、その光のほとんどが遮られ、室外に比べて薄暗く、なんとも不気味な雰囲気醸し出している。

「・・・フム・・・これはベル力戦乱時の資料のようだ」

「あつ、コレ、読んだことあるわ」

「よくもこれだけの書物をかき集めたものだ・・・」

残りの守護騎士達は感慨深そうに本の山を見つめ、または手にとつてパラパラとページをめくっている。懐かしそうなその様は、まるで昔のアルバムでも見ているかのようにだった。

「うつひゃ・・・！　すごいねコレ・・・」

「よく、こんな空間で数日も過ごせるもんだ・・・」

方や引きつった笑みを顔に貼り付け、方や盛大にため息をつきながら、執務官とその相棒は本で出来た暗い迷路を突き進む。

「・・・この量を、たった一人で・・・」

「いー加減、慣れたらどーだい？」

「そもそも、あなたごときがかおるさんを意識する事自体が間違っています」

例によってユーノが頭を抱えだし、アルフがため息混じりに慰める。リイナは相変わらずの毒舌だ。

「？　どうしたんですか？　玄斗さん」

「・・・いや、向こうから、かすかに物音が・・・」

部屋の奥へと少々厳しい視線を向ける玄斗を不思議に思い、フェイトが尋ねる。最近、この二人は一緒に行動することが多くなったため、表情や雰囲気の微妙な変化を敏感に感じ取れるようになっていた。一部には、その事を快く思っていない者もいるようで、ごくまれにだが、文字通り火花が散ることもあるのだとか。ちなみに、『あの会話』が盗み聞きされていた事実を彼とかおるは未だ知らない。

「あつ、かおるちゃん！」

玄斗が物音を聞いたという方向へ進むと、部屋の隅にかおるらしき人影を見つけ、なのはが実に嬉しそうに少年の名前を呼ぶ。連日連夜の研究で、さすがに疲れているのだろう。空中にモニターを開いたまま、彼は片手を枕にして机に突っ伏していた。

「もっ……こんなトコで寝たら、カゼ引いちゃうよ？」

しょうがないなあ、と近づこうとしたその時、

ピチョンッ

小さなしずくが床へと落ちた。

ピチョンッ

書類に埋まった薄暗い部屋に小さな音が木霊する。

ピチョンッ

なのはは、おそろおそろ視線を下に移す。するとどうだろう、床の一部が花を咲かせたように赤く染まっていた。

「……いや……」

机の縁から深紅の水滴が、重力に従って床へと落ちる。

「いやああああああアッ！！！」

天を突かんばかりのなのはの悲鳴が、アースラ全体に木霊した。

「誠に残念ですが、今の管理局の技術では手の施しようがありません・・・」

医師から告げられた言葉に、皆が顔を青ざめさせる。常に表情を崩さない玄斗ですら、悲痛に表情を歪めた。

「リンカーコアが機能不全を起こし、彼の生命活動を阻害しているのです・・・」

体中に及ぶ負傷の影響もあって、コアの自然回復にも時間がかかるでしょう」

すなわち、機能不全を起こしたリンカーコアがかおるの生命を侵食し、さらに重傷を負った身体では、その回復速度が通常に比べて異常なほど遅くなっているため、結果としてリンカーコアが身体を蝕み続けるという負の連鎖が成り立ってしまっているのだ。曰く、かなり無茶な魔力運用を行った結果、とのことだった。

「いずれは神経性麻痺が体中を蝕み、二週間ほどで死に至るかと
・・・」

残酷極まりない死刑宣告だった。場の空気も皆の表情も、一瞬にして地獄のどん底へと叩き落とされる。

「・・・かおるちゃんは・・・治らないん・・・ですか？」

「・・・残念だが、私達には何も出来ない・・・」

かわいそうだけど、どうしようもないんだよ・・・」

今にも泣きそうな顔で力無く尋ねるのはに、医者は申し訳なさそうにそう答えるしかなかった。出来ることならば、救いたい。しかし、現実的に不可能なのだ。リンカーコアの治癒力を促進させる薬や技術など、今の管理局には存在しないし、肉体的損傷を治療して自然治癒力を通常の数値に回復させようにも、床に血だまりを作るほどの吐血だったのだ、内蔵を始めとして、体中に相当のダメージが蓄積されている。リンカーコアの侵食によって悪化したそれらの症状を治療するには、管理局の医療技術をもってしても、かなりの時間を必要とするだろう。肉体の治療が終わる頃には、『後の祭り^{ウツ}』である。せめて、事前に事態を把握できたらまだ良かったのだが、機能不全が遅延性であったために先日 of 精密検査でも発見できなかったのだ。

「今のところ、病状は安定していますが、いつ急変してもおかしくありません。」

・・・とにかく、覚悟だけはしておいてください」

そう言い残し、医師は静かにその場を立ち去っていった。皆はその背中を眺めることしか出来ない。あまりのことに、なんと言ったら

いいのか分からなかったのだ。なのはが力が抜けたようにその場に座り込み、呆けた表情で大粒の涙を流し始める。言葉を発することもなく、涙で歪んで見える医者の後ろ姿を見つめ、白い床を水滴でぬらし続ける。フェイトが近寄り、慰めようとするが、クロノがそれを止めた。この状況での下手な慰めは、逆に彼女を傷付ける結果にしかならないからだ。

「もしかしくなくても・・・アレが原因・・・だよね・・・」

俯きながらのエイミイの呟きに、皆が思い浮かべるモノはただ一つ。闇の書との最終決戦でおおるが使用した新技術、『夜想曲^{ノクターン}』である。あの異常なほどの魔力量と濃度だ、常識で考えれば、肉体のみならずリンカーコアに後遺症が出て、なんら不思議はない。しかし、皆はそれを失念していた。精密検査で異常が見つからなかったこともあるが、それ以上に車イスでの生活を送りながらも、おおるが普段通りに笑い、いつものように明るく振る舞っていたから。

考えてみれば、あまりに無謀な技術だった。魔法を直接体内に取り込むなど、魔法学の常識ではあり得るはずがない。言ってしまうえば、それは異物を飲み込むのと同じ事で、取り込むことそれ自体が本来ならば不可能なのだ。

「かおる君は、その問題を独自の理論で解決したんです・・・。
計算上ではなんの問題も無かったのに、まさかこんな事になる
なんて・・・」

通常、人が異物を飲み込んだ時に吐き戻すように、体外で生成した魔法を再度体内に取り込もうとすれば、拒絶反応が起こり、その時点でこの技術は成り立たない。しかし、マリーの言う通り、かおるはその常識を覆し、出来ないはずの魔力運用をやったのけた。一ヶ月前にかおる自身が懸念していた安全性も立証され、理論上ではな

んの問題も無かったはずだが、幼すぎるかおるの年齢が災いした。未だ未成熟なリンカーコアが、あまりに高圧・高出力の魔力に耐えきれずに破損し、彼の命を蝕み、脅かすという予想外の副作用が起こったのだ。

この副作用の活発化が遅延的なモノであつた事や、負傷の影響で車イスでの生活をしていた事が要因となり、医師はもちろんかおる本人ですら自覚症状に気付けなかつた。言うなれば、出来ないはずのことをや^ってしま^える彼の才能が、今回はアダになつたのである。ガンツと鈍い音が広い廊下に木霊する。

「・・・なんで世界は、こんなはずじゃない事ばかりなんだッ・・・！！！」

壁を殴りつけたままの体勢で、クロノが苦々しく吐き捨てる。力一杯に壁を殴つたため、拳には弱冠血がにじみ、ギリツと噛みしめた歯が軋む音が殊更大きく聞こえた。絞^しり出^ですかのようなクロノの小さな一言はしかし、静まりかえつていたその場によく響いた。

第十四話 「夜のわすれもの」(後書き)

とゆーわけで、今まで以上に駆け足な展開となりました。荒唐井蛙です。

どんでん返しのタイミングが早すぎて、正直言^{わたし}って作者自身も弱冠置いてかれてる状況です(ちょっと待て！)。

リインフォース生存フラグかと思いきや、まさかの主人公の死亡フラグ！ さぞや驚いたことでしょう。私も驚いた(なんでやねん！)。

なんでこんな事になったのかというと、一重に私の文才の無さが原因です。もう二、三話に分けて書ければまだよかつたんでしょうが、私にはコレが限界でした・・・。

とは言え、この展開自体は当初の予定通りです。なんでも出来る天才とゆーキャラは使い勝手がいい反面、その万能さ故に状況を全て好転させてしまうバグキャラでもあるのです。要するに、『悲しい結末になりにくい』のです。このままでは、本文序盤の流れ通り、初代リインフォースが生存し、ツヴァイの誕生が無くなってしまう話が大幅に変わるのを避けたい。とゆーわけで、第十四話はこのような内容になりました。

リインフォースのその後については、かおるが倒れる関係上、あらゆる意味で違和感や不自然さを極力無くすため、原作ではなくゲーム版の設定を使わせてもらいました。

ともかく、泣いても笑っても次が最終話となります。どうぞ、ご期待下さい。

第十五話 「スタンバイ・レディ」 (前書き)

さゝいゝしゅゝうゝわゝっ!!!

堂々の完結です!! この駄文を見て下さった多くの方に最大の感謝を!!

そして、こんな場ではありませんが、東北地方の被災者・犠牲者の方々に、遅ればせながら深くお悔やみを申し上げます。大変でしょうが、頑張ってください。

第十五話 「スタンバイ・レディ」

空が綺麗な茜色に染まり、巢を恋しがるかのようなカラスの鳴き声が響き渡る。学校帰りの通学路を、仲むつまじく並んで歩く二つの小さな人影があつた。

「綺麗な夕焼けだね、かおるちゃん」

「うん、そうだね」

そんなありきたりな会話を、実に楽しそうにしている少年少女。普段はあと二人の親友と共に帰路に就くのだが、今日はその二人は習い事のために別行動だ。

今日一日の学校での出来事から、昨日の家族の話まで、会話の内容は多種多様だ。しかし、少年の口から『家族の話』が紡がれることはない。なぜなら、彼には家族がないから。

「・・・なのは・・・」

「ん？ なぁに？ かおるちゃん」

そんな少年の小さな呟きに、なのはは内心、首をかしげた。なぜなら、彼は滅多に自分から話題をふることがないからだ。無口というわけではないが、この少年はあまり会話というものを積極的に行ない。おとなしいと言えはそれまでだが、なのはや親しい友人達は、たまに見せる彼の寂しげな瞳の中に、『それ以上の何か』を薄々ながら感じていた。

「ありがと・・・」

「・・・え・・・？」

次いで呟かれたその言葉に、なのはは思わず素っ頓狂な声を漏らしてしまった。礼を言われる心当たりが見つからず、頭の中がぐるぐると渦巻く。

「なのははに会わなかったら、今のボクはなかった・・・」

「そ、そんな・・・かおるちゃんはおるちゃんじゃない」

未だに状況の整理が追いつかず、なのはは文字通りに目を回してあたふたと返事を返す。

「ホント言うとなね・・・ボク、世界なんて壊れてしまえばいいって思ってたんだ・・・」

一瞬、彼が何を言っているのか分からなかった。

「父さんや母さん、妹を殺したこの『世界』が、憎くて憎くて仕方なかった・・・」

それはもう、三年も前の話だ。休日家族水入らずのショッピング、その最中に起こった悲劇。仲むつまじく会話を弾ませながら横断歩道を渡っていたまさにその時、不運にも居眠り運転をしていたトラックが、猛スピードで突っ込んできたのだ。結果、父母と双子の妹は帰らぬ人となり、幸か不幸か彼だけがかるうじて一命を取り留めた。

「病院に来る親子や兄弟の笑顔を見るたびに、

それを壊したいって気持ちでいっぱいになってた・・・」

思考が追いつき、冷静に話を聞くことで、なのはは彼の告白に、心から納得していた。出会った当時の彼は、それはもう酷い表情（かお）をした。

ていたからだ。カワイイはずの顔は見る影もなく荒み、魅力的なはずの瞳は常にどこか遠くを見つめて暗い光を宿していた。

それも当然と言えるかもしれない。当時、たった四歳の少年が、それまでの幸せも日常も、一瞬で全てを失ってしまったのだから。神を呪い、運命に絶望しても、なんら不思議はないだろう。事実、家族を失った少年は、笑顔の絶えない親子や戯れる兄弟に、ある種の憎悪を抱いていた。自分は全てを失ったというのに、幸せそうに笑う人間が周りに溢れている。それが、たまらなく許せなかったのだ。

「あの頃の将来の夢はね、とにかく、世界をメチャクチャに壊すことだったんだ」

自分の前で笑顔は作らせない。自分の前で笑い声は起こさせない。自分が全てを失ったように、目の前のヤツらからも、全てを奪ってやる。壊してやる。そんなことを、一日中考えていた。

「あの日、なのはに会うまでは・・・」

しかし、それほどまでに腐り、荒みきっていた彼の前に、一人の少女が手をさしのべた。あまりに異質なその雰囲気は脅え、子供はるか大人達でさえ誰一人として近づこうとしなかったのに、だ。しかしながら、かおるは当初、そんな少女のことを好意的に見てはいなかった。『邪魔なことこの上ないお節介焼き』、そんな評価を下していた。なぜなら、彼女もまた周りの人間達と同じ、『何も失っていない人間』だから。

何度話しかけても、返ってくるのは感情のこもっていない素っ気ない返事だけ。そんなことが続けば、誰であつても諦めるものだが、なのはは諦めなかった。もう半ば意地になっていたのかもしれない。絶対に、カワイイはずの笑顔を見てみせる、と。

そんなやりとりを続けること一ヶ月ほど、ついにかおるが我慢の

限界に達した。

『あの、毎日毎日よく飽きないね。親とか兄弟とかいないの?』

文面だけを見れば、とても穏やかな言葉だが、その内には渦巻く苛立ちや憤怒がない交ぜになっていた。正直言つて、とてもウザイ。満ち足りた日々を暮らす幸せな人間が、興味半分に自分に関わるな。そんな気持ちが爆発した瞬間だった。

『ううん。いるよ?』

そして、その一言が、火に油を注ぐことになる。

『だったら、放つといてよ。家族みんなで、楽しく笑ってればいいじゃない』

冷たい視線と一緒に、拒絶の言葉を投げつける。これでいい。どうせ、孤独な自分の気持ちなんて分かるはずもない。分かってほしいとも思わない。

『それは・・・無理だよ・・・』

しかし、返ってきたのは、親切を踏みにじった自分への侮蔑でも、あざけりでもなく、それまでの口調からは想像も出来ないほどに悲しくて寂しそうな、蚊の鳴くような小さな呟き。驚いた。彼女の顔が、見たこともないほど悲しみて歪んでいたから。

聞けば、彼女の家族は確かに皆生きている。しかし、父親は仕事で負った大ケガで長期間の入院。母親は、始めたばかりの喫茶店の切り盛りと父の看病で忙しく、兄と姉もその手伝いで目を回すほど忙しい。よって、幼さ故に手伝いすら出来ない末っ子の彼女は、誰に

も迷惑を掛けないように、ただ一人で日々を過ごすしかない。甘えたい盛りの子供にとってそれは、事実上、孤独以外の何物でもないだろう。

『・・・・・・・・・・』

啞然とした。いつも、笑顔を絶やすことなく話しかけてきた少女の身の上とは思えなかったからだ。同時に、激しい疑問に襲われた。なんで、そんな笑顔を作れるのだろう。なんで、そんなに明るく振る舞えるのだろう、と。自分と同じくらい辛いはずだ。いや、手を伸ばせば届くのに伸ばしてはいけない辛さは、もしかしたら、手を伸ばせない自分以上なのかもしれない。

『友達になろうよ』

寂しさも悲しさも押し殺した極上の笑顔で、小さな手を差し出しながら少女はそう語りかける。つい先程まで敵意をむき出しにしていた相手だということも忘れ、かおるは思わず見ほれてしまった。この子なら、自分の孤独も絶望も、全て受け入れてくれる。そう思った瞬間だった。

その日から、かおるは徐々になのはに対して心を開くようになっていった。呼び方も、他人行儀な『高町さん』から『なのはちゃん』になり、最終的には『なのは』と呼び捨てるまでになった。

「なのはのおかげで、ボクは変わったんだよ」

天使のような笑顔が荒んだ心を洗い、聖母のような言葉が地獄へ堕ちようとしていた魂を拾い上げてくれた。彼女がいたから、自分は『世界を壊す』などという馬鹿げた現実逃避から抜け出すことが出来た。信じたくない家族の死を、受け入れることが出来たのだ。ど

んなに感謝しても、しきれない。

「だから、これからはボクがなのはや、みんなを助ける！

なのはがボクにしてくれたみたいに！！」

この時初めて、かおるは数年間胸の内にくすぶっていた己の決意を言葉にした。返しきれないこの恩を、一生を掛けてでも返していう。あの日憧れた少女に近づけるように、その少女のそばに居続けるために、人の心を救い、この世界を護っていこう。例え、この命を懸けてでも。

アースラのカフェテリアで、数人の人物が力無くイスに腰を下ろしていた。なのはは嗚咽混じりに大粒の涙を流し、リイナは背もたれに身体を預け、焦点の定まらない瞳で天井を見上げている。その横ではフェイトやはやて、ユーノやアルフが心配そうに見つめ、ハラウン親子と普段明るいエイミイまでもが表情を暗く沈ませていた。玄斗と守護騎士達に至っては、あまりに重い責任を感じ、頭の中で後悔と自分に対する憤怒が渦を巻いている。重い沈黙が続き、皆が精神的に疲弊しきっていた。

「……まるで、闇の書の呪いみたいだね……」

重い空気に耐えきれず呟いたアルフのその一言に、皆が少なからず反応を見せる。彼女の言う通り、かおるの病状は、はやてを蝕んで

いた『闇の書の呪い』のソレと酷似していた。まるで、彼がはやての身代わりになったかのように。

「・・・一つ、疑問があるのだが・・・」

そこで、玄斗がふと思いついたかのように口を開いた。蚊の鳴くような弱々しいその声に、皆が耳を傾ける。事実上かおるの次に聡い彼の言葉に、僅かばかりの希望を見ながら。

「なぜ彼は私ではなく、はやてが『本当の主』だと分かったのだろうか・・・」

しかし、そんな彼が呟いたのは、今聞くことなのかと、それこそ疑問に思うような疑問だった。一瞬垣間見えた希望の光が無情にもかき消え、あからさまに皆の肩が下がるが、彼を責める者は誰一人としていなかった。この場の誰よりも罪悪感にかられているであろう彼なりに、少しでも気を紛らわせようとしているのだらうと、皆は思ったのだ。

確かに、何もしゃべらないのでは息が詰まる。一見無駄に思える雑談も、無いよりは幾分かマシだ。言わばコレは、彼なりの皆に対する心配りなのだろう。

「それは・・・シグナム達に、そう教えられて・・・」

「それは、君やなのは嫌であって、かおるではない」

しかし、おずおずと答えたフェイトの言葉を、玄斗は「あり得ない」の一言で無情にもバツサリと切り捨ててしまった。事実、はやてが主として覚醒したあの時あの場所にいなかったかおるが、守護騎士の口からソレを知り得たわけがない。と言うより、かおるはそれ以前からすでに真実を見抜いていたとリイナは語っている。フェイト

への彼の反論は至極もつともだ。だがしかし、気を紛らわせるための会話でさらに空気を重くしてしまっているのでは元も子もない。彼の真意が読めず、一同が怪訝な顔をしながら疑問符を浮かべた。

「自分で言うのもなんだが、私の計画は完璧だった……。」

彼も最初は私を『闇の書の主』と思い込んでいたはずだ……」

一同がそんな思考にふけっている間も、玄斗は神妙な面持ちで一人語り続ける。事件の当事者である皆に言わせれば、それはそれで困るのだが、事実そうであった。

当初はかおるもクロノ達同様に『玄斗＝闇の書の主』と認識し、その上で、彼の不可解な言動を疑問に思っていたのだ。人間は、一旦先入観にとらわれると、なかなか抜け出せないモノである。いかに『天才』^{かおる}といえども、経験に乏しい齡九やそのらの少年が、簡単にその固定観念を振り払えるとは思えない。現地調査と友人達の橋渡しによつて、『玄斗とはやてが兄妹である』という事実が判明したとしても、その段階ではやてに対する印象は、『主の妹』となるのが妥当だ。少なくとも、そうなるように管理局には心理的な工作を施してきた。

それにもかかわらず、はやてが玄斗の妹だと知るやいなや、方針を百八十度変えたとなると、かおるは真実にいたる何か重大なヒントを手に入れていたに違いないと、玄斗は考えたのだ。

「そういえば、なんや、石田先生と知り合いみたいやつたけど……」

人指し指をアゴに当てながら呟いたはやての一言に、玄斗の表情が一瞬硬直した。初めて耳にする情報を判断材料に加え、馬車馬のごとく頭脳をフル稼働させる。

「なんでも、君の病の治療法について、前々から相談を受けていたらしい」

「うっそオ!？」

クロノの何も大したことは無いとでも言うようなサラッとした説明に、ヴィータが目をつぱいに見開き、驚愕の声を上げる。そんな彼女を見て、クロノは何を大げさなと言わんばかりのあきれ顔だが、彼女の反応は極めて自然なリアクションだ。どこの世界に、現役バリバリの医者から、原因不明の難病の治療法を相談される小学生がいるのだろうか。数多の世界を『闇の書』と共に渡り歩いてきたが、未だ見たことも聞いたことも無い。かおる本人に対してもそうだが、その信じられない事実をアツサリと認めているクロノに対して、ヴィータはある意味で恐怖を覚えた。

「・・・ということは、もしや、

彼ははやてのリンカーコアの異常に気がついていたのかね・・・？」

が、玄斗はその事実を冷静かつ簡単に受け止めた。重傷だった自分の的確かつ完璧な処置を施したあの少年ならば、あり得ない話ではない。むしろ納得すら出来ると即座に結論づけたのだ。

それを踏まえて、さらに高速で思考を巡らした。現役の医者から相談を受ける程の医学知識を持った魔導師ならば、はやてを蝕む『リンカーコアの機能不全』に気付いていたのではないかと。その事実、管理局がかき集めた闇の書の情報と自分の言動の不可解さを合わせて考えれば、『はやて』闇の書の主』という真実に行き当たるのはそう難しい事ではないだろう。

「うん・・・そうみたい・・・」

エイミイがそこまで言ったところで、玄斗が弾かれたように立ち上がった。あまりの勢いに、座っていたイスが大きな音を立てて後ろへ盛大に倒れる。突然かつ予想外の行動に、皆が目を丸くした。

「ど、どうかされたのですか？」

珍しく、シグナムがうるたえながら尋ねる。それも仕方のないことだ。感情を押し殺すように雑談をしていたかと思えば、一転して興奮しているのがハッキリと見て取れる。半年間共に過ごしてきたが、ここまで感情をむき出しにした玄斗など、今まで見たことがない。

「知れたことを・・・かおるの研究室へ行く」

短く行き先のみを伝える低めの声は、普段から見せる覇者のごとき力強さを取り戻し、刃のごとく研ぎ澄まされたその目には、歴戦の騎士が恐怖すら覚えるほどの決意の炎が激しく燃えさかっていた。

「ちょ、ちよつと待て！　なんで今更そんなところに・・・！？」

歩き去ろうとする玄斗の腕をつかみながら、クロノが行動の意味を問いただす。玄斗は歩みを止め、その場にいる全員を見渡し、ハッキリと言い放った。

「・・・機能不全になったリンカーコアの治療法を見つけるのだ・・・！」

その言葉に、周囲が驚愕に包まれた。当然だ。つい先程、管理局の医者から直々に『無い』とハッキリ宣告された治療法をどうやって見つけようと言うのだろうか。

「彼のことだ、はやての病の原因がリンカーコアにあると分かっていたのなら、

その治療法を研究していたと考えるのが妥当だろう・・・」

一点の希望が、絶望の淵にいる者達を照らした。

はやてに会った段階では、かおるは彼女と闇の書との関連性を考えなかったはずだ。だとすれば、『機能不全』を『闇の書の侵食』ではなく『なんらかの病気』と判断しただろう。常に他人のことを最優先に考え、人命第一に行動する彼ならば、忙しい職務中だったとしても自身に鞭打って治療法を解明しようとしたに違いない。かおるがこもっていた研究室に、彼自身が導き出した治療法のヒントないしそれ自体があるはずだと、玄斗は推測したのだ。「そー言えば、あれからよく研究室にこもってたつけ」と、エイミイが記憶の奥から情報を引っ張り上げる。

次の瞬間、一同の顔に僅かだが明るさが戻った。先程まで俯き、涙を流すだけだったなのはも同様だ。

「・・・でも、いくら彼でも方法を見つけているとは・・・」

「限らない」と暗い表情でリンディが現実を告げる。一見して残酷だが、紛れもない事実である。今まで無かったモノが急に見つかるなど、そうそうあることではない。かおるがどれほどの天才であろうとも、可能性は限りなく零ゼロに近い。

「解決不可能とまで言われた事件を解決に導いた少年だ。

可能性が1%でもあるのなら、懸ける価値はある・・・!」

しかし、彼は歩みを止めなかった。そもそも、理論上不可能とさえ言われていた技術を完成させたかおるに、カビの生えた常識は通用しない。そう言い残し、確かな足取りで部屋を出て行く。その背を

追うように、それまで暗く沈んでいた面々も立ち上がり、足早に退室していった。その行き先はただ一つ。唯一、希望の残された場所

『かある天才の研究資料』が残る研究室だった。

そして、月日は流れ、事件終結から6年後――

八神家 玄関

「ほなら、シャマル、グレアムおじさんに小包送つといてな」

八神 はやて 一等陸尉（15歳）

私立聖祥大附属中学校三年生兼 時空管理局 特別捜査官。

両足の麻痺も完治し、レアスキルを用いて捜査官として活動的確かつ順調にキャリアを重ねる。

守護騎士ヴォルケンリッターを率いる優秀な魔導騎士として、ロストロギア関連事件の捜査に才覚を発揮する。

「はい、お任せです」

八神 シャマル 医務官（年齢不詳）

八神家次女兼 時空管理局 医務官。

はやての補佐官兼優秀な医務官として活躍。

家庭では家事のほとんどを任されているが、殺人的料理の腕は相変わらずのため、

台所への無断立ち入りは未だ禁止されている。

「私は後ほど合流しますので」

八神 ザファイラ（年齢不詳）

八神家次男兼 八神家護衛。

管理局での役職や魔導師ランクを保有せず、もっぱらはやての護衛として活動。

八神家を影から支え、近所の子供達の人気者でもある。

「はやて、行つてらっしゃい」

八神 ヴィータ 准空尉（年齢不詳）

八神家四女兼 時空管理局 本局航空隊 空戦魔導師。

圧倒的な突発力と優れた防御性能を誇り、前線のトップとして活躍。戦闘教官資格を取得し、任務の傍ら、新人魔導師への愛の鞭を振っている。

ハラオウン家 リビング

「フェイト、はい、お弁当♪」

リンディ・ハラオウン 総務統括官（年齢不詳）

時空管理局 提督。

艦長職を退き、現在は平穏な本局勤務。

事務仕事の傍ら、巣立ちを迎えつつある若い世代を見守っている。

常識外れの甘党は相変わらずだが、一見すれば、どこにでもいる普通の母親。

「ありがとうございます、母さん」

フエイト・T・ハラウン デスタロッサ 執務官（15歳）

私立聖祥大附属中学校三年生兼 時空管理局 執務官。

『闇の書事件』後、正式にハラウン家の養子となり、義母、義兄と共に掛け替えのない今を歩む。

使い魔アルフを伴って、ロストログアやその違法研究の事件捜査を中心に

超一流の執務官として第一線で活躍中。

艦船アースラ 司令室

「今日は久しぶりに、全員集合だな」

クロノ・ハラウン 提督（20歳）

時空管理 提督 艦船アースラ艦長。

次元航行部隊の若きエリートとして活躍。

家では『よき兄』、仕事場では『頼れる上官』として、次元世界の平和維持に尽力。

年下である玄斗にますます背丈の差を付けられ、その事を大変気にしている。

「そうだね。クロノ君の艦長就任以来、初めてかもね」

エイミイ・リミエツタ 管制指令（22歳）

時空管理局 管制指令。

各々昇進後もクロノとのコンビは健在。

相変わらずの明るい性格で事務方、現場を問わず盛り上げている。

近々、クロノと婚約するとの裏情報も。

「平和な任務だ。ちょっとした同窓会、と言ったところか・・・」

八神 玄斗 主席執務官（18歳）

八神家長男兼 時空管理局 主席執務官。

管理局最強と呼び声高い優秀なその手腕と厳しくも優しい人柄から、上司や同輩から信頼され、後輩にも慕われている。

リーダーシップも強く、名実ともに数多くの執務官をまとめる存在。
最近、上司の義妹との関係に進展があったらしい。

「はい、そのようです」

八神 シグナム 三等空尉（年齢不詳）

八神家三女兼 時空管理局 ミッドチルダ首都航空隊 空戦魔導師。

指揮官資質を認められ、前線指揮官として実績を積む。

部下からは厳しい上官として恐れられている。

最近では玄斗の補佐官として活動すること多い。

ユーノもいいか？

「ああ。時間通りに」

ユーノ・スクライア 司書長（15歳）

時空管理局データベース『無限書庫』司書長。

無限書庫の整理や探索に専念するため、魔導師としての活動は現在休業中。

司書の傍ら古代史の論文を発表。学者としての実績を重ねる。

最近、玄斗から『はやてのフィアンセ婿殿』扱いされ、本人達もまんざらではない様子。

地球 海鳴市

「あ、なのは！」

「なのはちゃん！」

アリサ・バニングス（15歳）&月村 すずか（15歳）

私立聖祥大附属中学校三年生。

相変わらず、なのは達と良い友人関係を築いている。

管理局の仕事で忙しく過ごす親友達をサポートしつつ、それぞれの将来に向かって、充実した毎日を送る。

「アリサちゃん！ すずかちゃん！」

高町なのは 二等空尉（15歳）

私立聖祥大附属中学校三年生兼 時空管理局 本局武装隊 戦技教導官。

新任局員への戦技教導の傍ら、捜査官としても活躍。

優しく面倒見がよいため、上司からは信頼され、同僚や後輩からは慕われている。

戦技教導官として次代を担う優秀な人材を多く育て、
『管理局のエース』の一人として、優秀な成績を残している。

イギリス

「そうか・・・もう、あれから六年・・・早いものだ・・・」

ギル・グレアム（年齢不詳）

元時空管理局提督。

辞職後、使い魔と共に故郷英国にて隠棲中。

八神家との関係は良好で、今でも定期的に手紙でやりとりをしている。

時空管理局本局 遺失物管理部 機動一課 課長執務室

「二佐、そろそろお時間です」

リイナ・クルセイド 二等陸尉（15歳）

時空管理局 遺失物管理部 機動一課課長補佐及び部隊長補佐。
類い希な事務処理能力を発揮し、裏方として確実に昇進を重ねる。
補佐官としては非常に優秀な人材と、上層部からの評価も高い。
なのはとは、未だに『犬猿の仲』を続けている。

「そうですか・・・」

春風 かおる 二等空佐（15歳）

時空管理局 遺失物管理部 機動一課課長及び部隊長。

奇跡的に一命を取り留め、二ヶ月の入院と約半年間のリハビリを経て現場に復帰。

なのはの相棒として航空戦技教導隊に二年ほど在籍した後、

異例の若さで遺失物管理部の事実上？^{ナンバー}2である、機動一課課長兼部隊長に就任。

事件捜査・部隊指揮・技術開発・魔法医療の各分野で数多くの功績を残している。

「では、そろそろ行きましょうか」

あの日、出会った絆は、今もちゃんと結ばれて

聖祥大付属中学校 校舎屋上

「レイジングハート・・・」

<イエス、マイマスター>

「バルディッシュ・・・」

<イエス、サー>

「リインフォース・・・」

「はい、マイスターはやて」

八神 リインフォース？^{シヴァアイ}

八神家末っ子兼 人格型融合^{ユニオン}デバイス。

管制融合騎の基礎構造完成の間際にかおるが倒れてしまったため期限に間に合わず、

初代リインフォースは当初の予定通り闇の書事件終結から二ヶ月後に消滅。

その後、かおるの手により『二代目』^{シヴァアイ}として新たな生を受ける。

『初代』^{アインス}の意思と名前を引き継ぎ、はやての補佐として現在修行中。

いくつもの別れと出会いを越えて――

<スタンバイ・レディ>

――始まっていくのは新しい日々――

「セエエット、アアップ！」「」

――魔導師達は^{そら}大空を舞う――

第十五話 「スタンバイ・レディ」(後書き)

というわけで、なんとか完結させることが出来ました。およそ九ヶ月・・・長かったような短かったような・・・。初めの方の文章を読み返してみると・・・うわぁ・・・何コレ・・・。今でもつたない文章が、さらにつたない・・・。

何はともあれ、ようやくかおるとなのはの出会いのエピソードも書けましたし、比較的ハッピーエンドに出来たので、私としては思い残すことはありません。最初っから最後まで、とことん天才な子でしたねえ、かおるちゃん・・・(苦笑)。とりあえず管理局の医療技術云々は私の妄想がほとんどですので、ご都合主義だなと思って軽く流してくれると有り難いです。

えっ・・・ここだけの話ですが、実は、一番始めに私が考えていた結末では、かおるはあのまま死んでいました(オイ!)。当時考えていたストーリーとしては・・・

この最終話で玄斗の生存が判明し、実はかおるによって救助されていたのだということが明らかになり、その後、かおるは天に召され、玄斗は彼の遺志と重い十字架を背負って管理局の局員として尽力していく・・・といったものでして・・・。

・・・かな〜り暗いですね・・・。まるで玄斗が主人公みたいだし・・・我ながら何考えてたんだか・・・。

そんなこんなで書き始めた小説だったのですが、当初の予定と比べてかなり変更することになりました。本作の目標として『限りなく原作に近い流れの二次小説』というのを掲げていたので、原作の流れを壊すであろう内容は極力排除したのです。

今回のかおるの生存も、その内の一つです。主人公の死亡という『バットエンド』のまま行くと、原作の流れに支障をきたすのではな

いかと考えました。『知り合いの死』という身近な具体例があることで、なのはの家族が管理局入りを渋るかもしれませんが、よしんば管理局に入っても、メンバーがお互いの身体の負担などを非常に気に掛けるようになり、二年後の『なのはの墜落』も無くなるかもしれない。

それだけではどうしても避けたかった！ それに、かおるも玄斗もけっこう思い入れのあるキャラですので・・・それ故の結末というわけです。今更ですが、今作三人のオリキャラは、私の分身とも言えるほど私とよく似ているのです。

子供の頃はよく女の子と間違えられた

←
かおるの容姿

考え方が爺臭い

←
玄斗の老成した言動

思ったことがすぐに口から出る

←
リイナの毒舌

・・・といった具合に、私の過去やら現在やらから影響を受けた設定がちらほらありまして・・・。まあ、たいていの小説のオリキャラはみんなそーゆーモノだと思いますけどね？

ところで、六年後になんてかおるとリイナが中学校に行っていないのかというと、『留学』という名目で『外国に行ったことになっている』からです。天才なかおるは中学校に通ってる意味が無いですし、リイナも彼がいなくてここに用はないし、二人とも管理局の

高官になつてゐることで、仕事に専念そっちしているようです。あ、
玄斗は律儀に中学までは卒業しましたよ（笑）。

ちなみに、A's 本編は完結しましたが、彼等のドタバタな日常
はまだまだ続いていきます。ストーリー続編の大まかな構想もすでに出来てい
ますし、本編で思うように描けなかった空白期間や日常の風景も、
『番外編』として書くつもりです。更新は限りなく不定期か
つ遅くなると思いますが、新たに始まっていく彼等の物語を、よろ
しければ読んでやって下さい。詳しくは、活動報告などで追って報
告致します。

追伸：感想下さい！ 読書の皆さんがこの物語をどう思っているの
かが凄く気になります！

次回予告

古い結晶と無限の欲望が集い交わる地

死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る

死者達は踊り、なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を護る法の船は砕け落ちる

澄み渡る空に雲は漂い、世に黒き風が吹きすさぶであろう

新暦75年 春。

「移動命令、ですか・・・？」

「前線要員として、あなたには我が遺失物管理部の『第六課』へ
出向してもらいます」

たった一つの辞令が、少年少女の運命を変える。

「・・・ほう、なかなか良い太刀筋だ」

少年はそれ故に恐れ、

「凄いよね、ティア。あーゆーのを天才って言うのかな？」

「・・・そう、ね・・・」

少女はそれ故に迷い、悩む。

「・・・事態は、予想以上に深刻やな・・・」

困惑する若き司令塔。

「今一度、前線に立っていただきたいのです。管理局最強と謳^{うた}われたあなた方に」

立ち上がる英雄達。

「ま、まさか・・・管理局がそんな事を・・・」

「歴史というモノには、得てして知ってはならない『裏』があるものです」

「プロジェクトFも、戦闘機人計画も・・・コレに比べれば見戲同然だ」

決して見てはならない、管理局の黙示録。

「生まれ落ちたその瞬間から、アタシ達の運命は決まっていたのよ……」

十年の時を経て、『闇』の落とし子が動き出す。

「クククク……実に興味深い存在じゃあないか……！」

古の狂氣いにしえが狂喜し、

「止めるしかない！ 軌道上に到達する前に……！」

「タイムリミットまで、時間が無いな……間に合うか!？」

破滅の瞬間ときは刻々と迫る。

「ボク達に、何か出来ることがあるかもしれない……！」

「お願い！ 話を聞いて……！」

「温室でぬくぬくと育った、血の味も知らないガキが・・・知ったような口をきくな!!」

その少年は死を纏い、

「・・・もしかしたら、ボクと君は逆だったのかもしれない・・・」

かの少年は世界を背負う。

「凡骨にはな、凡骨なりの・・・意地ってのがあんだよ!」

天空に熱き雄叫びが轟き、

「・・・止めてやる・・・!!」

大槌は強き意志と共に振り下ろされ、

「護るよ、いつだって・・・どんな時だって!!」

清く優しい誓いの元に星々が集う。

「役に立ちたいんだ・・・！ 今度こそ！！」

魔法少女リリカルなのはStrikers へ未来への翼へ 始
ります。

次回予告（後書き）

てなわけで、次回作の予告でした。どれが誰のセリフか、分かったでしょうか？ 分かったらけっこう凄いかも？ ちなみに、四人ほど新キャラが加わっております。なんかオリジナルの要素が欲しいなーとか思ってた色々考えてたらこうなりました。私のつたない文才で纏めきれぬのか今から心配です（オイ！）。

キャラの設定やストーリーの大筋などは意外と早めに固まったのですが、未だに第一話を書けない……。投降はまだまだ先のこととなりそうです。気長にお待ち下さい。あ、ちなみに、続編とは言え題名がまるつきり違うので、別の小説扱いで投稿します。

エース達の日常・その一 「かおるの退院を祝う会」(前書き)

はい、そんなわけで、初めての番外編です。今回のような『エース達の日常』シリーズでは、初期のあとがきで書いていたようなセリフオンリーのドタバタな日常風景やら、事件終結後の後日談的なモノを書いていく予定です。シリアスメインだった本編から一風変わったエース達の日々の生活を堪能してくれたなら幸いです。

あ、もちろん、本編のようなセリフだけではない文章もおいおい書いていくつもりです。要は私の息抜きの作品だと思ってください。

今回は、『闇の書事件』の終結から二ヶ月後、本編で瀕死の重傷を負ったかおるが退院した三月くらいのお話です。よって、かおる達はまだ小学三年生で、玄斗も中学校には上がっていません。

追伸、感想を首を長くしてお待ちしています。

エース達の日常・その一 「かおるの退院を祝う会」

●その方が違和感無いしね

なのは

「今日はありがとう、はやてちゃん」

フェイト

「でもよかったの？ この家でかおるの退院祝いしちゃって・・・」

「

かおる

「そこはかとなく、申し訳ないんですけど・・・」

はやて

「ええのええの。かおるちゃんは、私と兄ちゃんの命の恩人や。こんなくらいのこと、いくらやつても足りんくらいや」

かおる

「・・・結局、『ちゃん』付けで定着しちゃったなあ・・・」

●宿敵 ライバル

フェイト

「あれ？　そういえば、玄斗さんは？」

ヴィータ

「お、なんだ？　やっぱ、気になんのか？」

シグナム

「・・・兄上なら、今朝から食材の調達に行っている。
残念だったな？　テストロッサ・・・」

フェイト

「・・・・・・・・・・」

シグナム

「・・・・・・・・・・」

すずか

「こんにちは」

アリサ

「はやて、今日は誘ってくれてありが・・・」

はやて

「あ、二人ともいらっしやい」

フェイト

「・・・・・・・・・・」

<ハーケンフォーム>

シグナム

「……………」

<シユランゲフォルム>

アリサ

「……何があつたのよ、この状況……」

はやて

「とりあえず、触れたら火傷じゃすまんのは確かや」

● 誰？

シャマル

「そろそろ帰ってくる頃じゃないですか？」

はやて

「そやね」

玄斗

「ただいま」

なのは

「あ、ホントに帰ってきた」

かおる

「さすがに家族ですね・・・って、あれ？」

ケント

「・・・・・・・・・・」

なのは・フエイト・かおる・アリサ・すずか

「・・・・・・・・・・」

ケント

「・・・・・・・・えーと、失礼ですけど、どちら様でしたっけ・・・・？」

なのは・フエイト・かおる・アリサ・すずか

「・・・・・・・・こっちのセリフです・・・・」

●いたんだ・・・

玄斗

「研人、あきひとお前は彼女達とは初対面だ」

ケント

「あ、そーなの？ ごめんごめん、ビックリしたよな？
オレ、紙野かみの 研人あきひとってんだ。よろしくな」

かおる

「えっと、玄斗さんのお友達ですか・・・？」

はやて

「さっすが、かおるちゃん。理解が早いなあ」

なのは

「・・・お友達、いたんだ・・・」

アリサ

「『配下』はいいいいそうだけど、『友達』がいたのね・・・」

玄斗

「・・・とりあえず、君達が私をどう見ているのかはよく分かった」

●類は友を呼ぶ

かおる

「紙野さんは、どういった経緯で玄斗さんとお友達に・・・？」

ケント

「『ケント』でいいよ。みんなそう呼ぶから」

玄斗

「手っ取り早く言えば、ケンカが切っ掛けであつたな」

フェイト

「ケンカ・・・ですか・・・？」

ケント

「チビッコだった時は、この名前のせいで『ケント紙』とか色々いじめられてたからな」

玄斗

「何が『いじめられていた』ものか。直後に百倍にして返していただろう」

なのは

「ひゃ、百倍・・・」

はやて

「で、見かねた兄ちゃんが注意したことで、取っ組み合いに発展したんや」

アリサ

「・・・気のせいかしら・・・どこかで聞いたような・・・」

ケント

「そんでまあ、事あるごとにド突き合つてる内に、いつの間にか意気投合してたんだなあ、これが」

すずか

「・・・冷静に分析してる場合じゃないよ、かおるちゃん・・・」

●ちなみに

なのは

「・・・どんな仕返ししてたんですか？」

ケント

「あん？ 言ってもいいけど、スッゲーくだらねえぞ？」

アリサ

「ま、子供の考えるよーなことだし、あんまり期待してないわよ」

ヴィータ

「アンタも充分子供じゃねーか・・・」

ケント

「そーだなあ・・・オーソドックスなので言つと、落とし穴かな？」

すずか

「・・・なんだかかわいいですね」

フェイト

「百倍っていうから、もっとすごい想像したけど・・・」

ケント

「まあな。中に蛇だの蜘蛛だのムカデだの色々ぶち込んだけど、あいつらギヤース力騒ぐだけで、気絶すらしなかったからなあ」

かおる

「・・・は？」

ケント

「あとはまあ・・・上履きの靴底を削ってロウ塗って、やたらと転ぶようにしたりとか、

便所の個室のカギに細工して、入ったら内側からは開かないようにしたりとか・・・

色々やってはみたけど、どいつもこいつも泣くばかりだったっけ・・・」

なのは

「じ、地味ではあるけど・・・」

かおる

「・・・それやったの、いつ頃の話ですか・・・？」

ケント

「うーん、玄斗と知り合う前だから・・・一年の時かな？」

アリサ

「あ、悪魔みたいな一年坊だったのね・・・」

ケント

「おいおい、人聞きの悪いこと言つなよこの程度で」

すずか

「こ、この程度って・・・」

ケント

「やってることはセコイ上に、誰一人失神しなかったんだぞ？
悪魔には程遠いつつの」

なのは

「人が泣き叫んでる段階で、充分に悪魔だと思います・・・」

フエイト

「うん、かなり陰湿だよね・・・」

ケント

「あまいなあ。本当の恐怖ってのは、声も出せずに気絶しちゃう
ようなモノを言つんだよ。」

単に悲鳴を上げるだけなら、テレビのバラエティ番組でやって
るじゃねーか。

そんな子供だましで満足してるようじゃ、まだまだ半人前なの
さ」

かおる

「半人前って・・・いったい何を目指してるんですか・・・」

アリサ

「てゆーか子供だましって言うけど、やってることはずいぶんあ
くどいわよ？」

ケント

「そーかあ？」

すずか

「少なくとも、小学一年生の発想じゃありません・・・」

ケント

「ならアレだ、気に入らねーヤツに爆竹投げたこととかは・・・？」

なのは

「ありません！」

ケント

「最近の子供ってのは、ずいぶん真面目なんだなあ、玄斗よ」

玄斗

「安心しろ、お前が少々変わっているというだけの話だ」

●小学生になったなら・・・

シャル

「そういえば、クロノ君やリイナちゃん達の姿が見えませんか」

かおる

「今、丁度抱えている任・・・じゃなくて、用事があるので遅くなるそうです」

ケント

「・・・玄斗、短期間でずいぶん知り合いが増えたな」

玄斗

「去年の年末に、いくつもの家庭を巻き込む大珍事があったのでね、その影響だ」

ケント

「まあ、いいけどよ・・・。これ以上交友範囲広げて大丈夫か？」

なのは

「友達って、多いと楽しいですよ？」

アリサ

「少なくとも、困りはしないんじゃない？」

はやて

「あ・・・兄ちゃんの場合、友達多いどころやないからなあ・・・」

「・

すずか

「・・・え・・・？」

ケント

「ウチの学校の生徒と教師は、全員が玄斗（ことう）の友達ないし関係者だ」

フ
エ
イ
ト

「ええええええええええええ！？」

ヴィータ

「近所のじーちゃんばーちゃんなんかとも、気が合うみたいだしな」

シグナム

「うむ、まさに老若男女、交友関係の範囲の桁が違う。さすがは兄上だ」

ケント

「『友達百人出来るかな』なんて歌があるけど、全校生徒四百八十九人全てが友達だぜ?」

アリサ

「なんというか……すごいとしか言いようがないわね……」

すずか

「ホント、すごいよね・・・」

フ
エ
イ
ト

「うん、すい。」

か
お
る

「……なんですぐに身元が分からなかったんだろ……？」

なのは

「……かおるちゃん、考えたら負けだよ……?」

●意外な関係

ケント

「ところで玄斗、今回はなんの祝賀会なんだ？」

玄斗

「お前の目の前で車イスに乗っている、春風かおるの退院祝いだ」

ケント

「・・・オレが来て良かったのか・・・？」

かおる

「あ、気にしないで下さい！ 大勢でやった方が楽しいですから！」

玄斗

「それにおそらくは、お前も全くの無関係ではないからな」

なのは

「え・・・？」

はやて

「なのはちゃん達とケントさんて、初対面やったよね？」

玄斗

「うむ、その通りだ」

フェイト

「……？」

ヴィータ

「????????」

シグナム

「ヴィータ、つまらんことで目を回すな」

エイミー

「こんにちは」

ユーノ

「お邪魔します」

クロノ

「悪い、遅くなった」

リイナ

「申し訳ありません、かおるさん。思いの外、時間がかかって……」

ケント

「……あれ……？」

リイナ

「……もしや、あなたは……」

● 終わりよければすべてよし

ケント

「よーするに、オレが切っ掛けでみんな友達になった、ってことか？」

玄斗

「・・・まあ、そうなるのかもしれないな」

リイナ

「しかし、なぜ私があなたの身元を聞いた人物が彼だと・・・？」

クロノ

「確かに不思議ではあるな」

玄斗

「簡単な話だ。リイナ嬢が私の情報を集めていた地域に、私の知り合いはおらんからな。」

と、なれば、残る可能性は研人こいつしか考えられん」

フェイト

「え？ 友達多いんじゃないんですか？」

ヴィータ

「兄貴はガキからじーちゃんまですぐに友達になるけど、

基本的にあまり遠くまで出かけないから、
近所や学校の人達以外とはあんまり関わってねえんだ」

シャル

「足の悪いはやてちゃんがいましたから、あまり長く家を空けた
くなかったそうです」

かおる

「そうか。だから、なかなか見つからなかったんだ」

なのは

「あれ？　じゃあ、なんでケントさんはそこにいたんですか？
住んでないんでしょう？」

玄斗

「こいつは意味もなくぶらぶらするのが好きでね、
一説にはその移動距離は渡り鳥をも凌ぐと言われている」

エイミイ

「な、なんか凄いなあ・・・」

玄斗

「加えて、恐ろしいまでに口が軽い。

こいつに秘密を知られたならば、

翌日には地球の裏側まで知られていると覚悟した方がいい」

アリサ

「・・・ってことは、もしかして『あの噂』の情報源は・・・」

玄斗

「ほぼ全てがこいつだ・・・」

すずか

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リンディ

「・・・・これもある種の才能かしらねえ・・・」

アルフ

「・・・・いや、明らかに欠点だろ・・・」

かおる

「確かに、口は災いの元とも言いますが・・・」

ユーノ

「でも、この人も事件解決に一役買ってたって事じゃないかな？
これ・・・」

ケント

「なんか知らんが、みんな仲良くなったみたいだし、気にしなくてよくな？」

なのは

「な、なんか・・・すっごく落ち着いてるね・・・自分のことなのに・・・」

はやて

「ま、昔っからマイペースな人やからなあ」

●そして歴史は繰り返される

ケント

「・・・・・・・・・・」

リイナ

「・・・・？　どうかされましたか？」

アルフ

「ひぶんへほはひほは気分でも悪いのか？」

リンディ

「アルフ、食べながらしゃべらないの」

ケント

「なんとなく、いづらいつていうか、なんていうか・・・」

かおる

「あ、あの・・・何か、お気に障ることも・・・？」

ケント

「いや、そーゆーことじゃねえんだけどよ・・・」

玄斗

「何かね。ハッキリ言いたまえ」

ケント

「周りが女子ばっかだと、どーも落ち着かなくて・・・」

ユーノ

「・・・あー・・・」

クロノ

「なるほど、気持ちは分からなくもない・・・」

ケント

「男がオレを含めて三人しかいないってのはどうなんだ？
お前の交友関係・・・」

フェイト

「・・・え？ 三人・・・？」

シグナム

「クロノ執務官・・・」

なのは

「ユーノ君・・・」

シャマル

「ケントさん・・・」

ヴィータ

「・・・三人・・・」

かおる

「・・・・・・・・・・」

すずか

「・・・・・・・・・・」

アリサ

「・・・・・・・・・・」

エイミイ

「・・・・・・・・えーと、ドンマイ？」

●逆転の発想

ケント

「いやっ、ホントーにゴメン！！ てっきり女の子だとばかり・・・・・・・・」

リイナ

「まったく、失礼な発言は慎んで下さい」

かおる

「えと、その・・・・気にしてませんから・・・・ホントに、大丈夫、ですから・・・・・・・・」

玄斗

「・・・号泣しながら言っても全く説得力がないぞ・・・」

エイミィ

「そ、そんなにイヤだったんだ・・・」

クロノ

「髪型変えればいいんじゃないか？」

はやて

「そやなあ。そうすれば少しは・・・」

アリサ

「それが、全く意味がなかったのよ。むしろ違和感バリバリだったし」

すずか

「なんか、無理して男装してる女の子みたいな感じに・・・」

ヴィータ

「・・・救いよーがねーな・・・」

アルフ

「やっぱ無理があるんだって。趣味が『料理とお菓子作り』って、どこのお嬢様だよ」

なのは

「で、でも！ かおるちゃんの作ったお菓子、私は好きだよ？」

フェイト

「・・・フォローになってないよ、なのは・・・」

ユ一ノ

「・・・あの、これって元々、『かおるの退院を祝う会』でしたよね・・・？」

リンディ

「ええ・・・いつの間にか、『かおるさんを弄る会』になってるわね・・・」

シグナム

「もうこの際、女として生きてみてはどうだ？」

シャル

「さ、さすがにそれは、あんまりじゃないかしら・・・」

●似たもの同士

玄斗

「おや、思いの外、遅くなってしまったな。最近は何騒だ、家まで送っていいこう」

アリサ

「アタシとすずかは大丈夫です」

すずか

「迎えが来てくれますので」

かおる

「となると、なのは嬢達だな。護衛がクロノ・ハラウンだけでは心許ない」

クロノ

「・・・悪かったな、頼りなくて」

エイミィ

「あー、はいはい、クロノ君もスネないスネない」

ケント

「ん、じゃあ、オレが送ってこうか？ お前も後片付けとか大変だろ？」

玄斗

「それは有り難いが、珍しく気が利くな・・・」

ケント

「なぐに、丁度ぶらつと出歩きたかったし、気にすんな」

かおる

「あ、あの・・・大丈夫なんですか・・・？」

玄斗

「安心したまえ。こいつの武術の腕前は折り紙付きだ。護衛としては優秀だよ」

なのは

「あ、そうじゃなくて・・・」

ケント

「ああ、オレにロリコンの気はないから、『そっち』も安心していいぞ?」

アルフ

「・・・アンタも十分子供だろ・・・」

フェイト

「そうじゃなくて、それだと、ケントさんが帰るのが遅くなるんじゃない・・・」

はやて

「大丈夫や。ケントさんのご両親も、この人の放浪癖は熟知してるからな」

玄斗

「うむ。多少遅くなっても問題は無い」

ケント

「ま、そんなわけで出発だ!　じゃあな、玄斗!」

ユ一ノ

「そろいもそろって押しの強い人達だなあ・・・」

リンディ

「っていうか、ご両親も大物ね」

●その痛みも悲しみも

玄斗

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ザフィーラ

「浮かない顔ですね・・・」

玄斗

「何、また機会を逃したな、と思ったただけだ」

ザフィーラ

「・・・・・・・・いずれば、全てを伝えるおつもりなのでしょう・・・・・・・・？」

玄斗

「研人とも長い付き合いだ。^{アレ}隠すのも、そろそろ限界だろう」

ザフィーラ

「・・・・・・・・すでに感づき始めていると思うのですが・・・・・・・・」

玄斗

「だろうね。あれでなかなか、勘が鋭い。」

今頃、クロノ・ハラウンあたりにカマを掛けているかもしれ

んな」

ザフィーラ

「辛いところです。一般人にむやみやたらと伝えてよいことはありませんから」

玄斗

「迷惑を掛けるね。」

普段から寡黙とはいえ、数時間一言も話さないのは少々苦痛だろう?」

ザフィーラ

「いえ、玄斗殿が背負われていた苦痛に比べれば、軽いモノです」

玄斗

「・・・本当に、迷惑を掛けるね・・・」

ザフィーラ

「あなただけの問題ではありません。守護騎士^{われわれ}にも、共に背負わせて下さい」

エース達の日常・その一 「かおるの退院を祝う会」(後書き)

というわけで、どうでもいいようにで案外重要なキャラだった紙野君でした。ホントは本編で出したかったんですけど、私の文才のなさ
が災いして番外編での登場に……。すまん……。

<詳細設定>

かみの
あきひと
●紙野 研人

性別：男

年齢：12歳(5月5日誕生)

身長：高くもなく低くもなく。

体重：それなりに。

外見：黒髪短髪七三分け。四角いメガネ着用。

黙っていると頭のいい優等生に見えなくもない。

メモ：玄斗の幼馴染でありクラスメイト。

ごく普通のサラリーマンと専業主婦の間に生まれた二人兄妹
の兄。

当初はケンカで知り合ったが、同じ妹を持つ持つ兄同士気が
合い、

いつの間にか玄斗とは無二の親友になっていた。

常識はずれの放浪癖の持ち主であり、

小学三年の頃、徒歩で青森まで行ったとか行かなかったとか。

「いささか奇行が目立つが、基本的には一般的な常識人」と

は玄斗の談。

玄斗程ではないが、周りから頼りにされることも多く、

現在は生徒会副会長の任に就いている。

そのため、生徒会会長である玄斗とは会議でも顔を合わせる
ことが多い。

玄斗同様に古流武術・止水流水流を修め、その腕前はかなり

のもの。

・・・と、紙野君に関してはこんなところでしょうか。
それと続編ですが、なんとか6月の頭くらいには投稿しようと思っ
ています。詳しくは活動報告をご覧ください。

エース達の日常・その二 「ドタバタ恋愛模様」(前書き)

そんなわけで、番外編二回目です。暇つぶしにでもどうぞ。

エース達の日常・その二 「ドタバタ恋愛模様」

●なんの話をしている

士郎

「いや、やっぱりこっちの方が・・・」

桃子

「そんなことないわ。こっちよ」

恭也

「何をやってるんだ？ 二人とも」

美由希

「なんか楽しそーだね」

士郎

「いや、オレは『猫耳スクール水着』がイイと思うんだが・・・」

桃子

「私は『裸エプロン』がイイと思うのよ。二人ともどう思う？」

恭也・美由希

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

● 恋人募集中

美由希

「かおる君をなのはにメロメロにする方法を考えてた!？」

恭也

「・・・なんでまたそんなコトを・・・」

桃子

「あら、親として子供の将来を真剣に考えるのは当然よ？」

士郎

「うんうん。今時、かおる君ほど実直な子は滅多にいないからな」

恭也

「いや、確かにあの二人は仲良いけど、早すぎないか？ 小学生だぞ？」

士郎

「しかし、かおる君の周りにはカワイイ子が多いからなあ・・・」

桃子

「美由希みたいに行き遅れないように、先手は打たなきゃ」

美由希

「私もまだ行き遅れてませんッ!！」

●にゃあ

かおる

「・・・・・・・・・・・・・・・・
/ / /」

なのは

「・・・・・・・・・・・・・・・・
/ / /」

かおる

「えと、その・・・・・・・・
/ / /」

なのは

「・・・・・・・・うん・・・・・・・・
/ / /」

かおる

「・・・・・・・・・・・・・・・・
/ / /」

なのは

「・・・・・・・・・・・・・・・・
/ / /」

美由希

「・・・・・・・・一時間くらいあんな感じだけど・・・・・・・・？」

恭也

「やっぱり、二人には刺激が強すぎたんじゃないか？」

士郎

「初々しなあ、二人とも」

桃子

「士郎さんの案にして正解ね♪」

恭也・美由希

「……この人達は……」

●新妻

クロノ

「——なんてコトがあつたらしい」

玄斗

「ははははは♪ それは、かおるも災難だったね」

クロノ

「本人達にしてみれば、笑い事じゃないと思うがな……」

玄斗

「合点がいったよ。」

いつになく互いを意識し合っているので、何事かと思っていたのだ」

クロノ

「ははは・・・それにしても悪いな。こんなに差し入れをもらって」

玄斗

「何、私は夕食に呼ばれた身だ。これくらいは当然さ」

クロノ

「相変わらず律儀だな。」

フェイトも気を許しているようだし、これからもよろしく頼むよ」

玄斗

「フフ・・・まさかとは思うが、高町夫妻のようなマネはしてくれるなよ?」

クロノ

「心配しなくても、そんな余裕はボクにはないよ。毎日仕事でてんでこ舞いさ」

ガチャ

フェイト

「い、いざっしやい・・・玄斗さん・・・／／／」

エイミィ

「おっ帰りいゝ！ クロノ君」

玄斗・クロノ

「……………」

フェイト

「……………／／／」

エイミィ

「…………あれゝ…………？ 反応、薄いね？」

●どこも似たよーなモノ

玄斗

「私は夕食に呼ばれたのだ。エプロンを着用していたことに関しては納得しよう」

クロノ

「問題は！ な・ん・で！ 素肌の上に付けていたのか、ということだ！！」

エイミィ

「まあまあ、クロノ君も玄斗君もそんなに怒らなくても……」

けっこーキモチイよ？ あの『裸エプロン』ってヤツ」

クロノ

「少しは羞恥心を持ってくれ！ 頼むからっ！-！」

玄斗

「全く、フェイト嬢まで何をやっているのかね・・・」

フェイト

「す、すみません・・・。

やっぱり、私が『お嫁さん』だなんて、無理・・・ありますよね・・・？」

玄斗

「・・・何・・・？」

クロノ

「・・・どういうことだ？ エイミィ・・・」

エイミィ

「いやー、私も艦長から聞いて初めて知っただけだし、

この世界じゃ新婚のお嫁さんはずっとこのカッコで過ごすんだっつて？」

フェイト

「そ、それで、あの・・・二人でお嫁さんのカッコして、玄斗さん達を驚かそう、って・・・」

クロノ

「・・・母さああああんっ！-！-！」

玄斗

「扉の陰に隠れているのは分かっているぞ！ リンディ・ハラオ
ウン！！！」

リンディ

「はあゝ・・・つまらないコ達ねえ・・・。もうちょっとエンジ
ョイすればいいのに・・・。」

クロノ

「何がだっ！！？」

玄斗

「嘘を吹き込んでまで娘にあのような格好をさせて、何も思わん
のか貴様はっ！！！」

リンディ

「思ったからこそその行動よ？ あなた達、いつまで経ってもなん
の進展もないんですもの」

玄斗

「余計なお世話だ！ 物事には順序というモノがあるだろうが！
！」

クロノ

「士郎さんや桃子さんのよーなことを言わないで下さい！！！」

リンディ

「子を思う親同士、考えは自然と似通うモノなのよ！」

玄斗・クロノ

「「威張るんじゃない!!」」

● 一目瞭然？

はやて

「ええ〜っ!？ 全く疑わなかったんか!？ リンディさんの話!？」

フェイト

「だ、だって・・・!／／／」

なのは

「しょ、しょうがないよ。

私もお母さんに『今時の流行』って言われてアレ着ちゃったし・
・・」

はやて

「は〜、二人とも天然さんやなあ・・・」

フェイト

「そ、それでさ・・・はやて、玄斗さんの様子、どう・・・?」

はやて

「ん？ いつもどーりやけど、なんで？」

なのは

「・・・玄斗さんと、お話しできてないの？」

フェイト

「・・・うん・・・その逆なんだ・・・」

なのは

「・・・え・・・？」

フェイト

「アレからも、ふつーに話しかけてくれるんだけど、

その・・・あの時も、かおると違って顔色一つ変えてくれないし・・・」

はやて

「自分に魅力が無いんじゃないか、つちゅーこと？」

フェイト

「・・・うん・・・」

なのは

「そんなことないと思うけど・・・」

はやて

「なのはちゃんの言つとーりや。心配せんでえエよ、フェイトちゃん」

フェイト

「でも・・・」

はやて

「冷静な兄ちゃんがそんなに怒鳴ってるって、私も見たことあらへん。」

フェイトちゃんのあらもない姿見て、テンパってた証拠や」

フェイト

「え・・・／／／」

はやて

「顔に出えへんだけで、以外と素直で純情なんやで？」

●娘を思えばこそ

士郎

「うん、しかし・・・」

桃子

「でもやっぱり・・・」

恭也

「・・・またか・・・」

美由希

「今度は何を企んでるの？」

士郎

「いや、ちよつとな・・・」

なのは

「あれ・・・？ お父さんもお母さんも何やってるの？」

桃子

「あ、なのは、いいところに来たわ」

美由希

「はあ・・・。恭ちゃん、後はよろしく」

恭也

「おいおい・・・」

士郎

「美由希の相手なんだが、この子はどつたろつ？」

美由希

「ずじー！！」

●もう、残り3くらい？

美由希

「ちょっと、二人とも！ 本人抜きでなんの話をしてるのよ！！」

士郎

「何って、美由希の交際相手を探してるんだよ」

桃子

「あなたも私達の娘なんだから、当然でしょ？」

美由希

「ンなわけあるかあっ！！」

恭也

「まあまあ、美由希」

美由希

「だ、だって、恭ちゃん・・・」

恭也

「これで行き遅れずに済むかもしれないし、むしろよかったじゃないか」

美由希

「うぐっ・・・！？」

恭也

「その年で浮いた話の一つも無くて、正直オレも心配だったんだ」

美由希

「ぐはっ・・・!?!」

恭也

「で、相手はどこ誰なんだ?」

桃子

「この前、商店街で偶然知り合った子なんだけど・・・」

士郎

「コレがまた、礼儀正しくて隙のない子でなあ・・・」

美由希

「ちょ、ちよつと・・・ヒトのライフポイント削るだけ削って・・・
・フロローも無しなの!?!」

士郎・桃子・恭也

「「「だって、全部事実じゃない(か)」「」「」

美由希

「ぐっはあっ・・・!?!?!」

なのは

「お、お姉ちゃん!?!」

● 続・娘を思えばこそ

なのは

「あれ？ この人・・・」

桃子

「え、もしかして、なのはの知り合い？」

なのは

「知り合いも何も、はやてちゃんのお兄さんだよ、この人・・・」

士郎

「へえ、そうだったのか。で、なのはから見た感じ、どうなんだ？」

なのは

「どうって言われても・・・」

強くて、頼りがいがあって、料理が得意で、無口だけど優しい人・・・かな？」

桃子

「あら、いいじゃない♪」

士郎

「ああ、美由希が料理下手だから、ちょうどいいな」

美由希

「だから、本人無視して勝手に話進めないでよ！
だいたい、その子どう見ても中学生じゃない！」

なのは

（・・・小学生なんだけど・・・）

恭也

（というか、料理が下手なことは認めるのか・・・）

桃子

「年の差なんか気にすることないわ。いいじゃない、姉さん女房」
♪
」

士郎

「一度会ってみればいいじゃないか」

恭也

「そうだな・・・」

美由希

「恭ちゃんまで!？」

恭也

「写真でもハッキリと分かるこの存在感・・・
隠してはいるが、とてつもない『何か』を感じる・・・。一度
手合わせ願いたいな」

美由希

「・・・そつちですか・・・」

桃子

「とにかく、今度彼をウチに呼びましょう。なのはの知り合いな

ら都合がいいわ」

なのは

「えっと、その・・・」

士郎

「ん？ どうしたんだ？ なのは」

なのは

「その人・・・玄斗さん、なんだけどね・・・」

恭也

「何か都合でも悪いのか？」

なのは

「その・・・両思いみたいなの、フェイトちゃんと・・・」

士郎・桃子・恭也・美由希

「「「「・・・」」」」

なのは

「えと・・・」

桃子

「まずいわね・・・フェイトちゃんと比べられると、美由希に勝ち目はないわ・・・！」

美由希

「えっ!？」

士郎

「こうなれば、さらに過激な悩殺コスチュームで・・・」

美由希

「え、ちよつ・・・!？」

恭也

「とりあえず、片っ端から試着だ！ 美由希!!」

美由希

「いやああああああ!!？」

●幸福なヤツら

玄斗

「やれやれ、互いに苦労が絶えんな」

クロノ

「全くだ」

はやて

「兄ちゃんもクロノ君もお疲れやな」

ユーノ

「あはははは・・・」

かおる

「その点、ユーノさんは安心ですね。はやてさん、そーゆーことに敏感そうですから」

玄斗

「うむ、危機回避能力が半端ではないからな」

クロノ

「全く、うらやましい限りだ」

ユーノ

「そ、そんな・・・／＼」

はやて

「おっ、ユーノ君テレとる」

ユーノ

「は、はやて・・・!」

かおる

「なんだかんだで、いいコンビですよね」

クロノ

「というか、この二人の仲をよく許したな、君も」

玄斗

「人格、能力共に申し分ない。はやてさえ幸せならば、私の出る

幕はないよ
「

●基本的にお人好しばっか

玄斗

「ただいま」

はやて

「おかず買ってきたで」

かおる・クロノ・ユーノ

「」「おじゃまします」「」

シャマル

「あ、お帰りなさい」

シグナム

「お、お帰りなさいませ」

ヴィータ

「おかえり」

ユーノ

「ぶっッ!!?」

かおる

「――！！！！」

↑ 声にならない悲鳴

玄斗・クロノ

「……………」

はやて

「…………三人ともどーしたん？ そのカッコ……」

シャマル

「リンディ提督と高町さんご夫婦のプロデュースです」

シグナム

「なんでも、この世界の新妻の正装だとか……」

ヴィータ

「アタシのは、この頃の流行なんだってさー」

かおる・玄斗・クロノ

「……………」

ユーノ

「…………はやて……」

はやて

「何も言わんといて……」

シグナム・シャマル・ヴィータ

「……………」

●もはや町の名物だ

かおる

「いったい何を考えているんですかッ!!」

士郎

「はっはっはっ、そんなに怒らなくてもいいだろう、かおる君」

桃子

「ちょっとしたお茶目よ?」

玄斗

「自分の家族のみならず、

他人の家族にまで下らん嘘を吹き込むとは、どういっ了見だ!

!」

リンディ

「そんなこと言って、彼女達の格好に見とれてたじゃない♪」

クロノ

「反省というモノをしろッ!! 頼むからッ!!」

恭也

「なんだ、結局着なかったのか」

美由希

「着られるわけないでしょ！？　こんな、ヒモみたいな水着^{ビキニ}！！
／／／」

恭也

「しかしな、お前がフェイトちゃんに勝つてるところなんて、ハッキリ言って年齢と身体しかないんだから・・・」

美由希

「ひどっ!？」

シグナム

「な、なぜ止めてくれなかったのだ！
よりによつて、兄上の前であのような醜態を・・・!!」

フェイト

「えと・・・その・・・」

なのは

「私達だけが恥をかくのは・・・不公平かな、と違って・・・」

シグナム

「っ！　表へ出る！！　レヴァンティンのサビにしてくれるー!!」

シャル

「ちょ、ちよつとシグナム！ 落ち着いて〜！」

ヴィータ

「？ このカッコ、なんか変か？ けっこーカワイクね？」

ユーノ

「ええっ！！？」

はやて

「・・・ヴィータ・・・ちよ〜と、お話しよか？」

アルフ

「賑やかだね〜・・・」

ザフィーラ

「よいことだ・・・」

リイナ

「近所迷惑でなければよいのですが・・・」

エイミィ

「どーでもいいーから、鎮圧に参加してよ！ 茶なんかすすってないでさー！ー」

エース達の日常・その二 「ドタバタ恋愛模様」(後書き)

タイトル通りの内容でしたが、一部キャラが崩壊してますね・・・。
なんで、こんななつちゃったんだろう・・・？ 感想などござい
ましたら、なんでもいいので気軽に書いていただけたなら幸いです。
まあ、ひとまずそれは置いておいて、ここでお知らせです。5日に
スライカーズ
続編を投稿することになりました。興味のある人は、そちらもどう
ぞよろしく願います。

エース達の日常・その三 「八神家恒例大掃除」(前書き)

続編の筆が進まないのので、暇つぶしに書いた駄文です。気軽に読んでください。

エース達の日常・その三 「八神家恒例大掃除」

●臨戦態勢

玄斗

「さて、これより戦闘を開始する。各々心してかかるように！」

シグナム・ヴィータ・シャル・ザフィーラ

「了解！！！！」

玄斗

「それではまず、寝室の清掃から始めよう！」

はやて

「・・・何かが間違ってる気がするのなんですよ・・・」

●はやて&ヴィータの場合

シグナム

「さすがは主はやて。よく整理されておられる」

シャル

「ヴィータちゃんが一緒だから、」

もつと散らかってると思ったけど、そうでもなかったわね」

ヴィータ

「なんだよ。それじゃまるで、アタシがだらしないみたいじゃないか！」

はやて

「そやなあ。ちよーっと、片付けるのが下手なだけやもんなあ？」

玄斗

「世間一般には、それを『だらしない』と言っただがね・・・」

●玄斗の場合

ヴィータ

「うつわ！？ 本だらけじゃねーか！！」

シャマル

「小説、エッセー、参考書、料理、経済、電話帳・・・
ジャンルも年代もバラバラですね・・・」

玄斗

「読む内容に、特にこだわりは無いからね」

ザフィーラ

「手入れも良く行き届いてますし、何か特別な思い入れでも……？」

はやて

「思い入れっちゅうか、思い出がつまっとるんよ……たくさん……」

シグナム

「？ 主はやて、何かおっしゃいましたか？」

はやて

「あはは、なんでもないよ、シグナム。気にせんというて」

●シグナムの場合

シャマル

「なんていうか……殺風景ね……」

シグナム

「あまりに物が多いと落ち着かんのでな」

ヴィータ

「だからってさあ……さすがにベッドだけってのは、ないんじ

「やね？」

「はやて

「てゆうか、兄ちゃんとザフィーラは、なんで部屋の外で立つてるん？」

玄斗

「家族とはいえ、女性の部屋に上がり込むのは、さすがにいかんだろう」

ザフィーラ

「『親しき仲にも礼儀あり』と言いますし・・・」

ヴィータ

「・・・別にいいけどさ、これが『女性の部屋』って言えるのか・・・？」

●シャマルの場合

シグナム

「シャマル！ な、なんだコレは！！？」

ヴィータ

「お前、アタシ等を殺す気か！！？」

シャル

「ちょ、ちょっと二人とも、落ち着いて！ 何もそこまで言わなくても・・・！」

はやて

「・・・そーとー、『アレ』がトラウマなんやろなあ・・・」

ザフィーラ

「気持ちは分からなくもないですが・・・」

玄斗

「部屋から料理本が一冊見つかっただけでこの騒ぎとはな・・・」

●ザフィーラの場合

シグナム

「・・・本当に、何も無いな・・・」

ヴィータ

「てゆーか、全然使ってねーな・・・」

ザフィーラ

「私は守護獣だ。寝室このような大層なモノは身の程にそぐわぬ」

玄斗

「ふむ……『部屋』という概念に引け目を感じるならば、
いっそのこと『大きな犬小屋』と思えばいいのではないかね？」

シャル

「お兄さん……それはさすがに……」

はやて

「そやで？　さすがにザフィーラがかわいそうや」

ザフィーラ

「なるほど、そういう考え方もありましたか。さすがは玄斗殿」

はやて・シグナム・ヴィータ・シャル

「……って、それでいいんかい……」「……」

●だから爺臭いって言われるんだけどね

ヴィータ

「……なあ、はやて、ホントに兄貴一人に庭の掃除させていい
のか？」

シグナム

「我々も手伝った方が・・・」

はやて

「ええのええの。あれは兄ちゃんの趣味みたいなもんやから」

ザフィーラ

「確かに、日頃から庭木の手入れをされていましたが・・・」

シャル

「お兄さん、前に『自分に趣味は無い』って言っていましたよ?」

はやて

「自覚してないだけやて。」

あの兄ちゃんが鼻歌交じりに何かするなんて、他に無いからな

あ

●その見た目はダテじゃない

ケント

「うおーい！ 遊びに来たぞー！ って、どわあああああああ

あああああ！！?」

玄斗

「・・・なぜ、何も無いところで転んでいるのかね」

ケント

「な、なんなんだ！？ この無駄にツルツルな床はっ！？」

玄斗

「今丁度、家族総出の大掃除中でね」

ケント

「いや、それにしたってお前・・・表面が鏡みたいだぞ・・・？」

シャル

「あ、お兄さん。リビングの方の床も終わりました」

玄斗

「ああ、ありがとう。」

シグナムとヴィータが苦戦しているようだから、そっちの援護を頼めるかね？」

シャル

「はい」

ケント

「・・・これ、もしかして全部シャルさんが・・・？」

玄斗

「うむ。普段から掃除や洗濯は、ほとんど彼女に任せているからね。」

掃除これに関しては、もはや達人の域だ」

●画竜点睛を欠く

ケント

「あとは料理が、せめて食えるモノだったらな・・・」

玄斗

「言つてやるな・・・」

●最凶コンビ

シャル

「・・・一つ聞いていいかしら・・・？」

シグナム

「・・・」

ヴィータ

「・・・」

シャル

「風呂場はともかく、なんで廊下にまで洗剤があふれかえっているのかしら……？」

ザフィーラ

「そしてなぜ、洗濯機が煙を噴いているのだ……？」

シグナム

「すまん……」

ヴィータ

「ゴメン……」

はやて

「やっぱり、二人に家事は向かんみたいやなあ……」

●ポーカーフェイスの裏側

ケント

「しっかしまあ……良くも悪くも賑やかになったなあ、この家も……」

玄斗

「喜ばしいことだ」

ケント

「お前も変わったな。あの人達が来てからさ……」

玄斗

「ふむ……。昔と変わらんと思っがね」

ケント

「んなことねーよ。昔はそんなに笑わなかったじゃねーか」

玄斗

「昔からこんな表情かおだか？」

ケント

「俺が言っひょうめんてんのは、顔じゃなくて心なかみの方さ」

●近所でもけっこう話題になってるらしい

ヴィータ

「あれ？ 兄貴は？」

シグナム

「声は聞こえるが、お姿が見えんな……」

はやて

「ああ、兄ちゃんなら、ケントさんと一緒に屋根の掃除やっとなるよ」

シャル

「ええ！？ お二人だけで大丈夫なんですか！？」

ザフィーラ

「万ーのために、誰か付き添った方がよいのでは？」

はやて

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。みんなが来る前から、よく二人でやっとなからな。」

目えつぶりながらも出来るってゆうとったで」

シグナム

「さすがは兄上達ですね」

シャル

「その内、お手玉なんか始めたりしそうですね・・・」

ヴィータ

「巨大ボールの上で一輪車に乗るかもしれねえな・・・」

ザフィーラ

「・・・大道芸人ではないぞ」

●お互い苦勞が絶えません

ケント

「とゆーわけで、お疲れさん！」

玄斗

「毎度毎度、手伝わせてすまないね」

ケント

「いやいや、これがけっこー楽しいのよ！」

それに、例年に比べて時間もかからなかったからな」

玄斗

「家族が増えたからね。手分けをすれば、所要時間が短くなるのは自明の理だろう」

ケント

「・・・約二名は、逆に散らかしてるように見えたのは気のせいかな？」

玄斗

「それを言うな。本人達なりに一生懸命だっただろうからな」

ケント

「・・・どーやったら、洗剤入れただけで洗濯機一台を潰せるんだよ」

玄斗

「・・・仕方がないと言えんな・・・。

どのようなモノでも叩き潰すのが、彼女達の仕事であったのだから・・・」

ケント

「・・・まあ、なんだ・・・

お前も色々大変だろうけどよ、なんかあったら遠慮無く言えよ？
オレに出来る事は協力するからさ・・・」

玄斗

「ははは。ならば早速、腕のよい修理屋でも紹介してもらおうか」

ケント

「そーゆーことを言ってるんじゃないんだけどなあ・・・」

●以心伝心？

ヴィータ

「そーいえばさ、いつの間に今日の大掃除のこと、ケントにーちやんに伝えてたんだ？」

玄斗

「いや、ヤツには一切何も伝えていなかった」

シャマル

「そ、それじゃ、何か大切な用事があつたんじゃ……」

シグナム

「手伝わせてしまつてよろしかったのですか？」

はやて

「あー、毎年こんな感じなんよ。

連絡してへんのに、示し合わせたみたいに大掃除当日に遊びに来てな……」

玄斗

「ヤツがウチに来る時も、別段たいした用事があるわけではない。そのまま手伝つて、すんだら帰るを繰り返しているのだ。毎年な……」

ザフィーラ

「偶然でしょうか……それとも……」

玄斗

「さてね……。しかし、感謝はしているよ。

作業の手は早くなるし、賑やかな方がはやても喜ぶ」

はやて

「何言つとるんや。大掃除じの日は、兄ちゃんの方が楽しそうにとるんや」

玄斗

「……いつも通りだと思うが？」

はやて

「よく当たる、
妹^{わたし}の勘や」

エース達の日常・その四 「アルフの突撃インタビュー」 (前書き)

S t S が書けない・・・。なぜかこんな意味のない話ばかりが思
い浮かぶ・・・。誰か何とかして・・・ (泣)。

まあ、ともあれ、一部のキャラが崩壊してますが、気にせず読ん
でやってください。

エース達の日常・その四 「アルフの突撃インタビュー」

●使い魔は心配性

アルフ

「・・・うん・・・」

リンディ

「あら、どうしたの？」

アルフ

「いや・・・最近、なんかフェイトが能面野郎といい雰囲気じゃん？」

リンディ

「・・・そのあだ名、まだ使ってたのね・・・。それで？」

アルフ

「いや、言っちゃあなんだけど、あいつのどこに惚れたのかなあ
くってさ・・・」

リンディ

「なるほどね。でも、私は彼のこと、けっこう好きよ？
いつでもフェイトのこと、護ってくれそうじゃない？」

アルフ

「そりゃあ、そーだろーけど・・・。ちょっと無愛想すぎない・・・？」

リンディ

「そうでもない、私は思うわ。第一、好いた惚れたは人それぞれよ？」

アルフ

「うん……。そーゆーもんかねえ……。」

リンディ

「そういうものよ」

●被害者は主にクロノ

エイミイ

「そーかなあ……。？ 私はけっこうイイカップルだと思うけどなあ」

アルフ

「そうかい？」

エイミイ

「フェイトちゃんにはさ、玄斗君くらい無口な方がお似合いだよ、なんてゆーか、こう……。無言の中にある不器用な優しさ、みたいなの……。」

アルフ

「それがよく分かんないんだよねえ．．．私はさ。
辛い時には何か言って、慰めてもらいたいじゃん？」

エイミイ

「時には、あえて何も言わない方が、慰めになることもあるって
コトだよ」

アルフ

「うーん．．．。やっぱり、よく分かんないねえ．．．」

エイミイ

「まあ、アルフは性格的にド直球だしねえ．．．。
てゆーかさ、無口で無表情な子ってカワイイじゃん？」

アルフ

「．．．．はあ．．．．？」

エイミイ

「普段は全然隙が無いのに、からかうと変なところで慌てたりする
のがさあ．．．」

「イジリがあるってゆーか、ギャップ萌えてゆーか、そんな
感じ？」

アルフ

「いや．．．アンタの好みは聞いてないし．．．」

● 思い立つ日が吉日

エイミィ

「あつ！ じゃあさ、みんなに好みのタイプとか恋愛観とか聞いてみるってのはどう？」

アルフ

「うん……。まあ、エイミィよりは参考になりそうだけど……」

エイミィ

「……。びみょーに失敬な……。でもま、やってみる価値はあると思わない？」

アルフ

「ま、コレもフェイトの将来のためだし、いっちょやりますか！」

エイミィ

「待ってました！ その言葉！ そんなじゃま、張り切ってレッツゴー！！」

アルフ

「……。アンタ……。楽しけりやなんでもいいんじゃないか……？」

●高町　なのはの場合

なのは

「え？　なんでかおるちゃんを好きになったのか・・・？」

アルフ

「うん。よければ教えてもらえないかい？」

なのは

「い、いいですけど・・・なんでそんなことを・・・？」

エイミィ

「そりゃもう、面白そうだからに決まって・・・ゲフツ・・・！
？」

なのは

「？」

アルフ

「エイミィは放つ^{バカ}といて・・・

ちよつとフェイトの将来のために参考に、と思つてね」

なのは

「・・・ああ、なるほど」

アルフ

「で、どうなんだい？」

なのは

「うーん……」

今思うと、初めて会った時は、昔のフェイトちゃんとけっこう似てたかなあ……」

エイミィ

「ほうほう……」

アルフ

「復活が早いな……」

なのは

「病院のロビーでちょこんと座ってるの見た時、不思議に思ったんです。」

『カワイイ顔なのになんで、こんなに悲しい顔してるのかな』
つて……。

私も丁度、ケガで入院してたお父さんのお見舞いに行ってたんですけど、

あの時は友達もいなかったし、友達になれたらいいなーって、最初はホントに、それだけでした」

アルフ

「なるほど」

なのは

「すぐには笑ってくれなかったけど、何回か会う内に、笑うようになってくれて……」

その顔が男の子とは思えないくらいカワイくて……」

エイミイ

「……確かに……」

なのは

「最初はただのお友達だったんですけど、
たまに見せる真剣な顔が、同じ年とは思えないほどカッコよく
て……／＼／」

エイミイ

「ギャップに萌え……じゃなくて、惚れた、と？」

なのは

「えっと、その……はい……／＼／」

アルフ

「……うん……。よーするに、『顔』に惚れたってコト？」

なのは

「えと……当たってるよーな、違うよーな……
ごめんなさい、よく分かりません……」

エイミイ

「ま、そんなハッキリするもんじゃないよねー。
私としては、ギャップ萌えだと思っただけだな」

アルフ

「アンタはそこから離れなよ、いーかげん……」

● 高町 美由希の場合

美由希

「え！？ 好きな人のタイプ！？」

なのは

「アルフさん達が、将来の参考に聞きたいんだって」

エイミィ

「ご両親やお兄さんも今いないんでしょう？
しょーがないから、ここは美由希ちゃんで妥協しようかなと思
いまして」

美由希

「かなり失敬だね？ それ」

アルフ

「エイミィのことは気にしないで、協力しとくれよ。フェイトの
将来のためにさ」

美由希

「あ、そーゆーこと？ でもさ、フェイトちゃん、好きな人いる
んじゃないかったっけ？」

アルフ

「そーなんだけどさあ、このままじゃフェイトが幸せになれるのか心配で・・・」

美由希

「だいじょーぶだと思うけどなあ・・・」。

フェイトちゃん、けっこうしっかりしてるし、

お父さん達もその子に会ったみたいだけど、いい子だったって言うてたよ?」

アルフ

「でもさあ・・・」

エイミィ

「まあまあ、ここは一つ、妹の友達のためだと思って、赤裸々に語っちゃいなよ」

なのは

「エイミィさん・・・楽しみたいだけですよね・・・?」

エイミィ

「ソナナコトナイヨ」

美由希

「はあ・・・まあ、いいよ? 減るものじゃないから」

エイミィ

「おお、さっすが美由希ちゃん! ふとっばらあ!」

美由希

「びみょーに嬉しくないほめ言葉ね・・・。えーと、好みのタイ

プ、だっけ？」

エイミィ

「そーそー！」

アルフ

「・・・テンション高いねえ・・・」

美由希

「えーと・・・」

エイミィ

「ワクワク」

アルフ

「・・・・・・・・・・・」

美由希

「・・・あれ・・・？」

なのは

「？ どうしたの？ お姉ちゃん」

美由希

「・・・私の好きなタイプって・・・どんな人なんだろ・・・？」

アルフ

「ええっ!？」

エイミィ

「ちよつ・・・!?!? こんだけ引つ張って、それはないでしょ！
いくらなんでも!!」

美由希

「な、何よー！ 勝手に盛り上がったのはそっちでしょー!?!」

なのは

「そういえば、男の人とお付き合いしたことないって言ってたよ
ーな・・・」

エイミイ

「え!?! マジ!!?!」

アルフ

「その歳で!!?!」

美由紀

「な、何よ!?!」

アルフ

「いやぁ・・・別に・・・」

エイミイ

「はぁ・・・なのはちゃん達ですら、好きな人がいるのに・・・」

「

美由希

「そ、そんな残念なモノを見るような目で見ないでよ！

わ、私だってね！ 好きで行き遅れてるわけじゃないんだから
!!」

エイミィ

「こりゃ、参考にやあならないね・・・」

アルフ

「そーだねえ・・・」

美由希

「う・・・うわあああああああんっ！！！」

なのは

「お、お姉ちゃん！？」

●クロノ・ハラオウンの場合

クロノ

「ノーコメントだ」

アルフ

「即答！？」

エイミィ

「ええ〜！？ いーじゃん別に〜！ 減るものじゃないし〜！」

クロノ

「そんなことよりも、だ！」

エイミイ

「・・・何かな？ その山のよーな紙の束は・・・」

クロノ

「先日起きた『管理外世界無差別大量殺害事件』の資料やら、その他諸々の書類だ。」

そんなことをしてるくらい暇なら、丁度いいから手伝ってくれ」

エイミイ

「急用を思い出しましたので！ これにて失礼いたしますー！」

——ダダダダダダダ——

クロノ

「まったく・・・」

アルフ

「教えとくれよ、クロノ。フェイトのためだと思ってさ」

クロノ

「はあ・・・ボクにもプライバシーはあるんだ。そこは分かっ
てもらいたいな」

アルフ

「でもさ、義理とは言え、フェイトの兄貴だろ？ 心配じゃない
のかい？」

クロノ

「ああ、心配じゃない」

アルフ

「なっ・・・!?!」

クロノ

「正確には、心配する必要がない、ただどね」

アルフ

「・・・?」

クロノ

「ボクもエイミィも、親しい人間の将来を左右する事柄で楽しんだり、

からかったりするほど、人として堕ちてないさ」

アルフ

「そ、そりやまあ・・・」

クロノ

「妹のためとは言え、字義通りに命を懸けられる人間なんてそうはいない。

ボクはもちろんエイミィだって、そんな玄斗かれと彼を選んだフェイトを信じてるのさ。

必ず、幸せになってくれる、ってね」

アルフ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クロノ

「だからこそ、あんなふざけた態度がとれるんだろっけど・・・」

アルフ

「そういう・・・ことだったのかい・・・」

クロノ

「なんだったら、玄斗^{かれ}の家族にでも聞いてみるといい。
きっとビックリすると思うよ」

アルフ

「？」

エイミィ

「そんじゃま、今度は八神家にレッツゴー!!」

クロノ

「・・・いきなりどこから出てくるんだ君は・・・」

エイミィ

「細かいことは気にしない!」

クロノ

「・・・まあいい、とりあえず、この書類を・・・」

アルフ

「とつくにどっか行っちゃったよ・・・」

クロノ

「・・・・・・・・・・」

アルフ

「気を付けないと、尻に敷かれるよ？」

クロノ

「はぁ・・・・・・・・かもしれないな・・・」

●八神 ヴィータの場合

ヴィータ

「あん？ アタシから見て兄貴をどう思うかぁ？ ンなこと聞いてどーすんだ？」

アルフ

「いや、クロノがアンタらに聞いてみる、って・・・」

エイミィ

「細かいことは気にしないでさ、とりあえず答えてよ」

ヴィータ

「・・・・・・・・いや、わけ分かんねーぞ？」

エイミィ

「いーから答えなさいっ!!」

ヴィータ

「なっ・・・なんだよ、おっかねーな・・・」

アルフ

「・・・キャラ、違くないかい？ エイミィ・・・」

エイミィ

「こーゆーことは、強気でいかないとねっ!」

アルフ

「いや、そんな隠された主義とか、きょーみ無いから・・・」

ヴィータ

「・・・なんかテレビでやってる、やつすい漫才みたいな会話だな」

エイミィ

「何々？ 面白すぎてしゃべりたくなってきた？」

ヴィータ

「別に、面白いなんて一言も言ってねーけどな？」

「はあ、いーぜ？ なんか断っても、しつこく付きまとわれそーだしよ・・・」

アルフ

「・・・イイ判断力だねえ・・・」

エイミィ

「そんじゃま、伊つてみよー!!」

ヴィータ

「・・・なんか、ウゼエな・・・」

アルフ

「同感・・・」

ヴィータ

「まあ、いいや・・・」

なんつーか、こう・・・お人好し・・・かな？」

アルフ

「・・・はあ・・・？」

ヴィータ

「メンドーごととか頼まれると、断れねーんだよなあ・・・」

まえに
小学校の時やってた『せーとかいちよー』とかゆーのだって、
頼まれて仕方なくやってたって、はやてが言ってたし・・・」

エイミィ

「へー、以外だねえ・・・」

そーゆーことは『フン、くだらん』とか言つて一蹴しそうだけ
ど・・・」

ヴィータ

「文句言いながらも、なんだかんだで引き受けちまうんだよ、兄
貴はさ」

アルフ

「・・・・・・・・・・」

●八神 シャマルの場合

シャマル

「え？ 私から見たお兄さん・・・ですか？」

エイミイ

「そ、関係者全員に聞いてるんだよ」

シャマル

「あの・・・何かの役に立つのでしょうか・・・？」

エイミイ

「メチャクチャ立つよ！ も、面白いのなんのって・・・ゲ
フウッ!？」

シャマル

「あわわっ・・・!? だ、大丈夫ですか？」

アルフ

「安心しな。このくらいじゃ、どーにもなんないよ」

シャマル

「いやでも・・・モロに正拳突きが鳩尾に・・・」

エイミイ

「うん。なかなかのツツコミだったよ、アルフ」

シャル

「ええっ!? 立ち上がった!？」

エイミイ

「そんなことよりも、話す気になった?」

シャル

「いやあの・・・『そんなこと』ってほど、軽いパンチじゃなかったような・・・」

アルフ

「深く考えたら負けさ」

エイミイ

「なんでもいーから、早くしゃべりなさい! それとも無理矢理がいいのかな!？」

シャル

「ひいつ!? 顔が怖いです!？」

アルフ

「・・・脅迫じゃん・・・」

エイミイ

「フェイトちゃんのためだもん。これくらいは、とーぜんだよ」

アルフ

「『自分の楽しみのため』の間違いだろ」

エイミィ

「細かいことはいいからさ。で？ どーなの？」

シャル

「え、え〜と・・・お料理がとっても上手で、とっても優しい人だと思いますよ・・・？」

アルフ

「でもさ、しょっちゅう仏頂面で、なんか怖くないかい？」

シャル

「お兄さん、なかなか本心を表情に出しませんから・・・。
でも、本当に優しい人ですよ？ そこは、断言できます！」

●八神 ザフィーラの場合

ザフィーラ

「確かに、シャルの言う通りだな」

エイミィ

「というと？」

ザフィーラ

「以前から、玄斗殿の散歩のお供をさせていただいているのだが、老若男女を問わず、町内の人々皆に好かれておられる」

アルフ

「私はどーも、信じられないんだよねえ・・・。

子供なんか、真っ先に逃げそうな人相なのに・・・」

ザフィーラ

「むしろ、その逆だな。子供達の方から寄ってくるほどだ。

そんな彼等と戯れるのも、あの方や私の日課になっている」

エイミィ

「こりゃまた意外な話だね」

アルフ

「言っちゃなんだけど、アンタもけっこーな強面なのねえ・・・

」

ザフィーラ

「日常生活では、動物の形態で過ごしているからな」

エイミィ

「いや、あんだけ大きな犬が目の前にいたら、しょーじきビビるよ？」

ザフィーラ

「それはやはり、玄斗殿の存在が大きいな。

初めの頃は確かに怖がられましたが、
何度かあの方との散歩をする内に、しだいに心を開いてくれた。
今では、私の背中に登るなどして遊んでいるくらいだ」

アルフ

「あの能面野郎に、そんな魅力があるとは思えないけどねぇ・・・

」

ザフィーラ

「目に見えるモノだけが、真実とは限らん。

厳しい外見の中に、溢れんばかりの慈悲を持っている・・・
そういう方なのだ。

子供達も、無意識にそれを感じ取っているのだろう」

アルフ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

●八神 シグナムの場合

シグナム

「何？ 兄上をどう思うか、だと？」

アルフ

「とりあえず、みんなに聞いてるんだけどさ・・・」

シグナム

「そうだな・・・あの方は、私の目標であり・・・憧れだな」

エイミィ

「ほ、こりやまた意外な・・・」

アルフ

「アンタはてつきり、あいつのこと好きなのかと思ってたけどね・
・・・」

シグナム

「確かに、ある種の恋愛感情が無いと言えば、嘘になる」

エイミィ

「素直じゃないなあ。ゾッコンだって言っちゃえばいいのに」

シグナム

「私にはまだ、兄上の隣に立つ資格はない。騎士としても、女としてもな・・・」

アルフ

「いや、充分強いし、べっぴんだと思うんだけどねえ・・・」

エイミィ

「ホントホント。胸大きいよね」

アルフ

「・・・目の付け所がオヤジみたいだね・・・」

シグナム

「それでもまだ、足りないというだけの話だ。
あの方の偉大さは、およそ口で語れるようなモノではない」

エイミー

「まあ、実際に玄斗君は無口だけどさ」

アルフ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シグナム

「ん、そうだ、テストロッサの守護獣、伝言を頼めるか？」

アルフ

「使い魔だつての。つか、名前くらい覚えとくれよ」

エイミー

（いや、アルフだつて玄斗君を未だに『能面』呼ばわりしてるじゃん・・・・）

シグナム

「『勝負はまだついていない。必ずや、兄上の心を射止めてみせる』。」

そう、テストロッサに伝えてくれ」

アルフ

「人の話を無視した上に、勝手に三角関係に巻き込まないでおくれよ！」

エイミー

「おお、燃えてますなあ。 比喻じゃなく。」

アルフ

「そっちもなんで楽しそうなんだい!？」

シグナム

「コレばかりは、負けるわけにはいかんっ!」

アルフ

「分かったから! その剣と炎をしまいな!」

●八神 はやての場合

はやて

「ハッキリ言って、ツンデレやな」

アルフ

「・・・は・・・?」

はやて

「ホントはお人好しで、人一倍優しいのに、無理して厳しい顔しとるんよ」

アルフ

「なんで、そんなことを・・・？」

エイミィ

「確かにね。男の子がツンデレやっても、あんまり萌えないし・・・」

アルフ

「そーゆー意味じゃないっての・・・！」

はやて

「私のせいやろなあ・・・」

アルフ

「え・・・？」

はやて

「子供二人で暮らすゆうのは、けっこう大変でなあ・・・。
色んなトラブルにも巻き込まれやすいんや」

エイミィ

「まあ、そりゃそーだねえ」

はやて

「私は車イス無しでは動けへんかったし、
兄ちゃんも必然的に、一人で二人分の面倒を見なあんかった・・・」

アルフ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

はやて

「厳しいこの世の中で生きていくためには、
ナメられたらあかん、強くなくちゃあかん、そう思ったんやろ
なあ・・・」

エイミイ

「へー、たいしたモンだねえ・・・」

はやて

「でも、中身は変わってへん。毎日のように笑顔を作った、
あの頃のままや。」

シグナムとかザフィーラ、いつもより口が軽かったやろ？」

アルフ

「あ、うん。そーいや、いつもよりしゃべってたねえ・・・」

はやて

「sonだけ、二人とも兄ちゃんのが好きなんや。
sonで、いつかは本音を全部見せてほしい、そう思うとる・・・
。」

アルフも、一緒に暮らせば分かると思うで？

ホンマの兄ちゃんがとってもカワイエゆうことが」

アルフ

「カ、カワイイ・・・？」

はやて

「うん、カワイエよ。」

フェイトちゃん以上に過保護で、かおるちゃん以上に純情で、
なのはちゃん以上に真っ直ぐな・・・そんな人なんや」

アルフ

「い、意外すぎる・・・」

エイミイ

「見事なまでに、外見と精神^{なにかみ}が逆だなあ・・・」

はやて

「アハハ♪ ホンマやね♪」

アルフ

「そーいえばさ、全然姿が見えないけど、能面野郎はいないのかい？」

「確か今日、非番のはずだろ？」

はやて

「なんや、聞いてへんのか？」

シャル

「お兄さんなら、早朝からテストロッサちゃんと一緒に釣りに行ってますよ？」

●今はちょうど昼飯時

シグナム

「なっ、何いっ!？」

エイミイ

「うわっ!？ ビックリしたあ・・・」

ザフィーラ

「どうかしたのか？」

シグナム

「なぜ、誰も兄上を止めなかったのだ!？」

ヴィータ

「いや、止めるこたあねーだろ。兄貴だつて、たまの休みに息抜きしてーだろーし・・・。」

「つか、シグナムも朝、見送ってたじゃねーか」

シグナム

「釣りそのものではなく、テストロツサが同伴していることが問題なのだ!」

シャマル

「何も問題ないと思うけど・・・?」

シグナム

「大ありだ! これ以上、あの二人が親密になったらどうするっ!?!」

ザフィーラ

「・・・また始まったか・・・」

シグナム

「こ、こうしてはおれん！　すでにあれから、五時間は経過している……。」

ずるいぞ、テストロッサアアア！！」

ダダダダダダッ

ヴィータ

「あーあ、行っちゃったよ……。」

シャル

「大丈夫かしら……。」

はやて

「ま、兄ちゃん達もそろそろ切り上げる頃やろから、途中でばったり会つかもなあ」

アルフ

「……………」

エイミィ

「……………」

はやて

「どないしたん？」

アルフ

「もしかして……いつもあんな感じなのかい……？」

シャマル

「何がですか？」

エイミィ

「いやぁ・・・シグナムがあんなに取り乱すのを見るのなんて初めてで・・・」

ヴィータ

「兄貴が絡むと人が変わるからなぁ・・・」

ほれ、よく言うだろ？ 『恋は猛爆』ってさ

ザフィーラ

「それを言うなら、『恋は盲目』だ」

●最初から、こーすればよかったんじゃない？

エイミィ

「あ、いたいた！」

アルフ

「案の定、フェイトとシグナムがいがみ合ってるねえ・・・」

エイミィ

「全く気にせずに、後片付けし続けてる玄斗君も玄斗君だけだね・
・」

アルフ

「・・・エイミィ、ちょっとアイツに話がある。フェイト達のこと、任せたよ」

エイミィ

「え！？ ちょっと!?!」

アルフ

「ちよいと」

玄斗

「ふむ？ ああ、フェイト嬢を迎えに来たのかね？」

アルフ

「まあ、そんなところさ。アンタに、ちょっと聞きたいこともあったしね」

玄斗

「何かね？」

アルフ

「アンタ、フェイトのこと、好きなんだろ・・・？」

玄斗

「・・・・・・・・・・」

アルフ

「本当に好きなのか、なんで好きになったのか、ハッキリ答えてもらおうかと思ってね」

玄斗

「・・・なるほど」

アルフ

「アタシは、フェイトに幸せになってもらいたいんだ。
そのためになら、なんだってするよ」

玄斗

「ふむ・・・では聞くが、君はなぜ、フェイト嬢にそこまで幸福になっしてほしいのかね？」

アルフ

「あん？ 決まってるじゃないか。フェイトはアタシのご主人様なんだから」

玄斗

「それだけで、朝から知り合いの家とはいえ、あちこち走り回れるものかね？」

アルフ

「な、なんでそれを・・・！？」

玄斗

「先程、はやてから連絡が来た。おおよその話は聞いているよ」

アルフ

「そ、そうか・・・」

玄斗

「・・・人の心というのは、思いの外単純であり、想像以上に複雑だ。
ここに来るまでに、何度もそんな話を聞いているだろう？」

アルフ

「・・・・・・・・・・」

玄斗

「君も、『主だから』などと言うが、実際はもっと単純ではないのかね？」

いちいち行動の理由を、考えて動いているのかね？」

アルフ

「それは・・・」

玄斗

「物事の動機というものは常に、単純明快だ。
しかし、理性や理論などといった不純物が複雑に絡み合い、
それを無用に分かりづらいモノにしている」

アルフ

「・・・・・・・・・・」

玄斗

「何事も、取って付けた理性や浅はかな思考などで計れるモノではないのだ」

アルフ

「・・・結局さ、何が言いたいんだい・・・？」

玄斗

「・・・人に好意を抱く・・・そこに理論的な思考は存在しない、そういうことだ」

アルフ

「・・・一目惚れ・・・ってこと・・・？」

玄斗

「世間一般的には、そう言うのだろうが、断言は出来ない。
理由など、後から考えればいくらでも作り出せるだろうからね」

アルフ

「・・・そうかい・・・」

玄斗

「おや？ もう帰るのかな？ フェイト嬢はまだ取り込み中のようだが・・・」

アルフ

「なんか、散々心配してたアタシがバカみたいに思えてね・・・。
無表情なだけかと思ってたら、今のアンタ、凄くいい表情カオしてるからさ」

玄斗

「？ いつもの顔だが？」

アルフ

「いんや、全然違うよ。

なるほどね、はやて達が言ってたこと、なんとなく分かったよ
ーな気がするよ」

玄斗

「そうかね？ 最近、紙野にもそのようなことをよく言われるの
だが・・・」

アルフ

「ああ。それじゃ、フェイトのこと、よろしくね」

玄斗

「うむ、安心したまえ。無事に家まで送ろう」

アルフ

「そーゆーことじゃないよ」

玄斗

「何か言ったかね？」

アルフ

「別にいゝ？」

●忘れ物

玄斗

「おや？ 君はいったい何をしているのかね？」

エイミィ

「・・・ついさっき、落雷と火災に遭いまして・・・」

玄斗

「ふむ、それはまた災難だったね」

エイミィ

「つて、ちょっと！？ もしかしてこのままほっとく気！？ 私、足腰たたないんですけどっ！？」

玄斗

「もしかしくともそのつもりだ。

無垢な少女につまらぬ入れ知恵をした報いとも思ってくれたまえ」

エイミィ

「じよ、冗談キツイって！！」

●忘れ物・番外編

ユーノ

「……ってことがあったらしいよ」

かおる

「そうだったんですか。知りませんでした」

ユーノ

「そっか、かおるもか」

かおる

「……………」

ユーノ

「……………」

アルフ

「あれ？ かおるとユーノが二人だけにいるなんて珍しいじゃないか」

フエイト

「あ、ホントだ。何か読んでるみたいだけど……」

エイミィ

「え〜と、何々……」

『立ち位置を確立するには』、『友人に無視されない方法』、『うつを防ぐ家庭の医学』

「……って、いったい何があったの、あの二人!？」

エース達の日常・その四 「アルフの突撃インタビュー」(後書き)

余談ですが、エイミーが異常に打たれ強くなっているのは、なのはVSリイナの被害を被っているのが主に彼女だからです。どーでもいい裏設定ですけど。

「風と風」(前書き)

本当に久しぶりの週刊投稿です。

夏休みということで、何か短編を書こうかと思ったら、こういうモノが出来上がりました。あんまり季節とかに関係ない内容ですが、暇つぶしにでもどうぞ。

「風と風」

その女性^{ひと}は、笑っていた。

悲しむでも、嘆くでもなく、その存在が消えゆく中でも、ただただ微笑んでいた。

ボクは、泣くことしかできなかった。

季節は夏。さんさんと輝く太陽と、みなぎる生命の季節である。終業式を終えた教室内では、早くも本日ただいまから始まる夏休みの予定の話でもちきりになっていた。海、山、レジャー施設、待ちに待った家族や友人との楽しいひと時を前に子供たちは胸を躍らせている。

「アンタ達は、夏休み前半は基本的に管理局だったわよね？」

そう、一部を除いては。

「うん」

「普段は学校があつて任務にあまり参加できないから、
こういつ時くらいはちゃんとやろうつて思つて・・・」

気の強そうな金髪少女の問いかけに、栗毛の少女と気の弱そうな金髪少女が申し訳なさそうに答える。彼女達は小学4年生としての生活の傍ら、とある組織の一員として活動しているのだが、学業優先のために溜まつてしまつた仕事を、この長期休暇を利用して片付けようということらしい。

「ごめんなあ？ 二人とも」

「気にしないで？ 5人とも大変だろうし・・・」

友人との時間を思うように作れないことに罪悪感を感じたのか、両手を合わせ謝罪のジェスチャーをする茶髪の少女。しかし、紫口ングヘアーの少女は逆にそんな彼女達の体調を気遣う。小学生が就職しているという事実だけでも驚くべきことなのに、その職種が職種なので当然といえば当然だろう。

「でもさ、なのは達はともかく、かおるはなんでそんなに忙しいのよ？」

今だつて、松葉杖なしじゃ、ろくに歩けもしないのに・・・」

と、そこで金髪少女の猫のようなツリ目が、黒髪の少年をとらえ

た。

話を聞けばこの少年、しばらくは家にも帰らず、本局とやらに泊まり込みらしい。2週間ほど前によく車イス生活から抜け出せたケガ人には、いささか以上の負担ではなかるうか。

「仕方ありません。管理局は慢性的な人手不足ですから。猫の手も借りたい状態なんだと思います」

世界の平和を守るといふ御大層な目的を掲げた組織だ。人手はいくらあっても足りることはない。苦笑しながらかおるはそう語るが、

「だとしても、あの書類の量は異常です。かおるさんの優秀さに、味を占めているとしか思えません」

その隣に控える銀髪少女は、肉眼で分かるほど不機嫌オーラを垂れ流していた。銀色のショートカットが風ではない何かによって、ゆらゆらと不気味に揺れている。

それもそうだろう。彼女の言うとおり、管理局上層部からかおる宛てに送られてきた書類の枚数は、尋常ではなかった。それこそ、教室一つ分の広さを誇るかおるの研究室が、比喩でなく埋め尽くされてしまったほどだ。普通の人間であれば、過労死は免れまい。しかし、

「でも、ボクはなのは達みたいに現場に出られませんから、その分、書類仕事で貢献しないと」

当の本人は横暴と言わざるを得ないその待遇を、むしろ快く受け止めてしまっている。命のかかった現場に出られないのだから、このくらいの苦労は当然だ。そう言わんばかりである。

確かに、彼の頭脳と手腕をもってすれば、部屋まるまる一杯分の書類仕事など、どうということはないのかもしれない。が、それでも彼をよく知る友人として、心配なものは心配だ。あまりにお人よしな少年に苦笑しつつ、超絶甘党な上司に頼んで書類を半分ほど突っ返してもらったのは正解だったと、心から思う友人一同であった。

「悪いな。休み早々に任務の依頼なんて」

「気にするな、ただの警護任務だ。」

どこぞのワーカーホリック少年に比べれば、心身共に億倍マシンだろう」

白く長い廊下で缶コーヒを片手にそんな会話をする二人の少年。髪の色は共に黒だが、その長さは一目で分かるほどに違っている。

「聖王教会の特殊能力者の存在が、うっかり外部に漏れてしまつてね。」

その能力やら命やらが狙われる恐れがあるってことで・・・」

「管理局からも警護要因を派遣するよう要請があった・・・だろう?」

なおも申し訳なさそうに後頭部を掻きつつ任務の内容を再度確認する単発の少年と、そんな生真面目な友人の様子に苦笑しつつ任務内容の先を口にする長髪の少年。

二人の間に展開されたモニターには、一人の顔写真が写っていた。流れるような金髪を伸ばし、カメラ（ひびく）に向かって微笑んでいる少女。年齢は10代前半、自分と同じ年くらいだろうか。写真を見つめる長髪少年の顔に、一瞬、黒い影が落ちる。

「・・・つくづく、やりきれんな・・・」

思わず、蚊の鳴くような小さな呟きが口からこぼれてしまった。おそらくは、隣の少年にも聞こえてはいないだろう。

かのワーカーホリック少年もそうだが、自分の周りには、こういう子供達が多すぎる。年端もいかぬうちから秀でた能力を持つてしまったがために、常に危険と隣り合わせにならざるを得ない子供達。高すぎる能力ゆえに、周りから疎まれることもあるだろう。少年は、それが悲しかった。

「あー、ここにおったんや、兄ちゃん」

と、思考の渦にのまれかけたその時、馴染みのある元気な声が耳に入ってきた。振り返ってみると、そこには3人の少女たちが、三者三様の笑顔を浮かべて駆け寄ってくる姿。

「おや、そちらも今日、終業式ではなかったのかね？」

「はい、終わってすぐにこっちに来たんです」

体の向きを変えつつ、とっさにモニターを閉じ、暗い感情を押し込めて相対すると、金髪少女が柔らかな笑みで即答してきた。

「なんだ、今日くらい友達と過ごしてもよかったのに」

「クロノ君や玄斗さんが働いてるのに、私達だけ遊んでられないよ」

ため息交じりのクロノの言葉に、胸の前で小さな拳を作って反論する栗毛少女。かの少年ほどではないとはいえ、ワーカーホリック気味の妹とその友人の将来が割と真面目に心配になる少年達であった。

「む？ かおるとリイナ嬢の姿が見えんが？」

「あ、そやそや。」

「なんや大事な用があるから、兄ちゃんも呼んできて言われとっ

「たんや」

そこでふと、玄斗が二名の不在に疑問を抱き、その妹がポンと手を打ち、思い出したように答える。

「私も、ということは、お前も呼ばれているのかね？」

「うん、守護騎士のみんなにも連絡入れとったみたいだよ」

「なんやるね？」と聞いてくる妹に曖昧な返事をしつつ、玄斗は友人の待つ研究室へと向かうのだった。

守護騎士四人と合流したのは、その道中のことである。

「ん？　　おー、兄貴達も呼ばれたのか」

最初に少年一向に気づいたのは、後頭部で腕を組んでいる三つ編み少女だった。

「なぜ、お前がいるのだ、テストロッサ・・・」

「なんとなく、気になりました」

なぜか出会っていきなり険悪なムードの桃色ボニーと金髪ツイン。

「話ってなんでしょうねえ？」

もしかしたら、料理が上手くなるエプロンを発明したとかだったり・・・」

「・・・そうだな・・・」

実に都合のいい夢物語を語る金髪ショートと、それに憐れむような眼差しを送る青色の狼。

周りが一気に賑やかになってしまった。ここにリイナ・クルセイドがいない分マシかと、苦笑していると、いつの間にやら目的地の前に到着していた。

ノックをし、入ろうとした次の瞬間、

「や、やめっ・・・やめてくださ・・・にやあああああああ！？」

ドタンバタンという騒々しいもの音と共に、そんな奇声が室内から聞こえてきた。声の主は、間違いなくこの部屋の所有者である少

年だ。何が起こっているのかは分からないが、この声と物音からしてただ事ではないことは容易に想像がつく。

「ど、どうしたのかおるちゃん!? リイナちゃんに変なことさ
れてるとか!？」

栗毛の少女が先陣を切り、ドアを蹴破らんばかりの勢いで部屋になだれ込む。小学生がいったい何を想像したのかと問いただしてみたいところだが、今はどうやらそれどころではないらしい。残りのメンバーも同様に入室し、そこに広がっていた思いもよらぬ光景に、思わず固まってしまった。

「きやはははははははははは」

「いー加減にかおるさんから離れなさい! この豆粒チビ!」

「やめてくださいいいい!」

なんだろう。何やら小さい水色長髪の妖精が、かおるの黒髪をそれはもういじくっている。さらさらとしたショートヘアーは見る影もなく、鳥の巣のようにボサボサだ。どうやらそれがとても面白いらしく、小人はすごい爆笑で、なおもいじり続ける。リイナとかおるが引きはがそうとしているが、よほど気に入ったのか離れようとしない。

「・・・何これ・・・？」

そう思ったのは、なのはだけではない。口には出さないが、皆が皆同じような心境だ。

「あつ、はやてさん、玄斗さん。そろそろ来るころだと思っていだだだだ！？」

「きやはははははは」

「だからやめなさいと言ってるでしょうに！」

どうやら、かおるがこちらに気づいたようだ。が、ほぼ同時に髪を後ろに強く引っ張られ、思わず悲鳴を上げてしまう。なおも爆笑する妖精と、引きはがそうとしているリイナ。それを眺める面々は啞然とするばかりだ。

「とりあえず、状況の説明をしてもらおうか」

ただ一人冷静であった玄斗の一言で、皆が我に返った。

「リ、リインフォース！？ そのちっこいのがか！？」

ヴィータの素っ頓狂な叫び声が、書類に埋め尽くされた研究室にこだました。

「た、確かにそっくりやけど・・・」

リインフォースとは、すでにこの世にいない夜天の書の管制人格「ニムデバース」はやて夜天の王の融合騎であつた女性だ。確かにかおるは、彼女が消滅して以来、その生まれ変わりともいえる存在を生み出そうと、日々研究を繰り返していた。目の前の妖精も、髪や瞳の色と外見年齢を差し引けば、文字通り『小さなリインフォース』と言ってもいいかもしれない。

しかし、そこでクロノが疑問を口にする。

「少し早すぎやしないか？ 彼女が消滅したのは、今年の二月だぞ？」

そう、研究を始めてから、まだ半年も経っていない。一度はロストロギアにも指定された魔導書の複雑かつ膨大なデータをこの短時間で解析・複製するなど、次元世界中の技術者が卒倒しかねない大快挙である。門外漢であるクロノも、これには目を丸くするしかない。

「基礎構造の解析自体は、半年前に終わってましたから……。そのデータを基に、一から組み直したにすぎません」

「い、いえ……。実際はそんな簡単なモノじゃないはずなんですけど……」

シャルが口元を引きつらせるのは無理もない。かおるは実に簡単に言つてのけるが、本当ならばそのような単純な話では決してないのだ。普通の技術者ならば、それこそ無限にあるのではと考えるほどのデータ量を前に、一晩で血反吐を吐くのが関の山である。二日もつたら上出来だろう。目の前の少年の計り知れなさを、改めて痛感する一同であつた。

「まあ、技術云々はひとまず捨て置くとして、なぜそのような事態に陥っているのかね？」

そして、またも冷静に事態を受け入れていた玄斗が、かおるの頭上を指さす。そこでは、相も変わらず小さな妖精が、無垢な笑い声をあげて黒髪をおもちゃにしていた。

「いえ……。なんだか妙に気に入られちゃったみたいで……」

トホホと肩を落とすかおる。だが、

「いや、そうではなく、なぜそこまで幼児に逆行しているのか、と聞いているのだ」

そんな彼の言葉を玄斗はバツサリと斬り捨て、単刀直入に再度問うた。

確かに、リインフォースは、物静かな成人女性の姿をしていた。目の前にいる妖精は、外見はともかく雰囲気も行動も彼女とはまるつきり違いすぎる。見た目は10歳前後の少女だが、中身はまるで赤ん坊だ。リインフォースが基になっていながら、なぜここまで違うのか、彼が疑問に思うのももつとも言える。

「・・・もしかして、失敗なんじゃ・・・」

恐る恐る、フェイトがそう口にする。かおるが失敗するなど思えない。思えないが、彼が人間である以上万が一の可能性は否定できない。しかし、

「いえ、むしろ大成功です」

当のかおるは、笑顔でそれをキツパリと否定した。

「えつとですね・・・いわゆる心や性格というものは、

主にその人の経験や記憶から構成されているのですが・・・」

わけが分からないといった表情の一同に、かおるは専門知識やら単語やらを極力省いた説明を始める。

単刀直入に言う、この妖精にはリインフォースの記憶がないらしい。リインフォースの記憶は、彼女と共に消滅してしまったため、組み込むことができなかったのだ。まあ、仮に組み込んだとしてもそれは『リインフォースの記憶を持った別の存在』にしかならないのだが。アリシア・テストロッサの記憶を移植され生み出された、フェイト・テストロッサのように。

呼吸をし、口から栄養を摂取し、感情すら持つ。融合騎は、デバイスという名こそ付いてはいるが、その性質上、人間に限りなく近い存在だ。ただの機械ならば製造されてすぐにその真価を発揮するが、人間ではそうはいかない。要するに、記憶を持たない彼女は、まさしく生後間もない赤ん坊同然なのである。むしろ、そうでなくてはならない。

かおるは説明をそう締めくくることが、理解した人間としていない人間は半々といった様子だ。中には頭から湯気を噴出させ、文字通り目を回している者までいる。

「ふむ、となると、この子をどうするかが問題だな」

「あ、そやね。家に一人で置いとくわけにもいかんし・・・。
かといって現場に連れてくのもなあ・・・」

と、そこで比較的話を理解していた玄斗が呟いた内容に、あまり理解できないけどまあいいか的な考えのはやてが思い出したかのよ

うに同意した。

要するに、家族に赤ん坊が一人増えたような状況だ。嬉しくはある。しかしながら、生憎と八神家の面々にはすでに長期任務の依頼が舞い込んできている。しばらくは基礎的な教育と監視の目が必要になる赤ん坊に一人で留守番させるわけにもいかないし、かといって少なからず危険の伴う現場に同伴するわけにはもつとかない。

どうしたものかと思案していると、

「もしよろしければ、ボクが預かりましょうか。

仕事といったら書類くらいですし、危険もないでしょうから」

かおるが即座に預かり先に立候補してきた。

「いいのか？ お前の仕事量は半端ではないと聞いて・・・というか、一目瞭然だが・・・」

部屋のあるこちらに山積みになっている書類の束を見ながら、シグナムが頬を引きつらせる。彼女の言うとおり、これだけの量进行处理するには、この赤ん坊の存在は邪魔なのではなからうか。

「かまいませんよ。そもそもこうなったのは、ボクの設計にも原因がありますから」

しかし、当の本人はあつけらかんとした様子で快く承諾する。真面目というか、なんとというか。

とはいえ、そもそもありがたい申し出ではあるし、

「それに、なんか離れてくれそうもありませんから・・・」

「・・・すごい気に入られちゃってるね・・・かおるちゃん・・・」

「

「ああっ！？ いつの間にか、かおるさんの髪がさらにスゴイことに！？」

妖精自身がかおるの髪をえらくお気に召している様子なので、多少戸惑いながらもお願いすることになった。それはもう、サボテンを連想するようなアフロである。

「ここまでやっても、まったく男の子に見えへんかおるちゃんもスゴイけどな・・・」

「はやて、それは言い過ぎ・・・でもないようなあるような・・・」

「

「やっぱりホントは女なんじゃね？」

友人たちから降り注ぐ、言葉の刃の雨あられ。いつも同じ結論に達するこのやりとりを前に、妖精のイタズラとは別の意味でかおる

が号泣しているのはご愛嬌だろう。

「ともあれ、山積みの書類と幼稚園児に加え、9人の邪魔者がいては彼の負担が増える。

我々はお暇するでしょう」

そんな玄斗の言葉に従い、自分の仕事もある訪問者たちはぞろぞろと部屋から去っていく。

「ああ、一ついいかね？」

「はい、なんですか？」

すると、最後に扉の前に立ったところで、玄斗が思い出したかのように歩みを止めた。その様子に、かおるは思わず首をかしげる。

「すまなかった。ありがとう・・・」

「・・・ボクの方こそ・・・」

双方共に、交わしたのはあまりにも短い言葉。その謝罪と感謝の言葉がどういう意味であるのかは、誰にも分からない。しかし、彼らにはそれで十分すぎた。どちらともなく苦笑を浮かべ、二人は別れる。

部屋を出れば、今の季節を忘れてしまうほどヒンヤリとした無機質な廊下が、どこまでも続いていた。

その女性ひとは、笑っていた。

「そう泣くな。私はむしろ、お前に感謝すらしている」

それは、心からの言葉だった。どこまでも真っ直ぐで、どこまでも正直な、彼女の本心。

「でも……ボクが……倒れてさえいなければ……っ！」

けれど、到底納得などできない。彼女が許そうが、彼女の家族が同意しようが、事実は変わらない。ボクは、救える命を救えなかったのだ。

「……ならば、一つ頼まれてくれないか？」

夜風で冷えたボクの頬に両手を添え、語りかけてくる。その顔は、先ほどとまるで変わらないのないモノ。悲しむでも、嘆くでもなく、その存在が消えゆく中でも、ただただ微笑んでいた。

「私はもう、主の翼にはなれない・・・。」

だから、主はやての翼となり、共に空を駆ける新たな風を、生み出してほしい」

生きていたいはずだ。生きて、家族と共に過ごしていたいはずだ。それなのに。

「過去ではなく、未来を救ってくれ」

ボクを元気づけるように、語りかけてくる。情けない。今まさに目の前で光の粒になっていく彼女に、逆に氣遣われるなんて。なんて、なんて情けない人間なんだろう。

「はっ、い・・・！ このっ、命を懸けて・・・っ！」

本当に、情けない。最後の、誓いの言葉すら、まともに言えないなんて。

目の前の視界が開け、星と月と雲達が、こちらを無言で見下ろしている。ボクは、泣くことしかできなかった。

「風と風」(後書き)

ふつー夏っていったら、海とか祭りとかそーゆーのを題材にするんだと思うんですけど、書いてたらなぜかこーになりました。本編の方でリインフォース消滅の話を書いていなかったもので、ちょうどよかったかな？ こーゆーシリアスな話って、得意でもないのに大好きなんですよね・・・。

ところで、原作では、リインが生まれるのはこれよりさらに2年後なのですが、そこはイレギュラーかおるがいることによる相違とゆーことで納得してください(汗)。

エース達の日常 「聖祥大附属小学校運動会・前編」 (前書き)

はい、スポーツの秋ということで、運動会ネタです。なんかグダグダと長くなってしまったので、前・後編の2話に分けて投稿します。

エース達の日常 「聖祥大附属小学校運動会・前編」

●人生初

はやて

「〜」

ヴィータ

「はやて、なんかいいことでもあったのか？」

玄斗

「いや、むしろ、これからいいことが起きるのだ」

ヴィータ

「・・・どーゆーことだよ？ 兄貴」

シグナム

「なんだヴィータ、忘れたのか？」

シャル

「ほら、『運動会』よ！ 『う・ん・ど・う・か・い』！」

ヴィータ

「・・・あゝ！ そーいや明日だっけ！」

玄斗

「はやては学校通い自体を去年までしていなかったからな。
必然的に、運動会も初体験だ」

シャル

「よっぽど嬉しいんでしょうね」

ザフィーラ

「そう言っお前達も、楽しそうだが？」

シグナム

「なんだ、聞いていないのか？」

『運動会』とは家族が集い、己の力と技を競い合う場なのだぞ？
血湧き肉躍るのは当然だろう」

ヴィータ

「えっ！？　そーなのか！？」

シグナム

「主はやてや兄上の手前、無様な姿は見せられん。
相手が誰であろうと、全力で叩く！！」

シャル

「頑張りましょう！　ヴォルケンリッターの名にかけて！」

ザフィーラ

「・・・申し訳ありません、玄斗殿・・・」

玄斗

「ははは、彼女達も初めての行事だからね。
少しばかり勘違いをしているだけだ。特に問題は無いだろう」

ヴィータ

「いよゝし．．．腕が鳴るぜ．．．！」

シグナム

「明日が実に楽しみだ．．．！」

シャル

「あ、お弁当作らなくちゃ！」

ザフィーラ

「．．．実に、不安です．．．」

玄斗

「ふむ、確かに、はやてが腹を壊しては困る．．．。

張り切っているところを悪いが、シャルにはおとなしくしてもらおう．．．」

ザフィーラ

「い、いえ、そういうことではなく．．．」

●仲間はずれというわけではないけれど

リン

「おにーちゃん、うんどーかいつてなんでしゅか？」

玄斗

「うむ、ちょっとした行事のようなものだよ」

リン

「ぎょーじつてなんでしゅか？」

玄斗

「そうだね、もう少し成長したならば、教えよう」

リン

「せーちよーってなんでしゅか？」

ザフィーラ

「・・・玄斗殿、これは・・・」

玄斗

「うむ、連れて行くわけにはいかな」

リン

「？」

玄斗

「かといって、一人で家に残すわけにもいかん。紙野の家にも預けるか」

リン

「かみのつてなんでしゅか？」

●当日の通学路

シグナム

「・・・剣は、使用できないのですか・・・？」

ヴィータ

「ハンマーもダメって・・・武器無しでどーやって戦うんだよ」

シャル

「つまりは白兵戦なんじゃないかしら」

玄斗

「二丁四チームほどに分かれ、己の身体一つで数々の種目ミッションに挑むのだよ」

ヴィータ

「よーするに、集団戦か・・・」

玄斗

「その通りだ。個人の身体能力だけではなく、チームワークも勝敗を左右する」

シグナム

「しかし、それでも負けるわけにはいきません！

例えば武器を失ったとしても、ベルカの騎士に敗北は許されないのですから！」

なのは

「・・・な、なんか・・・凄く気合い入ってるね・・・」

アリサ

「てゆうか、なんか勘違いしてない・・・？」

すずか

「これから戦場に行くみたいだね・・・」

はやて

「何度説明しても勘違いしっぱなしでなあ・・・
最終的には兄ちゃんも諦めて、『実際に見せた方が早い』って
ことになったんや」

ユ一ノ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

フェイト

「た、大変だね・・・玄斗さんも・・・」

エイミイ

「あれ？」

でもさ、普通こーゆー行事って生徒達はなやてちやんが主役だから、
家族の出番ってあんま無いんじゃない？」

かおる

「いえ、ウチの小学校は父兄が参加する種目も多いですから・・・

」

アルフ

「へえ、そーなのかい」

クロノ

「それにしても、君は残念だったな。まだ満足には歩けないんだ
ろ？」

かおる

「ええ、今回の参加は無理ですね」

リンディ

「まあ、それならそれで、応援席で一緒に応援しましょう？。」

かおる

「はい」

ザフィーラ

「ところで、その大荷物はなんなのだ？」

かおる

「ああ、皆さんのお弁当ですよ」

アルフ

「自分の分どころか、ハラOWN家や高町家、
しまいには八神家の分も作ってきてくれたのさ」

かおる

「今のボクは、こんなことくらいしか出来ませんから・・・」

リイナ

「そんなことはありません！　どこぞの砲撃バカよりは何倍も役に立っています！」

なのは

「・・・リイナちゃん・・・砲撃バカって、誰のことかな・・・？」

リイナ

「誰のことでしょうねえ？　無い頭使ってせいぜい考えてみてはいかがかしら」

なのは

「――ッ！――！」

はやて

「あやや・・・始まってしまった・・・」

フェイト

「な、なのはっ！　落ち着いて――！」

ユーノ

「リイナも挑発しないでよっ――！」

すずか

「あああ・・・なんだか大変なことに・・・」

アリサ

「あゝっ、もうっ!! なんでこーなるのよぉ!!」

ザフィーラ

「なるほど・・・どおりで主達が作るそぶりも見せなかったわけだ」

アルフ

「ちょっと! アンタもこの二人を止めるの手伝いなっ!!」

エイミィ

「現実から目をそらさないでえっ!!」

かおる

「ザフィーラさんの気持ちはよく分かります・・・」

クロノ

「同感だ・・・」

リンディ

「いい天気ねえ・・・」

●今日は土曜ですから

ヴィータ

「うわっ！？ 人いっぱいじゃねえか！」

シャマル

「どうしましょう……。皆さんで一ヶ所に集まるのは無理そうですね……」

シグナム

「油断したな……。まさかこれほど参加者が多いとは……」

玄斗

「何、心配するな。とうに先手は打ってある」

フェイト

「そうなんですか？」

玄斗

「先に来て、席取りをしてもらっているからね」

なのは

「あれ？ でも、みんなで一緒に来ましたよね？」

リンディ

「なのはさんのご家族も、お店の準備をしてからこっちに来るって言ってたし……」

ユーノ

「他に誰かいましたっけ？」

リイナ

「存在感皆無のあなたが言つと酷く滑稽ですね、ユーノ・スクラ
イア」

ユーノ

「酷っ!？」

すずか

「あ、あははは……。でも、ホントにどなたなんですか？」

玄斗

「じきに分かる」

アリサ

「何よ、もったいぶっちゃって……」

かおる

「……あれ？ あの人ってもしかして……」

ケント

「あっ！ おゝい！ こっちだこっち!!」

エイミィ

「なるほど、ケント君だったんだ……」

ザフィーラ

「さすがは玄斗殿。この上なくベストな人選です」

アルフ

「？　なんですか？　アイツの特技って散歩だろ？　席取りと関係ないじゃないか」

玄斗

「ヤツが町を徘徊するのは、夕方から早朝にかけてなのでね。他の誰よりも早く、『散歩のついで』に席を取ってもらった」

クロノ

「・・・いつ寝ているんだ、彼は・・・」

玄斗

「日曜日にまとめて寝ているらしい。その日一日はテコでも起きんがな」

●人生、あきらめが肝心だ

クロノ

「へえ、けっこういい位置じゃないか」

ケント

「ま、午前四時から場所取りしてれば、これくらいはな」

アリサ

「四時!？」

かおる

「よ、よく入れましたね……。門、閉まってたんじゃ……」

ケント

「まあな」

すずか

「……不法侵入ですよ？ 誰かに見つかったら、まずかったんじゃ……」

ケント

「見つければ、な。見つからなければオーケーさ」

なのは

「……それ、危険思想だと思います」

フェイト

「うん……そうだね……」

リイナ

「犯罪者予備軍ですか……。要注意人物のリストに入れておきましょう」

ケント

「ええっ!? 酷くねえ!? 特に最後の銀髪っ子!」

エイミィ

「はいな。要注意人物、一名追加……っ」

ケント

「何、素直に真に受けちゃってるのこの人！？ 怖いよ!？」

リンディ

「色々あつてね、エイミィはリイナさんには逆らえないのよ」

ケント

「なんで!？ かなり年離れてるよ!？ そんな怖い、この銀髪っ子!？」

ユーノ

「はい」

ケント

「マジで!？ 冗談のつもりだったんだぞ、オレ!！」

アルフ

「安心しなつて。骨は拾ってやるからさ」

ケント

「縁起でもねえな、オイ!？」

はやて

「なんや、始まる前から盛り上がつとるなあ」

シャマル

「皆さん楽しそうですね」

シグナム

「フッフッフツ……腕が鳴る……!!」

ヴィータ

「どんと来おい!!」

ザフィーラ

「……果てしなく不安です……」

玄斗

「いつものことだ」

●出る杭は打たれる

クロノ

「なるほど、クラスごとに『紅組』と『白組』に別れるのか。フェイト達はどっちなんだ？」

フェイト

「白組だよ」

なのは

「うーん……今年はどっちが勝つかなあ……？」

アリサ

「さあ？ 去年までは私達の圧勝だったけど、今年は分からないわね」

かおる

「去年は、百点差くらいつけてましたもんね」

エイミイ

「へえ、それは凄いね」

アリサ

「誰かと誰かが全種目の一位と二位を独占してれば、当然の結果よ」

アルフ

「・・・誰かと・・・誰か・・・？」

ヴィータ

「かおるは、だいたい想像つくけど・・・」

玄斗

「彼と並ぶほどの人間がいるのか？ にわかには信じがたいな・・・」

リイナ

「あなたに言われても、説得力に欠けますが・・・」

ユーノ

「うん・・・。身体能力だけなら、軽く最強だしね・・・」

シグナム

「うむ！」

ザフィーラ

「・・・なぜ、お前が威張る・・・」

シャマル

「でも、気になりますよね・・・。どんな人なのでしょう・・・？」

ヴィータ

「やっぱさ、ゴツツイ男^{ヤツ}じゃねーかな？」

エイミー

「あ、それ、私も思った！」

ユーノ

「まあ・・・かおると並ぶって段階で、ちよつと人間離れしてるよね・・・」

リイナ

「・・・ケンカなら買いますよ？ ユーノ・スクライア」

リンディ

「あらあら、男の子とは限らないんじゃないかしら？」

アルフ

「まあ、どっちにしろ、ただ者じゃあないよね」

シグナム

「うむ。化け物だな」

ザフィーラ

「そこまで言うか・・・？」

はやて

「なんか、色々言われとるなあ・・・」

かおる

「何も、そこまで言わなくても・・・」

すずか

「・・・化け物・・・化け物・・・」

アリサ

「・・・どーすんのよ、これ・・・」

なのは

「気持ちは分からないでもないよ・・・」

フェイト

「うん・・・。あそこまで言われたら、さすがにショックだね・・・」

玄斗

「おお、リイナ嬢が暴れだしたぞ」

クロノ

「・・・ユーノが飛んだな・・・。十メートルほど・・・」

ケント

「いや、とりあえず止めるよ。黙って見てねーでさ・・・って、十メートル!？」

●開会直前

エイミィ

「でもさ、フェイトちゃんとリイナちゃんが入ってきたんだし、
かおる君の穴は埋まるんじゃない？」

アリサ

「フェイトはともかく、リイナの運動神経はなのは並だからね・
・・・」

ユーノ

「いや・・・馬鹿力だけは、たいしたもんだよ・・・?」

アルフ

「・・・ボロボロだね、ユーノ・・・」

クロノ

「一番被害を被っているからな・・・」

アリサ

「それに、フェイトがかおると同レベルなのは、スピードだけだし・・・」

ユーノ

「・・・・・・・・・・・」

アルフ

「・・・軽く無視されたね、ユーノ・・・」

クロノ

「いつものことだけどな・・・」

はやて

「会話に参加出来るだけでもマシやと思うけどなあ・・・。
私なんて名前すら出てこんし・・・」

玄斗

「仕方あるまい。お前はなのは嬢以上に、運動が得意とは言えんからな」

すずか

「しょうがないよ。最近まで車イスで生活してたんだから・・・」

なのは

「足手纏い同士、一緒に頑張ろう、はやてちゃん！」

はやて

「・・・びみょーに嬉しくないな・・・」

リイナ

「な、なぜか私が怪力要員に!？」

かおる

「え!？ 今更!？」

ケント

「無自覚で人殴ってたのかよ!？ こええな、オイ!！」

リンディ

「リイナさん、案外うつかりやさんねえ」

ケント

「そーゆー問題じゃねえだろお!？」

ヴィータ

「お、そろそろ始まるんじゃないか？」

シグナム

「勝負だ! テスタロッサ!！」

シャル

「あらあら、ずいぶん気合いが入ってるわね」

フェイト

「いや、あの・・・父兄と生徒が戦うわけじゃ・・・」

ザフィーラ

「・・・誰かこの位置代わってくれ・・・」

●色別対抗リレー

士郎

「ふう・・・どうやら間に合ったな・・・」

かおる

「あ、おはようございます、皆さん」

桃子

「おはよう、かおる君」

かおる

「いいタイミングですね。丁度今、一種目です」

美由希

「おおっ、ジャストナウって感じだね！」

「『色別対抗リレー』だからだよ」

はやて

「足の速い人が選抜されてるんです」

エイミイ

「しかも軽くスルーされてるし・・・」

リンディ

「いつものことじゃない」

クロノ

「自業自得だ」

玄斗

「どうでもいいが、少しは応援をしたまえ」

シャマル

「アリサちゃん頑張ってますねー。今のところ二位ですよ、二位！」

シグナム

「ここの生徒は皆レベルが高いな。一般人にしては、なかなかの運動能力だ」

ヴィータ

「お、テストロッサにバトンが渡ったな」

ケント

「うおっ！？ ゴボウ抜きじゃねえか！..」

ユ一ノ

「凄い！ 一気に一位だ！！」

なのは

「フェイトちゃん速い！！」

士郎

「ははは、凄いな」

桃子

「まるで、かおる君みたいね」

シグナム

「さすがだな、テストロッサ。相手にとって不足はない」

ザフィーラ

「まだ言っているのか、お前は・・・」

シャル

「あら・・・？ 最後は・・・すずかちゃんかしら・・・」

ヴィータ

「・・・大丈夫なのか・・・？」

ユ一ノ

「あ、バトンが渡った・・・」

玄斗

「・・・っ！」

ケント

「なっ・・・なんだありゃあ!!?」

アルフ

「速っ!？」

クロノ

「フェイトと同じ・・・いや、それ以上か・・・?」

かおる

「すずかさん、ああ見えて運動が凄く得意なんです」

なのは

「かおるちゃんと全校で一、二を争ってるくらいなんだよ」

エイミイ

「ええっ!? どー見てもそんなふうに見えないよ!？」

リンディ

「凄いわねえ」

ヴィータ

「簡単に納得してるアンタもスゲーよ・・・」

アルフ

「うわぁ・・・二位との間がどんどん開いて・・・」

はやて

「ダントツやあゝ」

●玉入れ

ケント

「小学校の運動会って言やあ、これだよな」

玄斗

「懐かしいものだ」

フェイト

「え？ 中学校では無いんですか？」

ケント

「まあ、あんまりやるとは聞かねえよな」

ヴィータ

「なんでだ？」

ケント

「さあ？ でもま、中学行ってまで玉入れって、なんか情けなくてねえ？」

アリサ

「……確かに……」

アルフ

「ぶつちゃけ、落ちてるお手玉をカゴに入れるだけの競技だしねえ……」

クロノ

「いや、以外と難しいと思うぞ？ あれは……」

エイミイ

「どーゆーこと？」

クロノ

「自分とカゴの位置関係、投げる角度や力の入れ方など、高度な計算力と計算スピードがモノを言う競技だ」

玄斗

「ふむ。よく分かっているではないか」

エイミイ

「へ、へえ……」

ユーノ

「なんか……かおるが得意そうな種目だなあ……」

アリサ

「まさにその通りよ。かおる達の十八番おはじなんだから」

ヴィータ

「……ん？ かおる……達……？」

シャル

「すずかちゃんのことじゃない？ ほら、今回も参加してるみたいだし」

シグナム

「なるほどな。しかし、お前は行かなくていいのか？ テスタロツサ。」

お前ほどの人間でなくば、かおるの穴を埋めるのは難しいだろう？」

はやて

「？ シグナムもシャルも何言っとるんや？」

アリサ

「かおるの穴を埋めてるのがすずかよ？」

シグナム

「・・・は・・・？」

シャル

「すずかちゃん以上に上手な子がいるんですか？」

リイナ

「どこに目を付けているのですか、あなた達は・・・」

リンディ

「ほら、さつきから次々とお手玉をカゴに入れてるじゃない」

ユーノ

「あれ！？ なのは！？」

エイミィ

「い、いないと思ったら、あんなところに……。てゆーか、なんかすっごい手際よくない!? 百発百中じゃん!」

アリサ

「なぜか、病的に玉入れ^{これ}だけは上手いのよね、あの子……」

はやて

「あんまりにもかおるちゃんと息がピッタリなんで、ゴールデンコンビなんて呼ばれとるらしいで?」

桃子

「ホントに、昔っから仲いいわねえ、二人とも」

士郎

「うんうん、お似合いだな」

かおる

「……………//」

リイナ

「……………」

美由希

「せめて、本人のいないところで言っただけだよ。かおる君、顔真つ赤じゃん……」

恭也

「なんでか知らんが、こっちの銀髪の子も凄い殺気だな・・・。
何者だ・・・？」

玄斗

「ふむ・・・以前から、なのは嬢は空間把握の能力に秀でている
と思っていたが、

これもその片鱗ということだろうか・・・」

ザフィーラ

「僭越せんえつながら、冷静に分析している場合ではないかと・・・」

ユーノ

「なのはが戻ってきたら、一雨あるだろうなあ・・・」

ケント

「？ 晴天だけど？」

フェイト

「そーゆー意味じゃないと思います」

●大玉転がし

ケント

「コレも定番だよな」

玄斗

「大玉^{あれ}がなかなかクセ者だがね」

なのは

「・・・・・・・・・・」

ヴィータ

「え？ そーなのか？」

エイミィ

「な、なんか簡単そうに見えるけどなあ」

リイナ

「・・・・・・・・・・」

かおる

「い、いえ、案外、力加減が難しいんですよ」

はやて

「低学年にとっては、けっこう重いやろうしなあ」

なのは

「・・・・・・・・・・」

クロノ

「逆に、高学年にとっては軽く、意外と扱いづらいってわけか」

リンディ

「玉の表面が微妙にデコボコしてるから、そのせいもあるわね」

リイナ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アルフ

「へ、へえゝ・・・・そうなのかい」

シグナム

「い、意外と色々考えられているのだな・・・」

なのは

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

玄斗

「玉のデコボコに関しては、
素材と作り方の問題であって、意図的なモノでは無いと思うが
ね」

ユーノ

「そ、そうですか・・・」

リイナ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シャマル

「す、すずかちゃんもアリサちゃんもテストロッサちゃんも頑張
ってるわね・・・」

ザフィーラ

「そうだな・・・」

なのは

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リイナ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

桃子

「なんだか凄い緊張感ねえ」

士郎

「いったいどうしたというんだろうなあ？」

かおる

「どーしたもこーしたもないですよ!!」

クロノ

「むしろ、あなたが原因じゃないですか・・・」

士郎

「？ オレ達、何かしたかい？」

ユイノ

「なのはやリイナの前でかおるのことを話す時は、石橋を叩くくらい用心しないとダメなんです!」

桃子

「・・・ああ！ そーゆーことなの？ モテる子は大変ねえ」

アルフ

「ダメだ・・・反省する素振りさえないよ・・・」

恭也

「ウチの両親に、そんなモノを期待するだけ無駄だ」

美由希

「確かに・・・」

ケント

「おわあっ!? 取っ組み合いし始めたぞ!？」

玄斗

「やれやれ、またか・・・」

ヴィータ

「やめろって、お前等!！」

シグナム

「クッ・・・!?!? いつも思うが、どこからこんな力が出ているんだ!？」

リンディ

「恋の力って凄いわねえ」

はやて

「リンディさんリンディさん、のんきなこと言っとなる場合とちやいますよ?」

エイミィ

「って言っても、あの二人の間に割って入るのは自殺行為だよ?」

シャル

「え〜ん！ 四人がかりで止まらないってどーゆーこと〜!？」

ザフィーラ

「玄斗殿！ 加勢をお願いします!！」

●よくある勘違い

士郎

「六年生によるソーラン節かぁ・・・。壮観だなぁ・・・。」

桃子

「ホント。みんな凄く上手ね」

恭也

「まあ、こういう大きな行事の定番だな」

玄斗

「懐かしいことだ」

はやて

「そーいえば、兄ちゃん達も去年の運動会でやっとなあ」

フェイト

「へー、見てみたかったなあ・・・」

シグナム

「残念だったな？ テスタロッサ」

ヴィータ

「オメエだつて見てねえじゃねーか」

シャマル

「私達、はやてちゃんと一緒にお留守番だったものね」

ケント

「オレは別の意味でも懐かしいけどな？」

ユーノ

「別の意味・・・？」

玄斗

「・・・ああ、アレのことが・・・」

エイミィ

「何々！？　なんか面白そうっ！！」

クロノ

「頼むから、おとなしくしてくれ、エイミィ・・・」

なのは

「あははは・・・。それで、どうして懐かしいんですか？」

ケント

「いやな？」

小一の頃、玄斗と『ソーラン節の名前の由来が何か』で論争したっつーだけの話だ」

アリサ

「？ 論争も何も、かけ声が由来に決まってるじゃない」

ケント

「そ！ その通り！」

でもよ、当時のオレらはそんなことは知らずに、バカな言い争いをしたわけよ」

リンディ

「あらあら、意外ねえ・・・」

アルフ

「・・・全然驚いてるように見えないけど・・・？」

リイナ

「とりあえず、その不気味なお茶を飲むのをやめて下さい」

すずか

「そ、それで、何が由来だと思ってたんですか？」

玄斗

「確か、紙野が『やたらと騒がしいから、騒乱節』、で・・・」

ケント

「玄斗が『昔、天皇の前で踊ったから、奏覧節』・・・だったか

なあ・・・」

かおる

「・・・小学一年生の発想じゃありませんよね・・・？」

玄斗

「そうかね？」

ケント

「そーでもなくね？」

美由希

「いや・・・そーでもあると思うよ？ かおる君が言つと説得力薄いけど・・・」

エース達の日常 「聖祥大附属小学校運動会・前編」 (後書き)

おかしい・・・なんでこんなに長くなったんだろう・・・。やっぱ、
キャラクター多いとまとめるのに一苦労だなあ・・・。

エー・ス達の日常「聖祥大附属小学校運動会・後編」(前書き)

前回の続きになります。もうなんか・・・まったく内容のないグダグダ話です。そんな感じで軽々しくお読みください。

エース達の日常「聖祥大附属小学校運動会・後編」

● 見てるだけでお腹いっぱい

ケント

「おおっ、こりゃうまい！」

桃子

「さすがはかおる君ね。ウチの美由希にも見習わせたいわ」

美由希

「うっっっ・・・!？」

玄斗

「あまり得意ではないのかね？」

士郎・恭也

「「不器用だからな」」

なのは

「お、お父さんもお兄ちゃんもそこまでハッキリ言わなくても・・・」

美由希

「うっっ・・・なのははいい子だねえ・・・」

ヴィータ

「まあ、気にすんなよ。シャルルに比べたら、絶対マシなんだからさ」

すずか

「え？ シャマルさん、お料理苦手なんですか？」

シグナム

「ハッキリ言って、アレは人の食するモノではない！」

エイミイ

「うん……。一回食べたことあるけど、アレは酷かった……」

アルフ

「冗談抜きに殺人的なマズさだったからね……」

シャマル

「み、みんな酷い！ 少しずつだけど上達してますっ！」

はやて

「そやなあ。とりあえず、一口で気絶はしなくなったもんなあ」

アリサ

「……どっちにしろマズインじゃない……」

リイナ

「二口目で気を失えば、充分に異常です」

クロノ

「それにしても、少し量が多くないか？」

フェイト

「作り過ぎじゃない？ かおる」

かおる

「いえ、玄斗さんにこれくらい作るように言われて・・・」

ユーノ

「うわっ!? 玄斗さん!?!」

玄斗

「どうかしたのかね? ユーノ・スクライア」

ユーノ

「『どうかしたのかね?』、じゃないですよ! そんなに食べて大丈夫なんですか!?!」

アルフ

「ゲッ!? 重箱三段分がもう無い!?!」

なのは

「ひ、一段分でもけっこう多いのに・・・」

はやて

「兄ちゃん、意外と大食漢やからなあ」

ヴィータ

「いつも5、6人分はペロツといくぞ?」

美由希

「そ、それでその体型!?!」

エイミィ

「うらやまし．．．」

リンディ

「不思議ねえ．．．」

リイナ

「私としては、あれほど大量に糖分を摂取して
糖尿病を発症しない あなたも不思議でなりません」

クロノ

「とゆうより、『なぜ食べられるのか』にツッコむ人間が
一人もいないのはどーゆうわけだ．．．？」

かおる

「考えたら負けだと思います．．．」

● 綱引き

士郎

「おお、みんな元気だなあ」

桃子

「特に男の子がやる気満々ね」

ケント

「力の見せ所だからなあ」

玄斗

「元来は、占いの一種であつたらしいがね」

フエイト

「え、そうなんですか？」

かおる

「豊作を祈つたり、作物や漁獲の豊凶を占う年占としうらひの行事であつたモノが、

本来の意味が失われるのに伴つて、次第に遊技・競技化されたモノなんです」

エイミイ

「へっ……さすがだねえ、二人とも」

クロノ

「どこから仕入れてくるんだ、その知識は……」

シャマル

「あ！ そろそろすずかちゃん達の出番ですよ！」

ヴィータ

「ん？ リイナが先頭か。こりゃ、勝ちが決まったな」

リンディ

「あら、そうかしら。こういう競技は、チームワークも大切なものよ？」

シグナム

「うむ、彼女は少々協調性に欠けるからな。勝敗は五分五分といったところだろう」

はやて

「お、始まったで」

——うわあああああああああああああああ
っ！？

——きゃあああああああああああああああ
っ！？

恭也

「……飛んだな……」

美由希

「……飛んだね……」

ケント

「綱引きの一本釣りなんて初めて見たぞ……」

ザフィーラ

「ここまで圧倒的な力の差があるとは……」

玄斗

「問答無用の力業だね。相手の子供達も気の毒に」

ユーノ

「味方の子達もわけが分からずにボーゼンとしますけどね・・・」

アルフ

「てゆうか、なのははいつも、どーやってアレと取っ組み合ってるんだい？」

なのは

「えーと・・・なんとなく？」

かおる

「女の子って凄い・・・」

●臨戦態勢

玄斗

「さて、そろそろ行くでしょう」

はやて

「あ、そういえば次は『父兄の持久走』やったな」

シグナム

「兄上、ご武運を」

フェイト

「頑張ってください！」

ヴィータ

「ま、兄貴なら楽勝だろーけどな」

士郎

「そうはいかないよ？」

恭也

「オレ達がいることを忘れないでくれ」

アルフ

「あれ？　なんでなのはンとは、父親と兄貴の二人が出るんだい？」

美由希

「恭ちゃんは、『かおる君のお兄さん』として出るの」

かおる

「ボク、両親がいないので、以前からご厚意に甘えさせてもらってるんです」

桃子

「どうせ近い将来、義理の兄弟になるんだから、あながち間違っ
てはいないしね」

なのは

「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／」

リイナ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ケント

「うおい、なんかヤベーぞ、空気が・・・」

リンディ

「あらあらっ」

ユーノ

「なんで楽しそーなんですか・・・」

シャル

「あら？ ザフィーラ、どこ行くの？」

ザフィーラ

「あるかどうか分らんが、安全地帯だ」

クロノ

「・・・ボクも一応出場するんだが・・・」

エイミィ

「あははは・・・ドンマイ？」

アリサ

「完全に空気になってるわね」

すずか

「い、言い過ぎだよ、アリサちゃん・・・」

● 激戦

恭也

「オレは、この時を待ちわびていた・・・」

玄斗

「・・・ほう・・・？」

恭也

「写真を見た時からずっと思ってたんだ。君と戦いたい、ってね」

玄斗

「それはそれは。このような子供相手に酔狂なことだ」

恭也

「謙遜することはないさ、君は間違いなくただ者ではない。

オレは魔法だのなんだについては素人だが、

武術家としての第六感がしきりにそう叫んでいる」

玄斗

「光荣だね。しかしながら、私とて、自らの流派に愛着も誇りもある。

そこまで言われた以上、手加減はしないよ？」

恭也

「もとよりそのつもりさ。実戦でないのは少し残念だけどね」

クロノ

「だから、ボクもいるってば……」

士郎

「完全に忘れられてるなあ」

クロノ

「はあ……まあいいさ。余裕でいられるのも今のうちだからな。絶対に吠えヅラかせてやる……!」

士郎

「意外と負けず嫌いなんだなあ、君も……」

よーい……ドンッ!——

ヴィータ

「うおっ!?! 開始早々全力疾走かよ、あの四人!」

シャマル

「持久走なんでしょ? 大丈夫かしら……」

シグナム

「心配するな。いかなる状況や敵であっても、兄上が負けるとは思えん」

アリサ

「なのはのとその二人やフェイトのお兄さんだっただけ者じゃないわよ」

すずか

「四人ともいい勝負だね」

かおる

「他の父兄の皆さんは青い顔してますけど・・・」

美由希

「そりゃそーだよ、かおる君。私から見ても化け物だもん、あの四人」

はやて

「兄ちゃんガンバレー!!」

フェイト

「玄斗さあーん!!」

アルフ

「いや・・・クロノはフェイトの兄貴として出てるんだから、そっち応援してやんなよ・・・」

エイミイ

「あはははは・・・クロノ君もかわいそーに・・・」

ケント

「応援もいーけど、こっちのリイナハナとなのは止めんの手伝え！
つーかあのザフィーライヌッコどこ行ったあああつ!？」

桃子

「若いつていいわねえ・・・」

リンディ

「そうねえ・・・」

ユーノ

「言ってる場合じゃないです！」

●親子肩車騎馬戦

はやて

「がんばろーなあ、シグナム」

シグナム

「はい！ この命に懸けて！」

フェイト

「そうはいかないよ！ こっちだって頑張るから！」

クロノ

「とゆーか、なんで向こうは『^{シグナム}馬』の方が気合い入ってるんだ・・・？」

はやて

「騎馬戦は高さが勝負・・・こっちが有利やで、フェイトちゃん！」

クロノ

「誰の身長が豆粒だっぺ!？」

フェイト

「いや、クロノ・・・そこまでは言っぺないよ?」

クロノ

「行くぞフェイト! 返り討ちにしてやるんだ!」

フェイト

「う、うんっ!」

シグナム

「ふっ、やる気になったようだな。行きますよ、主はやて!」

はやて

「おゝ!」

リイナ

「申し訳ありません。ワガママを聞いていただいて」

恭也

「別にいいさ。今年はかおる君が出られないし、オレも出たかつ

たからね」

リイナ

「ふっふっふっ・・・」

これで合理的かつ問答無用にあなたをブチのめすことが出来ますね、高町なのは！」

なのは

「こっちのセリフだよ、リイナちゃん！」

リイナ

「減らず口を・・・あなたが私に勝てるんでもお思いですか？」

なのは

「病院のベットの上で、同じセリフが言えるかな？」

士郎

「なのは？ 騎馬戦っていうのは、相手の帽子を取ればそれでいいんだぞ？」

かおる

「皆さん白熱してますねえ」

美由希

「一部が妙に熱入ってるけどね・・・」

玄斗

「うむ、微笑ましいことだ」

ケント

「微笑ましいかぁ・・・？」

●それはむしろ・・・

ケント

「六年生の『組み体操』か・・・。定番だよな」

玄斗

「うむ、なかなかに見事だね」

フェイト

「六年生の人達、毎日練習してましたから」

はやて

「ホントに上手やわぁ」

なのは

「うう・・・いつか私もやると思つと、今から心配になってきた・
・」

美由希

「あははは、なのはって運動神経あんまりないもんねえ・・・」

恭也

「そのわりには、空とか飛び回ったりしてるんだから世の中は不思議だ」

かおる

「そのことなんですけど、なのはの場合、運動神経がないのではなく、

むしろありすぎるから運動が苦手なのではないでしょうか・・・

「

エイミイ

「?? どーゆーこと?」

アルフ

「わけ分かんないって・・・」

かおる

「えつとですね・・・たぶん、脳あたまから送られる指令に、

成長途中なため未熟な身体が反応し切れていないだけではないかと・・・」

ヴィータ

「・・・?」

頭で分かっても身体が動かないって、

要するに『運動神経がない』ってことなんじゃねえの?」

玄斗

「・・・いや、そうとも言切れんぞ」

クロノ

「何か理解したようだな」

玄斗

「頭で理解できていても身体がその通りに動かんということは、裏を返せばそれだけ脳の情報処理能力が高いということだ」

リンディ

「まあ、そうなるのかしらね」

玄斗

「つまり、高レベルの身体動作をするだけの能力が、なのは嬢の脳にはあるということを意味している」

シグナム

「ということはつまり・・・」

玄斗

「鍛練を積みめば、一流の武術家にもなり得る才能を秘めている・・・！」

アリサ

「ええっ!？」

かおる

「その証拠に、魔力で身体機能を強化した状態での戦闘は、守護騎士の皆さんにも引けを取らないじゃありませんか」

シャル

「い、言われてみれば、確かに・・・」

ユノ

「要するに筋力が足りないだけだったのか・・・」

すずか

「凄いね、なのはちゃん！」

なのは

「え、えーと、なんかテレちゃうなあ・・・／／／」

リイナ

「要はバケモノってことですか・・・」

なのは

「・・・何か言った・・・？」

桃子

「まあまあ、よかったじゃない」

士郎

「うんうん。さすがはオレ達の子だ」

ケント

「いや・・・女の子に武術の才能があるってなあ、むしろマイナスだと思っけどなあ・・・」

美由希

「えっ・・・！？」

●こうして歴女が溢れかえりましたとさ

玄斗

「・・・ところで、体操に合わせて流れている曲なのだが・・・
いったいなんなのかね？」

フェイト

「えっ・・・!？」

すずか

「最近有名なアイドルグループの代表作なんですけど・・・」

なのは

「し、知らないんですか!？」

玄斗

「皆目見当も付かん」

アリサ

「ええ〜!？」

ヴィータ

「まあ、しゃーねーよ。兄貴、そーゆーコト芸能界に疎いから」

はやて

「ヴィータの方が詳しいくらいやもんなあ？」

シャマル

「ヴィータちゃん、朝からテレビに見入ってますもんね」

エイミィ

「意外だなあ・・・なんでも知ってる印象なのに・・・」

クロノ

「実際、変な知識は必要以上にあるけどな・・・」

ケント

「ま、ある意味当然だけどな？」

ユーノ

「何がです？」

ケント

「だって玄斗^{コイツ}、大河ドラマとしか見ねえんだもん」

リンディ

「あら、渋いわね」

シグナム

「あとは一部の刑事ドラマくらいだろうか・・・」

アルフ

「・・・ジジ臭あゝ・・・」

士郎

「へえ、今時珍しいな」

桃子

「恭也みたいね」

恭也

「失敬な。オレはもう少し色々見るぞ」

美由希

「いやいや、庭に溢れてる盆栽の山を見て言ってよ……。
アレ、全部恭ちゃんのだよ……?」

リイナ

「……こっちにもジジ臭いのがありましたか……」

はやて

「まあとにかく、兄ちゃんに芸能界の話題振っても意味ないで」

フェイト

「そ、そうなんだ……」

ケント

「おかげでウチの中学は入学早々大変だったの……」

なのは

「え……?」

フェイト

「どうしてですか？」

ケント

「いやー・・・なんちゅーか・・・」

はやて

「兄ちゃんて、モテるやろ？」

色々アプローチしてくる子が、そらもつぎようさんおるんやけど・・・

兄ちゃん、芸能界のこととかに無関心やから・・・」

ケント

「お近づきになろうとそーゆー話題で言い寄っても、のれんに腕押しなわけだ。」

そんなこんなので、少しでもコイツと同じ話題を持とうと、
女子どもが日本史をそれはもう必死こいて読みかじってるのさ・
・・」

かおる

「はははは・・・で、でもいいじゃないですか。動機はどうあれ、
勉強に励んでるんですから」

ケント

「まあ確かに、中間試験で歴史の女子平均点は学校全体で90点
以上だったけどさ・・・」

美由希

「90点！？ 学校全体で！？」

恭也

「それは凄いじゃないか」

ケント

「先生達も驚いてたよ……。『学校創立以来の快挙だー！』なんつってさ……」

アリサ

「そりゃまあそうでしょーね……。」

すずか

「うん、なかなか出来ないよね、そんなこと……」

クロノ

「だが、話を聞く限り、いいことばかりじゃないか？」

エイミィ

「だよーね。なのになんで、そんな青い顔してるの？」

ケント

「これが青くならずにいられるかああああああつー！」

アルフ

「うわっ！？ なんだいいきなり！？」

ケント

「休み時間なんて、歴史の教科書片手にうつろな瞳でブツブツ言ってる連中が、

学校中を徘徊してんだぞ！？ 怖いなんてモンじゃねえっつーのー！」

かおる

「あー・・・」

なのは

「そ、それは確かに怖いかも・・・」

玄斗

「勉強熱心で、いいことではないか」

ケント

「・・・オメエだけだよ・・・あんな空間で落ち着き払ってられるのは・・・」

●こうして新たな歴女が生まれたとかそうでなかったとか・・・

ケント

「・・・覚悟はしてたけどな・・・？ 小学校の時も似たようなモンだったしょ・・・」

なのは

「へ・・・？」

ケント

「あの頃も学校中の女子の間で歴史ブームが起こって、

・
歴代徳川将軍の名前を言うのなんて当たり前だったからなあ・
」

アリサ

「そ、それはまたマニアックな・・・」

ケント

「しかも連中、自分達の知識を競い合って、
誰が玄斗の嫁になるかを争ったりなんかもして、毎度暴動になりかけたし・・・」

フエイト

「え・・・」

かおる

「しょ、小学生で嫁って・・・」

すずか

「に、人気あつたんですね・・・」

玄斗

「そうでもないと思うがね」

ケント

「どの口が言っただこのヤロー。
こっちゃんあ、オメーを追っかける女子どもの波に、何度飲み込まれたか知れねエっての」

フエイト

「え？ え？」

はやて

「今でも毎日のようにファンレター届いとるもんなあ？」

ヴィータ

「いやぁ・・・初めて見た時はビビったな・・・」

シャル

「大きな紙袋に入りきらなかったくらいだったものね・・・」

フェイト

「・・・・・・・・・・・・・・・・私も、歴史勉強しようかな・・・・・・・・・・」

なのは

「な、なんか怖いよ・・・？ フェイトちゃん・・・」

●色々言ってるけど

玄斗

「何やら散々に言ってくれるが、私にもよく聞く曲くらいは存在するのだがね」

なのは

「あ、そ、そうですね……。すみません」

アリサ

「まあ、さすがにそーよねー。テレビ番組はともかく、青春真っ盛りの中学生が歴史にしか興味ないだなんてありえないわよねー」

エイミィ

「で？ 歌手とか作曲家とかの好みってあるの？」

玄斗

「あるが、あまり最近の人間は知らんよ？」

美由希

「あ、その辺はあんまり期待してないから安心していいよ？」

玄斗

「何気に失敬だね？」

すずか

「あ、あははは……。それで、どなたなんですか？」

玄斗

「ふむ、古いモノでいうと、モーツァルト……」

なのは

「……え……？」

玄斗

「ベートーヴェン、シューベルト、ショパン……」

すずか

「え？ え？」

玄斗

「最近で言うと、美空ひばりあたりだろうか」

アリサ

「・・・いくらなんでも古すぎよ・・・」

美由希

「まあ、なんとなく予想はしてたけど・・・」

エイミィ

「結局、玄斗君はオジーちゃん趣味ってのは変わらないみたいだね」

ケント

「いや、今さらすぎね？」

● 借り物競争・準備中

ケント

「またしても定番だな」

玄斗

「ふむ、走力・判断力・行動力が一度に問われる競技だね」

クロノ

「毎度毎度、君はそーゆーコトしか言えんのか」

玄斗

「というと？」

クロノ

「せっかくの休みなんだから、もっと肩の力を抜いたらどうかって話さ」

玄斗

「心配無用だ。充分過ぎるほどに抜いている」

クロノ

「どこがだ」

玄斗

「この辺など、どうだろうか？」

クロノ

「……ふざけてるのか？」

玄斗

「気を抜けと言ってきたのはそちらだろうに。
君は私に、いったいどんな返答を期待しているのかね」

クロノ

「だからといって、『ふざける』とまでは言っていない」

玄斗

「難儀なヤツだね、君も」

クロノ

「こっちのセリフだ」

ケント

「どーでもいーけど仲いいオメーら」

クロノ

「まさか一度勝負に勝ったくらいで、自分の方が格上とか思っていないだろうな？」

玄斗

「ははは、どうだろうね？」

クロノ

「あくまでもおちよくる気が、君は」

玄斗

「不服というのなら、この場で白黒つけるといつのはぶつだね？」

クロノ

「いい度胸じゃないか。ほえッラかくなよ？」

ケント

「仲いいオメーら!？」

● 借り物競争・開始

ヴィータ

「はやて〜！ ガンバレ〜！！ って、あれ？」

シャル

「こっちに来るみたいね」

シグナム

「テストロッサ他二名も向かって来ているようだな」

ザフィーラ

「主、いかなさいましたか？」

はやて

「みんな、兄ちゃんどこや！？」

シグナム

「兄上なら、先ほどからクロノ執務官と果し合いを・・・」

玄斗

「何事かね」

ヴィータ

「うわっ!？」

シャル

「いつの間に!？」

クロノ

「相変わらず変わり身早いな君はっ！」

玄斗

「なるほど、借り物対象が『親兄弟』というわけか」

シャル

「そしてすばやく状況を理解している!？」

シグナム

「さすが兄上！」

ヴィータ

「オメーそれしか言わねーな・・・」

はやて

「コントはええから、兄ちゃん^{お兄}早う！」

シャル

「いつの間にか私たちの会話がはやてちゃんの中でコント扱いに!？」

ザフィーラ

「ズバリその通りだと思うが」

玄斗

「ふむ、了解した」

シャマル

「そして完全にスルーされた!？」

フェイト

「クロノ!」

クロノ

「なんだフェイト。もしかして君もか!？」

玄斗

「ははは、ちょうどよいではないかクロノ。この借り物競争で勝敗を決しようぞ!」

クロノ

「なっ!？」

玄斗

「先手必勝だ。行くぞはやて!」

はやて

「なんや分かんけど、りょーかいや!」

クロノ

「ちよっ!？ ずるいぞ君達っ!」

フェイト

「あ!？ 待つてよクロノ！」

● 借り物競争・本末転倒

なのは

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リイナ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

かおる

「えと、あの・・・」

アルフ

「・・・・なんだいアレ」

美由希

「見ての通りだよ」

エイミイ

「なのはちゃんは『お友達』、リイナちゃんは『尊敬する人』で、
見事にダブルブッキングしちゃったみたいなんだよねー」

桃子

「それで例によつて、両者譲らずのこつ着状態なのよ」

ユーノ

「なんで楽しそうなんですか・・・」

かおる

「その・・・早くゴールに行かないとまずいんじゃない・・・」

なのは

「大丈夫だよ、かおるちゃん。すぐに済むから」

リイナ

「はい。かおるさんは、のんびりお茶でも飲んでいらしてください」

士郎

「なのは、ガンバレよ」

恭也

「応援してどーするんだよ、父さん・・・」

かおる

「ほ、ほら！ こつしてる間に玄斗さん達がゴールしそつだつてばあつ！ 二人ともっ！！」

リンディ

「大変ねえ、かおるさんも」

ケント

「うわっ、他人事ヒトだよこの人！ 実際他人事ヒトだけど！」

●閉会

ケント

「なんだかんだで圧勝かー」

玄斗

「意外性の欠片もない結果だね」

エイミィ

「あはは、かおる君が復帰したら、どーなるんだろーねえ」

かおる

「それはもう、さすがにクラス替えとかあるんじゃないでしょうか・・・」

美由希

「かおるちゃんとしては、なのはとは離れたくないよね」

かおる

「それは、まあ・・・はい・・・／／／」

恭也

「美由希、あんまりからかうな」

美由希

「え〜、いーじゃん！ カワイイんだから！」

かおる

「か、勘弁してください〜！」

アルフ

「どーでもいーけどさ」

リンディ

「どうかしたの？」

アルフ

「いつになったら、あの校長ジーさんの長つたらしい話は終わるんだい？」

ユーノ

「あ〜・・・」

クロノ

「そうだな、もうかれこれ1時間近くは話し続けている」

玄斗

「よくもこれだけ話して話題が尽きぬモノだと、感心すら覚えるな」

ヴィータ

「なんかフラついてる生徒ヤツもいるぞ？ 大丈夫かアレ・・・」

シャル

「あくびしてる子もちらほらと・・・」

シグナム

「どうりでおるの整列が許されないわけだ」

エイミー

「先生なりの配慮ってところかな？」

ザフィーラ

「ケガ人にこの長話は、百害あって一利なしだからな」

アルフ

「なんだ、のけ者にされてるわけじゃなかったのか」

かおる

「ええ!？」

ケント

「・・・何気にアンタも毒舌だな」

エース達の日常「聖祥大附属小学校運動会・後編」(後書き)

あるかないか分かりませんが、感想等お待ちしております。

「It's the first . . .」 (前書き)

前回の投稿から一ヶ月近く放置してしまいました。申し訳ありません。

さて、今回の番外編ですが、時期的に言えば闇の書事件が解決して間もなく・・・4月あたりの物語になります。電車で揺られながらぼーっとしてたら突然思いついたとゆー、しょーもない内容ですが、暇つぶしにでもどうぞ。

「It's the first . . .」

少年は、ゆっくりと頭上の取っ手に手をかけた。ごくりと喉を鳴らし、何かを念じるように祈るように目をつぶる。己の心臓の鼓動が殊更大きく耳に入り、それが否が応でもその場の緊張感を高めていく。数秒後、意を決したかのように目を見開き、勢いよく運命の扉を開けた。

「うにゃああああああつ!？」

瞬間、大量の封筒が瀑布のごとく彼の顔面へとなだれ落ち、悲鳴にも似た奇声が、広い昇降口にこだました。

「あゝ . . . こりやまた大量なこと . . .」

気の強そうな金髪の少女がため息交じりに苦笑を漏らし、

「今朝もあんなにあつたのに、凄いやね . . .」

おとなしそうな紫色の長髪少女もその横で目を見開く。

「なんや? どないし . . . って、なんやこれ!？」

壁の向こう側から顔をのぞかせたショートカットの茶髪少女も、そこに広がる惨状を前に、思わずツツコミを入れてしまった。

「だ、大丈夫？ かおるちゃん・・・」

栗毛のツインテール少女が、封筒に埋もれている幼なじみに心配そうに駆け寄り、

「ていうか、どこにこんなの入ってたんだろ・・・？」

気の弱そうな金髪ツインテールの少女は、床に散乱する大量の封筒と、その出所である小さな下駄箱を見比べ、至極もつともな疑問を浮かべている。

「・・・また、職員室で紙袋もらってこないと・・・」

うつろな瞳で高い天井を見上げつつ、件の少年、春風かおるは、山のような恋文に囲まれながらそう呟くのだった。

「いやゝ・・・話には聞いたけど、ホントに恐れ入ったわ」

床を埋め尽くさんばかりのラブレターを前に、茶髪の少女、八神はやては乾いた笑みを漏らしながらそう語る。

「無理もないよ。私だって初めて聞いたときは、さすがに冗談か何かだと思ってたから・・・」

片っ端から恋文を手にとって、苦笑を浮かべる気の弱そうな金髪少女、フェイト・テストロッサ・ハラオウン。

「ま、高学年から低学年まで大人気だからね、あの子・・・」

気の強そうな金髪少女、アリサ・バニングスも、どこか遠い目でそう呟いた。

「かおるちゃん、落ち込んでないといいんだけど・・・」

「うん、ちょっと心配だね・・・」

件の少年が紙袋をもらいに行った先、職員室へと続く廊下を心配そうに見つめる、紫ロングの少女、月村すずかと、栗色ツインテールの少女、高町なのは。

二人の心配も無理はない。なぜなら、

「しかし、見事なまでに男子ばかりやな、差出人……」

この山のようなラブレター、その差出人のほとんどが男子生徒の名前なのだから。

「ま、本気で女の子だと思ってるのから、男色そっちが好きなまで色々だけどね」

まあ、それも、小国の王女のような雰囲気きふきを常に纏っているあの少年ならば、仕方ないのかもしれない。何しろ、入学当初などは学校中の男子が、暇を見つけてはお近づきになろうと教室まで押しかけてきたほどだ。最近では、ファンクラブが水面下でひそかに活動しているとかいけないとか。

「うげっ……マジかいな……」

「？ そっちって？」

アリサが口にした『そっち』という単語に即座に反応するはやて

と、意味が分からず、首をかしげるフェイト。人柄やら性格やらが色々垣間見える一コマだ。

「しっかしまあ、驚いてたわりに順応早いわね、はやて」

「？ 何が？」

アリサの言葉に、はやては思わず首をかしげる。

「いや、だって、これだけ大量のラブレター前にしたら、普通もつと何かしらの反応するわよ？」

そう、はやては今回、初めてこの惨状を目の当たりにしたのだ。にもかかわらず、恋文の枚数に対しては驚いているような反応が見られないというのは、いささか不自然である。現にフェイトは初めて見たとき、小一時間ほど動転していたし、はやての性格からして、もっとツツコミを入れるはずなのだ。

「あゝ・・・私の場合、兄ちゃんて慣れとるからなあ・・・」

が、返ってきたその言葉を聞いて、思わず納得してしまった。そう、公立中学校に通っている彼女の3歳年上の兄、八神 玄斗も、かなりモテるのだ。

もつとも、かおるとは違い、その相手は100%女性である。歴

史好きで流行のモノに疎い彼の気を引こうと学校中の女子が日本史を猛烈に勉強し、結果として学校設立以来の好成績を叩き出したものの、バレンタインデーには200個近いチョコレートが、生徒はもちろん独身の若い女性教諭からも贈られたのだ、その手の逸話には事欠かない。容姿端麗、文武両道、質実剛健、性格良好、とくれば人気が出ないはずもないが、それにしても異常といえる影響力を持った人物なのだ。

そんな兄の背中を見て育ったはやてからすれば、100通前後の恋文が下駄箱からなだれ落ちてくるなど、大したことはないのかもしれない。

「えつと・・・玄斗さんも、これくらいもらってたり・・・するのかな・・・？」

「うん。そろも毎日のように持って帰ってきてるよ」

そこで、フェイトがおそろおそろといった様子で問いかけてきた。はやてはアツサリと答えるが、それを聞いた金髪少女は思いつき肩を落とす。まあ、好意を抱いている相手が毎日のように恋文をもたらしていると聞いて、平気な人間などいないだろう。彼がまじめで一途な人柄なのは重々承知しているが、それでも心配なものは心配だ。

「でも、玄斗さんもフェイトちゃんのこと好きなんだよね？」

「うん、たぶんそうだと思うけど・・・」

すずかのそんな呟きに、なのはが控えめに肯定した。実際、態度を見ればなんとなく想像はつくのだが、玄斗が互いの年齢を必要以上に気にしているためにハッキリと明言しないので、微妙に判断しかねるのだ。

「でもさ、話に聞くと一目ボレらしいじゃない？」

初恋が一目ボレなんて、なんかロマンチックよねー」

そのようなことを玄斗が言っていたと、以前フェイトの使い魔・アルフが嬉しそうに話していた。乙女として何か憧れるモノがあるのか、アリサがうつとりとそう口にする。

「ところがな、そーでもないんよ」

『・・・え・・・？』

しかし、はやてのこの一言で、その場に微妙な空気が流れた。いったい何が、そうでもないのだろうか。

「もう、けっこう前のことなんやけどな、兄ちゃん、とっくに好きないたんよ」

『・・・ええええええええええええええええええ！？』

人気のない昇降口に、少女たちの絶叫がこだました。

さかのぼること、今から6年前。

清潔感あふれる白い廊下を、二人の少年少女が歩いていた。いや、正確には、歩いているのは少年の方で、少女は少年の押す車イスに乗っているのだが。

「ごめんなあ、兄ちゃん。わざわざ、お迎えに来てもらうて・・・」

「いや、今日は父さんも母さんも忙しいし、僕も暇だったからな。気にすることじゃないよ」

仕事で忙しい両親に代わり、小学校からの下校ついでに迎えに来てくれた優しくも律儀な兄に、感謝と申し訳なさでいっぱいになる少女。そんな妹に気を使わせまいと、ただただ笑顔で答えるショートカットの少年。見る者全員が微笑ましく思うような、仲の良い兄妹を絵に描いたような光景が、そこには広がっていた。

彼女、八神 はやては、生まれながらに病を患っている。原因不明の重病で、下半身をまったく動かすことができないのだ。主治医の石田先生も様々な手を講じてくれているが、正直、効果は見られ

ない。そんなわけで、月に1、2回、病の進行と現状を確認するため、こうして病院に通っているのだ。

ガラス張りの壁から夕暮れの日の光が差し込んでいるロビーに出ると、人気が多くなったためか一気に賑やかになった。退屈な病院での数少ない楽しみなのか、碁石を打ち合う老人達もいれば、携帯用のゲーム機で対戦している子供達もいる。と、そんな中で、異色を放つ光景が少年の目に飛び込んできた。

「どうしたん？ 兄ちゃん・・・ああ、あの子？」

兄の纏う空気の変化を敏感に感じ取った妹も、その視線の先を探り、その存在を視認したようだ。

肩口の高さで切りそろえられた光沢のある黒い髪、白い包帯の間からのぞかせる透き通ったガラスのような瞳と、桜の花を思わせる可憐な唇。年の頃は、はやてと同じ3歳かそこらだろうが、そんなことすら忘れてしまうほどの美を、その少女は纏っていた。他の子供達と遊ぶでもなく、その手にある書物のページを、一定のリズムでめくっていく。服装は入院患者のソレだが、まるで、どこかの貴婦人を思わせるような、そんな雰囲気放っているのだ。このまま成長すれば、間違いなく絶世の美女になるであろう。

「なんや・・・キレイな子やね・・・。天使みたいや・・・」

「そう・・・だな・・・」

はやては思わず見惚れ、少年もまた、ただただ見つめていた。あ

まりにも美しく、あまりにも神々しいその少女を。

「あら？ はやてちゃん、玄斗君、まだいたの？」

するとその時、二人の背後から聞きなれた声がかけられた。振り返ってみると、案の定、そこにあったのは見知った一人の女性の姿。

「あなたが年齢^{とし}のわりにしっかりしてるのは知ってるけど、子供だけで夜の街を歩くのは危険よ？ 早く帰りなさい」

はやての主治医、石田 医師である。今帰宅するところなのか、肩にはショルダーバックをかけ、その身に纏っているのはいつもの白衣ではなく、ワイシャツとピッチリしたズボンという私服だ。

「すみません。ちょう、あの子が気になってもうて・・・」

はやてが素直に頭を下げ、ロビーの椅子に座って読書中の少女を指し示す。

「ああ、そうなんだ・・・」

「？ お知り合い、ですか？」

遠い目をした石田に、何かを感じたらしく、玄斗が顔色をうかがいながらそう問いかけた。

「うーん・・・知り合いつて程じゃないんだけど・・・
この病院じゃ、結構有名な子だから・・・」

少年の問いに齒切れ悪く、そう返す石田。

話を聞くと、石田がよく知る同僚が主治医になっているようで、その関係で知り合ったものの、実際はさほど話をしたことはない、とのこと。なんでも、あまり他人に言えない事情を抱えた子供らしい。つい先日、同年代の友人ができるまでは、とても暗く、今は全く真逆の印象だったようだ。

「ホント・・・その子には感謝しないとね・・・。
私達じゃ、たぶんどうすることもできなかったから・・・」

悲しげに、独り言のように語る石田。救いたくても救えない、そんな医療の現状と限界に、そんな場面に直面している一人として、何か思うところがあるのだろう。

「あ、ごめんね。なんか愚痴っぽくなっちゃって・・・」

「あ、いえ、そんな・・・」

「お気になさらず」

なにやら空気が湿っぽくなり、思わず謝罪する石田。はやては咄嗟に、玄斗は落ち着いた様子でそんな彼女をフォローする。

結局、日も沈みかけているので、石田も交えてこの日は早々に帰路に就くことにした兄妹であった。

「・・・とまあ、その後も何度か見かけたんやけど、兄ちゃん、遠くからじいっと見つめるばっかで・・・
結局、話すこともなくその子は退院してもあった、っちゅう話や」

はやては、そのように話を締めくくる。

「えと、てことは、どこの誰かとか、全然分かんないってこと・・・？」

「ま、そーゆーことになるなあ」

結果として、その少女とは全く交友を持たぬまま、現在に至るらしい。その事実には、フェイトはわずかながらに安堵した。

「でも、今の玄斗さん見てると、なんか想像できないなあ・・・」

「てゆうか、その話ホントなの？　なんかしゃべり方もふつーの男の子みたいじゃない」

「そ、そうだよね・・・。一人称も、『私』じゃなくて『僕』だったし・・・」

はやての話と現在の玄斗との相違点に、違和感むき出しの栗、金紫の三人娘。まあ、実は20歳くらいサバを読んでいるのではないかと思えるような大人びた思考と口調で相手に接し、ただ立っているだけで覇者のオーラを放つ彼を知る者からすれば、先ほどの昔話に出てきた少年とは別人に思えても仕方ないのかもしれない。どこにでもいる普通の少年のような言葉遣いと態度に加え、普通に恋愛感情を持ち合わせていたなどと、誰が信じるものか。

「まあ、今の口調になったんは、両親が死んでからやからね・・・。」

昔は、ホントにマジメで優しいだけの人やったんよ・・・」

しかし、はやては表情を暗くゆがませながら、悲しそうにそう語る。どうやら、無意識のうちに地雷に足をつっ込んでしまったようだ。

「で、でもさ、かなーり怪しいわよね？ 玄斗さんのその態度」

「あ、そ、そうだね。あながちはやてちゃんの予想も間違っ
てないかも・・・」

自分達の不注意を後悔しつつ、アリサとすずかは慌てて話題を
り替える。二人としては、その内容には半信半疑だが、元々、こ
ちらが本題ではあったので、違和感は最小限に抑えられるだろう。

「せやろ？ あの子が退院したって聞いた時の兄ちゃんの落ち込
みようつたら・・・」

途端に、はやての顔が明るさを取り戻し、嬉々として再び語り始
める。どうやら話題の転換には成功したようだ。友人たちが心の中
で胸をなでおろしたその時、

「誰が落ち込んでいたのかね？」

澄んだ水のような、穢れのない低くも涼やかな声が、少女たちの耳
に飛び込んできた。

「うわわっ・・・！？ 玄斗さん！？」

「なんでここに！？」

振り返ってみれば、噂の少年が闇夜のような長髪を風になびかせて、昇降口の入り口でたたずんでいる。実の妹経由とはいえ、人の過去を聞いていた後ろめたさからか、なのはは思わず飛びのき、フエイトは彼がここにいる事実に必要な以上に過敏な反応を起こす。

「何、はやての帰りが少々遅いのでね、迎えに来た次第だ」

慌てふためく少女たちの様子など意にも介さず、さらっと答える黒髪の少年。時計を確認すると、かおるが職員室に向かつてからすでに30分が経過していた。紙袋を取りに行った割には帰りが遅い行った先で、何か用事でもできたのだろうか。

「友人との会話が盛り上がって楽しいのは分かる。

しかし、最近は何かと物騒だ、帰宅時間は守りたまえ」

諭すようにはやてにそう語りかけてくる玄斗。口調と表情は普段と変わらないが、彼なりに妹の身を案じていることはよく分かる。態度も雰囲気も様変わりしているが、性格だけは、6年前から変わっていないようだ。

「ごめんなあ？ 兄ちゃんの昔の話してたら時間忘れてもった」

「む？ 私の昔話など、大して面白くもあるまいに」

まるで小悪魔のような意地の悪い笑みを浮かべるはやてに首をか
しげつつ、ため息交じりに玄斗はそう切り返す。

「そんなことあらへんよ？ 兄ちゃんの初恋の人のことかあ・
」

「？ なんの話かね？」

上目づかいで詰め寄るはやてと、訳が分からないといった様子で
怪訝な顔をする玄斗。周りの少女達は赤くなったり青くなったりし
ながら、二人のやり取りを眺めていた。

「兄ちゃん、兄ちゃん、隠さんでもええねんて。

ほら、6年前に病院で兄ちゃんが熱烈な視線浴びせてた、キレ
エな子のことや」

往生際の悪い兄に引導を渡そうと、ど直球に単語を並べたてるは
やて。一瞬、フェイトの肩がビクリと震えた。

「・・・ああ、そんなこともあったな」

数瞬遅れて、思い出したと言わんばかりにそう呟く玄斗。

「私はなんでもお見通しや。あん時の視線は、ただ事やなかった」

今現在好意を抱いている少女の手前、あくまでしらばくれる気かと、はやては若干呆れた様子でため息をつく。自分の兄が、ここまです往生際が悪いとは思わなかった。

「うむ、話しかけようかと思案しているうちに、いつの間にか退院してしまったな。」

あの時は、散々悔いたモノだよ」

ところが、今度はアツサリとその事実を肯定してきた。黙秘から自供、あまりの方向転換の素早さに、思わず啞然としてしまう。とはいえ、初恋の存在がいたことを認めさせたのは大きな収穫だ。即座に意識を取り戻し、赤裸々に白状させるべくはやては身を乗り出した。

「なぜ、『その本を貸してくれ』という、たった一言が言えなかったのか、とね」

『……へ……？』

が、矢継ぎ早に紡がれたその言葉に、思わず素っ頓狂な声を出してしまった。それまで黙って見ていただけだった少女達も同様だ。

「？ 何を呆けているのかね？ そちらからふった話題だろう」

当の少年はと言えば、何を驚くことがあると言わんばかりに首をかしげている。その仕草と表情は、ウソや冗談を言っているように、どうしても見えない。

「えっと、もしかして玄斗さんがその子を見つめてたってゆーのは……」

恐る恐る、なのはが疑問を口にする。

「何、彼の読んでいた書物は、当時すでにどこの書店でも扱っていない貴重な代物だね。」

偶然見つけたはいいが、初対面の人間にいきなり貸してくれと言っわけにもいかず……」

案の定、少年の口から出てきたのは、色気もへったくれもない、そんな内容だった。要するに、彼が興味を示していたのは少女自身ではなく、彼女が読んでいた本の方だったのだ。退院したと聞いて落ち込んでいたのも、レアモノの本を借りられなくなったことに対しての後悔であつたらしい。

「そ、そうだったんですか・・・」

ホッと胸をなでおろす者、

「結局、はやての勘違いだったみたいね」

そんなことだろうと思ったと言わんばかりの者、

「なんやガツカリやなあ・・・」

思いつきり肩を落とす者と、反応は様々だ。

「盛り上がったり下がったりと忙しいことだね？ いったい何事かね」

「あつ、いやそのつ、なんでもないんです！」

「気にしないでください！」

「？ 承知した」

いまいち状況を飲み込めていない玄斗と、必死でごまかすなのはとすずか。これで承知してしまうあたり、彼はお人よしだと語る三

つ編み少女の意見も、まんざらハズレではないようだ。

「すみません、お待たせしました・・・って、あれ？　玄斗さん？」

「おや、ようやく戻ってきたか。
いくら車イスとはいえ、紙袋一つ取りに行くのに、随分と時間をかけたようだ」

と、そこでおかおるが紙袋片手に戻ってきた。床に散乱した色とりどりの封筒の山と、少年がその手に携えている紙袋を見て、ある程度この状況を理解している玄斗は、さすがというべきなのだろうか。

「すみません。ついでに先生に色々頼まれてしまって・・・。
あ、そうそう、この前読みたいって言っていた本、見つけておきました」

「ふむ、わざわざすまないね。
6年間あちこち探し回ってみたのだが、やはりどこも扱っておらんんだ」

「仕方ありませんよ、発売した翌週に出版社が倒産して増版されなかった本ですから。

マニアの間では、結構高値で取引されてるみたいですし」

そう言って、かおるは少し古びた分厚い本を玄斗に差し出した。

どうやら、下校ついでに彼の家まで私に行くつもりだったらしい。

「・・・あれ・・・？ あの本・・・」

何やら見覚えがあるなと思った、その時だった。はやての記憶の片隅に、ふと何かがよぎる。

「・・・なあ・・・なのはちゃん、フェイトちゃん・・・」

「え？」

「どうしたの？ はやて」

本の話題で盛り上がり、笑顔を交わし合う二人の少年を見つめたまま、友人二人にすぎるように話しかけた。

「さつき・・・兄ちゃん、6年前のあの子のこと・・・『彼』って、呼んどったよね？」

「「・・・あ・・・」」

三人の脳裏に、つい先ほどの少年の言葉がフラッシュバックする。

——彼の読んでいた書物は、当時すでにどこの書店でも扱ってい

ない貴重な代物でね――

そう、確かに玄斗はそう言っていた。服の上からですら女性のスリーサイズを寸分たがわず見抜くほどの洞察力の持ち主が、人の性別ごときを見間違えるはずがない。

6年前、海鳴大学病院に入院し、同年代の子供と出会ったことで明るさを取り戻した、他人には言えない事情を持つ、可憐な空気を纏った美少女のような美少年。これに符合する人物を、彼女達はよく知っている。

「「「あああああああああああつ！」「」」

間の抜けたカラスの鳴き声が響き渡る夕暮れ時の大空に、少女三人の絶叫がこだました。

「It's the first . . .」(後書き)

はい、なんというか、しょーもない話でしたね……。タイトルを英語にしたのは、せめて見てくれだけでも気取ろうという、これまたしょーもない理由です。ちなみに訳すと、『それは、初めての・・』となります。

自分なりにどんでん返しを用意したつもりなのですが、ほとんどの方にはラストが目に見えていたのではないのでしょうか？ その辺はまあ、頭の悪い私なりによくやったと、寛大な心で受け入れてくださいませ。ホント・・・こんなバカが天才の活躍する話を欠こうなんて、なんとゆー命知らず・・・。

さて、ここでお知らせなのですが、長い間放置している続編、こちらで出す予定だった小話的なモノが案外長くなりそうなので、番外編でやってしまおうと思います。その名も、『闇の欠片事件編』と『なのは墜落事件編』。今後の物語にも影響するであろうネタを含むため、そちらが書き終わるまで続編の方はしばらく手を付けないことにしました。楽しみにしている方がどれほどいるか分かりませんが、しばらくの間ご辛抱してくださいますようお願い申し上げます。

それでは、また会う日まで。

闇の欠片事件第1章「復活」（前書き）

はい、というわけで、ゲーム版が元ネタになっております、闇の欠片編です。基本的にはゲーム版の設定をそのまま使っていますが、内容はまるつきり違うのでご注意ください。

さて、本シリーズの導入となります第1章、軽ーい気持ちでご覧ください。

闇の欠片事件第1章「復活」

木々が赤や黄に染まり、木枯らしが吹く季節。晴れ渡った大空に、カラス達の鳴き声がこだまする。

「あ」

「おや」

買い物中の主婦で賑わう休日の商店街に、そんな気の抜けた声がこぼれたのは、太陽が西へと沈み始めた、そんな頃であった。

「買い物かね」

夜空のような黒い長髪を風にゆだね、目の前の少年にそう尋ねる。文面はともかく発音が疑問形でないのは、おそらくはそうであろうという確信めいたモノがあるからに他ならない。

「はい」

ショートカットの黒髪を揺らしながらの返答は、やはりというか想像通りのモノだった。まあ、スーパーのロゴが印刷されたビニール袋を持っているその姿を見て、他の予想を立てるというのが無理

な話ではあるが。

「玄斗さんですか？」

にこやかにかわいらしい微笑みを浮かべながらの、そんなあどけない問いかけに、玄斗と呼ばれた少年もまた肯定で返す。

「今夜は冷え込むのでね、鍋にでもしようかと食材の買い出しに
来た次第だ」

ははは、と、両手にぶら下げた食材の入った袋を胸の高さまで上げながら嬉しそうに語る玄斗を見て、ショートヘアの少年も嬉しそうに笑う。

玄斗の家は、かなりの大所帯だ。去年の夏に育ちざかりの末っ子が加わったことで、もともと賑やかだった家中がさらに賑やかになった。冷蔵庫から毎日消えていく食材の量とそれにかかる費用も増えたので、家計のやりくりは苦労がないとは言えないが、それでも家族が増えるのは家長たる彼にとっては喜ばしいことのように、無表情の中にも不器用な笑顔を毎日のように浮かべている。

「用事が済んだのであれば、どうかね？ 途中まで」

「はい。よろこんで」

ここで友人と出会ったのも何かの縁。少年達は、世間話がてらに帰路を共にするのだった。そんな様子をはるか上空から眺める、4つの影がいることも知らずに。

その日、八神家は大賑わいだった。久しぶりの鍋料理ということ、食いしん坊どもがいつにも増して夕食作りの準備に精を出しているのだ。足りない食材を買い足しに行った家長たる長男が戻るまでに、その他の下ごしらえは終えておかなければならない。しかし、である。

「おせーなあ・・・兄貴・・・」

「そうねえ、何かあったのかしら・・・」

腹の虫を盛大に鳴かせながらリビングの大きなテーブルに突っ伏す赤毛の三つ編み少女は、四女のヴィータその横で壁にかかった時計を確認しながら心配そうにため息をつくボブカットの金髪女性は、次女のシャマルだ。

そう、彼女達の言うように、長男・玄斗が買い出しに行ってから1時間はゆうに経過している。すぐ近くの商店街にある激安セールスが売りのスーパーに言った割には、いささか帰りが遅い。

「そやねえ・・・なんの連絡もあらへんし・・・」

「万が一、ということもあります。私がお迎えに行きましょうか」

彼が武術に秀でた猛者という事実は熟知しているものの、それでも一向に返ってこないのもまた事実。何か事件に巻き込まれているのではないかと、兄の身を案ずる茶髪ショートカットの長女・はやてと、そんな彼女に進言する桃色ポニーテールの三女・シグナム。

「しかし、行き違いにあつては元も子もない。

まずはこちらから連絡を試みるのが先決ではないか？」

「あ、そーゆーことなら、リインにお任せくださいです！」

あくまでも冷静に現状を把握している、青い毛並みの狼こと次男のザフィーラ。その頭上でハイハイと元気よく拳手している水色長髪の妖精が、最近ようやく外見相応の言動をするようになった、五女兼末っ子のリインフォース^{ツヴァイ}である。

そいうわけで、いまだ帰らぬ兄へと連絡を取ろうとしたその時、

はやて、クロノだ。ちょっといいか？

突如リビングに巨大なモニターが展開され、よく知った顔が映し出された。

先ほど、君の自宅付近で正体不明の魔力反応が確認された。
玄斗やかおるへの通信もつながらないんだが、何か知ってるか？

挨拶もそこそこに切り出されたその内容に、はやて達の鼓動が一気に跳ね上がった。帰宅の遅い兄、音信の不通、そして原因不明の魔力反応。なんとなく感じていた悪い予感が、次第に形を成していくような、そんな感覚に襲われる。

どこか暗い泥沼のような場所へと意識が沈みかけた次の瞬間、

ピンポーン

無機質な玄関の呼び鈴によって、はやては現実へと引き戻された。

「あ、あら、お客さんかしら・・・」

よほど急ぎの用事でもあるのか、シャルマルがそう呟く間にも訪問者は引っこ切り無しに呼び鈴を連打している。

「・・・私が出てまいります。主は、執務官との通信を続けてください」

「私も行こう。さすがに犬の姿で応対されても困る」

「・・・狼だ」

生憎、取り込み中ではあるが、近所づきあいをおろそかにするわけにもいかない。仕方がないとばかりにザフィーラが腰を上げ、その後をシグナムが追っていく。

「それで？ その魔力反応ゆーんは今どこに？」

二人の姿が廊下へと消えたのを見計らって、はやてはモニター越しの会話を再開した。未だに呼び鈴の連打は続いているが、あえて気にしない。

ほんの数分前に反応は消失した。ただ・・・

「『ただ』、なんだよ？」

もったいぶったクロノの返答を、じれったいばかりにヴィータがせかす。最愛の兄に危険が迫っている可能性がある以上、一分一秒でも時間が惜しいのだ。

正体不明とは言ったが、リイナの話によると、

どこかで似たモノを見た覚えがあるようなんだ・・・

表情を引き締めてクロノが言葉を紡いだその時、

「兄上！？　しつかりしてください！！」

「やめろシグナム！　無理に動かせば、かえって危険だ！！」

彼の言葉を遮る悲鳴にも似た叫び声が、廊下を介してリビングに響き渡る。

何事かと慌ててはやて達4人も廊下へと飛び出すが、そこに広がっていた凄惨な光景に思わず凍り付いてしまった。

のんびりゆったりとした雰囲気を持ち味の八神家。その玄関にまったく似つかわしくない喧騒が響き、誰もかれもが赤く血塗れている。まるで大事故の現場を連想させるが、傷を負っているのはその場にいるごく一部であり、その血液の大半も開け放たれた扉の前で小さな肩に支えられながらぐったりとしている、1人の少年から流れ出たモノだ。力なく垂れた腕から鮮血がとめどなくしたたり落ち、黒髪で隠れたその顔には、まったく生気が感じられない。もはや玄関は血の海で、致死量ではないかと思えるほどの血液が家の外にまであふれていた。

「なんでもいいですから！　早くクロノ執務官に連絡を！！」

担ぎ手たる少年の、口元からの赤いしぶきを伴うその一言で、新たに駆けつけた4人は我に返る。仲間内で最強を誇る最愛の兄は、上から下まで衣服を朱色に染めるといふ変わり果てた姿で、遅い帰宅を果たしたのだった。

一組のソファとテーブルしかない、簡素なミーティングルーム。そこに、大小15人の姿があった。

「骨折が5ヶ所、切り傷と擦過傷は全身に及んでいます……特にこの左肩から右脇腹にかけての一太刀は酷い……。一部が肺にまで達している上に、一歩間違えれば心臓も……。間違いなく、相手は殺意をもって、お二方を襲ったのでしょうな」

あまりにも痛々しい映像を交えての医務官の説明に、その場の人間達は息を飲んだ。あと一步で、いや、普通の人間であつたならばすでに致命傷だろう。あの状態で一命を取り留められた彼に対して、驚嘆を覚えずにはられない。

あの後すぐに玄斗は管理局の医療施設に担ぎ込まれ、救急処置が施された。先の説明の通りこの上なくむごたらしい状態ではあつたが、結果的に手術は無事に成功し、今は医療施設内の集中治療室で深い眠りにについている。が、顔に深いシワが刻まれた老年の医務官による説明と、眼前に展開されたモニターに映し出されているデータが示すように、事態はあまり芳しくはない。

なぜなら、

「まったくもって信じられません・・・。

あの方々を相手に、ここまでの傷を負わせられる人間が存在するなど・・・」

敵は、春風かおると八神玄斗の2人を同時に相手取り、1人に重傷を負わせ、もう1人にも少なくない手傷を与えたのだから。加えて、現場周辺には犯人らしき人物の姿やそれに通ずる手がかりは、何一つ発見されなかった。この意味するところは、教養のある者ならば誰でも理解することができるだろう。

「管理局の『矛』と『盾』を持ってすら敵わない、正体不明の敵か・・・。

厄介なことこの上ないな・・・」

現場に血痕の一滴すら残っていなかったことから考えても、敵はかの少年達を1時間という短時間で打倒し、なおかつかすり傷すら追わずに逃げおおせたということなのだ。その事実を思い描き、上から下まで黒一色に身を包んだ短髪黒髪の執務官は、苦々しげなため息交じりに愚痴をこぼした。

『最強の矛』と『最強の盾』。この相対する2つの通り名は、管理局においてはあまりにも有名だ。

類いまれな『風の魔力変換資質』レアスキルと自ら開発した固有魔法を手にした・中・遠全ての空域を制する管理局史上最高の天才・春風 かおる。攻撃魔法こそ持たないが、最高の強度を誇る障壁と他の追随を許さぬ体術を駆使し、近接戦闘最強の名をほしいままにする武神・八神 玄斗。

共に10代前半という若い年齢ながらも、片や魔導師としてのみならずリーダーとしての資質を見いだされ、武装隊において早々とキャリアへのレールが用意された天才少年、片や犯罪者としての過去を持ちながらもその人格と能力を評価され、たった2年で執務官に任命された質実剛健を地で行くエリート。その実力は、誰もが認めるところだ。2人そろえばまさに鬼に金棒。向かうところに敵はなしと謳われる存在なのである。その2人が、1時間で血みどろにされたのだ。しかも、相手は無傷。深刻に考えずにはいられない。

もしかしたら複数犯で、完全完璧なる不意打ちだったのかもしれないが、

「少なくとも、兄上の不意を打てる手練れが敵の中にいるということは確かだ」

「ど、どうでしょう・・・」

それは裏を返せば、かの武神に対して気配を消して接近し、殺傷できるほどの実力者が敵であるという絶望的な事実には他ならない。次元世界にどれだけ、それを成し得る人間がいるだろうか。普段冷静なシグナムの顔にも焦燥感が滲み出し、シャマルはあたふたと取り乱している。

「問題は、かおるさん玄斗さん共に、デバイスが大破してしまっていることです」

「・・・そうね。この状況では、対抗策を練ることすらできないわ」

さらに、リイナとリンディの一言によって、その場の空気がまた一段と重みを増した。

先の戦闘データを保存しているはずのメモリーまでもが破損してしまっているため、データが完全に消滅してしまったのだ。かおるから聞き出すという手段もあるにはあるが、今はケガ人な上にいくら彼といえども、生と死の極限状態の中で正確な戦力分析ができたとは到底思えない。これでは、敵の戦力を吟味して、それを基に対策を講じるという戦術の初歩を行うことは不可能である。数も戦闘能力も戦闘スタイルも、すべてが謎に包まれた強者を相手に手探りで戦うというのは、いくらなんでも無謀極まりない。

「でも・・・だからって、敵が待ってくれるとは思えないし・・・」

「

ユーノの言う通りだ。現時点において管理局の最大戦力である2人が襲われた以上、犯人は管理局に敵意を持っている可能性が非常に高い。最悪の場合、このままこのまま本局に殴り込んでくることも十分に考えられる。むしろ、戦力を欠いた今が絶好の好機とばかりに攻めてくるだろう。

「あゝ！ もうっ！ ゴチャゴチャ言ってんじゃねーよ！！

兄貴がやられたんだぞ！ 黙ってられっか！！」

やられる前にこちらから先手を打つべきだと、テーブルを力の限

りに殴りつけ、額に青筋を浮かべながら叫ぶヴィータ。長男長女大好きっ子の四女は、玄斗が重傷を負わされたことで、いささか冷静さを欠いているようだ。

「落ち着け、ヴィータ。」

玄斗殿とかおるを一度に倒した以上、敵はそれなりの能力を持っているはずだ。

考えなしに突っ込んだところで、我々に勝機はない」

そんな彼女を、ザフィーラが冷静になだめた。冷静に事に当たらねば、勝てる戦も勝てぬ、と。

「そうはいつでもさ、相手の情報がなんにもないんだろ？
考えても考えなくても、結果は同じじゃん」

「八方ふさがりだよねえ・・・」

が、後頭部で腕を組みながらのアルフの指摘通り、どんなに思考をめぐらせたところで、こちら側が圧倒的に不利な状況が好転するべくもない。まさに絵に描いたような手詰まり。エイミイが力なく肩を落とすのも無理からぬ話だ。

「数は、確認できただけで4名」

と、その時、そんな沈みきった空気を切り裂く澄んだ声が、ミーティングルームに響いた。皆が思わず、部屋の入口へと弾かれた様に視線を向ける。

「戦闘スタイルは、中・遠距離を得意とする射撃・砲撃型、速力で相手を翻弄し、一撃の威力よりも手数を重視した近・中距離型、

遠距離からの範囲・空間攻撃を旨とした支援・殲滅型、
そして全空域・全戦闘法に対応できる規格外の万能型と、バラバラです」

漆を塗ったかのようなツヤのある黒髪を揺らしながらこちらに歩み寄ってくるのは、今はここにいないはずの人物。

「でも、オールレンジ万能型の人なんとか倒せたので、
今も活動しているのは3名ですね」

「か・・・かおるちゃん!？」

栗毛ツインテールの少女が、思わず飛び上がる。身体の随所を白い包帯に包まれた痛々しいその姿は、病室にて寝ているはずの幼馴染。春風かおるその人に間違いなかった。

「い、いけません！ 春風三尉！

八神執務官に比べれば軽傷ですが、それでも出歩いてよい傷で

は・・・！」

「ご安心ください。それでも魔導医師の端くれです。ボクの体の限界は、ボクが一番分かっていますよ」

顔を青く染め上げ、医務官が彼の身を案ずるが、かおるはにこやかな笑みでその言葉を遮った。曰く、こんな時に1人病室などで寝てはいられない、とのこと。

「まあ、なんとなく疑わしいが、とりあえずは君の自己管理を信じよう。」

それはともかく、今の話はどういうことだ？」

自分の身を顧みず、他者を優先するその姿勢に、相変わらずだないと、自分を師と慕う少年に苦笑しつつ、クロノは疑問をぶつける。

「どういう、といいますと？」

「君は今、襲ってきた4人のうち1人を倒したと言ったな？」

だが、現場には敵本人どころか、それに付随するモノすら残されていなかった」

あまりに抽象的な問いかけにかおるが困惑したため、クロノは再度、今度は具体的に問うた。確かに、クロノの言う通りである。倒したというのならば、その犯人そのものかそれに関連する遺留品が

残されていてもよさそうなものだ。しかし、現場には一切それがない。いささか不自然である。

もしか仲間が回収したのかと、質問した後に思い至ったが、かおるの答えは想像の斜め上に行くモノだった。

「それは仕方ありません。彼女は、光の粒となって消えてしまいましたから・・・」

「・・・え・・・？」

紡がれたその返答に、はやてがピクリと反応する。すべての距離に対応した女性、光の粒となつての消滅。どこかで見たような話だ。

「ちよ、ちよっと待って、かおる・・・。消えたって・・・」

金髪ツインテールの少女が、恐る恐るといった面持ちでかおるを見つめる。そんな友人の『嫌な予感』を肯定するかのようにな、かおるはゆっくりと頷き、

「敵は、闇の書の闇・・・その欠片です」

信じがたい一言を、力強く言い放った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4258m/>

魔法少女リリカルなのはA`s ~夜天の大空 そら を舞う者達~

2011年11月11日18時58分発行